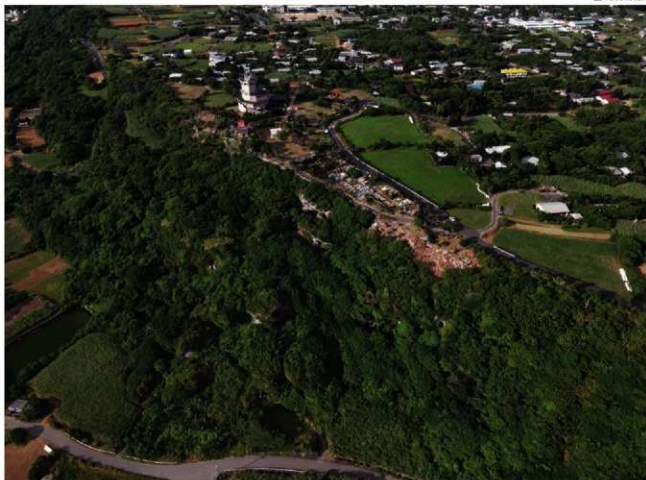


与論町埋蔵文化財発掘調査成果報告書（2）

町内遺跡発掘調査事業に伴う与論城跡発掘調査報告書

与論城跡

令和6（2024）年3月
与論町教育委員会



巻頭図版 1 令和3年撮影 与論城跡全景 南西から



巻頭図版 2 令和3年度撮影 与論城跡遠景（ハキビナ海岸から望む）



巻頭図版3 昭和21年撮影の航空写真(所蔵:沖縄県立公文書館)を一部改変して使用)



巻頭図版4 昭和52年国土地理院撮影の航空写真(出典:地図・空中写真閲覧サービス(国土地理院)を一部改変して使用)



巻頭図版5 平成5年発掘調査時に撮影の航空写真



巻頭図版6 与論城跡の空撮オルソ画像(令和元年度に株式会社PASCO 鹿兒島支店に業務委託を行い作成)

序 文

この報告書は、令和元（2019）年度から令和5（2022）年度にかけて、文化庁及び鹿児島県教育委員会の御指導・御協力をいただき実施した、町内遺跡発掘調査等事業（対象：与論城跡）の記録です。

事業の対象である与論城跡は、本町の中では地主神社や琴平神社の境内地や墓地、そして国指定重要無形民俗文化財の与論の十五夜踊の奉納場所として人々から親しまれておりますが、かつての城の跡とは知られていても、その歴史的価値については顧みられることはなく、詳細は不明のままでした。

しかし、町内外の研究者による調査の進展によって城跡としての価値が再評価されたことをきっかけに、町としても城跡の範囲や年代観といった詳細な情報や歴史的価値の把握と将来的な国の文化財指定を目標に当該調査事業を開始しました。

調査事業を進めていく過程で、多様な出土品や建物の痕跡が確認されるなど、多くの考古学的な成果が得られ、与論城跡だけでなく本町の歴史について町民が顧みるきっかけとなりました。

本報告書の刊行によって、町民の皆様が地域の歴史により興味・関心を抱くきっかけの一助となれば幸いです。

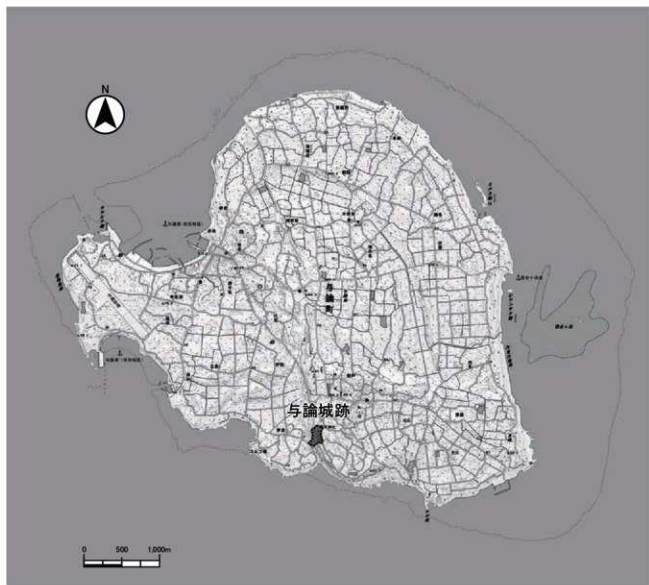
最後に、調査の実施および本報告書の作成にあたり、多数の御助言・御指導をいただきました与論城跡発掘調査指導委員会の委員の皆様、文化庁、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターならびに関係者各位、調査を御快諾くださった地権者の皆様、そして調査の際に激励をいただきました町民の皆様に対しまして、心より感謝申し上げます。

令和6年 3月

与論町教育委員会
教育長 中山 義和



東アジアの中の与論島の位置図



与論城跡位置図（背景の画像は国土地理院地図を使用）

例言

- 1 本書は、与論町教育委員会が文化庁および鹿児島県教育委員会の補助を受け、令和元(2019)年度から令和5(2023)年度にかけて実施した、町内遺跡発掘調査等事業の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県大島郡与論町大字立長小字辺後地に所在する。また遺跡の一部は昭和51年2月20日付けで与論町の指定文化財「城跡」に指定されている。
- 3 「与論城跡」は「与論グスク」とも標記されたり、地元では「グスク」「グスク」とも呼称されているが、本書では「与論城跡」を用いる。
- 4 本書で用いる時代名称と時期区分は、本報告の第2章第2節第1項の時代名称、時期区分とした。
- 5 三山時代の沖縄の王権を「北山」「中山」「南山」とも標記するが、山川出版社の教科書では「三北」「中山」「山南」を用いていることから、本書においてもこの標記を用いる。
- 6 掲載した遺構番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 7 本書で用いたレベル数値は海抜絶対高で、方位は磁北である。
- 8 本書に掲載している与論城跡全域の測量図面及び石垣3～5の平面・立面図面は令和元年度に株式会社PASCO鹿児島支店に業務委託を行い作成した成果品を編集・改変したものである。
- 9 発掘調査および整理作業における効率化と地域住民の参画を図るため、作業の支援業務をNPO法人ヨロン島専々我無に委託した。
- 10 遺構図等の作成は南が行った。
- 11 掲載遺物の実測・拓本・トレースは、主に南が監督を行いNPO法人ヨロン島専々我無の作

- 業員が作成したものを南が編集した。
- 12 掲載遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場を利用して南が行った。
 - 13 整理作業の効率化を図るため、一部実測図面のトレース業務を株式会社九州文化財研究所鹿児島支店に委託した。
 - 14 放射性炭素年代測定(株)加速器分析研究所、バリノ・サーヴェイ(株)、に委託した。
 - 15 本書の編集は、南が担当した。
 - 16 本書の執筆の分担は次のとおりである。

第1～4・7章	南
第5章 第1節	樋泉
第2節	黒住
第3節	委託成果を南が編集
第4・5節	鹿児島県立埋蔵文化財センターの分析結果を南が編集
第6章 第1節	池田
第2節	麓
第3節	赤司
第4節	永山
 - 17 本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は与論町教育委員会が保管し、展示・活用を図る予定である。
 - 18 遺物は掲載見込みの遺物に対してトレンチごとに番号をふった。最終的な掲載遺物の管理においては、再度平成5年度の遺物より1番から番号を振り直し、管理番号とした。
 - 19 第3章第1節21頁掲載の「図6-②」平面図(沢村ほか1982)は10月6日付け教生第116で日本建築学会九州支部に転載の申請を行い10月18日付けで承諾を受けたものである。複写厳禁。

凡例

- 1 本報告書掲載の調査区平面図・セクション・遺物の縮尺は、基本的に以下のとおりである。ただし、石垣などの大型の遺構など、規模や遺物の大きさ・形状に応じて縮尺が異なる場合には、各国に提示してあるので参照していただきたい。

【調査区平面図・見通し図面】
平面図・見通し図面：30分の1
【セクション】
セクション：30分の1
【遺物】
土器・磁器・陶器・石器・石製品：1/3
一部石製品・土製品・銭貨・鉄製品・銅製品：1/2
ガラス製品：1/1
- 2 発掘調査成果の内容及び土層の色調などの表現については、原則として現場担当者による注記を用いた。また、土色の記述にあつては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』に基づき、掲載した。
- 3 観察表に記した胎土の色調は、『新版 標準土色帖』のマンセル記号で表記している。
- 4 遺物観察表の表記凡例は、次のとおりである。
 - (1)「法量」において括弧内に記載してある数値は復元径及び残存高の値である。また、径は口唇部の最高点間の幅を測定値とした。
 - (2)「胎土」における記号の表現は、次のと

- おりである。
- ・・・微量含む △・・・少量含む
○・・・含む ◎・・・多量含む
- 5 本書で用いる土器・陶磁器等の分類で特定の種類を用いる際は主に下記のものを使用した。(中国産陶磁器：大宰府分類)
 - ・太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV』太宰府市の文化財49, 太宰府市教育委員会
 - (白磁：森田分類)
 - ・森田勉 1982『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』No.2, 日本貿易陶磁研究会, pp.47-54.
 - (白磁：ピロースタイプ)
 - 金武正紀 1988『ピロースタイプ白磁碗について』『貿易陶磁研究』No.8, 日本貿易陶磁研究会, pp.148-158.
 - (白磁：今帰仁タイプ)
 - 金武正紀 2007『今帰仁タイプ白磁碗』『南島考古』第26号, 沖縄考古学会, pp.187-196.
 - (青磁：裾袖陶器：沖縄分類)
 - ・瀬戸哲也 2017『沖縄出土貿易陶磁器の時期と様相』『第35回 中世土器研究会 貿易陶磁器研究の現状と土器研究』日本中世土器研究会, pp.53-68.
 - ・瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城樹樹・安座間充・松原哲志 2008『沖縄における貿

凡例

- 易陶磁研究 14～16世紀を中心に『紀要
沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財セン
ター, pp. 55-76.
(青花: 小野分類)
・小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の
分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2,
日本貿易陶磁研究会, pp. 71-87.
(備前焼: 重根分類)
・重根弘和 2005 「中世備前焼に関する考察
-制作技法から-」『古文化談叢』第54集,
九州古代文化研究会, pp. 95-108.

- (カムイヤキ)
・新里亮人 2003 「琉球列島における窯業生産
の成立と展開」『考古学研究』第49号4巻,
考古学研究会, pp. 75-95.
(土器: 新里分類)
・新里亮人 2018 『琉球国成立前夜の考古学』
同成社

目次

巻頭写真

序文	i
巻頭図版	ii・iii
例言・凡例	iv
目次	v
挿図目次	vi
表目次	vi
第1章 発掘調査の経緯	
第1節 調査に至るまでの経緯	1・2
第2節 事業の経過	3～8
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	9～11
第2節 歴史的環境	11～17
第3章 与論城跡の過去の調査研究成果	
第1節 与論城跡の由来と研究史	18～23
第2節 与論城跡の縄張り	23～31
第4章 発掘調査成果	
第1節 調査方法	32・33
第2節 基本層序	34～38
第3節 台地部分の調査	39～53
地区2の調査	39～44
地区3の調査	44～48
地区4の調査	48～52
出土地点不明の特徴的な台地部分・ 周辺部分出土遺物(平成5年度調査)	52～53
第4節 崖下部分の調査	54～75
地区6の調査	54～57
地区7の調査	58～62
地区9の調査	62～68
地区10の調査	69～70
地区11の調査	70
地区13の調査	71
地区14の調査	71～75
地区15の調査	75

第5節 周辺部の調査	75～83
第6節 発掘調査成果の小結	83～91
第5章 科学的分析	
第1節 脊椎動物遺体	92～94
第2節 貝類遺体	95～98
第3節 放射性炭素年代	99～104
第4節 ガラス製品成分分析	104・105
第5節 赤色顔料成分分析	106
第6章 各論	
第1節 奄美・沖縄の城郭遺跡との比較	107～115
第2節 与論城跡と城集落	116～121
第3節 古代・中世の奄美・与論	122～130
第4節 日本本土の城郭遺跡と与論城跡	130～137
第7章 総括	138～143
写真図版	
遺物図版	
報告書抄録	

挿図目次

東アジアの中の与論島の位置図	ii	図 51	周辺部トレンチ 19 (172)・21 (174～183)・22 (197～221)・23 (184～186)・24 (191～196) 出土遺物	82
与論城跡位置図	iii	図 52	周辺部トレンチ 25 (222)・26 (223～226)・27 (227・228) 出土遺物	83
図 1 与論町の地質図	9	図 53	与論城跡の主な出土土器、陶磁器	85
図 2 与論町の植生分布	10	図 54	与論城から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISF 比)。R3 (T2・3)・R4 (T12・13) をそれぞれ一括	93
図 3 本書で主に用いる歴史区分	12	図 55	与論城から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISF 比)。R3 (T2・3)・R4 (T12・13) トレンチ別	93
図 4 与論町内の周知の埋蔵文化財	14	図 56	与論城から検出された魚類遺体の組成 (NISF 比)	93
図 5 与論城跡周辺の民俗地図	16	図 57	出土貝類組成	96
図 6 過去の与論城跡関係図面集成	21	図 58	暦年較正年代グラフ (参考)	99
図 7 与論城跡と関係史跡等の位置図	22	図 59	暦年較正結果	101
図 8 与論城跡の地形測量図面と周知の埋蔵文化財の範囲	24	図 60	暦年較正結果	102
図 9 地区 6・8・13 表採品	28	図 61	与論城跡出土のガラス製品の分析スペクトルチャート	104
図 10 調査区配置図	33	図 62	与論城跡出土の赤色顔料の分析スペクトルチャート	105
図 11 基本層序柱状図	35	図 63	石積みグスクの規模の変遷	109
図 12 台地部分の調査区配置図	39	図 64	グスクの石積み編年	109
図 13 地区 2 トレンチ 1 (4～31) 出土遺物	39	図 65	グスクの石積み囲いの編年	110
図 14 トレンチ 2 平面図・セクション	40	図 66	グスクの構造化	110
図 15 トレンチ 3 平面図・セクション	41	図 67	竹富島花城村跡遺跡模式図	112
図 16 トレンチ 3 セクション	42	図 68	奄美大島伊津部勝グスクバル (城原) 遺跡 (伊津部勝グスク) 見取り図	113
図 17 地区 2 トレンチ 2・3 出土遺物	43	図 69	界界島七城遺跡測量図及び調査区設定状況図	113
図 18 石垣 1 平面図・立面図	45	図 70	『海東諸国記』の「琉球国」図 (部分)	
図 19 トレンチ 5 平面図・セクション	46	図 71	古代山城と官道の位置関係図	133
図 20 トレンチ 6 平面図・セクション	47	図 72	古代山城分布図	133
図 21 地区 3 トレンチ 6 出土遺物	47	図 73	長野城縄張り図	135
図 22 石垣 2 平面図・立面図・オルソ画像	49	図 74	与論城跡の主な範囲	141
図 23 トレンチ 7 平面 (左図・右図検出状況)	50	図 75	与論城跡の主な範囲と土地境界	142
図 24 トレンチ 10 セクション	52	図 76	奄美群島へ沖縄諸島の城郭遺跡 (グスク) の中の与論城跡の位置	143
図 25 地区 4 トレンチ 7～10 出土遺物	53			
図 26 崖下部分の調査区配置図	54			
図 27 石垣 3 平面図	55			
図 28 石垣 3 南面・北面立面図	56			
図 29 トレンチ 11 セクション・平面・立面	57			
図 30 地区 6 トレンチ 11 出土遺物	57			
図 31 石垣 4 平面図	59			
図 32 石垣 4 南面・北面立面図	60			
図 33 トレンチ 12 平面図・東壁セクション・北壁見通し	61			
図 34 地区 7 トレンチ 12 出土遺物	62			
図 35 トレンチ 13 平面図	63			
図 36 トレンチ 13 SK1 セクション	63			
図 37 トレンチ 13 西壁・東壁セクション	64			
図 38 トレンチ 13 北壁・南壁セクション	65			
図 39 地区 9 トレンチ 13 出土遺物 1	67			
図 40 地区 9 トレンチ 13 出土遺物 2	68			
図 41 トレンチ 14 平面図・セクション	69			
図 42 地区 10 トレンチ 14 出土遺物	70			
図 43 石垣 5 平面図	72			
図 44 石垣 5 立面図	73			
図 45 トレンチ 16 平面・セクション及びトレンチ 16・17 出土遺物	74			
図 46 周辺部 調査区配置図	75			
図 47 トレンチ 21 平面図・地形断面図	76			
図 48 トレンチ 21 セクション	77			
図 49 トレンチ 22 平面図・セクション	79			
図 50 トレンチ 24 平面図・セクション・SK1-2 平面・断面	80			

表目次

表1	日本史と与論町刊行物の歴史区分略対応表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12	表11	与論城から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISP)・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
表2	与論町の周知の埋蔵文化財一覧・・・・・・・・ 15	表12	与論城跡の発掘調査で得られた出土品類 リスト・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
表3	与論城跡関連年表(中世並行期)・・・・・・・・ 19	表13	放射性炭素年代測定結果(δ ¹³ C 補正值) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
表4	各年度における主な調査目的等・・・・・・・・ 32	表14	放射性炭素年代測定結果(δ ¹³ C 未補正值、 暦年較正用 14C 年代、較正年代 13)・・・・ 100
表5	地区2～15のトレンチ番号と主な調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32・33	表15	放射性炭素年代測定結果・・・・・・・・・・ 102
表6	出土遺物・遺構対照表(調査時の層序と整 理後層序番号の対応表)・・・・・・・・ 36～38	表16	放射性炭素年代測定結果・・・・・・・・・・ 104
表7	掲載遺物観察表(陶磁器類)・・・・・・・・ 84～89	表17	与論城跡出土のガラス製品の各元素の質量 濃度結果・・・・・・・・・・・・ 105
表8	掲載遺物観察表(土器・土製品・羽口) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88・89	表18	与論城跡出土の赤色顔料の質量濃度結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
表9	掲載遺物観察表(石器・石製品・金属製品・ ガラス製品)・・・・・・・・・・・・ 89～91		
表10	主なトレンチからの青磁碗・白磁碗等の出 土数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91		

写真図版目次

巻頭図版

巻頭図版1	令和3年撮影 与論城跡全景 南西より
巻頭図版2	令和3年度撮影 与論城跡遠景 (ハキビナ海岸から望む)
巻頭図版3	昭和21年撮影の航空写真
巻頭図版4	昭和52年国土地理院撮影の 航空写真
巻頭図版5	平成5年発掘調査時に撮影の 航空写真
巻頭図版6	与論城跡の空撮オルソ画像

本文中写真

写真1	令和2年度 与論城跡発掘調査指導委員 会(与論町役場)・・・・・・・・・・・・ 2
写真2	城遺跡検出の住居跡・・・・・・・・・・ 13
写真3	国指定重要無形民俗文化財与論の十五夜 踊(令和4年 旧暦三月十五夜一番組 二十四孝)・・・・・・・・・・・・ 13
写真4	国指定重要無形民俗文化財与論の十五夜 踊(令和4年 旧暦八月十五夜二番組 アーマタボーリ)・・・・・・・・ 13
写真5	町指定文化財 屋川(城集落)・・・・ 13
写真6	地区1 地主神社(左)と琴平神社(右) (2022年旧暦八月十五夜の地主神社への 最後の演目奉納前)・・・・・・・・ 23
写真7	地区1 南側の石垣(石垣の内側が樋口御 嶽)・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
写真8	地区2 鳥居と平場を囲む石垣(北から) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
写真9	地区3 南端の石垣(メグチバンタ) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
写真10	地区4・5 北側の石垣(伝龍の頭) (北東から)・・・・・・・・・・・・ 25
写真11	地区4 東側の石垣・・・・・・・・・・ 25
写真12	地区6 北側の大型石垣(東から)・・・・ 26
写真13	区7の石垣と平坦面(東から)・・・・ 27
写真14	地区7と地区14を繋ぐ通路の張り出し の石垣(南東から)・・・・・・・・ 27
写真15	区8の石垣と平坦面(南から)・・・・ 27
写真16	地区9と出土した礎石状の石造物 (北から)・・・・・・・・・・・・ 27

写真17	地区10の石垣と平坦面(東から)・・・・ 28
写真18	地区11の平坦面と通路(写真左下) (南から)・・・・・・・・・・・・ 28
写真19	地区12の入口の岩盤と通路(南西から) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
写真20	地区13の石垣と通路(北西から)・・・・ 28
写真21	地区14 シンゴースメーの石組み遺構 (東から)・・・・・・・・・・・・ 29
写真22	地区15の通路と岩盤を地区13から望む (東から)・・・・・・・・・・・・ 29
写真23	地区15への崖下からの入口(南西から) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
写真24	トレンチ21 東壁・・・・・・・・・・・・ 34
写真25	トレンチ12 東壁・・・・・・・・・・・・ 34
写真26	トレンチ6 西壁・・・・・・・・・・・・ 34
写真27	与論城跡出土陸産貝類・・・・・・・・ 95
写真28	主な与論城跡出土の貝類・・・・・・・・ 97
写真29	与論城跡内の破風墓・・・・・・・・ 116
写真30	与論城跡内の石仏・・・・・・・・ 116
写真31	ヤマラギシ・・・・・・・・・・・・ 117
写真32	メグチバンタの間道・・・・・・・・ 117
写真33	祖国復帰記念碑・・・・・・・・ 118
写真34	石から上野應介翁頌徳碑・口之津移住開 拓民之碑、忠魂碑(大正年間作成)、満 州開拓団の慰霊碑・・・・・・・・ 119
写真35	シンゴースメー周辺の石積み、写真右下 の方形の石組みと右端のバショウの間に 石組みがあり、夫婦井戸の可能性がある ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
写真36	昭和30年代の与論城跡・・・・・・・・ 120
写真37	メグチバンタから見た辺戸岬のかがり 火、写真中の○枠内・・・・・・・・ 121
写真38	令和5年旧暦十月十五夜で踊りの解説す る筆者・・・・・・・・・・・・ 121
写真39	大野城の土塁・・・・・・・・・・・・ 134
写真40	金田城の石塁・・・・・・・・・・・・ 134
写真41	高良山神籠石の列石・・・・・・・・ 134
写真42	大野城太宰府口城門・・・・・・・・ 134
写真43	復元整備された屋島城の懸門・・・・ 135
写真44	弘田櫓・・・・・・・・・・・・ 135
写真45	ヨンネモトチャシ・・・・・・・・ 136
写真46	与論城石垣・・・・・・・・・・・・ 137

写真図版目次

写真図版

- 図版 1 地区 2 トレンチ 1 調査状況 (北から)
 図版 2 地区 2 トレンチ 2 調査状況 (南から)
 図版 3 地区 2 トレンチ 2 SP 1 石灰整地層検出状況 (西から)
 図版 4 地区 2 トレンチ 3 調査状況 (西から)
 図版 5 地区 2 トレンチ 3 石積根石・フィッシャー造成状況 (北から)
 図版 6 地区 3 トレンチ 4 調査状況 (北から)
 図版 7 地区 3 トレンチ 5 調査状況 (西から)
 図版 8 地区 3 トレンチ 6 調査状況 (北から)
 図版 9 地区 3 トレンチ 7 調査状況 (北西から)
 図版 10 地区 3 トレンチ 7 根石及び造成層 (西から)
 図版 11 地区 3 トレンチ 8 根石及び造成層 (西から)
 図版 12 地区 3 トレンチ 9 根石及び造成層 (西から)
 図版 13 地区 3 トレンチ 10 調査状況 (南西から)
 図版 14 地区 6 トレンチ 11 調査状況 (北から)
 図版 15 地区 7 トレンチ 12 整地層検出状況 (南から)
 図版 16 地区 9 トレンチ 13 II 層遺物出土状況 (北西から)
 図版 17 地区 7 トレンチ 12 調査状況 (南西から)
 図版 18 地区 7 トレンチ 12 石垣 2 の裏込め及び造成層 (南から)
 図版 19 地区 9 トレンチ 13 調査状況 (西から)
 図版 20 地区 9 トレンチ 13 調査状況 (北西から)
 図版 21 地区 9 トレンチ 13SX1 調査状況 (東から)
 図版 22 地区 9 トレンチ 13SP1 調査状況調査状況 (西から)
 図版 23 地区 9 トレンチ 13SK1 調査状況調査状況 (北西から)
 図版 24 地区 9 トレンチ 13SX1 遺物出土状況 (東から)
 図版 25 地区 9 トレンチ 13 銭貨出土状況 (東から)
 図版 26 地区 10 トレンチ 14 調査状況 (西から)
 図版 26 地区 10 トレンチ 14 調査状況 (西から)
 図版 27 地区 10 トレンチ 14 滑石混入土器出土状況 (北から)
 図版 28 地区 10 トレンチ 14 調査状況 (北から)
 図版 29 地区 10 トレンチ 14 調査状況 (北から)
 図版 30 地区 10 トレンチ 14 東壁セクション (東から)
 図版 31 地区 10 トレンチ 14 裏込め検出状況 (北から)
 図版 32 地区 11 トレンチ 15 調査状況 (南から)
 図版 33 地区 14 トレンチ 16 調査状況 (南から)
 図版 34 地区 14 トレンチ 16 調査状況 (東から)
 図版 35 地区 14 トレンチ 17 調査状況 (東から)
 図版 36 地区 15 トレンチ 18 調査状況 (東から)
 図版 37 周辺部分トレンチ 19 調査状況 (北東から)
 図版 38 周辺部分トレンチ 19 東区調査状況 (北東から)

- 図版 39 周辺部分トレンチ 19 西区調査状況 (北から)
 図版 40 周辺部分トレンチ 20 調査状況 (北西から)
 図版 41 周辺部分トレンチ 21 調査状況 (南から)
 図版 42 周辺部分トレンチ 21SD1 ガラス小玉出土状況 (東から)
 図版 43 周辺部分トレンチ 21SD1 調査状況 (東から)
 図版 44 周辺部分トレンチ 21SD2 調査状況 (東から)
 図版 45 周辺部分トレンチ 21SP1 調査状況 (西から)
 図版 46 周辺部分トレンチ 21SP1 遺物出土状況 (西から)
 図版 47 周辺部分トレンチ 22 調査風景
 図版 48 周辺部分トレンチ 22 調査状況 (西から)
 図版 49 周辺部分トレンチ 22 遺物出土状況 (南から)
 図版 50 周辺部分トレンチ 22 遺物出土状況 (南から)
 図版 51 周辺部分トレンチ 23 調査状況 (西から)
 図版 52 周辺部分トレンチ 24 調査状況 (南から)
 図版 53 周辺部分トレンチ 25 調査状況 (南から)
 図版 54 周辺部分トレンチ 25 調査状況 (北から)
 図版 55 周辺部分トレンチ 26 調査状況 (東から)
 図版 56 周辺部分トレンチ 27 調査状況 (南西から)
- 遺物図版**
- 図版 57 台地部分出土の青磁・白磁・染付
 図版 58 台地部分出土の土器・陶器
 図版 59 台地部分・崖下部分出土の羽子・土製品・石器・石製品
 図版 60 崖下部分出土の土器・陶磁器
 図版 61 台地部分・崖下部分出土の小型土製品・小型石製品
 図版 62 与論城跡出土のガラス製品
 図版 63 台地部分・崖下部分出土の貝製品・未製品
 図版 64 与論城跡出土の貝製品
 図版 65 与論城跡出土の金属製品
 図版 66 与論城跡出土の金属製品の X 線写真
 図版 67 周辺部分出土資料及び表採資料

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至るまでの経緯

1 目的

与論城跡は、沖永良部島の後蘭孫八城跡とともに琉球様式の城郭遺跡（いわゆる「グスク」）の北限となる城郭遺跡とされ、町内外から注目される遺跡であった。

平成5年度に与論町教育委員会は、周辺の公園整備事業（遊我風ランド事業）に伴い史跡の整備や将来的な県指定を目的として、鹿児島県立埋蔵文化財センターの支援を受けながら、町単独事業で発掘調査を実施した。しかし、当時の町の財政上の都合により、発掘調査成果報告書の刊行にはならず、整備や指定事業も様々な要因もあり進展することは無かった。

その後、2010年代以降の学術調査によって保存状態が比較的良好な石垣や、台地の縁辺部から断層崖までを縄張りに取り込む特徴的な構造を有していることが把握され、再度、文化財として高い評価を受けることになった。

与論町教育委員会では、遺跡の学術的な価値の高さや将来にわたる保存を図るため、平成30年度に文化庁、鹿児島県教育庁文化財課と現地協議を行い、令和元年度から5箇年計画で、文化庁より国宝重要文化財等保存・活用補助金、鹿児島県より国指定文化財等事業費補助金を受けながら、遺跡の発掘調査を実施した。

また、平成5年度の調査成果についても、与論城跡の評価を行う上で欠かせない資料であることから、併せて再整理を行い、与論城跡の調査成果を総括した調査成果報告書の作成を行うこととした。

2 指導委員会

(1) 与論城跡発掘調査指導委員会の経緯

与論町教育委員会では、調査事業を学術的にも意義かつ友好的に実施するため、外部有識者で構成される指導組織として、令和元年度に与論城跡発掘調査指導委員会（以下、指導委員会）を設置（平成31年4月1日付与論町教育委員会告示第2号）し、城域の未確定箇所や主な利用時期等を把握するための調査を進めることとなった。

(2) 与論城跡発掘調査指導委員会の組織

委員長 池田 榮史（考古学） 琉球大学国際地域創造学部 教授（令和2年度まで）
國學院大学研究開発推進機構 教授（令和3年度より）

委員 赤司 善彦（考古学） 大野城心のふるさと館 館長
永山 修一（文献史学） ラ・サール学園 中学部長（令和2年度まで）
教諭（令和3年度より）
非常勤講師（令和4年度より）

麓 才良（郷土史）与論町文化財保護審議会 会長

(3) 与論城跡発掘調査指導委員会検討内容

第1回 与論城跡発掘調査指導委員会検討内容

開催日 令和元（2019）年11月25日（月）・26日（火）
場所 与論町多目的屋外運動場（クラブハウス2階：会議室）、与論城跡
検討内容 事業の目的および内容の確認
過去の調査成果等について
令和2年度の事業計画について

第2回 与論城跡発掘調査指導委員会検討内容

開催日 令和2（2020）年12月11日（金）
場 所 与論町役場（2階：会議室）、与論城跡
検討内容 主な事業計画の確認について
令和2年度の調査成果について
令和3年度の事業計画について

第3回 与論城跡発掘調査指導委員会検討内容

開催日 令和3（2021）年11月16日（火）
・17日（水）
場 所 与論町役場（2階：会議室）、与論城跡
検討内容 主な事業計画の確認について。
令和3年度の調査成果について。
令和4年度の事業計画について

第4回 与論城跡発掘調査指導委員会検討内容

開催日 令和4（2022）年7月26日（火）・27日（水）
場 所 与論町役場（1階：会議室）、与論城跡
検討内容 主な事業計画の確認および昨年度までの調査成果について
令和4年度の調査成果について
令和5年度までの事業計画について

第5回 与論城跡発掘調査指導委員会検討内容

開催日 令和5（2023）年1月23日（月）・24日（火）
場 所 与論町役場（1階：会議室）、与論城跡
検討内容 主な事業計画の確認およびこれまでの調査成果について
現在までの整理作業状況について
今後の事業計画について

第6回 与論城跡発掘調査指導委員会検討内容

開催日 令和5（2023）年6月26日（月）・27日（火）
場 所 与論町役場（1階：会議室）、与論城跡
検討内容 主な事業計画の確認およびこれまでの調査成果について
現在までの整理作業状況について
報告書掲載内容検討
今後の事業計画について

第7回 与論城跡発掘調査指導委員会検討内容

開催日 令和5（2023）年12月15日（金）・16日（土）
場 所 与論町役場（1階：会議室）、与論城跡
検討内容 主な事業計画の確認およびこれまでの調査成果について
現在までの整理作業状況について
報告書掲載内容検討



写真1 令和2年度 与論城跡発掘調査指導委員会
（与論町役場）

第2節 事業の経過

与論町教育委員会では、与論城跡の範囲・内容確認を目的として、文化庁の国庫補助事業を活用した町内遺跡発掘調査等事業を計画し、令和元（2019）年度に城内の地形測量調査、令和2（2020）年度に台地部分の範囲確認調査、令和3（2021）年度に崖下部分の範囲確認調査、令和4（2022）年度に補足調査および整理作業、令和5（2023）年度に報告書作成を実施した。

調査の経過については、以下に各年度ごとに記載する。また、平成5年度の調査についても併記する。

（1）平成5年度

ア 概要

与論町教育委員会が主体となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターに支援を依頼して調査を実施した。記録図面や出土遺物は、調査を担当した鹿児島県立埋蔵文化財センターが保管、整理作業を実施した。調査では内容確認や範囲確認を目的にトレンチ調査、周辺踏査、地形測量、航空写真撮影を実施した。

しかし、与論町側の予算の都合により報告書の刊行まで至らなかったため、遺物等は鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて保管が行われた。

イ 調査体制

調査主体 与論町教育委員会

責任者 与論町教育委員会 教育長 喜山 富三

事務担当 与論町教育委員会 社会教育課長 川畑 辰興、派遣社会教育主事 沖田 浩
社会教育係長 池田 直也、主事 久留 満博、同 田畑 豊徳、同 野口 芳徳

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財研究員 富田 逸郎、同 前迫 亮一

調査指導 鹿児島考古学会 会長 河口 貞徳
北谷町教育委員会 主査 中村 愿

ウ 経過

- 10月 25日 トレンチ1～3着手（調査開始）。26日 トレンチ4・5着手。27日 地形測量打合せ、
周辺踏査。28日 河口氏指導、現地踏査。29日 一部トレンチの土層図作成を除いてトレンチ調査終了。
- 11月 1日 航空写真撮影、土層図作成、中村氏指導。2日 地形測量以外の調査終了。

（2）令和元年度

ア 概要

城跡の現状を把握するとともに、次年度以降の調査計画策定のため株式会社PASCO鹿児島支店に業務委託を行い、城跡全域の地形測量調査および一部石垣の図化作業を実施した。また、測量調査に先だって城集落青少年育成センター（通称 城公民館）において、地権者向けの事業内容の説明会を実施した。

この、測量調査に際して大野城こころのふるさと館館長赤司善彦氏、鹿児島県教育庁文化財課の森幸一郎文化財主事と現地指導および協議を行った。

イ 調査体制

事業主体 与論町長 山 元宗

調査主体 与論町教育委員会 教育長 町岡 光弘

責任者 与論町教育委員会 生涯学習課長 朝岡 芳正

事務担当 生涯学習課長補佐 大馬 福徳、同 主事 内野 優三郎

調査担当 同 学芸員 南 勇輔

調査指導 文化庁 文化財第二課 主任文化財調査官 近江 俊秀
公益財団法人京都市埋蔵研究所 主任研究員 宮原 健吾
調査支援 鹿児島県教育庁 文化財課 埋蔵文化財係 係長 桑波田 武志、文化財主事 平 美典、
同 森 幸一郎
鹿児島県立埋蔵文化財センター 第一調査係 文化財主事 西野 元勝

(3) 令和2年度

ア 概要

NPO法人ヨロン島尊々我無に発掘作業支援の業務委託を行い、10月19日より12月25日にかけて発掘作業を実施した。

1月以降は随時調査箇所の測量、記録作業を行い、記録作業が終了した令和3年3月12日付け与教生第211号で文化財保護法第99条に係る発掘調査実施報告書を鹿児島県教育委員会に提出した。

併せて同日付け与教生第212号で鹿児島県教育委員会宛てに埋蔵物保管証、与教生第213号で沖永良部警察署長宛に遺失物法第4条に基づく埋蔵物発見届を提出した。

整理作業は発掘調査に引き続きNPO法人ヨロン島尊々我無に作業支援の業務委託を行い、主に与論町立中央公民館において実施した。

また、自然科学分析(AMS法による理化学年代測定)を株式会社加速器分析研究所に業務委託を行った。

イ 調査体制

事業主体 与論町長 山 元宗

調査主体 与論町教育委員会
教育長 町岡 光弘

責任者 与論町教育委員会 生涯学習課長 朝岡 芳正

事務担当 同 課長補佐 田畑 綾子、同 主事 内野 優三郎、同 会計年度任用職員 川上 明日香
調査担当 同 学芸員 南 勇輔

調査指導 文化庁 文化財第二課 文化財調査官 川畑 純
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 主任研究員 宮原 健吾

調査支援 鹿児島県教育庁 文化財課 埋蔵文化財係 文化財主事 立神 倫史
鹿児島県立埋蔵文化財センター 調査課 課長 中村 和美
同 第一調査係 文化財主事 西野 元勝

ウ 経過

10月 19日 トレンチ1・2着手(調査開始)。20日 トレンチ1一時終了。21日 トレンチ2一時終了。
トレンチ3着手。26日 トレンチ7着手。27日 トレンチ7一時終了。トレンチ8着手。
29日 トレンチ8着手。

11月 12日 トレンチ4着手。トレンチ9一時終了。16～19日 宮原氏指導。18日 トレンチ5着手。
19日 トレンチ4一時終了。27日 文化庁との事業内容協議。

12月 9～11日 西野氏指導。13日 発掘調査成果現地説明会。14日 トレンチ2・3追加調査着手。
15日 トレンチ1追加調査着手。17日 トレンチ1～3追加調査一時終了。18日 トレンチ5追加
調査着手。25日 年内の調査及び支援業務委託による発掘調査終了。以後、教育委員会職員が随時
記録作業を実施。

令和3年1月 19日 作業開始、数量把握作業。20日 平成5年度出土遺物の注記作業。

- 2月 2・3日 中村氏指導。22日 令和2年度出土遺物の洗浄作業。
3月 2日 令和2年度出土遺物の注記作業。9日 注記作業終了。実測作業開始。12日 調査箇所の記録作業終了。15日 作業終了。

(4) 令和3年度

ア 概要

上半期の整理作業は、NPO法人ヨロン島尊々我無に整理作業支援の業務委託を行い、7月26日より9月9日にかけて整理作業を実施した。

発掘調査は、NPO法人ヨロン島尊々我無に発掘作業支援の業務委託を行い、10月18日より12月28日にかけて、主に与論町立中央公民館において整理作業を実施した。

1月以降は随時調査箇所の測量、記録作業を行い、記録作業が終了した令和4年3月11日付け与教生第225号で文化財保護法第99条に係る発掘調査実施報告書を鹿児島県教育委員会に提出した。

併せて同日付け与教生第227号で鹿児島県教育委員会宛てに埋蔵物保管証、与教生第226号で沖永良部警察署長宛に遺失物法第4条に基づく埋蔵物発見届を提出した。

下半期の整理作業は、発掘調査に引き続きNPO法人ヨロン島尊々我無に作業支援の業務委託を行い、主に与論町立中央公民館において実施した。

また、自然科学分析(AMS法による理化学年代測定)をバリノ・サーヴェイ株式会社沖縄支店に業務委託を行った。

イ 調査体制

事業主体 与論町長 山 元宗

調査主体 与論町教育委員会 教育長 町岡 光弘

責任者 与論町教育委員会 生涯学習課長 川上 嘉久

事務担当 同 課長補佐 阿野 斉、同 主事補 朝岡 陽平、同 会計年度任用職員 川上 明日香

調査担当 同 学芸員 南 勇輔

調査指導 文化庁 文化財第二課 文化財調査官 川畑 純、同 斉藤 慶吏

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 主任研究員 宮原 健吾

福岡県立アジア文化交流センター 展示課 企画主査 岡寺 良

沖縄県立博物館・美術館 博物館班 主任学芸員 山本 正昭

調査支援 鹿児島県教育庁 文化財課 埋蔵文化財係 文化財主事 立神 倫史

鹿児島県立埋蔵文化財センター 調査課 第一調査係 文化財主事 西野 元勝

ウ 経過

7月 26日 作業開始

8月 10日 平成5年度及び令和2年度出土遺物の分類・仕分け作業開始。

9月 10日 上半期の整理作業終了

10月 18日 トレンチ1・2着手(調査開始)。19日 トレンチ1一時終了。20日 トレンチ4着手。

28日 トレンチ4一時終了。29日 トレンチ9着手。

11月 1日 トレンチ5着手。4日 トレンチ9一時終了。5日 トレンチ3着手。10～12日 西野氏指導。

22日 トレンチ9追加調査着手。24・25日 岡寺氏指導。24日 トレンチ5追加調査着手。

25日 トレンチ9追加調査一時終了。26日 トレンチ5追加調査一時終了。

12月 1日 トレンチ3追加調査着手。9・10日 文化庁・県文化財課との現地協議。

10日 NHK鹿児島放送局取材。11日 発掘調査成果現地説明会。NHK鹿児島放送局取材。

15日 トレンチ2追加調査一時終了。28日 年内の調査及び支援業務委託による発掘調査終了。
以後、教育委員会職員が随時記録作業を実施。

令和4年1月 21日 令和3年度出土遺物の洗浄作業開始。

2月 10日 注記作業開始。24・25日 山本氏指導。

3月 11日 下半期の整理作業終了。同日調査箇所の記録作業終了。

(5) 令和4年度

ア 概要

上半期の整理作業は、NPO法人ヨロン島尊々我無に整理作業支援の業務委託を行い、5月17日より6月17日にかけて、主に与論町立中央公民館において整理作業を実施した。

発掘調査は、NPO法人ヨロン島尊々我無に発掘作業支援の業務委託を行い、6月30日より8月26日にかけて発掘作業を実施した。

9月以降は随時調査箇所の測量、記録作業を行い、記録作業が終了した令和4年10月3日付け与教生第149号で文化財保護法第99条に係る発掘調査実施報告書を鹿児島県教育委員会に提出した。

併せて同日付け与教生第151号で鹿児島県教育委員会宛てに埋蔵物保管証、与教生第152号で沖永良部警察署長宛に遺失物法第4条に基づく埋蔵物発見届を提出した。

下半期の整理作業は、発掘調査に引き続きNPO法人ヨロン島尊々我無に作業支援の業務委託を行い、主に与論町立中央公民館において実施した。

また、自然科学分析(AMS法による理化学年代測定)をバリノ・サーヴェイ株式会社沖繩支店に業務委託を行った。

イ 調査体制

事業主体 与論町長 山 元宗

調査主体 与論町教育委員会 教育長 町岡 光弘

責任者 与論町教育委員会 局長兼生涯学習課長兼学務課長 川上 嘉久

事務担当 同 課長補佐 林 健太郎、同 主事 朝岡 陽平、同 会計年度任用職員 川上 明日香

調査担当 同 学芸員 南 勇輔

調査指導 文化庁 文化財第二課 主任文化財調査官 近江 俊秀、同 調査官 斉藤 慶史

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 主任研究員 宮原 健吾

調査支援 鹿児島県教育庁 文化財課 埋蔵文化財係 文化財主事 阿比留 士朗、同 馬籠 亮道

鹿児島県立埋蔵文化財センター 調査課 第一調査係 文化財主事 今村 結記

同 文化財研究員 鮫島 えりな

ウ 経過

5月 17日 令和3年度出土遺物の注記作業開始。20日 一部実測作業開始。25日 令和3年度出土遺物の注記作業終了。令和3年度出土遺物の分類・仕分け作業開始。

6月 6日 令和3年度出土遺物の分類・仕分け作業終了。分類した資料の台帳データ化、実測作業再開。
17日 整理作業終了。30日 トレンチ5より調査開始。

7月 1日 トレンチ6着手。6日 トレンチ6一時終了。トレンチ4着手。令和2年度トレンチ4の土層確認作業開始。7日 トレンチ5一時終了。8日 トレンチ4一時終了。トレンチ1着手。

11日 トレンチ3着手。12日 トレンチ2着手。14日 トレンチ3一時終了。19・20日今村氏指導。

28日 トレンチ3追加調査着手。

8月 15日 トレンチ5追加調査着手。20日 発掘調査成果現地説明会。26日 支援業務委託による発掘調査終了。以後、教育委員会職員が随時記録作業を実施。

10月 3日 調査箇所記録作業終了。11日 令和4年度出土遺物の洗浄作業実施。26日 令和4年度出土遺物の注記作業開始。

11月 15日 令和4年度出土遺物の注記作業終了。分類作業開始。18日 令和4年度出土遺物の分類作業終了。実測作業開始。

12月 19日 遺物実測図面のトレース作業開始。

令和5年1月 16・17日 鮫島氏指導。

2月 7～9日 宮原氏指導。17日 支援業務委託による整理事業終了。21・22日 赤司氏指導。
28日 文化庁との事業内容協議。

3月 22・23日 永山氏指導。

(6) 令和5年度

ア 概要

整理作業は、NPO法人ヨロン島尊々我無に整理作業支援の業務委託を行い、5月1日より12月14日にかけて、主に与論町立中央公民館において整理作業を実施した。

また、遺物実測図面の一部を株式会社九州文化財研究所鹿児島支店に業務委託を行った。

イ 調査体制

事業主体 与論町長 山 元宗（～9/24）、田畑 克夫（9/25～）

調査主体 与論町教育委員会 教育長 町岡 光弘（～9/30）、中山 義和（10/1～）

責任者 与論町教育委員会 局長兼生涯学習課長兼学務課長 川上 嘉久

事務担当 同 課長補佐 林 健太郎、同 主事 朝岡 陽平、同 会計年度職員 町 公代（7/1～）

調査担当 同 学芸員 南 勇輔

調査指導 文化庁 文化財第二課 文化財調査官 主任調査官 近江 俊秀

千葉県立博物館 資料管理研究科 上席研究員 黒住 耐二

明治大学 研究・知財戦略機構 研究推進員 樋泉 岳二

調査支援 鹿児島県教育庁 文化財課 文化財主事 阿比留 士朗

鹿児島県立埋蔵文化財センター 調査課 第一調査係 文化財主事 鮫島 えりな

ウ 経過

5月 1日 実測作業及びトレース作業開始。

24～26日 黒住氏、樋泉氏指導。

8月 31日 実測作業終了。以後、トレース作業を中心に実施。

9月 7・8日 鮫島氏指導。16・17日 永山氏指導。

25～29日 鹿児島県埋蔵文化財センターの写場において出土遺物の写真撮影作業実施。

10～12月 報告書の編集作業を中心に実施。

調査協力（五十音順）

町内

池田直也、石峯森雄、伊東伯良、岩村朝香、沖家寿、沖隆寿、大原佐江勝、大山安峰、大山行則、大山正臣、椋山寿春、川北英輝、黒田茂實、酒井茂、坂井広美、猿渡恵子、平初雄、竹森七海、龍園典男、保スエ、保多美子、土持俊秀、林和子、林清文、平田弥禎、福留羽津美、堀勝広、堀田和男、森展宏、南敬弘、基俊文、基真理子、山下隆重、一般社団法人 ヨロン島観光協会、龍堅蔵、若松初江

町外

新井一史、新垣力、臼井洋輔、小野正敏、北野勘重郎、金城亀信、隈本俊一、呉屋義勝、佐々木健策、重根弘和、関根達人、武芳子、田中克子、玉城綾、玉城靖、田邊桃子、堂込秀人、西園勝彦、馬場昌一、麓トシエ、麓知孝、前迫亮一、宮城弘樹、宮崎大和、村木二郎、目賀里佳、森達也、横手伸太郎、渡辺芳郎

琉球大学国際地域創造学部

教授 後藤雅彦

准教授 主税英徳

学 生（当時） 狩俣優里、小川泰盛、佐久本晴生、下村春樹、畑中爽甫、花城媛子

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

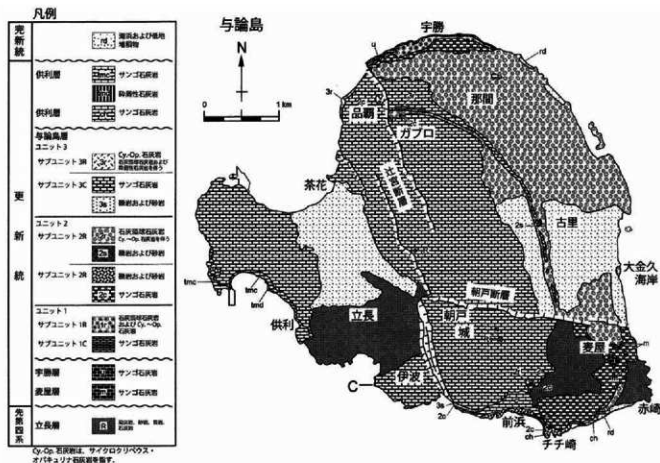
1 地形・地質

与論島は、鹿児島県の最南端に位置しており、島周23.7km、面積20.58km²の島で、島の南北に走る辻宮断層と東西に走る朝戸断層によって凡そ3分されている。

島の最高点は辻宮断層と朝戸断層が交わる標高97mの地点にあり、ほかの奄美群島の島々に比べて低平な地形上の特徴を有する。しかしながら、比高差数十mに達する断層崖と発達した石灰岩段丘によって、高低差のある地形となっている。

島内の地質は、地表を覆う琉球層群（琉球石灰岩）と、その基盤となる付加体の地層・岩盤に分けられる（稲田・井龍・尾方2018）（図1）。このうち、琉球層群は更新世に形成された更新統の石灰岩で、島の地表面の殆どを占めるとともに、地層の年代が古いものから宇勝・麦屋層、与論島層、チチ崎・供利層の3層に区分される（井龍・小原1999）。

付加体は、島の南側の立長、東区、朝戸集落の一部や海岸で露頭としてみられ、泥質の千枚岩を基質として塩基性火山岩（玄武岩が弱変性した緑色岩）、チャート（中生代ジュラ紀後期から白亜紀初期頃）、結晶質石灰岩（古生代ペルム紀から中生代三畳紀）、砂岩などで構成される。また、上位の琉球層群とは不整合で接しているが、付加体が高不透水性になるため、琉球層群と接する面より湧水や鍾乳洞内の地下水系が発達している。特に辻宮断層と朝戸断層によって囲まれた、島の南側の地区（図1の「城」「朝戸」が記載されている地区）では、標高50mを超える内陸部であっても湧水地が認められ、町指定文化



財の「神ゴー」や「麦屋井」や菅原池といった湧水地や池が存在している。この地域に所在する城、朝戸、西区、東区の4集落は古くから集落が開けていたと伝わっている。

一方で、完新統の低地堆積物で構成される茶花集落や古里集落の一部や、琉球層群が厚く堆積する那間集落、叶集落の一部は与論校区の集落に比べて水源が乏しいこともあり、近世期に上述した4集落から島内各地に分村、移住する際は湧水地や周辺やアナゴウ（堀井戸）を開削して水源として利用し、近代以降、深井戸を掘る技術の導入や、戦後上水道が整備されることで安定した水源が確保できるようになったとされている（本山1983）。

また、与論島は奄美群島内でも最大規模の裾礁が発達しているが、島の南東端の赤崎海岸から北端の宇勝海岸、西端の兼母海岸付近にかけて特に発達した裾礁となっている。一方で、島の南側に位置する前浜海岸から尾道にかけては礁湖があまり発達しておらず、磯のような海岸地形になっており、島の中でもサンゴ礁の形成状況に違いを認めることができる。

与論城跡（与論グスク）は、町内の南側に位置する城集落内に所在している。城跡は琉球層群の琉球石灰岩台地の縁辺部に位置しており、台地を区切る辻宮断層の断層崖と台地の縁辺部の高まりを城壁に取り込むとともに、縄張りはこの断層崖と崖の間に存在する平坦面を利用して曲輪を構築している。

2 自然環境

奄美群島内には「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の一部として世界遺産に指定された奄美大島、徳之島を始め、多くの固有種・固有亜種が生息しており、与論島も平成29（2017）年3月7日に奄美群島国立公園の一部として海域の一部が指定されている。

島内で確認される動物相としては、国の天然記念物であるオカヤドカリ（方言名アマン）やカラスバ



図2 与論町の植生分布（環境省自然環境局生物多様性センター自然環境調査Web-GISより引用、筆者一部改変）

ト(方言名カラバトゥ)をはじめ、海域にはアオウミガメ、アカウミガメ(ウミガメ類は総称して方言名ハミ)、12月から3月にかけてマッコウクジラが回遊してくることがある。渡り鳥にはサシバ(方言名ター)やリュウキュウコノハズク(方言名ミヤンチックー)を見ることが出来る。両生類・爬虫類については、与論島にハブは生息していないがアカマタやアオナカヘビ、リュウキュウアオヘビ(ヘビ類は総称して方言でマツブ)、ホオグロヤモリ(方言名ヤドゥマープイ)が生息しており、絶滅した固有種としてヨロントカゲモドキが発見されている(Yasuyukiほか2014)。しかしながら、本町において現存する固有種は殆ど無く、ヨロントカゲモドキの絶滅した理由が人為的に輸入されたニホンイタチによるものとされているように(Yasuyukiほか2014)、人間活動によって両生類・爬虫類の多様性は乏しい状況にある。

甲殻類としては、前述したオカヤドカリのほかにヤシガニ(方言名アンマフ)を認めることができる。

植物相(図2)については、島の地形に応じて異なる植生を認めることができる(池田1988a)。海岸部にはグンバイヒルガオ、アダン(方言名アダニ)、ソテツ(方言名シチチ)、オオハマボウ(方言名ユーナ)の群生があり、台地上にはガジュマルやアカギ(方言名アカギ)、アコウ(方言名ウスク)、ヤマグワ(方言名クワァーギ)、ソテツ(方言名シチチ)、松喰い虫で多くが枯死したもののリュウキュウマツ(方言名マツィギ)がみられる。また、集落の周辺には屋根を葺く茅材と利用されていたトキワススキ(方言名ギシキ)やハチジョウススキ(方言名ギヤー、ギヤームトゥ)、シニグ祭りなどの祭事に用いられるダンチク(方言名デーク)、建築用材などに多用されたリュウキュウチク(方言名ダイ)が群生しており有用植物として利用されていた。集落内については、人為的に導入された植生であるが、屋敷林や木材として利用されたフクギ(方言名フクギ)、リュウキュウコクタン(方言名クルキ)、イヌマキ(方言名シャーギ)、果樹として利用されたミカン、バナナ、芭蕉(方言名バシャ)を認めることができる。

なお、与論島の植物相は、島内全域が畑地や居住地、牧草地などとして利用されているため、自然林は断層崖や石灰岩段丘の崖に僅かに残る程度である。

第2節 歴史的環境

1 時代区分(図3)

奄美群島の歴史区分、時代区分については、高梨が指摘するように歴史の変遷には日本本土や沖縄県域とも異なった独自性が指摘されている(高梨2001)。奄美市立博物館で採用されている日本本土の歴史区分との並行関係で歴史区分を捉える場合(奄美市立奄美博物館編2021)や、近似した風土を有する沖縄県域の考古学、文献史学などを踏まえた時代区分(瀬戸内町誌歴史編纂委員会2007、宇検村誌編纂委員会編2017)など、複数の時代区分が提示されており、自治体ごとに異なる状況である。

与論町については、与論町誌において「序節 カミヌバナシ(神話)」に与論島創世の神話伝承、先史時代から近世までが「第一章 与論島の先史時代」、「第二章 古代」、「第三章 中世」、「第四章 与論の近世社会」、明治以降の近代は「第三編 政治」として収録されている(与論町誌編纂委員会1988)。

また、巻末の年代表では、「縄文」から「大和時代(古代)」の6世紀前半までを「南島民の定住・移動時代」、「大和時代(古代)」の6世紀前半以降から「平安時代(古代)」の一部を「朝貢時代」、「平安時代(古代)」から「鎌倉時代」の13世紀後半を「無所属的時代」、奄美大島が琉球国に朝貢したと伝わる13世紀後半から島津氏の琉球入り後、琉球の検知が終了した江戸時代の1611年までを「琉球服属時代」、1611年から17世紀前半までを「薩摩派遣の奉行・代官配下時代」、17世紀前半以降から1860年代後半までを「薩摩派遣の代官配下時代」、明治時代に入る1869年から1945年までを「皇国民時代」、

戦後米軍統治下に置かれた1946(昭和21)年から1953(昭和28)年までを「米軍政下時代」、1954(昭和29)年以降を「民主政体・経済成長時代」として時代区分が行われている。

一方で本町の町政要覧では、「奄美世(あまみゆ)のころ」、「按司世(あじゆ)のころ」、「那覇世(なはゆ)のころ」、「大和世(やまとゆ)のころ」、「明治・大正のころ」、「終戦・祖国復帰新しい時代へ」と時代区分されている。

このように与論町で採用されてきた時代区分を踏まえると、奄美市立博物館の時代区分が町政要覧で採用されている区分に近く、国境の島でもあった本町の流動的な時代区分を考える上でも適していると考えられることから、奄美市立博物館の時代区分方法を基にした時代区分を採用する。

なお、沖縄県域の時代区分と対応させる場合は沖縄県史史料編纂所のもの(沖縄県教育委員会2017)を採用し、考古学的な分野での時代区分には高宮らの区分(新里ほか2013)を用いる。

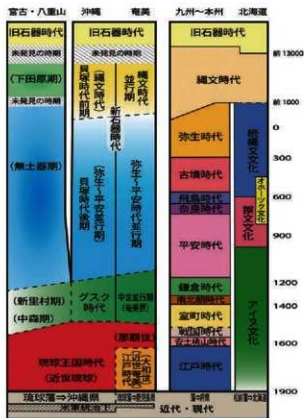
2 各時代の概要と周知の埋蔵文化財

与論町内では、令和5年6月現在、周知の埋蔵文化財(以下、遺跡)が56か所確認されている(図4、表2)。このうち、最古の遺跡は、大兼久海岸の後背砂丘に立地する古里クヅレ遺跡において、室川下層式(縄文時代中期並行期)と考えられる土器片が採集されている。

縄文時代並行期の遺跡は、上述したクヅレ遺跡を始め、縄文時代後期並行期の長東遺跡、縄文時代晩期～弥生時代前期の住居址が確認された上城遺跡(与論町教育委員会1990)(写真2)や、与論町内で始めて発掘調査が実施された際に調査が行われたヤドゥンジョウ遺跡(与論町教育委員会1980、熊本大学考古学研究室1981)がある。

弥生時代～古代並行期の遺跡は、ハキビナ海岸周辺の茶泊1遺跡、ハキビナ浜遺跡で確認されている。

縄文時代並行期～古代並行期にかけての遺跡の立地環境については、奄美群島や沖縄諸島の遺跡と同様である。各遺跡の土器型式、石器組成については、資料が限られているため判然としなが、現時点で



※当歴史区分表は沖縄考古学会編2018「奄美考古入門」掲載図1を基に、奄美市立博物館の年代観を踏まえて作成

図3 本書で主に用いる歴史区分

表1 日本史と与論町刊物の歴史区分対照表

日本史	与論町誌		町政要覧
	準近代	近世	
旧石器時代	原始	原始	未定
縄文時代	縄文時代	縄文時代	
弥生時代	弥生時代	弥生時代	弥生世のころ
古墳時代	先史	先史	大和時代
飛鳥時代	古代	古代	新羅時代
奈良時代	古代	古代	奈良時代
平安時代	平安時代	平安時代	無氏無姓時代
鎌倉時代	中世	中世	鎌倉時代
南北朝時代	中世	中世	北朝室町時代
室町時代	中世	中世	室町時代(中世)
戦国時代	中世	中世	室町時代(中世)
安土・豊前時代	中世	中世	室町時代(中世)
江戸時代	近世	近世	江戸時代(近世)
明治～昭和元年	近代	近代	明治維新後の泰平・代官統治時代(1611年～17世紀後半)
昭和20年～	現代	現代	戦時体制下の代官統治時代(17世紀後半～1960年代後半)
	近代	近代	明治・大正のころ
	現代	現代	米軍政下時代(1946年～1953年)
	現代	現代	民主政体・経済成長時代(1954年～)
	現代	現代	終戦・祖国復帰新しい時代

は奄美・沖縄両地域の土器型式が確認されている。

中世並行期になると、現在の与論校区内に遺跡が集中して形成されるようになる。特に兵屋らが指摘するように、中世並行期の遺跡は地元で「サトゥ」と呼称され島内でも古い集落とされる城・朝戸・西区集落内に分布している傾向が認められる（竹下ほか2019）。

与論城跡は、当該期の遺跡が集中する台地の西端に位置している。与論城跡の所在する城集落内にも13か所の遺跡が確認されているが、いずれも中世並行期の遺跡である。与論城跡が利用されていた時期には、城域の周辺に集落遺跡が展開していた可能性がある。また、与論城跡の西側に位置するハキピナ海岸では、町内で唯一海岸付近で中世並行期の遺跡（茶泊1遺跡）が確認されている。このため、当該海岸は中世並行期に港湾などとして利用されていた可能性がある。

近世並行期になると、遺跡は中世並行期の遺跡が集中する与論校区の台地上に加えて、現在与論島の中心地となっている茶花集落にも遺跡が僅かに認められるようになる。

この遺跡分布は、江戸時代に作成された国絵図に記述がある「あがさ村」と「むぎや村」の2村と凡そ一致する。加えて、地元に伝わる分家関係などから推測すると江戸時代に現在の与論島の集落の原型が形成されたと考えられる。

しかしながら、各遺跡の時期は資料不足により判然としないところもあるため、今後精査する必要がある。

3 民俗（図5）

与論町内には現在、「与論の十五夜踊」（写真3・4）と「与論島の芭蕉布製造技術」の2件が国指定重要無形民俗文化財として指定されている。

このうち「与論の十五夜踊」は、与論城跡内に鎮座する「地主神社」に対して、土俵が設置されている曲輪（通称、境内）において奉納の演舞が執り行われている。

与論城跡の東側に接する城集落は、与論町誌によると（与論町誌編集委員会1988）、山北から派遣されてきた王舅との関わりを有する人々の子孫や、第



写真2 上城遺跡検出の住居跡



写真3 国指定重要無形民俗文化財 与論の十五夜踊
（令和4年 旧暦三月十五夜 一番組 二十四孝）



写真4 国指定重要無形民俗文化財 与論の十五夜踊
（令和4年 旧暦八月十五夜 二番組 アーミタボーリ）



写真5 町指定文化財 屋川（城集落）

二尚氏期に与論島に渡り近世期に地元の役人である与人を務めた人々の子孫、近世期に薩摩藩から派遣されてきた役人の子孫など、中世から近世にかけて与論島の役人層を形成した人々の屋敷地となっている。また、これらの屋敷の多くが屋号を有しており、フクギを用いた屋敷林の導入も認められる。与論島で最初に植えられたと伝わる城集落内のフクギは樹齢274年と推定されており（仲間・来間 2021）、近世段階からの集落景観を現代にまで伝えていていると考えられる。

また、現在、奄美群島内では与論島でしか行われていないシニグ祭りも城集落内において、各祭祀集団によって現在でも執り行われている。「与論の十五夜踊」についても、元々は城集落内の一部のシニグ祭りで踊られていたものだったと伝わっている。

与論城跡に関わるような伝承についても以下のものが伝わっている。

- ・築城主は山北王の三男王舅。

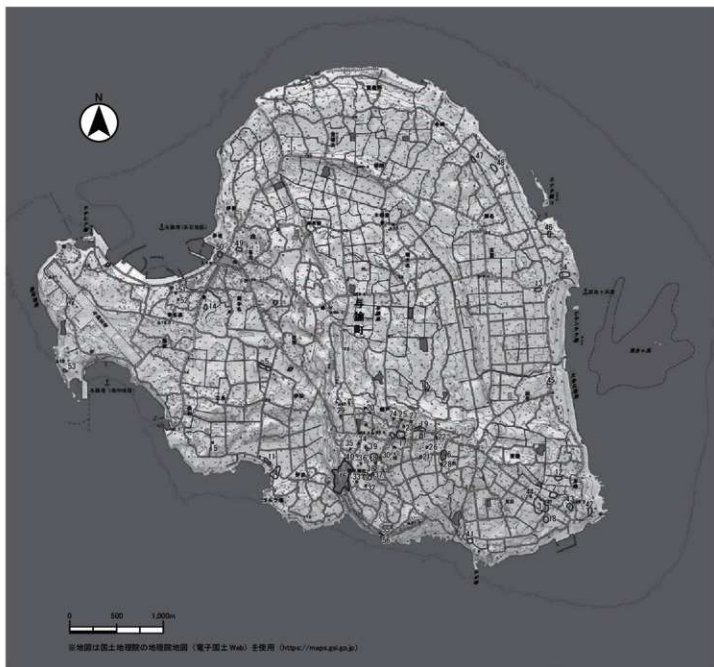


図4 与論町内の周知の埋蔵文化財

・城集落の公民館西側に所在する与論町指定文化財の「屋川」(写真5、図5-①)は石灰岩洞穴内を流れる小川を利用した井戸であるが、この井戸の所説ある発見の経緯の伝承の中で、与論城跡の築城時に発見されてという話がある。

・与論城跡の崖下にある平坦地の「ハマシチャ」(図5-②)は与論城跡築城時の鍛冶を行っていた場所という話が鹿児島県教育委員会の民俗調査の際に集録されている(鹿児島県教育委員会1981)。

・与論城跡の隅にはデーク(和名ダンチク)が植えられている(2019年 城集落在住の当時70代前半の男性より聞き取り)。

・伊波集落からの登り口は城内で分かれるが、北側が武士の道(図5-③)、南側が役人や商人の通る道(図5-④)として分けられていた(2019年 城集落在住の当時70代前半の男性より聞き取り)。

表2 与論町内の周知の埋蔵文化財一覧(令和5年4月現在)

通番	番号	遺跡名	遺跡名(ヨミガナ)	所在地(大字・小字)	立地	時代
1	H25-535-1-0	朝戸メーサフ遺跡	アサト メーサフ	朝戸・花川	台地	古墳・古代・中世
2	H25-535-10-0	ヤドゥンジョウ遺跡	ヤドゥンジョウ	妻屋・ヤドゥンジョウ	台地	縄文
3	H25-535-11-0	上城遺跡・上城	ウワイグスク	妻屋・アマミゾ	丘陵	縄文～中世
4	H25-535-12-0	茶治1遺跡	チャドゥマイ1	立長・茶治	海岸砂丘	中世
5	H25-535-13-0	北登五良遺跡	ミシトウグラ	茶花・北登五良	台地	縄文
6	H25-535-14-0	江遺跡	シヨウ	妻屋・正	台地	中世・近世
7	H25-535-15-0	当間渡遺跡	トーマツタイ	朝戸・当間渡	台地	中世・近世
8	H25-535-16-0	妻屋ホービヤー遺跡	ムギヤ ホービヤー	妻屋・久保	台地	中世・近世
9	H25-535-17-0	厚川遺跡	ヤゴ	妻屋	台地	中世・近世
10	H25-535-18-0	平田遺跡	ビヤーキ	朝戸・平草・半田岸本	台地	縄文
11	H25-535-19-0	ハキビナ浜遺跡	ハキビナハマ	立長・宮利	海岸砂丘	縄文～中世
12	H25-535-2-0	妻屋遺跡	ムギヤ	妻屋	台地	縄文
13	H25-535-3-0	古里遺跡	フルサト	古里・ヨイマシ・早畑キ	台地	縄文
14	H25-535-4-0	茶花遺跡	ヤバナ	茶花・南与毛田	台地	縄文
15	H25-535-6-0	立長ハギビナ	リツショウ ハギビナ	立長	台地	縄文
16	H25-535-7-0	与論城跡	ヨロングスク	立長・辺城跡・ほか	丘陵	中世・近世
17	H25-535-8-0	花川遺跡	バナゴ	朝戸・花川	台地	縄文～近世
18	H25-535-9-0	奄水遺跡	アマミゾ	妻屋・アマミゾ(奄水)	台地	縄文
19	H29-535-20-0	朝戸根津梁遺跡	アサト ニツチエ	朝戸・尾下川	台地	古墳・古代・中世
20	H29-535-21-0	高塚遺跡	ターヤ	朝戸・高塚	台地	中世・近世
21	H29-535-22-0	妻屋サトウメシ遺跡	ムギヤ サトウメシ	妻屋・高塚・稲穂辻	台地	中世・近世
22	H29-535-23-0	妻屋フカナ遺跡	ムギヤ フカナ	妻屋・田畑	台地	中世・近世
23	H29-535-24-0	朝戸アサトウ遺跡	アサト アサトウ	朝戸・津葉	台地	中世・近世
24	H29-535-25-0	徳川原遺跡	トウクゴバル	朝戸・徳川原・津葉	台地	中世・近世
25	H29-535-26-0	朝戸スーマ遺跡	アサト スーマ	朝戸・津葉	台地	中世・近世
26	H29-535-27-0	高塚遺跡	ターニ	妻屋・高塚	台地	古墳・古代・中世
27	H29-535-28-0	尾下川遺跡	シーシチャゴ	朝戸・尾下川	台地	古墳・古代
28	H29-535-29-0	妻屋サキマ遺跡	ムギヤ サキマ	朝戸・サキマ	台地	中世・近世
29	H29-535-30-0	茶花見良パンタ遺跡	ヤバナミーラ パンタ	茶花・西平田	台地	中世・近世
30	H29-535-31-0	朝戸メーダ遺跡	アサト メーダ	朝戸・川増	台地	中世・近世
31	H29-535-32-0	朝戸グスクマ遺跡	アサト グスクマ	妻屋・矢口	台地	中世・近世
32	H29-535-33-0	妻屋ホーチ遺跡	ムギヤ ホーチ	妻屋・前平	台地	中世・近世
33	H29-535-34-0	立長クチビヤー遺跡	リツショウ クチビヤー	立長・大水	台地	中世・近世
34	H29-535-35-0	見良遺跡	ミーラ	立長・見良	台地	中世・近世
35	H29-535-36-0	大塚倉遺跡	ウツラグラ	立長・大塚倉	台地	中世・近世
36	H29-535-37-0	立長イナビヤー遺跡	リツショウ イナビヤー	立長・稲穂	台地	中世・近世
37	H29-535-38-0	当間渡遺跡	トーマ	妻屋・矢口	台地	中世・近世
38	H29-535-39-0	妻屋ウィマサ遺跡	ムギヤ ウィマサ	妻屋・久保	台地	中世・近世
39	H29-535-40-0	立長ウィホービヤー遺跡	リツショウ ウィホービヤー	立長・見良 妻屋・久保	台地	中世・近世
40	H29-535-41-0	茶治2遺跡	チャドゥマイ2	立長・茶治	台地	中世・近世
41	H29-535-42-0	風花遺跡	ハダハナ	妻屋・風花	台地	縄文
42	H29-535-43-0	赤崎遺跡	アサキ	妻屋・赤崎	台地	縄文
43	H29-535-44-0	妻屋ノースク遺跡	ムギヤ ノースク	妻屋・ヤドゥンジョウ	台地	縄文
44	H29-535-45-0	赤崎洞穴遺跡	アサキドウケン	妻屋・ヤドゥンジョウ	台地	グスク時代・近世
45	H29-535-46-0	クツレ遺跡	クツレ	古里・クツレ	台地	縄文
46	H29-535-47-0	ガギン遺跡	ガギン	古里・ガギン	台地	縄文
47	H29-535-48-0	野畑遺跡	ノーバツタイ	原間・野畑	台地	縄文
48	H29-535-49-0	黒花遺跡	クワハナ	原間・黒花	台地	縄文
49	H29-535-50-0	岸田遺跡	キシント	茶花・岸田	台地	中世・近世
50	H29-535-51-0	茶花ビグチ遺跡	ヤバナ ビグチ	茶花・赤畑	海岸砂丘	中世・近世
51	H29-535-52-0	立長イチヨウキ遺跡	リツショウ イチヨウキ	立長・宇ガンの前	海岸砂丘	縄文
52	H29-535-53-0	立長ウガンヌメ遺跡	リツショウ ウガンヌメ	立長・宇ガンの前	海岸砂丘	縄文
53	H29-535-55-0	ビドウ遺跡	ビドウ	立長・ビドウ	台地	貝塚時代
54	R20535-56	長東遺跡	ナガビジャ	原間・長東	台地	縄文
55	R3-535-57-0	シミヤー古墓群	シミヤー	妻屋・山志喜名	海岸砂丘崖	近世
56	R3-535-58-0	フマイヨ古墓群	フマイヨ	妻屋・山志喜名	海岸砂丘崖	近世

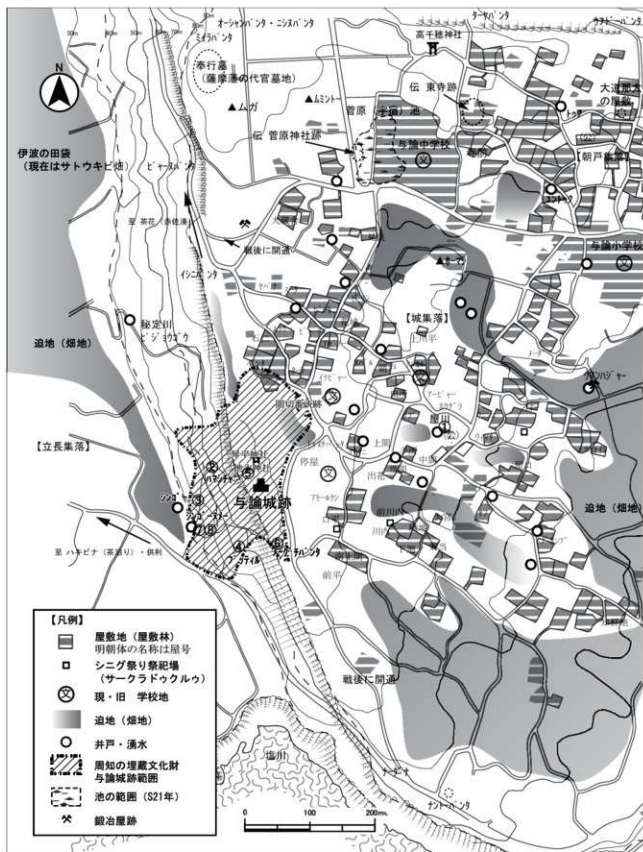


図5 与論城跡周辺の民俗地図

・築城時に^{うわすて}上城跡の石積みを崩してその石材を手渡して与論城跡まで運んだ（与論町教育委員会1990）。

・地主神社は幕末に島中の御嶽を合祀して祭っている社だが、南側の^{ひぐら}辺後地御嶽（図5-⑤）は城の築城から存在したものである（2019年 朝戸集落在住の当時70代前半の男性より聞き取り）。

・与論城跡の南端にある「メーグチバンタ」は、ハキビナ海岸から沖縄に貢物の穀物を運ぶ船が出港したら、旗を掲げて琉球へ合図した（図5-⑥、菊1988）。などが伝わっている。

また、与論城跡の崖下には、明治以前まで集落の方々が墓地として利用していた風葬墓があり、現在でも旧盆には集落の方が墓地の参拝に訪れている。シンゴヌメーの南側には、島の英雄として伝わるウブドーナタの墓地である「クンジャンパー」（図5-⑦）とサービィマートツイの墓地「アダンパー」（図5-⑧）がある。また、彼らが沖縄北部の国頭地域と往来する際はハキビナ海岸を利用していたと伝わっている（与論町誌1988）。これらの墓地の成立時期は不明だが、ブツィルの風葬墓の前に「明和三丙戌六親春風菩提 中久間」の銘がある石仏が安置されている（町2018）。

このことから、与論城跡の崖下部分は近世段階には風葬墓として利用・整備されたと考えられる。

引用HP

産総研地質調査総合センター 地質図Navi <https://gbank.gsj.jp/geonavi>

国土地理地図 <https://maps.gsi.go.jp/>

環境省自然環境局生物多様性センター自然環境調査Web-GIS <http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-002.html#webgis/402843>

参照・引用文献

奄美市立奄美博物館編2021『博物館が語る奄美の自然・歴史・文化 奄美博物館公式ガイドブック』南方新社

池田豪憲1988a「第一章 自然環境 第二節 陸の植物」『与論町誌』与論町教育委員会, pp. 15-36.

池田豪憲1988b「第一章 自然環境 第三節 陸の動物」『与論町誌』与論町教育委員会, pp. 36-49.

稲田瑞穂・井龍康文・尾方隆幸2018「第一節 与論島自然環境 三 地質」『与論町誌 追録版』与論町教育委員会, pp. 10-14.

井龍康文・小田原啓1999「鹿児島県と与論島の第四系サンゴ礁堆積物（琉球層群）」『地質学雑誌』第105巻4号, 日本地質学会, pp. 273-288.

宇検村誌編纂委員会編2017『宇検村誌 自然・通史編』宇検村教育委員会

鹿児島県教育委員会1982『奄美群島の民俗2 加計呂麻島・喜界島・与論島』鹿児島県教育委員会

菊千代1988「与論町大字麦屋の地名考」『沖縄文化』第24巻2号, 沖縄文化協会, pp. 21-38.

熊本大学文学部考古学研究室編1981『与論島の先史時代』研究室活動報告9, 熊本大学文学部考古学研究室

瀬戸内町誌歴史編纂委員会編2007『瀬戸内町誌 歴史編』瀬戸内町

新里貴之・伊藤慎二・宮城弘樹・新里亮人2013「琉球先史・原始文化の考古学的画期」

新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』六一書房, pp. 305-311.

高梨修2001「知られざる奄美諸島史のダイナミズム 奄美諸島の考古資料をめぐる新しい解説作業の試み」

『沖縄文化研究』第27巻, 法政大学沖縄文化研究所, pp. 183-245

竹下徹・竹盛窪・内野優三郎・呉屋義勝・麓才良・南勇輔2019「与論（ゆんぬ）の先人の生活跡を訪ねて！ -2016・2017年の遺跡分布調査の概要-」奄美考古学会編『中山清美と奄美学 -中山清美氏追悼論集-』奄美考古学会, pp. 389-407.

仲間勇亮・来間玄次2021『福木巨木の巡礼誌』東洋企画

麓才良2020「地域のなかの与論城・くんびら」『明らかになる与論城跡発表資料集 令和2年度地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業に係る関連シンポジウム』与論町教育委員会事務局, pp. 1-4.

町富秀2018「第三節 与論島の仏教」『与論町誌 追録版』与論町教育委員会, pp. 572-573.

本山文雄1988「第一編 概観 第二章 社会環境」『与論町誌』与論町教育委員会, pp. 78-112.

与論町教育委員会1980『与論島の先史時代』与論町文化財調査報告書, 与論町教育委員会

与論町教育委員会1990『上城跡・上城遺跡- 泉宮畑地帯総合土地改良事業（真正地区）に伴う埋蔵文化財確認調査報告書-』与論町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）, 与論町教育委員会

与論町誌編集委員会1988『与論町誌』与論町教育委員会

Yasuyuki Nakamura, Akio Takahashi, Hidetoshi Ota2014「A new, recently extinct subspecies of the Kuroiwa's Leopard Gecko, *Goniurosaurus kuroiwa* (Squamata: Eublepharidae), from Yoronjima Island of the Ryukyu Archipelago, Japan」『Acta Herpetologica』9(1), pp. 61-73.

第3章 与論城跡の過去の調査研究成果と縄張り構造

第1節 与論城跡の由来と研究史

1 与論城の由来

与論城跡の由来については、王舅と花城真三郎の2説が伝わっている。

王舅説は、山北王の三男である王舅が築城し、山北の滅亡により未完成とする説で伝承として伝わっている。花城真三郎説は、尚真王代の人物とされる花城真三郎が築城し完成したとする説で、花城真三郎自体は町指定文化財の『基家文書』等で家祖として近世の系図に登場するが、築城にまつわる話は後述する戦前に作成された家系図以前は確認することが出来ない。

2 与論城に関わる記述・記録と郷土研究

「与論島」に関する文献記録は、日本側の記録の中に14世紀前半から「与論島」と推定できる島の存在を確認することができる(表3)。「与論島」と記載された史料は、『琉球国図』や『海東諸国記』など15世紀後半以降に海図や地理誌において確認することができる。但し、この『琉球国図』や『海東諸国記』には沖縄島内に「首里グスク」や「今帰仁グスク」に比定されるような、「城」の記述が確認できるものの、与論島には「城」に関する記載は認められない。このため、与論城に関する同時代の文献・記録は確認できない。

一方で、近世・近代の記録では下記のもの確認できる。

- ① 19世紀前半の古文書『代官記録』(仮称)に琴平神社建立に関する記述で、建立場所の表記に「城」の文字(先田編 2012)。
- ② 天保四年から天保八年にかけての記録の簿冊と考えられる『瀧家文書』(先田 2012)に記されている役職名中に「城之百」を認めることができ、先田は城の管理者として比定(先田 2012, p. 241)。
- ③ 筑波大学所蔵の大正9年に当時の与論村役場が提出した村内に関する資料(仮称『大正九年与論村役場提出資料』筑波大学武井基見准教授より教示を頂く)に「名勝旧跡」の項目に「城、古城址」と記述。大正時代には当時の与論村内では与論城跡が史跡として認識されていたことが伺える。
- ④ 昭和10年刊行の郷土史『与論島』(野村 1935)に、吉田豊一が「與論城(琴平御城)の由来」(吉田 1935, p. 124)を寄稿。
- ⑤ 花城真三郎の一族(龍野家)の家系図である昭和11年初版の『與論自治世鑑』(龍野 1936)では、下記の与論城跡及び築城者に関する記述がある。
 - ア 与論城跡の構造は「内城」(台地部か)と「外城」(崖下部)から成り「清川」まで含む。
 - イ 築城時に技師として「大里」ほか数名を首里から招聘。『与論島』で吉田は「石峯、中里等」と記述(吉田 1935, p. 125)。
 - ウ 石材の不足により「追城」や「積墓」から石垣を運び出す。
 - エ 城は完成。
 - オ 『与論島』で吉田は、花城真三郎は完成後にビヤース半田の見良(みーら)に新たな城を築城途中で死亡と記述(吉田 1935, p. 128)。
- ⑥ 林清国(林 1985, 出典は1966)は按司の占有していた漁場の例に与論城主を挙げた際、城主を王舅とし、花城真三郎(又吉按司)は王舅の後に派遣されてきたと記述(林 1985, p. 51)。

また、野口才蔵は『南島与論島の文化』(野口 1976)の中で、林清国の説が妥当だと主張している。この中で野口は、林清国から聞いた話として、王舅から数代後の子孫にあたる石仁の祝女(ノロ)が妹に付き添って首里に上国した際、又吉按司と妹が結ばれて生まれたのが花城真三郎という伝承などを踏

表3 与論城跡関連年表（中世並行期）

西暦	和暦	中国歴	出来事
1260年	正元2年 文応元年	景定元年（南宋） 中統元年（元）	『球陽』に英祖王即位と伝わる（琉）
1266年	文永3年	咸淳2年（南宋） 理宗3年（元）	『琉球国由来記』奄美群島の島々が英祖王に入貢と伝わる（奄）（与） 『琉球国由来記』奄美群島の島々が泊津を利用、泊瀬殿が奄美群島を管轄させる（奄）（与）
1274年	文永11年	咸淳10年（南宋） 至元11年（元）	文永の役（日）
1281年	弘安4年	至元18年（元）	弘安の役（日）
1306年	嘉元4年・徳治元年	大徳10年（元）	『千載家文書』奄美群島に関する記述（奄）（与） 次男千羅経家が沖永良部島（与論まで含むか）の所領を相続。 喜界島・奄美大島・徳之島・沖永良部島（与論島まで含むか）は北来得宗家廟との記載
1333年	正慶2年・元弘元年	至期4年・元統元年	鎌倉幕府 滅亡（日）
1335年	建武2年	元統3年・至元元年	南北朝時代（日）、前期後期の活動が活発になる
1350年	観応元年（北朝） 正平5年（南朝）	至正10年	順慶王即位と伝わる（琉）
1362年	康安2年・貞治元年（北朝） 正平17年（南朝）	至正22年	『島津家文書』島津道隆謀状に島津師久に奄美群島（此外五島）を譲与する記述（奄）
1368年	貞治7年・応安元年（北朝） 正平23年（南朝）	至正28年（元） 洪武元年（明）	朱元璋 明 建国（中）
1372年	応安5年（北朝） 文中元年（南朝）	洪武5年	順慶王 明に朝貢（琉）
1383年	永徳3年（北朝） 元中元年（南朝）	洪武16年	山北王 明に朝貢（琉）
1392年	明徳3年	洪武25年	明徳の和約 南北朝合一（日）
1406年	応永13年	永業4年	第一尚氏王統始まる（琉） ※この頃、王舅 与論城築城と伝わる（与）
1416年	応永23年	永業14年	尚巴志により山北国滅亡（琉）
1419年	応永26年	永業17年	応永の外寇（日・韓）
1422年	応永29年	永業2年	『真本毛氏由来記』尚巴志が佐佐丸を渡合按司に任じ、喜界島・奄美大島等の入貢を徴発して城（鹿野味城跡）を築かせる（琉）（奄）（与） 尚巴志 三山統一（琉）
1429年	正長2年	宣徳4年	この頃から琉球国が奄美群島へ軍事行動（琉）（奄） 『朝鮮王朝実録』臥蛇島に漂着した朝鮮人4名を、島が薩摩と琉球に半分ずつ属していることから、2人づつ送還。この時、琉球国の王弟が喜界島に遠征している記録（琉）（奄）
1450年	宣徳2年	景泰元年	志魯・希里の乱（琉） 臨宗元年に博多商人の遺安、朝鮮政府に『博多・薩摩・琉球、相拒つるの地図』を献上。この地図の原図に近い資料として考えているのが、元禄9（1696）年に福岡藩士・竹森道悦が絵師・熊本内繁と共に書写し、太宰府天満宮へ奉納したとされる『琉球国図』（沖縄県立博物館・美術館所蔵）。この『琉球国図』には与論島を含めた奄美群島が記載。
1453年	享徳2年	景泰4年	『球陽 外蕃異書説伝』に琉球国中山王が喜福武閩切東邊名村奥間里の子により、与論島と沖永良部島の2島を討たせる。また、この頃、毎年喜界島を討つ、十五年前には奄美大島が琉球王国に帰属。
1458年	長祿2年	天順2年	護佐丸・阿麻和利の乱（琉）
1466年	寛正7年・文正元年	成化2年	『琉球国中山世譜』『中山世譜』尚徳王が喜界島親征を行い、帰順させる（琉）（奄） 『琉球国由来記』泊地頭に奄美群島の島々の年貢を管轄させる（琉）（奄）
1467年	文正2年・応仁元年	成化3年	応仁の乱 勃発（日）
1470年	文明2年	成化6年	金丸即位 第二尚氏王統始まる（琉）
1471年	文明3年	成化7年	李氏朝鮮領議政 申叔舟『海東諸国図』併行（朝）、海図に与論島を含めた奄美群島の記載（琉）（奄）（与） 尚真王即位（琉） 八重山のオヤケアケハチ討伐（琉）
1500年	明応9年	弘治13年	※『高家系図』花城真三郎 来島（与） 『おもしろそうし』に尚真王が奄美大島の笠利を討つおもしろ（奄）（琉）
1526年	応永6年	嘉靖5年	『おもしろそうし』第一巻編纂（琉）、奄美群島のおもしろが収録（奄）（琉） 『球陽』琉球国、奄美大島に派兵して興済大親を征討する（奄）（琉）
1531年	享祿4年	嘉靖10年	『琉球国中山世譜』『添補世門北之碑文』尚清王、典渡上および宮古・八重山の人々を徵発して首里城世継門石礎を普請する（奄）（琉）
1537年	天文6年	嘉靖16年	『与論の十五夜論』、花城真三郎の息子らによって創設と伝わる。 『毛氏家譜』毛感理を典渡上之管理に任ずる（奄）（琉）
1544年	天文13年	嘉靖23年	『琉球国中山世譜』『添補世門北之碑文』尚清王、典渡上および宮古・八重山の人々を徵発して首里城世継門石礎を普請する（奄）（琉）
1561年	永祿4年	嘉靖40年	『与論の十五夜論』、花城真三郎の息子らによって創設と伝わる。
1568年	水祿11年	隆慶2年	『毛氏家譜』毛感理を典渡上之管理に任ずる（奄）（琉）
1593年	文祿2年	萬曆21年	『蘇姓家譜』尚寧王、島津氏の琉球征討の風説により、蘇重里を典渡上の五島に派遣する（11月）。翌年正月に帰朝（奄）（琉）
1598年	慶長3年	萬曆24年	『蘇姓家譜』尚寧王、蘇重里を典渡上の五島に派遣する（10月）。翌年正月に帰朝（奄）（琉）
1609年	慶長14年	萬曆37年	島津氏による琉球侵襲（日）（奄）（琉）（与）

凡例：（日）は日本史、（琉）は琉球史、（奄）は奄美史、（与）は与論町に関する歴史。

：塗り直しを行っている出来事は与論町に關係する出来事。

まえ、王舅を築城主として比定している。

以後、野口が編集委員長を務めた『与論町誌』等では王舅説が採用され、現在は王舅説が多くの公刊物等で用いられている。

3 与論城跡に関する研究史

与論城跡に関する研究については、有元彰順による与論城跡北東側の畑で採集した遺物を紹介と縄張り図の掲載(図6-①、有元1974)が最初期である。

また、与論城跡自体の調査ではないが、金関丈夫は九学会連合による調査成果の一環として隣接する城集落で陶磁器が採集できることを報告している(金関1978)。加えて金関は、現在の土俵付近で与論十五夜踊りを撮影しており、公園整備前の城跡の状況を伺い知ることができる。

沢村仁らは、与論城跡全体および地主神社南側の石垣の測量図面を作成しており(図6-②、沢村ほか1982)、1980年代前半の城内の状況を把握する資料として重要である。

三木靖は、与論城跡の縄張り構造や由来について報告を行っており、入口を現在の参道、琴平神社を本丸に比定、東北側の畑地も石垣が認められることから、城域に含められるとしている(三木1979)。また、沖永良部島の山城(世之城跡)の位置づけを検討する中で、奄美群島内における琉球様式の代表的な城郭遺跡として与論城跡を略測量図付きで紹介しており、サザンクロスセンター東側の公園も城域に含まれる可能性を指摘している(図6-③、三木1983)。

行政資料であるが、1980年代前半に実施された鹿児島県教育委員会による中世城郭分布調査では、1983年に小園公雄によって与論城跡に関する縄張り構造や伝承等に関する調査が実施されている。この際の与論城跡に関する評価については、水源の乏しさや与論島自体の生産能力の低さから臨時的な城跡であり、戦略的には乏しいと評価されている。また、この時の調査成果を踏まえて刊行された『鹿児島県の中世城館跡』(図6-④、鹿児島県教育委員会1987)では、与論城跡の略図が掲載されているが、図面では現在土俵がある平場を取り囲む石垣が東側に開口している。聞き取りでは、この時期(1980年代)までに石垣が東側に開口していたことは伺えないため、どのような意図で作図されたのかは不明である(虎口を想定したか)。

富田逸郎は1993年に与論城跡の確認調査を実施、調査成果を踏まえて城跡の時期が伝承と凡そ一致するとした上で、未完成という説に対しては遺物や遺構の出土状況から城内の利用があったと推定しており、初めて発掘調査成果を踏まえた検討が行われた(図6-⑤、富田1994)。また、崖下の平坦面や周辺の畑地についても城域に含まれる可能性が指摘された(図6-⑤、富田1994)。該調査の正式な発掘調査成果報告書については、町単費での調査事業であったためか、整理作業の予算化ができず、報告書の刊行には至らなかった(当時の与論町教育委員会の元担当職員談)。

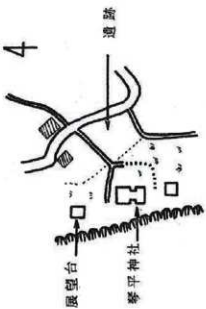
名嘉正八郎は奄美群島の城郭遺跡(グスク)を集成する中で、与論城跡について特徴や伝承等について紹介。城壁は野面積みと切石積みで構築されており、南側から南西側へ下る階段状の道や門跡が残っていることや、城集落を城下の村として想定している(名嘉1994)。

山本正昭は、与論城跡の平面図(縄張り図)と採集遺物を報告、採集遺物の年代観等から富田の調査成果を追認している(図6-⑥、山本1999)。

2013・2015年にかけて、当時九州国立博物館に所属していた赤司善彦らの研究チームは与論城跡の縄張り調査を実施(赤司2020)。調査の結果、これまで注目されていなかった崖下部分に、大規模な石垣が残存していることを確認するとともに、地主神社・琴平神社のある曲輪を中心とした重層的な曲輪構造を持ち、城内をⅠ～Ⅵの地区に区分した(図6-⑧、岡寺2020)。

山本は、この調査成果を踏まえ、与論城跡の規模が沖縄県内の主要な大規模グスクに匹敵する規模で

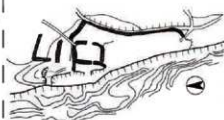
N
4



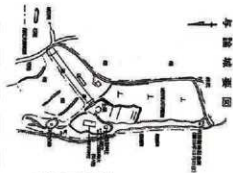
①見取り図（有元 1974）

※著作権の都合、画像は割愛

※著作権の都合複製厳禁
②平面図（沢村他 1982）



④略測図（鹿児島県教育委員会 1987）



③要図（三木 1983）



⑤平面図（富田 1994）



⑥縄張り図（山本 1999）



⑦縄張り図（山本 2015）



⑧防壁ラインと地区区分図（岡寺 2020）

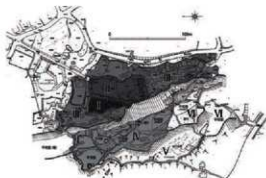


図6 過去の与論城跡関係図面集成

あり、断層崖を縄張り構造に取り組みグスクに類例の少ない特徴も有している（図6 - ⑦、山本 2015・2020）ことが確認された。

赤司らによる調査により、与論城跡の学術的価値が再評価されることになり、特に調査に携わった山本は、以降も与論城跡の縄張り構造や石垣に関する報告、論考を提示している（山本 2015・2020）。

呉屋義勝は、与論郷土研究会と共同で実施した与論町内の分布調査の中で与論城跡についても表採資

料を採集している（竹下ほか2019）。また、前述したように、この調査によって与論城跡の周辺に所在する集落（城・朝戸・西区）に中世並行期の遺跡が複数箇所確認されており、与論城跡という城郭遺跡とその周辺に展開する集落遺跡との関係を考える上で重要な成果である。

また池田榮史は、与論城跡について沖永良部の後園孫八城跡（グスク）とともに、グスクの北限の遺跡としての評価を示している（池田2019・2020）。

以上のように、与論城跡については1970年代以降、神社地となっている台地部分の曲輪構造について、複数の研究・報告が行われてきた。

2013・2015年の赤司らの調査以降は、城域が崖下まで広がることが明確に判明したことで、北限のグスクという評価だけでなく、大型グスクであることや特徴的な縄張り構造を持つことが明らかとなった。

4 与論城の名称について

与論城跡の名称が文献上で確認できるのは、戦前の郷土誌『与論島』（野村1935）に掲載されている吉田氏記述の由来（野村1935）や、昭和11年に編纂された『興論主治世鑑』において、「与論城」という標記が初出である。周知の埋蔵文化財名称にもなっている「与論グスク」は、『日本城郭体系』（平井ほか編1979）で紹介された1980年代以降に用いられる傾向がある。

また、地元では与論城跡周辺の集落を含めて「グシク」や「グスク」と呼称しているが、与論城跡自体のことは「ク（クウ）ンピラ」（城内に所在する琴平神社が由来か）と呼ぶことも多い。この「グスク」という呼称を持つ「城（ぐすく）集落」の集落名は、江戸時代末までには成立していた「立長村」と「麦屋村」が、大正年間に「甲立長」と「甲麦屋」をまとめて成立した（与論町誌編集委員会1988）とされている。

しかし、集落名が城になった経緯は、与論城跡との関係が想定されるものの、当時の資料が不足しているため不明である。

なお、与論城跡は昭和51年2月20日付けで与論町の指定文化財になっているが、指定名称は「城跡」である。



図7 与論城跡と関係史跡等の位置図（背景の画像は国土地理院地図を使用）

5 小結

与論城跡は、これまで調査・研究によって有数の規模を持つグスクの北限の一例と評価できる城跡であることが明らかになりつつある。しかし、築城者や名称、由来についても一次史料が殆ど存在せず、伝承等として伝わっている状況である。一方で、与論城跡に関する複数の伝承や関連史跡（図7）が伝わって来ていることから、本町や島外との関りを語る上で重要な城跡だと言える。

与論城跡の城郭遺跡としての価値を把握するためには、発掘調査成果を踏まえた検討が必要である。以上のことから、次節では、これまでの調査・研究成果を踏まえて与論城跡の地区区分の特徴と課題の整理を行う。

第2節 与論城跡の地区区分

与論城跡の調査では、過去の研究成果を踏まえながら、与論城跡内の平場を便宜的に高低差や石垣、斜面等を基に1～15か所に区分を行った。以下では、区分方法と各地区の概要について確認を行う。

1 地区分類の方法

与論城跡内部を、台地の上から崖下までの全城を区分している岡寺の研究では、城内をⅠ～Ⅵの6地区に区分している（図6～⑧）。当報告書では、岡寺の区分を参考に、城内の石垣で囲まれた平場に加え、高低差や斜面などの地形的な変化も踏まえ、便宜的に地区を15か所に区分をした。このため、通路沿いの張り出し状の平坦面や通路そのものは地区区分から外している。また、城内は断層崖で大きく区分されることから、各地区を台地部分（地区1～5）と崖下部（地区6～15）に大別している。

2 各地区の概要

（1）地区1（台地部分）

地区1は城内の最高所で、範囲は南北約43m、東西約20m、面積約60㎡である。この地区を取り巻くように石垣で囲まれた平坦面が配置されることから、城の中心部分と指摘されている（岡寺2020、三木2000、山本1999・2015・2020）。現在、地主神社と琴平神社が鎮座している（図8-①、写真6）。

両神社とも幕末から明治初期にかけて設置された神社であるが、琴平神社の社殿地については、社殿を建てる以前は岩山であった場所を整地して現在の社殿地としたという話が伝わっている（神社の宮司70代前半談）。一方で、地主神社は元々、与論城跡が構築される前からあったとされる樋口御嶽に明治初期に島内の拝所を統合して建立されたと伝わって



写真6 地区1 地主神社（左）と琴平神社（右）（2022年旧暦八月十五夜の地主神社への最後の演目奉納前）



写真7 地区1 南側の石垣（石垣の内側が樋口御嶽）



写真8 地区2 鳥居と平場を囲む石垣（北から）

いる（神社の宮司70代前半談）。当該地区の西側の石垣は、連続する張り出しを持つような石垣が構築されていることや、崖下から上ってきた際に、正面となる配置になっていることから、城に伴う石垣もしくは部分的に積みなおしたものと考えられる。また、地主神社南面の石垣は、沢村仁・片野博・後藤元一によって立面図（沢村ほか1982）が作成されている（図8-②、写真7）。

地区1の東側にある雑壇状の石垣は、隣接する地区2の広場で国指定重要無形民俗文化財「与論の十五夜踊」や旧暦十月十五夜に合わせて開催される相撲大会（通称「奉納相撲」）が催される際は、石垣の上が観客や主賓、来賓の座席となる。このことから、後世の改変が加わっていると考えられる。

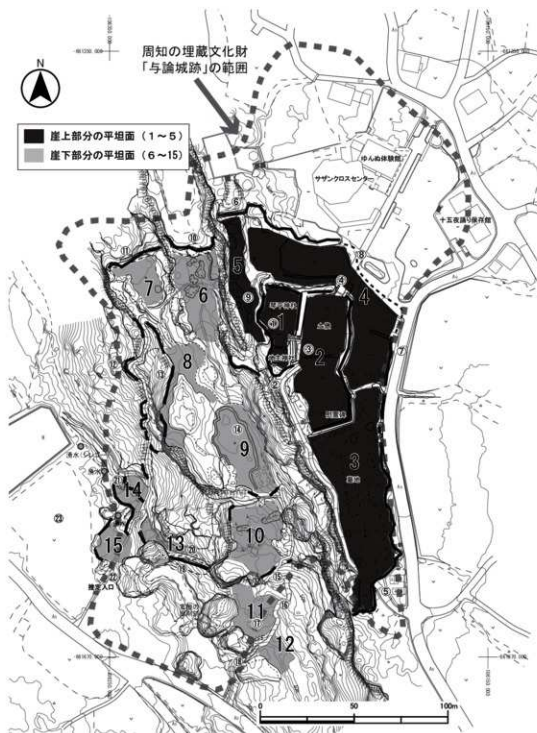


図8 与論城跡の地形測量図面と周知の埋蔵文化財の範囲

当該地区は眺望が良く、周辺島嶼（本部半島までの沖縄島北部・伊平屋島・伊是名島・天候が良い場合は伊江島）を望むことができるとともに、現在与論町の主要港湾として利用されている供利港、茶花港（近世の赤佐港）、ウンジャミ祭祀場跡や国頭との往来の伝承を持つハキビナ海岸を一望することができる。特に、樋口御嶽の御神体となっている岩の高まりが突き出るような形になっているため、沖縄島方面や周辺の港や海岸からも目印になるような位置にあることから、海上の航路を抑える上で重要な地区である。



写真9 地区3 南端の石垣（メーグチバンタ）

（2）地区2（台地部分）

地区2は、地区1を取り巻くように石垣で囲まれた地区である。範囲は南北約62m、東西22m、面積約1,100㎡である。地区1とともに城の中心部分（山本1999・2015）や主郭に付属する重要な空間（岡寺2020）として指摘される地区である。前述したように与論の十五夜踊の会場として利用されているほか、土俵の整備や慰霊碑、公園化に伴う造成が行われている。この慰霊碑側の公園整備の際に、土俵と慰霊碑の境にあった石垣が撤去されている（図8-③）。



写真10 地区4・5北側の石垣（伝龍の頭）（北東から）

地区の北側の石垣は参道から伸びる鳥居からつながるように配置されているが、この鳥居周辺は明治期に整備されたものとされており（与論町誌編集委員会1988）（図8-④、写真8）、元々は鳥居の西側の石垣に入口があったと伝わっている（城集落在住70代から2019年に関き取り）。



写真11 地区4東側の石垣

（3）地区3（台地部分）

地区3は、地区2の南側の平坦面で、西側を断層崖、東側と南側を石垣が区画される。範囲は南北約111m、約東西22m、面積約1,790㎡である。当地区は、明治期以降の墓地整備によって変更が加えられているが、現在でも部分的に東側の道路に沿って石垣がめぐり、連続する張り出し状の石垣やその形状の名残を確認することができる（図8-⑤）。

当地区の南側は、地元住民から「メーグチバンタ」（図8-⑤、写真9）と呼ばれ、墓地への通用道路で部分的に分断されているが、断層崖の際まで続く張り出し状の石垣を確認することができる。

また、このメーグチバンタには、城跡の西側にあるハキビナ海岸から沖縄に貨物の穀物を運ぶ船が出港したら、旗を掲げて琉球へ合図したという話が収録されている（菊1988）。

（4）地区4（台地部分）

地区4は、地区2・3に接する逆くの字状の地区で、地区3とは1.3mほどの段差によって区画される。範囲は南北約69m、約東西64m、面積約1,480㎡である。西側は地区5、北側は「龍の頭」（図8-⑥、

写真16)と称される石垣から道路沿いの東側にかけて石垣2(図8-⑦、写真11)で囲まれた地区である。集落と接する地区であることから、当地区に集落からの入口が存在した可能性が考えられる。

当該地区の北側は、「龍の頭」と称される石垣が、北側に伸びる断層崖の谷を遮断するように配置されている。石垣の内側は、現在、駐車場として利用されている広場がある。この広場は、元々畑地やお土産店が建てられていた。平成5年度に石垣の構築方法の確認が行われたが、周辺の公園整備に合わせて平成6～7年に整地と石垣の積み直しが行われた。石垣の配置は旧状をある程度は反映しているとのことである。



写真12 地区6 北側の大型石垣 (東から)

この平場の東側を通る参道は、戦前から存在するもので、参道が整備される以前の道筋は不明である。しかし、参道南東側の公衆トイレのある平場は、元々北側まで広がっており、石垣が縁辺部に設けられていたものが、平成3年の公園整備に伴う通路拡張工事によって削平された。旧道の輪郭は昭和期に撮影された航空写真や地籍図で確認することができる(図8-⑧)。

このことから、参道沿いに対して石垣が張り出す配置が想定でき、加えて周辺の集落や島内を循環する道路は城跡の北側から東側にかけて展開することから、現在の参道と平場が接する付近に城の入口があった可能性も想定される(図8-⑧周辺)。

(5) 地区5 (台地部分)

地区5は、地区1・4の西側に接し、台地部分と崖下部分を繋ぐ地区で、昭和30年代まで周辺の地域住民が崖下の畑地に通う際の通路としても利用されていた(図8-⑨、写真18)。範囲は南北約70m、約東西20m、面積約920㎡である。谷地形を利用した地区で北側は伝龍の頭の石垣、西側は断層崖、南は岩盤、東側は地区1の石垣によって区画される。西側の断層崖沿いの石垣は現在確認できていない。当該地区は、地区4などの造成工事と同時期に樹木等の植栽のため一部整地が行われている(神社の宮司70代前半談)。

(6) 地区6 (崖下部分)

地区6は地区5から断層崖を降りた先にある広場である。地元から「ハマシチャ」と呼ばれており、鹿児島県による民俗調査で城の築城時の鍛冶跡という報告がある(鹿児島県教育委員会1982)。範囲は南北約51m、約東西21m、面積約760㎡である。地区6の北側には、断層崖の間の平坦面を塞ぐように2～3m以上の高さのある石垣が地区4・5の石垣みから連なるように配置されている(図8-⑩、写真12)。地区5と地区6を繋ぐ通路は、岩盤の割れ目を利用して構築されており、通路の側面には平場を持つ石垣を配置しており、見張り場のような役割が考えられる。当地区以降の崖下部分の大半は、2010年以降の赤司善彦や山本正昭、岡寺良らの調査によって石垣の存在が新たに確認されたことで(赤司2020、岡寺2020、山本2015・2020)、城域として把握されるようになった地区である。また、当地区では、城内だと類例が無い15世紀中頃～後半頃のタイ産の半練土器の蓋(図9-1)が表採されている。

(7) 地区7 (崖下部分)

地区7は地区6から一段下がる広場で、地区6とは最大3～4mの比高差のある崖で区分される。範囲は南北約32m、東西約28m、面積約810㎡である。当該地区の北側は、地区6の石垣から連なるように高さ3～4mの雛壇状に構築された大型の石垣がある(図8-⑪、写真13)。石垣の背後の平坦面は

島の西側一帯への眺望が良い。東側は落差30m近い断崖になっており、南側の地区8につながる通路からは崖沿いに地区14に下る通路が通り、通路の屈曲部には張り出し状の石垣(図8-⑫、写真14)が複数箇所配置されている。山本はこの石垣について、与論城跡でしか確認されていない特徴的な遺構と評価している(山本2015)。地域に伝わる話として、この通路は「武家(代官)の人々の通路」という話が伝わっている(城集落在住70代から2020年に聞き取り)。

(8) 地区8(崖下部分)

地区6・7から細い通路や斜面、岩盤の高まりで区別される平坦面である。範囲は南北約43m、東西約23m、面積約700㎡である。西側は地区14まで比高差30m近い断崖や急斜面で、この斜面部分に沿って地区14へ繋がる通路が通る。通路側の平坦面の縁には土留め状の石垣が構築されている(図8-⑬、写真15)。一方で、地区9と接する南側は、物見にも適した高さ3～5mの岩盤の高まりとなり、この高まりは地区9まで続く。また、地区7との間の通路で15世紀前半～中頃の備前焼の播鉢(重根分類IVB類か)が表採されている(図9-2)

(9) 地区9(崖下部分)

地区9は、地区8の南側から約1mほど下がったところにある、崖下部分で最も面積が広いまとまった平坦面を持つ地区である。範囲は南北約47m、東西24m、面積約890㎡である。東側は地区2・3との間にある高さ20mほどの断崖がそびえ、東側は地区8から続く岩盤の高まりが連なる。南側は地区9と地区13から続く通路に約1.5mほどの段差で区画される。このため広い平坦面にも関わらず北風が通らない。また、当該地区では、昭和30～40年代の耕作中に出土したという礎石状の石造物がある(図8-⑭、写真16)。

(10) 地区10(崖下部分)

地区10は、地区9の南側に約1mほど下がったところであり、地区13とつながる通路で地区9と区別される地区である。範囲は南北約32m、東西38m、面積約730㎡である。地区10やその周辺の断層崖下には、明治期に当時の鹿児島県の政策によって風



写真13 地区7の石垣と平坦面(東から)



写真14 地区7と地区14を繋ぐ通路の張り出し状の石垣(南東から)



写真15 地区8の石垣と平坦面(南から)



写真16 地区9と出土した礎石状の石造物(北から)

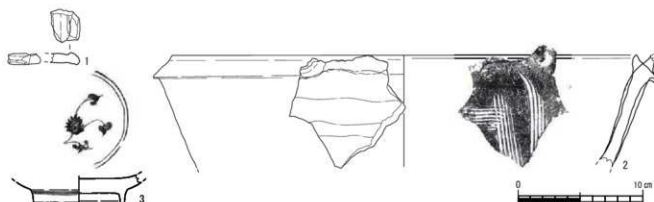


図9 地区6・8・13表採品



写真 17 地区 10 の石垣と平坦面（東から）



写真 18 地区 11 の平坦面と通路（写真左下）（南から）



写真 19 地区 12 の入口の岩壁と通路（南西から）



写真 20 地区 13 の石垣と通路（北西から）

葬が禁止され、地区3にある墓地に移転する前に周辺集落の住民が利用していた風葬墓や、風葬禁止後に使用した墓地跡があり、現在でも参拝の対象になっている。このため、近世以降に改変が加えられているが、南西端から東側の断層崖にかけて石垣やその痕跡を確認することができる（図8-⑮、写真17）。平場からは、木々に覆われているが、沖縄島方面の海を望むことができる。

地区3から地区10・11を通り、斜面を下る通路は、城跡の南側にある塩川（シゴー）海岸に行く際に周辺集落の住民が利用していた道で、大字の境目となっている（図8-⑯）。また、当該通路は「商人や行政職の通路」という話が伝わっている（城集落在住70代から2020年に聞き取り）。

(11) 地区11（崖下部分）

地区11は、地区10の南側から約5mほど下がったところにある、緩やかな斜面と平坦面になる地区である（図8-⑰、写真18）。範囲は南北約22m、東西約23m、面積約350㎡である。この平坦面は、塩川海岸方面に続く通路（旧道）や地区12、南側にある塩川海岸方面（沖縄方面）の海を望むことがで

きる。地元住民から地区10と同様に「ブツティル」と呼ばれている。

(12) 地区12 (崖下部分)

地区12は、地区11の通路を挟んだ南側から約3mほど下がったところにある、緩やかな斜面と平坦面になる地区である。範囲は南北約20m、東西約16m、面積約220㎡である。地区10・11から続く通路は、巨大な岩盤の間を通り(図8-⑱、写真19)、屈曲しながら塩川海岸へ続いていた(現在は道路で海岸までの道は分断されている)。

(13) 地区13 (崖下部分)

地区13は、地区10から崖沿いの屈曲した通路から、巨大な岩盤の岩陰に造営されている島の偉人の墓として伝わるクンジャンパー(被葬者:ウブドーナタとその一族)とアダダンパー(被葬者:サービィマートゥイとその一族)の前を通り(図8-⑲)、地区14に繋がる地区である。範囲は南北約20m、東西約25m、面積約300㎡である。通路の南側には、地区10の岩盤から地区15に接する巨岩を繋ぐように1.5mほどの石垣が通路沿いに構築されている(図8-⑳、写真20)。当該地区は岩盤や斜面が多いため、まとまった平坦面は少ないが、通路の側面に部分的な平坦面が認められる。また、岩陰に造営されている墓には、城跡の石垣を使用した可能性がある石垣も認められるが今後の課題である。また、当地区では、城内だと類例が少ない15世紀中頃～後半頃の青花碗(図9-3)が表探されている。

(14) 地区14 (崖下部分)

地区14は、地区13の北西側の地区7に繋がる通路と通路に沿って段状に構築された平坦面を中心とした地区で、東側は断崖と斜面地になっている。範囲は南北約23m、東西約30m、面積約470㎡である。地区内には畑地として利用されていた平坦面が3段ほどあり、この平坦面の下段や周辺には現在は農業用水の溜池(地区14の北西)の水源となっている「シンゴー」をはじめ、湧水が確認できるほか、石囲状の構築物(溜井戸か)があり(図8-㉑、写真21)、水源を確保する上で重要な地区と考えられる。地区Vの中でも、この湧水地がある畑地周辺のことを地元では「シンゴースメー」と呼称している。

当該地区を取り巻くように石垣を確認できるが、台地部分や崖下部分の地区6・7・10の石垣とは礫のしきや外面の揃え方が不規則であり、畑の区画として構築された可能性が考えられる。しかし、城の石垣を積み直した可能性もあるため、発掘調査による確認が必要である。

(15) 地区15 (崖下部分)

地区15は地区13・14とは石垣や約3～4mほど下がった通路沿いの土留め状の石垣を持つ平坦面を



写真21 地区14 シンゴースメーの石組み遺構(東から)



写真22 地区15の通路と岩盤を地区13から望む(東から)



写真23 地区15への崖下からの入口(南西から)

中心とした地区である（写真22）。範囲は南北約20m、東西約23m、面積約400㎡である。地区13・14の通路は当該地区で合流して、巨岩の間を通過して崖下の道路に繋がる（図8-㉔、写真23）。この道路は周辺集落の住民が地区15周辺の耕作地や、北西側にあるハキビナ海岸へ向かう際に利用していた。

通路側面の平坦面と地区14の石垣の間は、地区14と同様に、湧水の生じる箇所や雨天時は水が溜まる窪地がある。また、地区15の西側に接する畑は北西側のため池を含め、谷状の地形で耕作者によると現在の畑地は1mほど嵩上を行っている（図8-㉔、茶花集落在住50代から2020年に開き取り）。

第3節 成果と課題

1 調査成果と課題

与論城跡の過去の研究成果と課題について以下の点が指摘できる。

【研究成果】

①規模

面積は2万㎡を超える面積があり、琉球王国の王都があった沖縄島を除くと、周辺離島の中では最大規模の城域を持つ。

②北限のグスク

沖永良部島の後蘭孫八城跡とともに琉球様式の城郭遺跡（以下、「グスク」）の北限として位置づけられる城郭遺跡であり、大型のグスクとしては北限の遺跡の一例と考えられる（山本2020）。

③縄張りの異質性

城域内に崖を取り込む縄張りを持つグスクは、勝連グスク（うるま市）、上里グスク（糸満市）と与論城跡の3例ほどしかなく、類例の少ない縄張り構造を持つ（山本2015）。

④台地部分の年代視

平成5（1993）年に実施された確認調査では、台地部のトレンチで遺構が確認された。特に地区Ⅱのトレンチ6（現在の土俵前）からは、14世紀後半～15世紀前半を主体とする陶磁器類や自然遺物（獣骨など）が出土しており、一定期間使用されていた可能性が指摘されている（富田1994）。

⑤崖下部分の石垣

崖下部分については、2010年以降の調査により大規模な石垣が把握され、地区7から地区14につながる通路沿いには、特徴的な堡塁状に配置された石垣がある（山本2015）。

【課題】

①城域が未確定

耕作地や墓地、公園造成など、様々な後世の改変により城域を取り囲む石垣が判然としない。台地部分については、三木や富田はサザンクロスセンターが立つ周辺の公園も城域に含まれる可能性を指摘している（三木1983、富田1993）。崖下部分についても湧水地や耕作地跡を含む地区14・15や近世・近代の墓域と接する地区11・12についても、現存確認できる石垣が城跡に伴うものか不明確である。

②利用年代

城跡の利用年代は、平成5年度の調査で一定の成果が得られていた。しかし、平成5年度の調査は調査後の整理が不十分な状況であり、正式な報告書も刊行されていなかったため、断片的な情報しか残っていない状況であり、成果の確認が必要である。

また、崖下部分についても遺物が表探できる地区が殆どで、平坦面が多数存在することから、何かしら利用されていた可能性があるものの、台地部分との年代的な差異の有無等については発掘調査による確認が必要である。

③城内の遺構の有無や造成方法の把握

平成5年度の発掘調査では、城跡の中心部分である地区2や地区3ともに明確な遺構は確認されていない。しかし、現代の改変が少ない崖下部分では遺構が残存している可能性が高いため、平成5年度調査成果の再検討を含めて、発掘調査による確認が必要である。

第4節 小結

以上の課題を踏まえ、城跡の範囲確認および利用年代や遺構、城の構築に伴う造成状況の把握を目的とした調査が求められる。このことから、与論城跡の課題を解決することを目的に、与論城跡の発掘調査を令和2年から令和4年にかけて確認調査を実施した。調査成果の詳細は次章で取り扱う。また、正式な報告が未刊行の平成5年度の調査成果についても、上記の課題を考える上で重要な成果が得られていることから、併せて報告を行う。

参照・引用文献

- 赤司善彦 2020 「平成25～27年度の与論グスクの調査と与論グスクの概要について」『明らかになる与論城跡発表資料集 令和2年度地域の特色ある埋蔵文化財活用事業に係る関連シンポジウム』与論町教育委員会事務局, pp. 29-36.
- 有元彰順 1974 「与論島城遺跡について」『鹿児島考古』第10号, 鹿児島県考古学会, pp. 121-123.
- 池田榮史 2019 「座談会 中世の琉球」『琉球の中世』中世学研究2, 中世学研究会, pp. 153-192.
- 池田榮史 2020 「奄美における「グスク時代」『遺跡から見た琉球列島のグスク時代 資料集』国立歴史民俗資料館「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」展示プロジェクト, pp. 11-18.
- 岡寺良 2020 「与論グスクの平面構造(縄張り配置)について」『明らかになる与論城跡発表資料集 令和2年度地域の特色ある埋蔵文化財活用事業に係る関連シンポジウム』与論町教育委員会事務局, pp. 33-37.
- 鹿児島県教育委員会 1982 『奄美群島の民俗2 加計呂麻島・喜界島・与論島』鹿児島県教育委員会
- 鹿児島県教育委員会 1987 『鹿児島県の中世城館跡—中世城館跡調査報告書—』鹿児島県教育委員会
- 龍野興澄 1936 『與論論治世鑑』私費出版(近藤 栄次郎 1996年再版)
- 金関丈夫 1978 「与論島見聞録」『えとのす』第9号, 新日本教育図書, pp. 37-42.
- 先田光演編 2012 『与論島の古文書を読む』南方新社
- 沢村仁・片野博・後藤元一 1982 「903 南西諸島中世遺跡の研究(その1) 調査経過, 及び遺跡分布(建築史・建築意匠)」『日本建築学会研究報告.九州支部.2, 計画系』日本建築学会, pp. 409-412.
- 富田逸郎 1994 「0840 与論城」『鹿児島考古』第28号, 鹿児島県考古学会, p. 84.
- 名嘉正八郎 1994 「10. 与論城」『グスク(城)の姿』南日本文化研究所叢書20, 鹿児島短期大学付属 南日本文化研究所, pp. 27-28.
- 平井聖ほか編 1979 『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島, 新人物往来社
- 野口才藏 1976 『南島与論島の文化』著者発行(非売品)
- 野村正尚 1935 『与論島』私費出版
- 林清国 1985 「尚瀛王は庶民的国王—漁場専有していた按司と豪族—」平安座自治会編『故きを温ねて』平安座自治会, p. 51-52. (1966年『琉球新報』に掲載されたものを再掲載)
- 増尾国忠 1963 『与論島郷土史』与論町教育委員会
- 三木靖 1979 「与論城」平井聖ほか編 1979 『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島, 新人物往来社, pp. 100.
- 三木靖 1983 「(3) 沖永良島部の山城」『薩琉文化』第20号, 南日本文化研究所, pp. 3-9.
- 三木靖 1999 「奄美の中世城郭について」南九州城郭談話, pp. 67-82.
- 三木靖 2000 「奄美の中世城郭(個別編)」『南日本文化』鹿児島国際大学付属地域総合研究所, 第34号, pp. 5-21.
- 山本正昭 1999 「与論グスクの縄張りおよび表探遺物に関して」『愛城研報告』第4号, 愛知中世城郭研究会, pp. 220-227.
- 山本正昭 2015 「与論グスク概観」『しまたてい』No. 73, 建築情報誌しまたてい編集委員会, pp. 38-41.
- 山本正昭 2020 「石積み形態と配置から見た与論グスクの特徴—主に平面プランから読み解く—」『明らかになる与論城跡発表資料集 令和2年度地域の特色ある埋蔵文化財活用事業に係る関連シンポジウム』与論町教育委員会事務局, pp. 38-52.

第4章 発掘調査成果

第1節 調査方法

発掘調査では、与論城跡の範囲確認や内容確認を目的として行ったため、城域に含まれる可能性の考えられる石垣や建物跡等の遺構が想定される平坦面にトレンチを設定した(図10、表5)。

調査地の選定にあたっては、神社の敷地内や現在利用されている墓地を避けつつ、与論城跡発掘調査指導委員会での指導を踏まえ、調査箇所を選定した。地区1については、現在神社の敷地になっているため調査は行っていない。また、平成5年度に行われた調査成果についても、城跡の範囲や内容を考える上で重要な成果が得られていることから、併せて報告を行う。

発掘調査では、原則、遺物は調査時の層序ごと一括で取り上げを行ったが、令和3年度調査のトレンチ12とトレンチ13では一部出土位置座標を測定して取り上げを行った。また、一部の遺構は埋土の土壌サンプルの採集を行い、理化学年代測定を行った。分析結果は第5章に掲載している。

トレンチ名は年度ごとに割り振りを行っているため、報告に当たっては再度トレンチ番号の割り振りを行った(対応関係は表5参照)。

表4 各年度における主な調査目的など

年度	目的	調査対象	トレンチ	調査面積
平成5年	台地部分(地区2・4、周辺部分)の範囲確認と遺構など確認	遺構の存在が想定される平坦面	7箇所	約62.32㎡ (一部推定含む)
令和元年	城内全域地形測量調査及び石垣3～5の図化	城域の地形の把握及び崖下部分の大型の石垣3箇所(石垣3～5)		
令和2年	台地部分(地区2)の範囲確認と遺構など確認	外郭となる可能性がある石垣と遺構の存在が想定される平坦面	8箇所	35.5㎡
令和3年	崖下部分の範囲確認と遺構など確認	外郭となる可能性がある石垣と遺構の存在が想定される平坦面	6箇所	48.4㎡
令和4年	範囲未確定部分の範囲確認と遺構など確認	範囲が明らかで無かった台地部分の北限と崖下部分の西限、中心部分と考えられる地区2・3	6箇所	18.68㎡
			合計	27箇所 約168.9㎡

表5 地区2～15のトレンチ番号と主な調査成果

※A掛け部分は遺構未検出のため調査状況は文章と写真図版、出土遺物の実測図面のみ掲載

地区	報告トレンチ名	調査時トレンチ名	生活層(Ⅱ層)	遺構(近世以前)			表込め(Ⅲa層)	整地層(Ⅲb層)	地山(Ⅳ層)	岩盤(Ⅴ層)	攪乱近代の遺構
				石垣基礎	柱穴	その他遺構					
台地部分	トレンチ1	H5-T1	○					○			
	トレンチ2	R4-T1	○					○	○	○	
	トレンチ3	R4-T2	○					○		○	
	トレンチ4	R2-T1									○
	トレンチ5	R2-T2					○				
	トレンチ6	R2-T3					○				
	トレンチ7	R4-T3		○			○	○	○		
	トレンチ8	H5-T4									○
	トレンチ9	H5-T5		○					○	○	
	トレンチ10	H5-T7							○		
崖下部分	トレンチ11	R3-T1		○					○		
	トレンチ12	R3-T2	○				○	○			
	トレンチ13	R3-T3	○		○	○		○			
	トレンチ14	R3-T4	○				○	○			
	トレンチ15	R3-T5							○		○
	トレンチ16	R4-T5				○					
	トレンチ17	R4-T6							○		○
	トレンチ18	R3-T6							○		○

表5 地区2～15のトレンチ番号と主な調査成果

※アミ掛け部分は遺構未検出のため調査状況は文章と写真図版、出土遺物の実測図面のみ掲載)

地区	報告トレンチ名	調査時トレンチ名	生活層(Ⅱ層)	遺構(近世以前)			裏込め(Ⅲa層)	整地層(Ⅲb層)	地山(Ⅳ層)	岩盤(Ⅴ層)	攪乱近代の遺構
				石垣基礎	柱穴	その他遺構					
周辺部	トレンチ19	R2-T4									○
	トレンチ20	R4-T4									○
	トレンチ21	R2-T5	○		○	○			○	○	
	トレンチ22	H5-T3									○
	トレンチ23	H5-T2			○				○		
	トレンチ24	H5-T1				○			○		
	トレンチ25	R2-T8									○
	トレンチ26	R2-T7									○
	トレンチ27	R2-T8									○

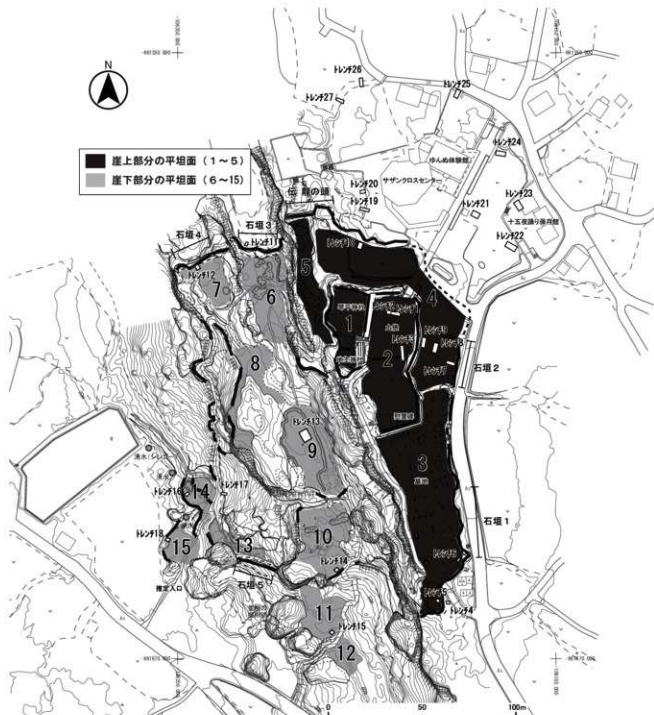


図10 調査区配置図

第2節 基本層序 (写真 24～26・図 11)

基本層序は地区毎に差異があるものの、凡そ以下の層序に大別することができる。また、調査時はトレンチ毎に層序番号を割り振っていたため、対応関係は表6に掲載する。

I層 表土 (耕作土・公園や墓地、畑地の造成層)

現在の地表面で、畑地や公園、墓地として利用が行われている。畑地として利用されている箇所では、天地返しにより岩盤まで攪乱を受けている場合や、盛土による造成が認められる。また、遺物包含層に含まれていたと考えられる遺物も出土している。

II層 生活面・遺物包含層

14世紀後半～15世紀中頃の遺物を主体とする遺物包含層で、城利用時の生活面と考えられる。

ただし、土壌の堆積が浅い場合や近世以降、耕作地として利用されている場合は、近世以降の遺物が含まれることがある。また、元々の地形が平坦である場合は複数時期にわたり利用が行われているため、14世紀以前の遺物や以降が確認されることもある。層厚は約20cm～40ほど。主に10YR3/1や10YR3/2黒褐色。

III層 造成層・石垣の裏込め

築城に関わる造成層。石垣の構築に関わるIII a層と土地の造成に関わるIII b層に大別される。

III a層 石垣の造成に伴う造成層。主に琉球石灰岩を15～20cmに粗割した礫を用いるが、部分的に立長層由来と考えられる中生代の結晶質石灰岩や緑色片岩を用いる場合もある。

III b層 平坦面の造成に伴う造成層。赤土を主体とし、琉球石灰岩の礫や海産貝類、炭化物、焼土を含む。陶磁器などの遺物も含むが、下層の造成層ほど出土量は少なくなる。



写真 24 トレンチ 21 東壁



写真 26 トレンチ 6 西壁



写真 25 トレンチ 12 東壁

IV層 地山（赤土）

方言で「アードゥル」と呼ばれる地山の赤土。粘質で締まりが強い。台地部分と崖下部分の平坦面
で確認される。崖下部分の石垣では赤土上に直接い石垣を積み上げる場合もある。主に5YR4/6赤褐や
7.5YR4/6赤褐。

V層 地山（岩盤）

断層崖に立地する地理的な特性上、地区によって岩盤の種類に差が認められる。

地区II～IV・VIは琉球石灰岩の岩盤で、石垣の基礎としても用いられ、石垣の主な素材である。

地区Vは基盤岩となる付加体（塩基性火成岩や千枚岩）の風化土。不透水層であり、当該岩盤の周辺
には湧水地が認められる。

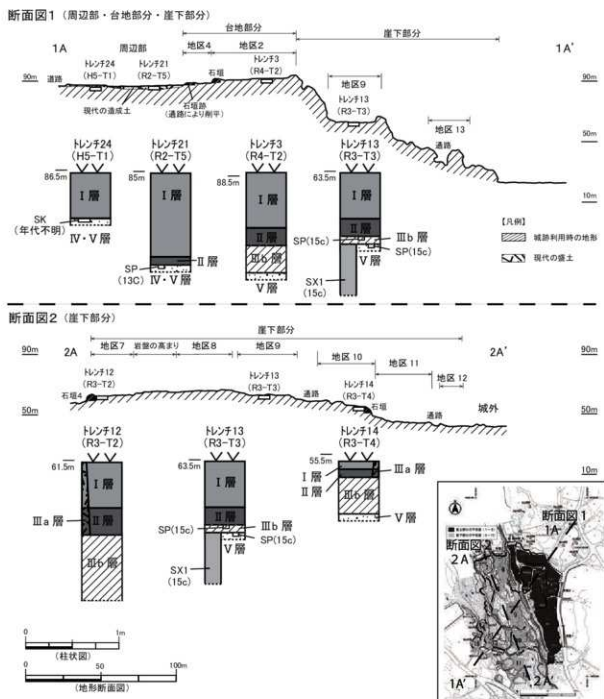


図11 基本層序柱状図

表6 各地区・トレンチの調査時層序と統括層序の対応表

地区	横断トレンチ	年度	トレンチ	経路番号	当初層序	遺構	所見	土色	しまり	粘性	土質	混入物	その他	遺物
2		R4	I	I	1		表土(礫土)	75YR5/8明褐	良い	有り	砂質シルト	白砂		
		R4	I	II-1	2-a		白砂を含む黒褐色土(旧農土・生活層含む)	10YR3/1黒褐	良い	有り	砂質シルト	白砂		
		R4	I	II-2	2-b		白砂を含む黒褐色土(旧農土・生活層含む)	10YR3/1黒褐	良い	有り	砂質シルト	白砂は上層より少ない。		
		R4	I	III-b-1	3		黒褐色土(墾地層・礫含む)	75YR3/1黒	良い	有り	砂質シルト	白砂少ない。75YR4-8褐色の赤土70%を5%以下含む。炭化物・焼土含む。		SP1-2が圍りにむ。
		R4	I	III-b-2	4		赤土交じりの黒褐色土(遺成層)	75YR3/1黒褐	上層より良い	有り	砂質シルト	白砂少ない。75YR4-8褐色の赤土70%を10%含む。炭化物・焼土含む。		
		R4	I	IV	5		地山・赤土	5YR4/6赤褐	良い	有り	砂質シルト			
		R4	I	V	6		岩層							石灰岩。
		R4	I			SP1		75YR3/1黒褐	良い	有り	砂質シルト	白砂少ない。75YR4-8褐色の赤土70%を5%以下含む。炭化物・焼土含む。		埋土はⅢ-b-1層。
		R4	I	①	SP2		75YR3/3黒褐	良い	有り	砂質シルト	75YR4-8褐色の赤土70%を10%含む。			SP1-2が圍りにむ。
		R4	I	②	SP2		75YR3/3黒褐	良い	有り	砂質シルト	炭化物・焼土含む。			ブロック状に入った。
		R4	I	③	SP2		75YR3/3黒褐	良いが6%層に比べてしまりが弱い。	有り	砂質シルト	75YR4-8褐色の赤土70%を30%含む。			
		R4	I	④	SP2		75YR3/3黒褐	良い	有り	砂質シルト	75YR4-8褐色を1%含む。			
		R4	I	⑤	SP2				無し	白色コーラル				白色コーラルの墾地層
		2		R4	2	I-1	1a		表土(礫土で透層による埋込を受けた包含層の遺物を含む)	75YR5/8明褐	良い	やや砂質	砂質シルト	白砂と赤土含む。
R4	2			I-2	1b		表土(透層による埋込を受けた包含層の遺物を含む)	5YR3/1黒	良い	有り	砂質シルト			遺物と現代のガラスなどを含む。
R4	2			I-3	1c		表土(透層による埋込を受けた包含層の遺物を含む)	10YR3/1黒褐	やや弱い	有り	砂質シルト	白砂が上層に比べて少ない。		
R4	2			II-1	2a		旧農土(T1の2層と対応か)	10YR3/1黒褐 10YR2/1黒	やや弱い	有り	砂質シルト	小礫や炭化物、骨殖動物骨や貝類を含む。		石塔の下層からトレンチの南側に残る。北側は埋込を受けている。
R4	2			II-2	2b		包含層か	10YR3/1黒褐 10YR2/1黒	良い	有り	砂質シルト	上層に比べて小礫や骨殖動物骨や貝類を含む。		石塔の基礎の遺土。生活層の層か。
R4	2			III-b-1a	3a		小礫交じりの墾地層。岩層・フィッシャーを埋める	75YR3/2黒	良い	有り	砂質シルト	75YR5-8明褐色の赤土70%を10%以下マール状に含む。上層に比べ5~10cmの小礫を多く含む。		丸いイキ車出土。
R4	2			III-b-1b	3b		小礫交じりの黒褐色土(礫土)。岩層・フィッシャーを埋める	75YR3/2黒	良い	有り	砂質シルト	75YR5-8明褐色を10%以下マール状に含む。上層に比べて5~10cmの小礫を多く含む。		礫土の透層から直層に4層に層分できる。
R4	2			III-b-2a	4a		赤土をブロック状に含む墾地層。無遺物層	75YR3/2黒	良い	有り	砂質シルト	75YR5-8明褐色の赤土70%を10~15%マール状に含む。		礫土の透層から直層に4層に層分できる。
R4	2			III-b-2b	4b		墾地層。無遺物層	10YR3/3黒	良い	やや強い	砂質シルト	赤土70%を含まないが5~10cmの小礫を含む。		墾地層の層下で埋込を埋める。礫土の透層から直層に4層に層分できる。
R4	2			III-b-3	5		フィッシャー埋め土	10YR3/1黒	上層ほどしまりは強くない。	有り	砂質シルト	5~10cmの小礫を多く含む。		土層。カタツムリが出土。
8		R2	1	I-1	1a		黄土	10YR6/8橙	良い	弱い	砂質シルト	石灰岩礫や炭化した緑色岩を15%含む。		石灰岩。一部旧農土が混入。
		R2	1	I-2	1b		造成土	5YR3/1黒	良い	有り	砂質シルト	1~2mmの石灰岩礫が入る。		
		R2	2	I-1	1a		表土(遺成層)	75YR5/8明褐	良い	有り	砂質シルト	石灰岩、緑色片岩、中生代の石灰岩の砂粒。現代のコシを含む。		平準造成のため、現代の土が回転されている。
		R2	2	I-2	1b		造成土	10YR3/2黒	上層より良い	有り	砂質シルト	石灰岩、緑色片岩、中生代の石灰岩の細かい砂粒。現代のコシ、カタツムリなどを含む。		縦横に砕石を打った際の埋込層か。
		R2	2	III-a	2		石積の裏込め					15~40cmの石灰岩礫を裏込めに入れる。裏込めの基礎に異なる50cmほどの岩層を用い、外周部に異なるより大きな礫を用いる。		
		R2	3	I	1		表土(基地の遺成土)	5YR3/1黒	弱い	弱い	砂質シルト	海砂の砂粒。炭化物を含む。		基地の遺成。利用に裏込めの石灰岩礫や、埋込の遺物を含み、埋められていた遺物を含む。
		R2		III-a・III-b	2		石積の裏込め兼造成層	75YR3/1黒	やや良い	やや強い	砂質気味のシルト	炭化物や魚骨、貝類。15~30cmの石灰岩礫を含む。		石積の裏込めの石灰岩礫と造成土。裏込めの層が異なるように黒褐色土が入る。
		R2												

地区	横断 トレンチ	年度	トレン チ番号	経路 番号	当初 順序	遺構	所見	土色	しまり	粘性	土質	混入物	その他	遺物	
4	7		R4	3	I-1	1a	表土(耕作土)	5YR7/1 黒 褐	良い	有り	砂質シルト				
			R4	3	I-2	1b	表土(耕作土)	5YR7/1 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	噴土が多くなる。			
			R4	3	II	2a	旧表土、遺物包含層?、石 積みの痕跡だけ残る	5YR7/1 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	石灰岩の小礫を含む。			石積の基礎 遺物(赤土、 中城瓦)
			R4	3	III b-1a	2b-3	整地層	10YR2/2 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	2~5cmの石灰岩の小 礫を30%含む。			
			R4	3	III b-1b	2b-2	整地層	10YR2/2 黒 褐	やや強い	有り	砂質シルト	7.5YR5.6 明褐色の赤土 7.0%を含む。大きな 礫はない。			
			R4	3	III b-1c	2b-1	整地層	10YR2/2 黒 褐	弱い	有り	砂質シルト	7.5YR5.6 明褐色の赤土 7.0%を40%含む。石 灰岩の小礫を僅かに含む。			
			R4	3	III b-1d	2b-4	整地層	10YR2/2 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	石灰岩の小礫を含む。			
			R4	3	III b-1e	2b-5	整地層	10YR2/2 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	7.5YR5.6 明褐色の赤土 7.0%を1~5%含む。			
			R4	3	III b-1f	2b-6	整地層	10YR2/2 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	7.5YR5.6 明褐色の赤土 7.0%を40%含む。			
			R4	3	III b-1g	2b-7	整地層	10YR2/2 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	7.5YR5.6 明褐色の赤土 7.0%を50%含む。			
			R4	3	III b-2a	3-①	盛土	10YR2/2 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	噴土・炭化物を僅かに 含む。			SP1-2の埋土か?
			R4	3	III b-2b	3-②	盛土	10YR2/2 黒 褐	上層より 強い	有り	砂質シルト	噴土・炭化物を僅かに 含む。			
			R4	3	III b-2c	3-③	盛土	10YR2/2 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	噴土・炭化物を僅かに 含む。			
			R4	3	IV	4	地山・赤土	7.5YR4/6 赤 褐	良い	有り	砂質シルト				
R4	3	V	5	岩盤								石灰岩。			
6	11		R3	1	I-1	1a	表土	7.5YR2/2 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	石灰岩礫、楕土、炭 化物を含む。			
			R3	1	I-2	1b	表土(層積で擾乱された旧 表土か)	7.5YR2/2 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	10~15cmの石灰 岩礫、楕土、炭化物 7.5YR4.6 褐色の赤土 7%を含む。			
			R3	1	IV	2	地山・赤土	7.5YR4/6 赤 褐	良い	有り	砂質シルト				
			R3	1	V	2	岩盤							石灰岩。	
7	12		R3	2	I-1	1a	表土	7.5YR2/2 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	石灰岩礫、楕土、炭 化物を含む。			
			R3	2	I-2	1b	表土	7.5YR2/2 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	上層より石灰岩礫を多 く含む。			
			R3	2	II-1	2	遺物包含層・生活層	7.5YR2/2 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	上層より石灰岩礫が少 なく(1%),楕土を多く 含む。			近所の遺物 を殆ど含ま ない。陶製 品(からぶき) も出土。
			R3	2	II-2	3	遺物包含層・生活層	7.5YR2/2 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	上層に比べて混入物 が多く、1.2cmの石灰 岩礫や楕土を1%含む。			
			R3	2	III b-1a	4a-1	造成層	7.5YR2/2 黒 褐	弱い	有り	砂質シルト	3.8cmの石灰岩礫や貝 殻、楕土を多く含む。			甲斐面の造成 層。石灰岩 礫が表層に 入れられて いる。
			R3	2	III b-1b	4a-2	造成層	7.5YR2/2 黒 褐	弱い	有り	砂質シルト	石灰岩礫があまり入 らない。新築などを含む。			甲斐面の造成 層下に属す と思われる。
			R3	2	III b-2	4b	造成層	7.5YR2/2 黒 褐	弱い	有り	砂質シルト	3.8cmの石灰岩礫は 稀と入るが、1.2cm の石灰岩礫が入 る。			石積の裏込 めの裏面に 入れらる 造成層。
			R3	2	III a	4c	石積の裏込め埋土	7.5YR2/2 黒 褐	弱い	有り	砂質シルト	3.8cmの小礫と15.20cm の石灰岩礫が裏込め として入る。			b-3層一 層、b-4層の 遺 土の上に構 築。
			R3	2	III b-2	4a-1	造成層	7.5YR4/6 赤 褐	良い	有り	砂質シルト	貝殻を含む。			赤土の盛土。
			R3	2	III b-3a	4a-2	造成層	10YR2/1 黒 褐	やや強 い	有り	砂質シルト	貝殻や炭化物を多く 含む。			
			R3	2	III b-3b	4a-3	造成層	10YR2/1 黒 褐	やや弱 い	有り	砂質シルト	貝殻を含む。			
			R3	2	III b-3c	4a-4	造成層	10YR2/2 黒 褐	やや強 い	有り	砂質シルト	貝殻や3.5cmの石灰 岩の小礫を含む。			
			R3	2	III b-4	5	造成層	7.5YR3/3 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	楕土、炭化物、貝殻を 含む。埋める赤土 を含む。			
			R3	3	I-1	1a	表土(耕作土)	7.5YR3/1 黒 褐	良い	有り	砂質シルト	楕土、炭化物を含む。			
R3	3	I-2	1b	表土(耕作土)	7.5YR3/1 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	楕土、炭化物を含む。			II~III層を埋 める。耕作による ものか。			
R3	3	I-3	1c	表土(耕作土)	7.5YR3/1 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	楕土、炭化物を含む。			II~III層を埋 める。耕作による ものか。			
R3	3	II	2	生活層・造成層	7.5YR2/1 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	楕土を15%含む。			II-2層を整地 して生活層にす る。埋める赤土 や炭化物の 散在。			
9	13		R3	3	III b-1	3a	生活層・造成層	7.5YR3/2 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	楕土、炭化物を含む。			II b-3層一 層、b-4層の 遺 土の上に構 築。
			R3	3	III b-2	3b	造成層	10YR3/3 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	楕土、炭化物を含む。			
			R3	3	IV・III b	4	地山・赤土。部分的に造成 層の可能性あり。	7.5YR4/6 赤 褐	強い	有り	砂質シルト				
			R3	3	①	SX1		7.5YR2/1 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	楕土を15%含む。			埋土はII-1層。
			R3	3	②	SX1		7.5YR3/3 黒 褐	強い	上層よ り強い	砂質シルト	炭化物や獣骨を①層より 多く含む。			図40-156出 土。
			R3	3	③	SX1		7.5YR2/2 黒 褐	強い	有り	砂質シルト	炭化物や獣骨を多く含 む。			

地区	経路 トレン チ	年度	トレン チ	経路 開序	当該 開序	通稱	所見	土色	しまり	粘性	土質	混入物	その他	遺物		
9	13	R3	3		④	SX1		75YR3/3 褐 褐色	強い	上部より強い	砂質シルト	炭化物や腐骨を多く含む。	理化学年代測定実施。14世紀末の年代推定。			
					⑤	SX1		5YR2/2 黄褐色	強い	上部より強い	砂質シルト	75YR4/6 褐色の赤土のロウを 20%含む。		④～⑤ 雨が層土になる。	④～⑤ 出土	
					①	SP1		75YR2/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト					
					②	SP1		10YR3/3 暗褐色	強い	有り	砂質シルト					
					③	SP1		75YR2/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト					
					④	SP1		10YR3/3 暗褐色	強い	有り	砂質シルト					
					⑤	SP1		75YR2/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト					
					⑥	SP1		75YR2/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト					
					⑦	SP1		75YR2/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト					
					⑧	SP1		75YR2/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト					
10	14	R3	4		I	1	表土 (高地の造成土)	75YR2/2 黄褐色	弱い	低い	砂質シルト	海砂の砂利、炭化物を含む。				
					II	2	生活層	75YR2/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	炭化物を 15%、赤土を少し含む。				
					III b-1	3a	硬土	75YR4/4 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	炭化物を 5%、赤土を少し含む。				
					III b-2	3b	硬土	75YR4/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	炭化物を 10%、赤土を少し含む。				
					III b-3	3c	硬土	75YR4/3 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	炭化物を 5%、赤土を少し含む。				
					IV	4	地山・赤土	75YR4/4 黄褐色	強い	有り	砂質シルト					
					I-1a	1a	表土 (耕作土)	10YR3/3 黄褐色	弱い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層を含む。				
					I-1b	1b	表土 (耕作土)	10YR3/3 黄褐色	弱い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層と片前の小片を含む。				
					I-1c	1c	表土 (耕作土)	5YR4/1にぶら褐色	弱い	有り	砂質シルト	赤土を含む。				
					I-1d	1d	表土 (耕作土)	10YR3/3 黄褐色	弱い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層と片前の小片を含む。				
14	16	R4	5		I-1e	1e	表土 (耕作土)	10YR3/3 黄褐色	弱い	有り	砂質シルト	上部より石灰岩層が少ない。				
					I-2a	2a	硬土	10YR4/4 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	75YR6/6 明褐色の赤土のロウを多く含む。片前の小片を含む。				
					I-2b	2a	硬土	10YR4/4 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層と片前の小片を含む。				
					I-2c	2b	硬土	10YR4/4 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層と片前の小片を含む。				
					I-2d	2c	硬土	75YR4/4 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層と片前の小片を含む。				
					I-2e	2d	硬土	10YR5/3 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層と片前の小片を含む。				
					I-3a	3a	硬土	75YR4/4 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	片前の小片を含む。				
					I-3b	3b	硬土	75YR4/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	片前の小片を含む。				
					I-3c	3c	硬土	75YR5/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	片前の小片を含む。				
					I-3d	3d	硬土	75YR5/2 黄褐色	強い	有り	砂質シルト	片前の小片と 75YR5/6 明褐色の赤土のロウを含む。				
周辺					I-4a	4a	硬土	10YR4/3にぶら黄褐色	弱い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層を含む。				
					I-4b	4b	硬土	10YR4/2 黄褐色	弱い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層を含む。				
					I-4c	4c	硬土	10YR4/2 黄褐色	弱い	有り	砂質シルト	10～15cmの石灰岩層を含む。				
					I	1	硬土。年代不明									
					I-1	1a	造成土									
					I-2	1b	造成土	75YR3/1 黄褐色	強い	やや弱い	砂質シルト	白色粘・積土・炭化物を含む。				
					II-1	2a	遺物包含層	75YR3/1 黄褐色	強い	やや弱い	砂質シルト	白色粘・積土・炭化物を含む。				
					II-2	2b	遺物包含層 (遺物はII層と同一層取り上げ)	75YR3/1 黄褐色	強い	やや弱い	砂質シルト	白色粘・積土・炭化物を含む。				
					IV	3	地山・赤土									
					V	3	岩層									
22	H5	3			I	1	表土	所見なし。(写真から75YR3/1黄褐色か?)								
					IV	2	地山・赤土									
24	H5	1			I	1	表土	所見なし。(写真から75YR3/1黄褐色か?)								
					IV	2	地山・赤土									
					V	3	岩層									

第3節 台地部分の調査

台地部分（地区1～4）では、地区2で3か所（トレンチ1～3）、地区3で3か所（トレンチ4～6）、地区4で4か所（トレンチ7～10）の10か所で発掘調査を実施した（図12）。

また、地区3・4の外郭となる石垣1・2の図化を行っている。以下では、各地区ごとに調査成果の報告を行う。

地区2の調査

地区2はトレンチ1、トレンチ2、トレンチ3の3か所で調査を実施している（図12）。

また、当該箇所では国指定重要無形民俗文化財の与論の十五夜踊が上演される場所でもある。

1 トレンチ1の成果（図版1）

トレンチ1は、現在、土俵が設置されている平坦面で、この土俵の北側に調査区を設定して発掘調査を実施した。遺物は層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序

現在の表土下から生活層と考えられる旧表土層（Ⅱ層）、城跡利用時の整地層と考えられる層（Ⅲ層）が確認された。出土遺物はⅡ層から多く得られている。

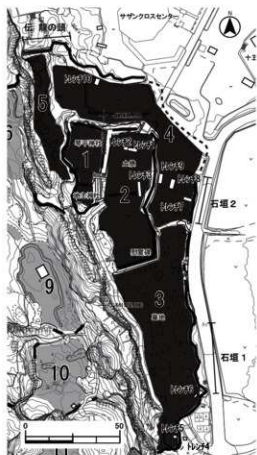


図12 台地部分の調査区配置図

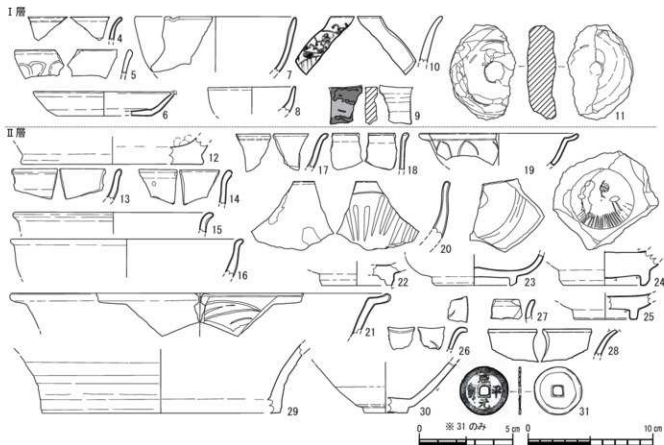


図13 地区2 トレンチ1 (4～31) 出土遺物

(2) 遺構

柱穴などの遺構は確認されなかったが、上述のように城跡の造成に関わると考えられる整地層（Ⅲ層）が確認されている。

(3) 出土遺物（図13-4～31、表10）

全体で491点が出土した。出土遺物としては、近世～近代の遺物（図13-10）を含むが、大宰府分類の白磁碗Ⅳ類（図13-27）、青磁碗Ⅰ類（図13-7）や白磁皿Ⅸ類（図13-6）、白磁碗Ⅸ類（図13-28）を上限に、主に14世紀後半から15世紀中頃の陶磁器類（図13-4～5, 8・9, 11, 13～25, 29）が出土した。ほかのトレンチでは出土が少ない土器（図13-12）や青磁の輪花皿（図13-26）、いわゆる天目茶碗（黒軸陶器の碗）（図13-30）、成平元寶（図13-31）が出土している。

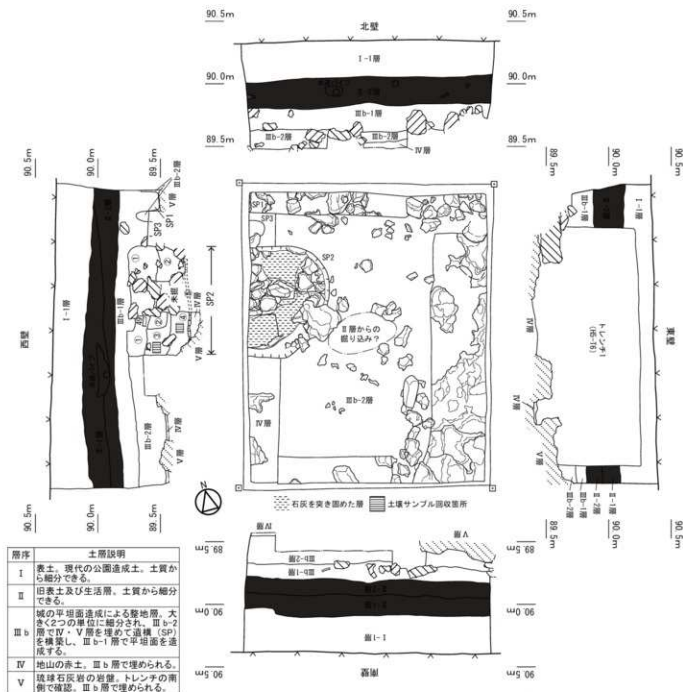


図14 トレンチ2 平面図・セクション



2 トレンチ2の成果

トレンチ2は、トレンチ1の西側に平成5年度の調査成果の再確認と遺構や造成層の把握を目的として発掘調査を実施した。遺物は層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序 (図14)

トレンチ1と同様に、現在の表土下から生活層と考えられる旧表土層 (Ⅱ層)、城跡利用時の整地層と考えられる層 (Ⅲ層) が確認された。また、Ⅲ層は複数層に分けることができる。

西壁ではⅢ層の下層約30cmから地山の赤土 (Ⅳ層) が検出されたことに対して、東壁側ではⅢ層や岩盤 (Ⅴ層) が検出されたことから、東から西側 (地区1側) へ高くなる土地の高まりをⅢ層の盛土で造成して現在の平坦面を整地していると考えられる。出土遺物はⅡ層から多く得られているが、Ⅲ層が

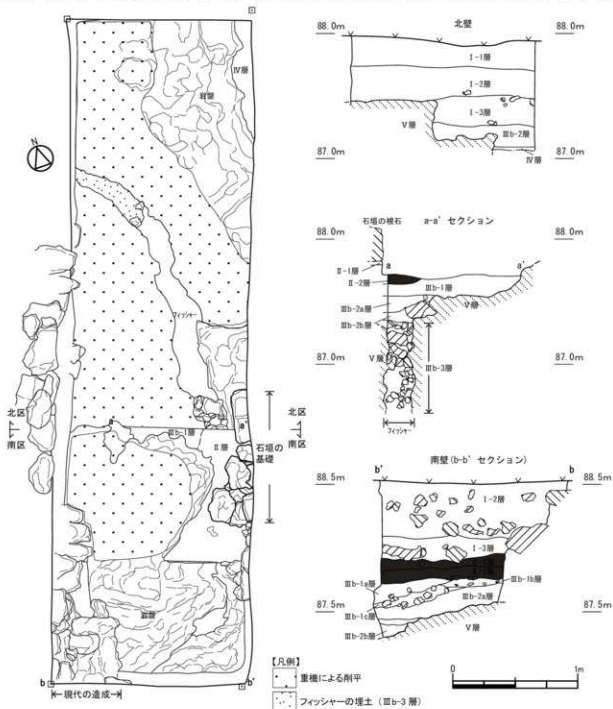


図15 トレンチ3 平面図・セクション

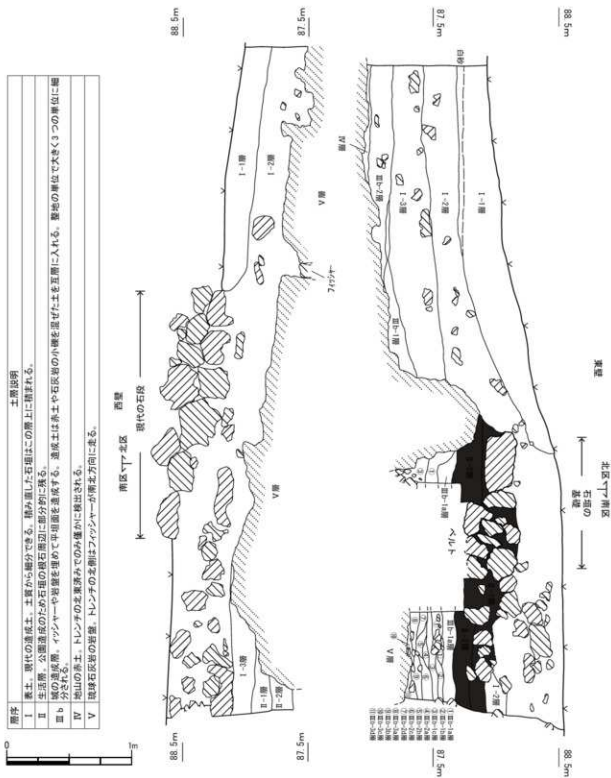


図 16 トレンチ3 セクション

らも出土が認められる。

(2) 遺構 (図 14)

柱穴状の掘り込み (SP) が東壁で 3 基確認された。そのうち、SP 2 は西壁沿いで半円形状に確認された遺構で、全体の半分しか確認できていないため正確な平面形は不明だが、大型の柱穴の可能性を考えたものである。

また、SP 2 は、造成層 (III 層) と地山 (IV 層) を掘り込んで構築されており、掘り込みの中には幅 10 cm ほどの石灰岩などの礫が噛合うように入れ込まれている。また、掘り込みの最下層は地山との間に石灰岩を突き固めたような薄い整地層が確認された。

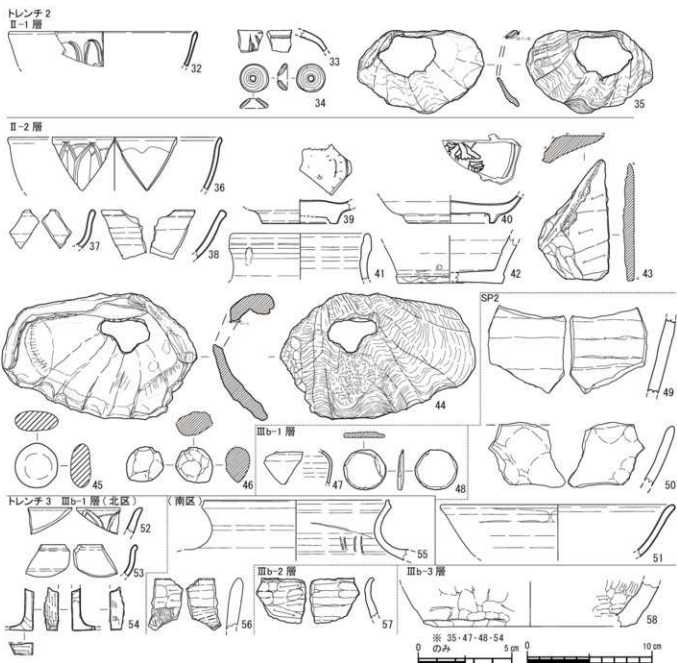


図 17 地区2 トレンチ2・3 出土遺物

このことから、何らかの建物の基礎、少なくとも城跡の整地に伴う遺構と考えられる。SP 2の埋土③(位置は図14の西壁セクション参照)の理化学年代測定を実施したところ、SP 2は14世紀前半頃の年代が得られた(第5章第3節第3項参照)。

(3) 出土遺物(図17-53~58、表10)

全体で1,068点が出土した。主にII-1・2層、III b-1層から遺物が出土している。大宰府分類青磁碗II類(図17-36・39)を上限にビロースクタイプIII類(図17-38)の白磁碗、14世紀後半~15世紀中頃の青磁(図17-37・40)、中国産陶器(図17-41・42・48)、石器(図17-44)、貝錘(図17-45)、石製品(図17-46・49)や土製品(図17-47)等が出土した。また、SP 2の埋土からグスク土器(図17-50)や中国産の青磁碗(図17-51)や中国産褐釉陶器壺(図17-49)が出土した。

3 トレンチ3の成果

トレンチ3は、トレンチ1、トレンチ2の南側にある慰霊碑の広場との境目になっている段差が、かつて地区Ⅱを区画する石垣が存在していたことから、南北方向に調査区を設定して発掘調査を行った。遺物は層序単位で一括して取り上げを行い、表土掘削後の遺物の取り上げにあたっては、中央の段差を境に「北」と「南」に区分して取り上げを行った。

(1) 層序 (図15・16)

現在の公園造成に伴う造成土層 (Ⅰ層) の下から生活層と考えられる旧表土層 (Ⅱ層)、城跡利用時の整地層と考えられる層 (Ⅲ層)、地山の赤土 (Ⅳ層) と岩盤 (Ⅴ層) が確認された。このうちⅡ層は公園造成工事による攪乱のため、残存状況は良くない。Ⅲ層は旧地形の岩盤 (Ⅴ層) の高まりやフィッシャーを、赤土や礫を混ぜた造成土で埋めて城内の平場の整地を行っている。出土遺物は旧生活層を攪乱してⅠ層から多く得られているが、Ⅱ層やⅢ層からも得られている。

(2) 遺構 (図15)

トレンチの中央部のスロープ状の段差になっている箇所から、かつて存在した地区Ⅱを区画する石積の基礎を検出した。柱穴などの遺構は調査区の制約や造成による攪乱のためか確認できていない。今後の課題である。

(3) 出土遺物 (図17-53～59、表10)

全体で1,072点が出土した。出土遺物としては、Ⅰ・Ⅱ層から青磁碗Ⅱ類 (図17-53) を上限にビロースクタイプⅢ類白磁碗や、14世紀後半～15世紀中頃の陶磁器類 (図17-54)、年代不明だが硯 (図17-55) 等が得られている。Ⅲ層からは、南側の岩盤を埋める造成土からカムイヤキの壺 (図17-55) が、トレンチ中央のフィッシャーを埋める造成土からはグスク土器の甕 (図17-58) が出土している。このことから、13世紀後半から遅くとも14世紀前半までには現在の平坦面の基礎となるような造成が行われていたと考えられる。

また、フィッシャーの埋土からは現在与論に生息してしないシュリマイマイが出土しており (第5章第2節参照)、旧地形や島の生態環境の変化を考える上でも重要である。

4 小結

地区Ⅱは平坦面構築のための造成層を全てのトレンチで確認した。また、トレンチ2では、掘り込み状の遺構や柱穴跡の可能性のある遺構が検出され、当該地区内に建物を構築するなど利用があったことが伺えた。

トレンチ3では、かつて存在した区画の石垣の根石が検出され、城跡の造成層との重畳関係から、城跡に伴う区画の石垣だったと考えられる。

当該地区の整地が行われたのは、出土遺物や理化学年代測定値から14世紀前半頃と考えられる。一方で15世紀頃までの遺物が出土していることから、平場の造成後は断続的に利用が行われたと考えられる。しかし、建物跡等の構造物に関する遺構の把握が不十分であるため、地区の性格については今後の課題である。

地区3の調査

地区3では、東側の集落側に配置されている石垣Ⅰの実測とトレンチ4～6で調査を実施している。

当該地区の大半は現在周辺集落の墓地として利用されている。

1 石垣Ⅰ (図18)

石垣Ⅰの構築方法は野面積みで、外面となる東側に部分的に面が揃う箇所が残る。平面形はM字状で、墓地造成やソテツなどの植物の樹根によって崩落している箇所や積み直しが行われている箇所も多いも

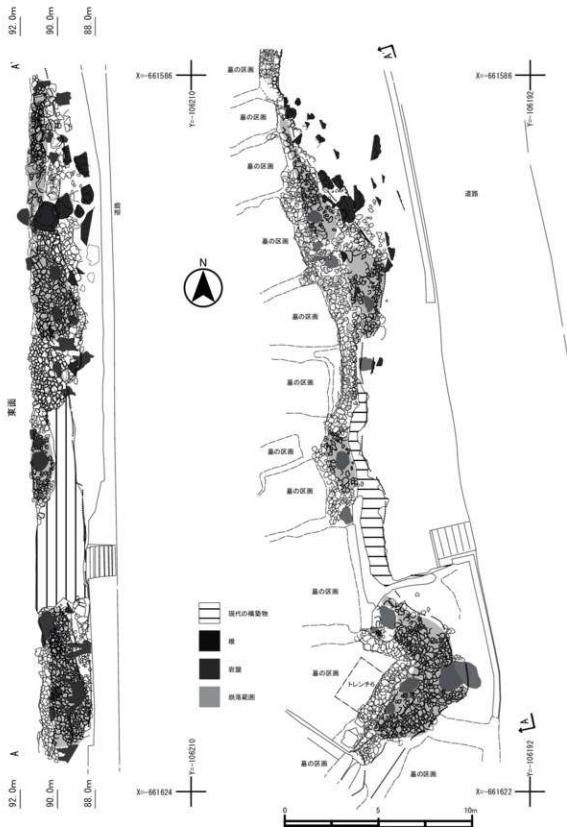


図 18 石垣1 平面図・立面図

の、現在でも張り出し部分を確認することができる。石垣は、東側の集落の緩やかな傾斜地から立ち上がる石灰岩の岩盤の高まりを利用して構築されており、30～50cmほどの礎を積み上げる。また、石垣の背後は地区3の平坦面になることから、石垣自体が平坦面を造成するための土留めを兼ねていると考えられる。石垣1は集落側からの防御と平坦造成のために配置したと考えられる。

2 トレンチ4 (図版6)

トレンチ4は、石垣1から続く地区3南端の石垣の基礎や根石を確認するために発掘調査を実施した。遺物は層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序・遺構

地山まで攪乱を受けており、遺構などは確認されなかった。

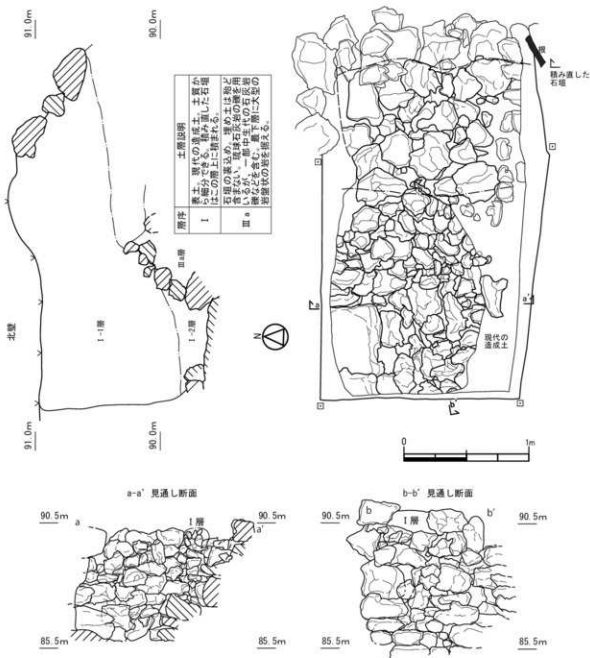


図19 トレンチ5 平面図・セクション

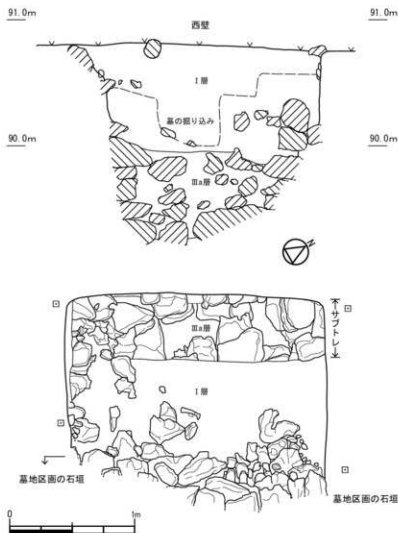


図20 トレンチ6 平面図・セクション

層序	土層説明
I	表土。墓地の造成土。墓地の利用により海砂の白砂を含む。II層を攪乱しているため、陶磁器類を含む。
III a	石垣の裏込め。琉球石灰岩の礫を用いる。黒褐色の埋め土として入り、埋め土中からは魚骨が出土。陶磁器類の出土無し。

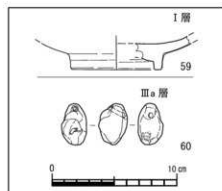


図21 地区3 トレンチ6 出土遺物

(2) 出土遺物

I層から包含層を攪乱した際に混入した遺物が僅かに出土したが、図化対象資料からは除外した。

3 トレンチ5 (図19)

トレンチ5は、地区3南端の石垣の裏込めや構築方法を確認するため、トレンチ4の上部で発掘調査を実施した。遺物は層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序 (図19)

表土 (I層) は現代の平坦面造成のための盛土で、現代ゴミを含み、地表近くは公園整備の造成により固く転圧されている。トレンチ5周辺では、昭和30年代に石垣の高さを利用して砕石をおこなっていたことや、公園整備にの造成工事より、現在の地表面下1.8m近くまで攪乱を受けている。このためI層は、現在の造成土 (I-1層) と以前の砕石時に堆積したと考えられる土砂層 (I-2層) に細別される。このほかは、石垣の裏込め (III a層) が確認されたが、当該層からは年代を特定できるような遺物の出土は無かった。

(2) 遺構 (図19)

石垣の裏込めを確認した。裏込めには、主に琉球石灰岩の粗割した長軸15～20cmの礫を内側に充填し、外面側は長軸20～30cmほどの一回り大きな礫を1.3m以上の幅にわたって列状に並べて配置する。

裏込めの下層では、長軸70cm以上になる大型の岩が確認された。このことから、構築方法として大型の岩などを基礎に据えるなど、箇所に応じて礫の大きさを変えながら積み上げることで、石垣の構築を行っている状況を確認した。

(3) 出土遺物

I層の造成層及び石垣の裏込め層から遺物の出土は無かった。

4 トレンチ6

トレンチ6は、地区3東側の石垣1の裏込めや構築方法を確認するため、発掘調査を実施した。遺物は層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序 (図20)

I層は現代の墓地利用(現在は墓地としての利用無し)に伴う盛土で、墓地にまく海砂の白砂を多く含む、トレンチ西壁の中央部のI層の落ち込みは白砂を多く含むことから、骨壺を埋めていた際の掘り込み跡と考えられる。また、城跡利用時の生活層(II層)を攪乱しているため、陶磁器類や石器等を含む。埋め土からは、年代を特定できるような遺物の出土は無かったが、サンゴ製の石製品や魚骨が出土した。

(2) 遺構 (図20)

石垣の裏込めを確認した。裏込めには、主に琉球石灰岩の粗割した長軸15~20cmの礫を積み上げており、黒褐色土を埋め土とする。埋め土の有無は異なるがトレンチ5の裏込めと同様の構築方法と考えられる。

(3) 出土遺物 (図21-59・60)

全体で220点が出土した。I層からビロースクタイプⅢ類の白磁や14世紀後半~15世紀中頃の青磁(図21-59)、近世以降の陶磁器、石器等が出土した。Ⅲa層からは年代が判明する遺物は出土しなかったが、サンゴに穴を穿った石製品(図21-60)が出土した。

5 小結

地区3では、トレンチ5・6で城跡の石垣の裏込めを確認した。このことから城城の南端は、調査を行った石垣1の流れから、通路で分断されるもののトレンチ4・5の石垣へと繋がる一連の石垣の範囲と考えられる。また、構築方法は粗割した石灰岩の礫を裏込めとし、外面に近い裏込めは一回り大きな礫を用いるなど、箇所によって用いる礫の種類を変えていることが伺えた。出土遺物からは、石垣の構築年代は判明できなかったが、トレンチ6のI層から14世紀後半~15世紀前半の遺物が出土しており、これまでの調査成果から城跡が利用されていた時期の遺物と考えられる。以上のことから、地区3において城城の南限となる石垣とその構築法について把握することが出来た。

地区4の調査

地区4は石垣2の実測と、トレンチ7、トレンチ8、トレンチ9、トレンチ10の4か所で調査を実施している(図12)。

1 トレンチ7 (図23)

トレンチ7は、地区4東側の石垣2の根石および構築方法確認のため発掘調査を実施した。遺物は層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序 (図23)

I層の表土は畑地の耕作層で、II層を攪乱しているため遺物を含む。II層は石垣2の根石付近にのみ残存している。Ⅲa層は石垣2の根石・裏込め層で、石垣2の直下には造成層であるⅢb層上に長軸30~40cmほどの大型の礫を石垣と並行するかやや西側に傾いて並べ、その内側に長軸10~15cmほ

西面

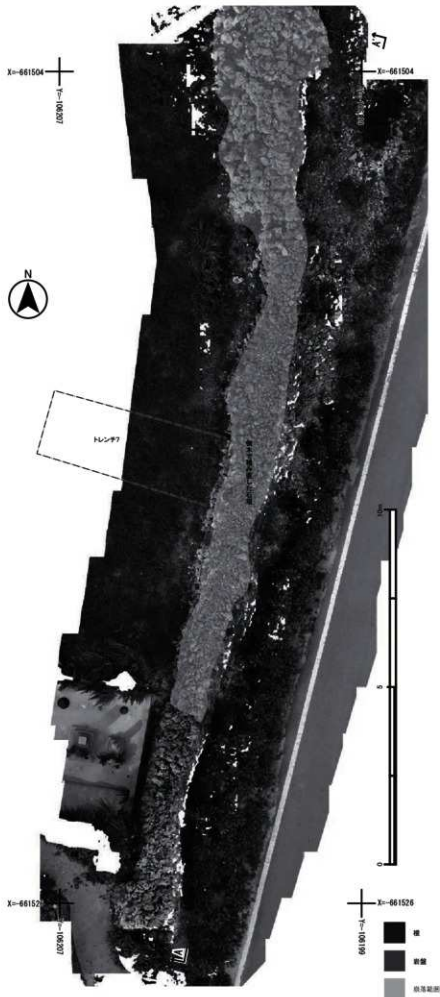


図 22 石垣2 平面図・立面図オルソ画像

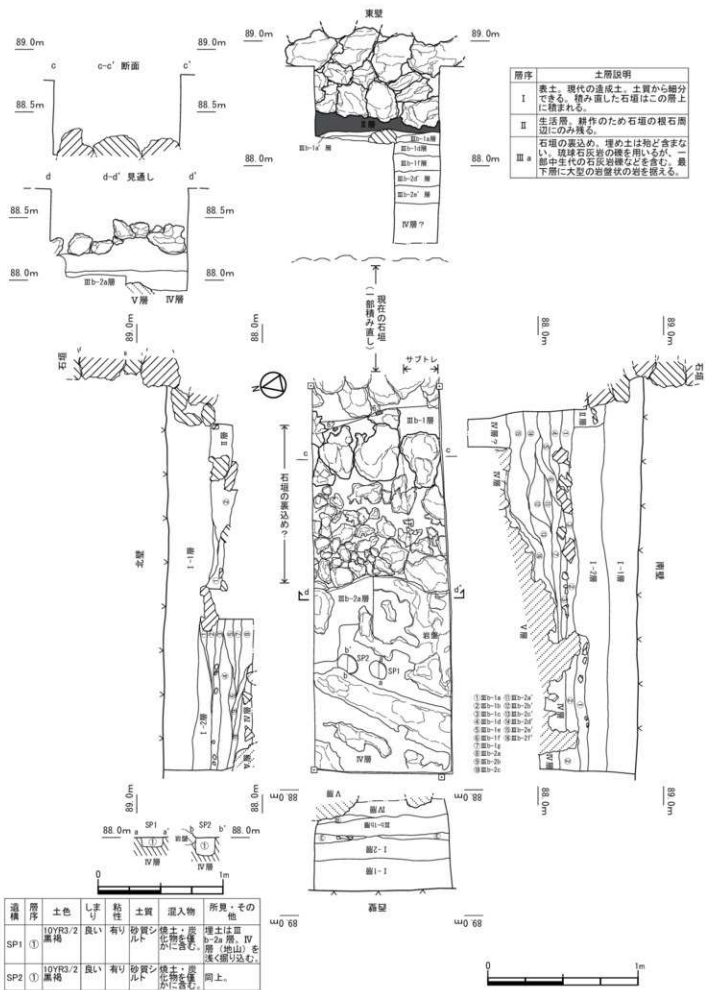


図 23 トレンチ7 平面・セクション・SP1・2 詳細図

どの小ぶりな礫と長軸20～30cmほどの礫を60cmほどの幅で敷き詰めるように充填する。地区3のトレンチで確認した石垣の裏込めのように礫を積み上げることは行っていない。

Ⅱ層が埋め土となる。Ⅲb層は石垣や平坦面を整地するための造成層で、赤土や黒褐色土、石灰岩の小礫が混ざり、土質や混入物から複数層に細分できる。トレンチの西側は岩盤を埋める40cmほどの造成層で、各層は10～15cmの厚さの造成土を複数回盛土して整地を行っている。石垣の直下は、岩盤が東側に落ちこんでいるため、この整地層の下に赤土を主体とする30cmほどの盛土を行い整地をしているため、造成層の厚さは80cm以上になる。岩盤のV層はトレンチの全体で確認されたが、赤土の地山であるⅣ層はトレンチの西側でのみ確認できたが、石垣の直下では地山まで到達できなかった。

(2) 遺構 (図23)

石垣の直下で、石垣の根石や造成に関わると考えられる礫群が確認された。Ⅳ層面では柱穴状の遺構(SP1・2)が2基確認された。両遺構とも掘り込みは10～20cmほど度と浅く性格は不明である。

(3) 出土遺物 (図25-61～67、表10)

全体で635点が出土した。主にⅠ層から14世紀～15世紀中頃の陶磁器(図25-61)や近世以降の陶磁器、鉄滓等が出土している。石垣の根石の埋め土周辺に残存するⅡ層からは出土遺物は僅かだったが、青磁の盤の口縁部(図25-62)と中国産褐釉陶器の壺(図25-62)、砥石(図25-64)が出土した。整地層であるⅢb層から滑石混入土器を加工したと考えられる土製品(図25-66)が出土しているが、年代の明らかな遺物の出土は無かった。排土からは大宰府分類青磁碗Ⅱ類(図25-67)や刀子の柄(図25-68)が出土している。

2 トレンチ8 (図版11)

トレンチ8は、現在飼料畑と利用されている平坦面で遺構確認のため調査が実施した。遺物は層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序・遺構

地山直上まで耕作による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。

(2) 出土遺物 (図25-69)

全体で46点が出土した。Ⅰ層からカムイヤキ(図25-69)のほか、カムイヤキや14世紀後半～15世紀中頃の陶磁器、近代の陶磁器、鉄滓等が出土している。

3 トレンチ9 (図版12)

トレンチ9は、地区3をとりまく石垣の根石部分の確認のため発掘調査を実施した。遺物は層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序

地山直上まで耕作による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。

(2) 出土遺物

岩盤上に構築された石垣の根石を確認した。根石の周辺は重機による攪乱を受けており、遺構や造成層の有無は確認できなかった。

(3) 出土遺物 (図25-71～73)

全体で20点が出土した。Ⅰ層からカムイヤキの壺を上限に、14世紀後半～15世紀中頃の陶磁器(図25-70)や近世の沖繩産の壺(図25-71)、貝鍾(図25-72)が出土している。

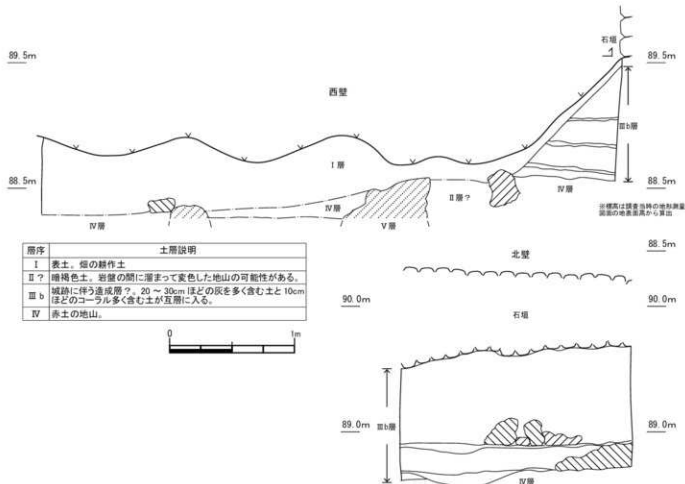


図24 トレンチ10 セクション

4. トレンチ10 (図24)

トレンチ10は、「龍の頭」と称される石垣に繋がる地区4北側の石垣の構築方法確認のために調査を実施した。

(1) 層序

地山上に、炭と土を互層に積み上げる造成層(III b層)を設けた上に石垣を構築している。

(2) 遺構

柱穴跡等は確認できなかったが、石垣の構築に関わると考えられる造成層が確認された。

(3) 出土遺物(図25-73～80、表10)

全体で79点が出土した。I層及びII層から、14世紀後半～15世紀中頃の陶磁器(図25-73～78)が出土している。中国産の鉢(図25-78)は、ほかの地区では例がない資料である。

5 小結

地区4は外郭と考えられる「龍の頭」と称される石垣に関わる造成層をトレンチ4、トレンチ7で確認することができた。また、トレンチ5では、石垣2の根石を確認した。このことから、地区4の調査では外郭となる石垣とその構築のための造成が行われていることを把握した。

出土地点不明の特徴的な台地部分・周辺部分出土遺物(平成5年度調査)(図25-81～88)

1 遺物の概要

平成5年度調査の遺物で、出土地点が不明の遺物(109点)の内、特徴的な遺物の報告を行う。平成5年度調査では、台地部分と周辺部分で調査を行っており、特に台地部分の地区2・4・5に設定した4箇所のトレンチから多くの遺物が得られている。令和4年度の調査でこれらの調査箇所に近い地点を調査していることから、比較参考のために報告を行う。図25-81は大宰府分類II類の青磁碗、図25-82は

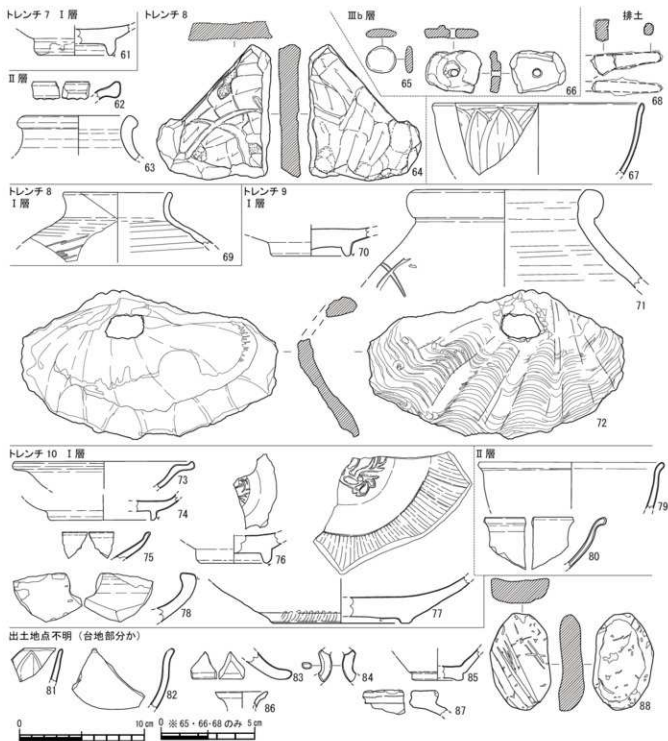


図 25 地区4 トレンチ 7～10 出土遺物

沖縄分類Ⅴ類の無文外反の青磁碗でほかの台地部分や周辺部分の調査でも出土している。陶器類についても図 25-87 は褐釉陶器の壺の口縁部、図 25-85 は黒軸陶器の碗（いわゆる天目茶碗）の底部で、こちらもほかの調査で出土している。一方で、図 25-83 は酒海壺の蓋の底、図 25-84 は青磁の瓶の耳もしくは飾りの一部、図 25-86 は白磁（もしくは青白磁）の瓶の口で台地部分や周辺部分の調査では確認されていない遺物である。図 25-88 は軽石製の砥石で、軽石自体はほかの調査区でも出土しているが、製品として形状が残る資料は希少である。

2 小結

平成 5 年度調査時に、台地部分や周辺部分の調査で出土した遺物の内、ほかのトレンチ出土遺物と同様な遺物がある一方で、青磁の酒海壺の蓋や瓶の耳？、白磁の瓶の口など希少な遺物が出土している。このことから、少なくとも台地部分やその周辺には希少な遺物を保有していたと考えられる。

第4節 崖下部分の調査

崖下部分では、地区6で1か所（トレンチ11）、地区7で1か所（トレンチ12）、地区9で1か所（トレンチ13）、地区10で1か所（トレンチ14）、地区11で1か所（トレンチ15）、地区14で2か所（トレンチ16・17）、地区15で1か所（トレンチ18）で調査を実施した。また、石垣3～5（図26）は令和元年度に測量調査を実施した。

地区6の調査

地区6では、地区の北端にある石垣3の構築方法を確認するため、石垣外面の北側にトレンチ11で調査を実施した。また、令和元年度に石垣3（図27・28）の測量調査を実施している。

1 石垣3（図27・28）

石垣3は、台地部分の一段下がった平坦面の崖と崖を防ぐように築かれてた城壁で、転石を用いながら、人頭大の礫で野面積みで平面形がU字状に構築されている。構築方法は野面積みで、外面と考えられる北側に面が揃うように構築されている。石垣の基礎は高さが1～1.5mの岩盤や、横幅が50～80cmの長方形に加工した石灰岩を基礎とし、その上部に30～50cmほどの礫を目地が通るように積み上げる。また、石垣の背後には地区15の崖下部からの入口から台地部分に通じる通路が通るとともに、地区8・9などの平坦面が配置されている。このことから、これらの通路や広場

を防御するため、平坦面が続く北側からの防御を意識した配置が行われている。一方で石垣の南側は崩落が激しいため、元々の幅と高さは不明だが、現状幅が約2m、高さ約3mほど残存する。東側の岩盤の痕跡の可能性がある石が残っていることから、全体では比高差が5mほどあった可能性がある。

2 トレンチ11（図29）

トレンチ11は、地区6の北端にある石垣3の構築方法を確認するため、発掘調査を実施した。遺物は基本的に層序単位で一括して取り上げを行った。

(1) 層序

石垣の根石の表土直下から赤土の地山や岩盤が確認された。遺物包含層は確認されなかった。また、トレンチの北側は耕作による重機の掘削を部分的に受けている。

(2) 遺構

調査を行った石垣の根石以外は、遺構は確認されなかった。

(3) 出土遺物（図30-89）

全体で23点が出土した。殆どが流れ込みの遺物で緑色岩製の石錘（図30-89）が出土している。

3 小結

地区6では、大型の転石を利用しながら地山上に石垣を構築している状況を把握した。

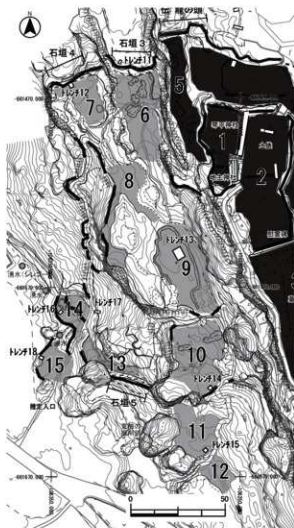


図26 崖下部分の調査区配置図

X=661447
Y=106297



X=661400
Y=106247



A

X=661447
Y=106322
遺代の石組み



トレンチ1



B

X=661400
Y=106322

図 27 石垣3 平面図

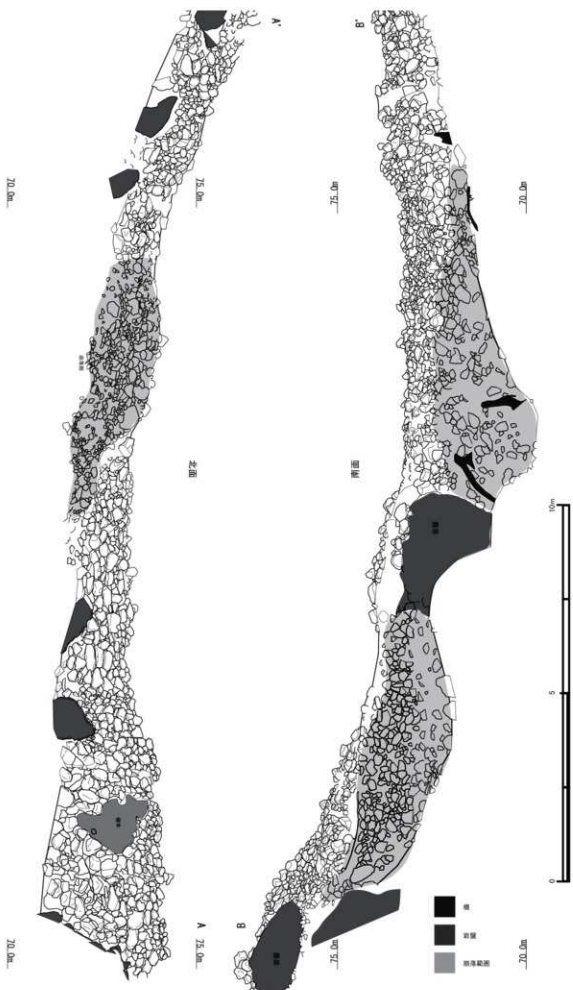


图 28 石塚3 南面・北面立面

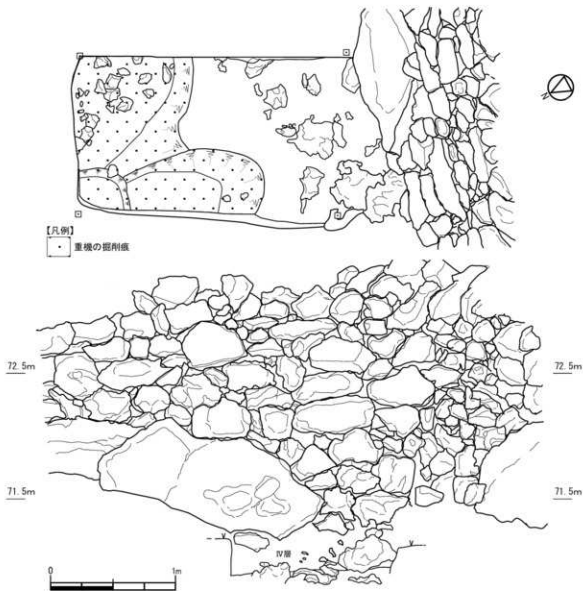
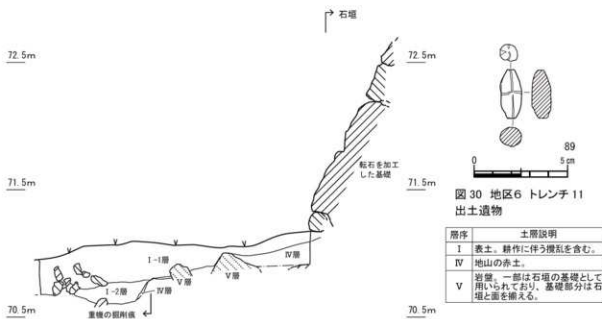


図 29 トレンチ 11 セクション・平面・立面

地区7の調査

地区7では、トレンチ12で調査を実施している。また、令和元年度に石垣4（図31・32）の測量調査を実施している。

1 石垣4（図31・32）

石垣4は、地区6の一段下がった平坦面の崖と崖を防ぐように築かれた城壁で、平面形は直線的だが張り出しを2箇所設けている。構築方法は野面積みで、外面と考えられる北側に面が揃うように構築されている。石垣の基礎は高さが1～1.5mの岩盤や、横幅が50～80cmの長方形形状に加工した石灰岩を基礎とし、その上部に30～50cmほどの礫を目地が通るように積み上げる。石垣は1～1.5mほどで段を作り、その上に石垣を積み上げている。また、石垣の背後には地区15の崖下部からの入口から台地部分に通じる通路が通り一、地区8・9などの平坦面が配置されている。このことから、これらの通路や広場を防御するため、平坦面が続く北側からの防御を意識した配置が行われている。

一方で石垣の南側は崩落が激しいため、元々の幅と高さは不明だが、現状幅が約2m、高さ約3mほど残存する。東側の岩盤の痕跡の可能性のある石が残っていることから、全体では比高差が5mほどあったと考えられる。

2 トレンチ12（図33）

トレンチ12は、トレンチ11と同様に地区7の北端にある石垣3の裏込めや構築方法を確認するため、発掘調査を実施した。遺物は基本的に層序単位で一括して取り上げを行ったが、一部の遺物は出土座標を測量してから取り上げを行った。

（1）層序（図33）

I層の表土は畑地として利用されていた際の層で、耕作行為や耕作放棄後に生えてきたアカギヤクワの根による攪乱を受ける。混入物や締まりの違いから2層に分けられるが、木の根などによる攪乱のためと考えられる。II層は城の利用時の生活層と考えられる層で、木の根による攪乱と考えられる近世の染付片が僅かに出土したが、殆どが14世紀後半～15世紀中頃にかけての陶磁器類や石器、貝・獣骨類などで、後世の攪乱は限定的と考えられる。層は混入物や締まりなどから15～20cmの厚さで2層に細分されるが、年代差や利用の単位なのかは不明である。III a層は石垣の裏込めとその埋土で土質、出土遺物共にII層と類似する。裏込め自体の発掘調査箇所は限定的であるため、出土遺物は裏込めの内部ではなく、裏込めに接する周辺の埋土から出土していたものである。このため、II層に含まれる可能性もあるが、裏込めに含まれていた可能性もあるためIII a層出土の可能性のある遺物として報告した。III b層は城の造成層で、大きく4つの層に分けられる。III b-1層は、II層の下層にあたる層で、小礫や獣骨が多く、III a層の裏込めを埋めてII層の平坦面を造成していることから、地区7の平坦面を造成した際の利用面を構築するための層と考えられる。III b-2層は、III b-1層と同様に利用面を構築するための造成と考えられるが、III b-1層と異なり、小礫などが少なくなり、層の厚さも異なることから、裏込めを構築した後平坦面を造成する際の盛土層と考えられる。III b-3層は、ほかのIII b層とは異なり石垣側を土質の異なる土を版築状に入れ込んだ層で締まりが良い。直上にIII a層の裏込め層があることから、石垣の裏込めを構築するために版築状に造成を行ったと考えられる。III b-4層は赤土の盛土でしまりはやや弱く、陶磁器類は出土せずに貝類が僅かに出土した。ピンホールを50cmほど差し込んでも質感に変化がなかったことから、盛土の厚さは壁面で確認したものを含め1m以上あると考えられる。石垣4自体が断層崖の崖と崖の間の谷を塞ぐように石垣を構築していることから、III b-4層の盛土はこの谷を埋める造成土と考えられる。

X=661452 Y=106322

X=661487 Y=106322

X=661452 Y=106350

X=661487 Y=106350

■ 樹
■ 草
■ 低層緑地

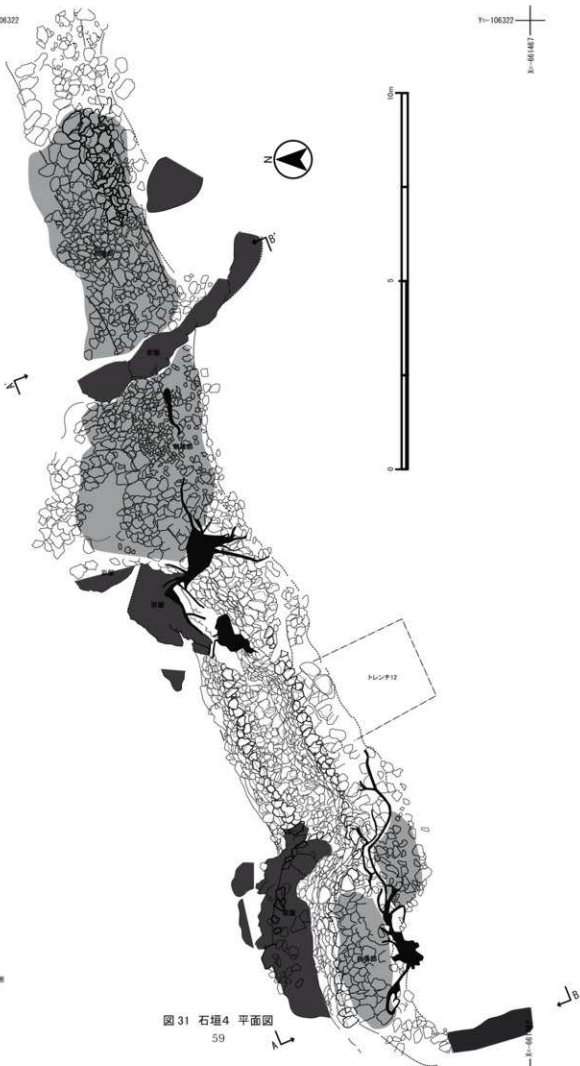


図 31 石堀4 平面図

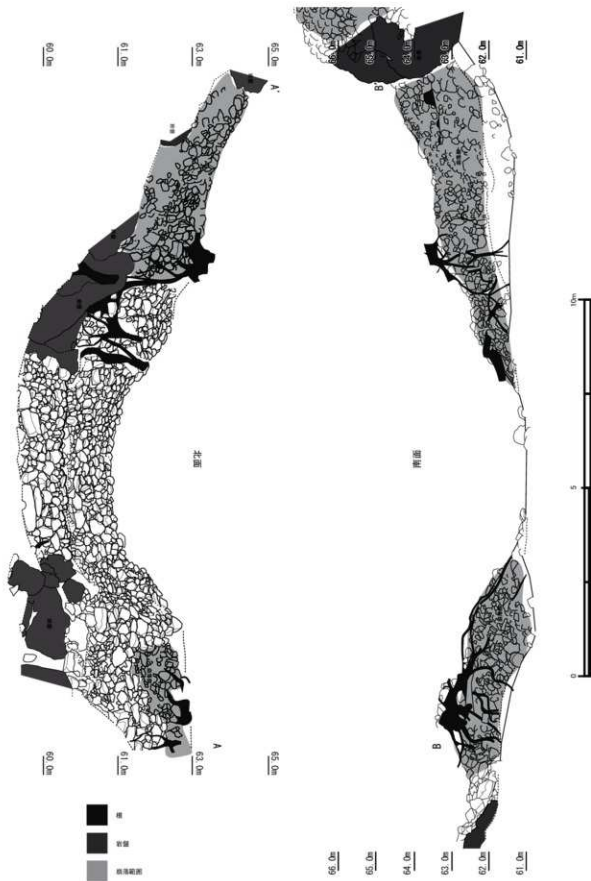
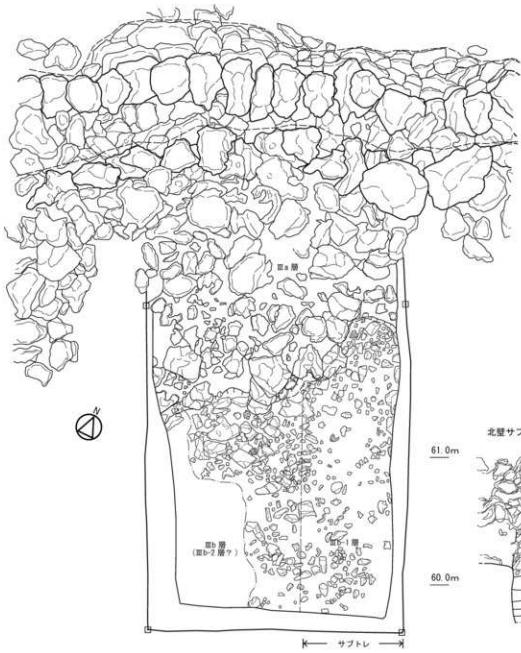


图 32 石垣4 南面·北面立面图



土層説明

Ⅰ	灰土、耕作に伴う腐植を含む、生活層（Ⅱ層）に露んでいた遺物を含む、混入物などからⅡ層に属分される。
Ⅱ	頃の利用時の生活層、14世紀後半～15世紀中頃の遺物が主体で、壁かに木の柱や耕作に伴う土中の遺物を含むが、混入物の数は僅か、混入物のことからⅡ層に属分される。
Ⅲa	石垣の裏込め、15世紀後半の築造から17～18世紀の大名屋敷築造の間の埋め立てからなる土層、小溝の埋め立てを各層に示出前の遺層であるⅢa-1層（埋め立ての遺物を含む）とⅢa-2層の埋め立ての遺物であるⅢa-2層（埋め立ての遺物を含む）に属分される。この層の遺物は、Ⅲa-1層の遺物とⅢa-2層の遺物とを区別する。また、各層は埋め立ての遺物とⅢa-1層に属分される。また、各層は埋め立ての遺物とⅢa-2層に属分される。
Ⅲb	Ⅲa-1層の埋め立ての遺物であるⅢb-1層（埋め立ての遺物を含む）とⅢa-2層の埋め立ての遺物であるⅢb-2層（埋め立ての遺物を含む）に属分される。この層の遺物は、Ⅲb-1層の遺物とⅢb-2層の遺物とを区別する。また、各層は埋め立ての遺物とⅢb-1層に属分される。また、各層は埋め立ての遺物とⅢb-2層に属分される。

北壁サブトレクション見通し

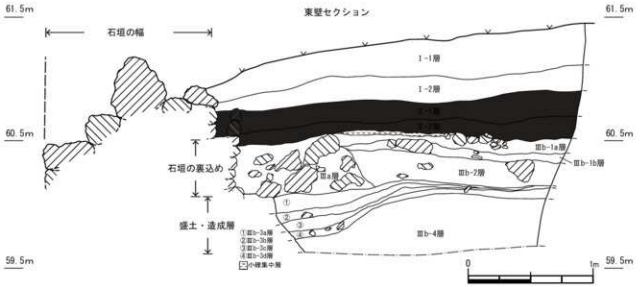
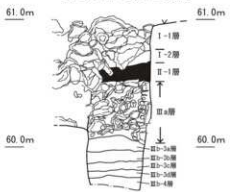


図 33 トレンチ 12 平面図・東壁セクション・北壁見通し

(2) 遺構

柱穴跡などの遺構は確認されなかったが、石垣の裏込めとその構築層を確認した。

(3) 出土遺物 (図 34-90 ~ 106、表 10)

全体で 1,224 点が出土した。遺物は生活層である II-1 層、II-2 層と造成層の中でも II 層と接する III b-1 層、III b-2 層から遺物が多く得られている。

滑石を外面に塗布した土器 (図 34-90) や今帰仁タイプの白磁皿 (図 34-98) といった 13 世紀後半までの遺物から、14 世紀から 15 世紀中頃にかけての沖縄分類 IV 類 (図 34-91) や沖縄分類 V 類 (図 34-96・102・105) の青磁碗、徳化窯系の白磁皿 (図 34-104)、青磁の盤 (図 34-92)、青磁の小杯 (図 34-95)、青磁の瓶 (図 34-97)、中国産褐釉陶器の壺 (図 34-103)、茶壺 (図 34-101) といった多様な器種が出土している。また、石錘 (図 34-93)、台石状の砥石 (図 34-94)、棒状の鉄製品 (図 34-106) といった道具類や、ガラスの小玉 (図 34-99) などの装飾品も出土している。

3 小結

地区 7 では、石垣を土留めとして盛土を行い平坦面を造成しつつ、外壁となる城壁の石垣を構築している状況が把握できた。平坦面造成後の利用時期は、今帰仁タイプなどの 14 世紀以前の遺物を含むものの、沖縄分類 V 類を中心に沖縄分類 IV 類の青磁碗が出土していることから、14 世紀後半から 15 世紀中頃にあったと考えられる。加えて様々な機種や道具類も出土していることから、一定の利用が行われていたと考えられる。

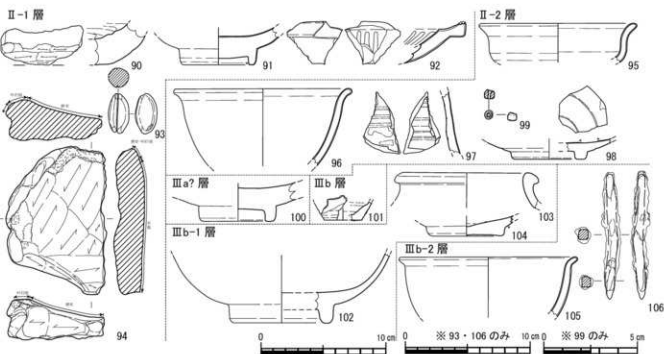


図 34 地区 7 トレンチ 12 出土遺物

地区 9 の調査

地区 9 では、トレンチ 13 で調査を実施している。

1 トレンチ 13 (図 35 ~ 38)

トレンチ 13 は、地区 IV で最も面積の広い平場であり、畑の耕作中に出土した礎石状の石製品があることから、建物跡などの遺構の確認のため発掘調査を実施した。遺物は基本的に層序単位で一括して取り上げを行ったが、一部の遺物は出土座標を測量してから取り上げを行った。また、表土掘削後は、調査区内を A ~ D 区に 4 分割して取り上げを行った。検出された遺構については、保存目的の調査である

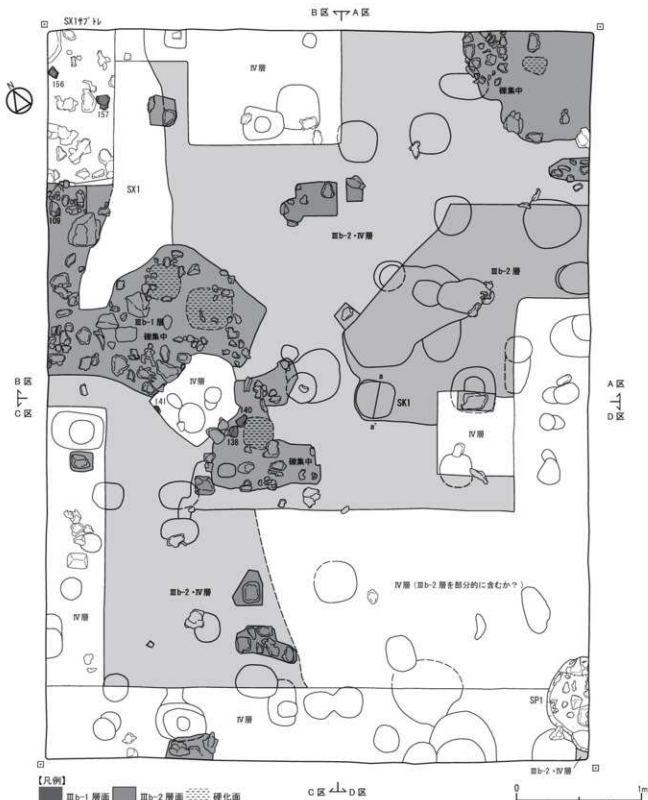
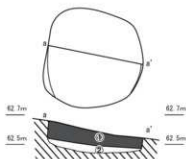


図 35 トレンチ 13 平面図



層序	土色	しまり	粘性	土質	混入物	所見・その他
①	7.5YR2/1 黒褐	弱い	有り	砂質シルト	炭が詰まるように入る。	遺土はIIIb-1層でIIIb-2層を析のため回収。深く掘り込む。埋土は年代分析のため回収。
②	10YR2/3 暗褐	良い	有り	砂質シルト	焼土、炭化物を含む。	IIIb-2層。

図 36 トレンチ 13 SK1 セクション

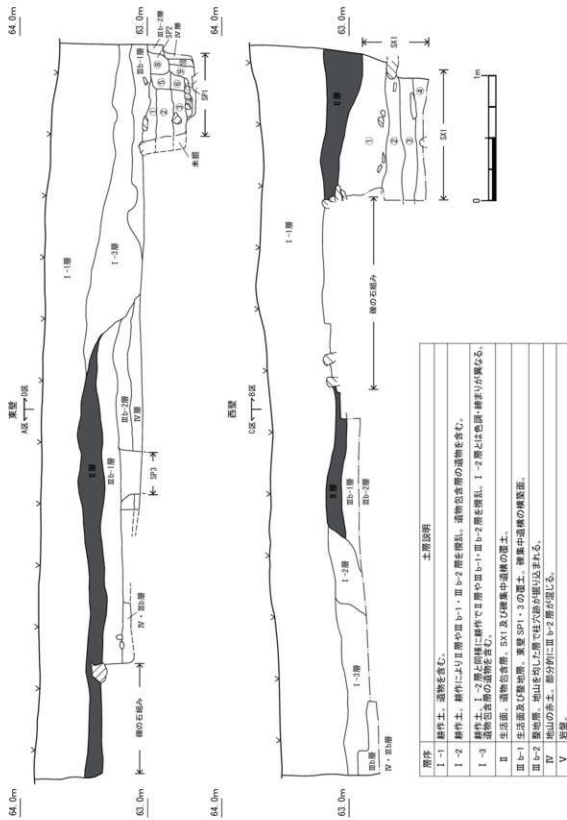


図 37 トレンチ 13 西壁・東壁セクション

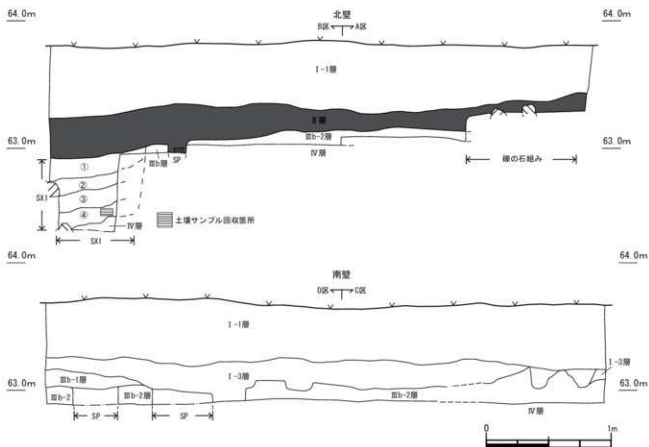


図 38 トレンチ 13 北壁・南壁セクション

ことから、基本的に検出状況の把握のみに留め、セクションにかかるものや特徴的な遺構 (SP 1・2、SK 1、SX 1) (図 35・36) のみ半裁を行った。

(1) 層序 (図 37・38)

I 層の表土は畑地として利用されていた際の層で、耕作行や耕作放棄後に生えてきたアカギヤクの根による攪乱を受ける。混入物や縮まりの違いから 3 層に分けられ、C・D 区に見られる I-2 層と I-3 層は当初 II 層の一部と誤認していたが、壺屋焼の破片 (図 39-114) が出土したことから、層序の精査を行った結果、耕作 (おそらくトラクター) による攪乱層と判断した。このため C・D 区で II 層以下の出土遺物については、攪乱を受けている可能性が高い。II 層は生活層で多く遺物が出土した。礎集中箇所や硬化面が確認された III b-1 層段階の生活層と考えられる。III b-1 層は柱穴跡が検出された整地層であるが、II 層のように多くの遺物も出土したことから III b-2 層を利用面とする段階の生活層を整地したと考えられる。また、A・B 区では確認できなかったが、A 区で III b-1 層の礎集中箇所が確認されていることから、II 層の利用段階で攪乱されて II 層に含まれてしまったと考えられる。III b-2 層は III b-1 層の前段階の整地層で、同じ高さで IV 層の地山の赤土が確認されたことや、地山に近い土質であったことから、地山を整地した造成層と考えられる。このため III b-2 層と IV 層の判別が行いにくかった箇所は III b-2・IV 層として標記した。また、IV 層と判断した箇所でも部分的に III b-2 層が含まれる可能性がある。III b-1 層が生活層と考えられ、III b-1 層段階の整地によって SP1 などの柱穴跡を埋めている。

(2) 遺構 (図 35・36)

III b-1 層面で柱穴跡や炭の詰まった掘り込み (SK 1) (図 36) のほか、硬化面や礎が集中する箇所が確認された。III b-2 層及び IV 層の面で柱穴跡や、用途不明の掘り込み遺構 (SX 1) が検出された。柱

穴跡は長軸20～40cmの円形や隅丸方形のもの(柱穴A)、長軸30cmほどの楕円形のもので芯柱の跡が残るもの(柱穴B)、長軸50cmを超える大型で一部芯柱跡が残る柱穴跡(柱穴C)の3種類が確認された。各柱穴跡の切り合い関係などについては、柱穴AはⅢb-1層、Ⅲb-2層、Ⅳ層で確認され、南壁で柱穴Cを掘り込む切り合いが認められる一方で、地区Bでは柱穴Bとの切り合いがあり、Ⅲb-1層面で根固めと考えられる礎が確認された。柱穴Cは前述のように柱穴Aに掘り込まれる。このことから、柱穴C→柱穴A→柱穴Bの順で構築された可能性が考えられるが、今回の調査では建物跡のプランは把握できておらずサイズにも差異があるため、具体的な柱穴跡の評価については今後の課題である。

SP 1(図35)はD区の南東隅のⅣ層面で検出された柱穴Cに分類できる柱穴跡で、Ⅲb-1層を覆土とする。形状は長軸約60cmの円形で根固めの礎が入る。Ⅲb-2層を掘り込むSP 2に掘り込まれる。

SK 1(図36)はA区とD区間のⅢb-1層面で検出された遺構で、柱穴Aのような平面形で掘り込みは浅いものの、埋土は殆ど炭で詰まるように入る。埋土の理化学年代測定を行った結果、calAD1324～1425の年代値が得られた(第5章第3節参照)。

SX 1(図35)はB区のⅣ層で検出された遺構で、Ⅱ層や礎集中が認められるⅢb-1層を覆土とする形状及び用途不明の遺構で、サブトレンチで調査を行ったが北壁側では部分的に地山面に到着できたものの、西壁側では床面まで到達しなかったことから、1m以上の深さがあると考えられる。遺構の南側はⅢb-1層の礎集中箇所を潜り込むことから、SX 1構築後にⅢb-1層の礎集中箇所を整地したと考えられる。遺構中からは中国産の陶磁器類(図40-156・157)や石器(図40-158)、獣骨が出土。特に青磁の皿(図40-157)は、口縁部の3分の2が欠損しているものの、口縁部から底部までが残る資料である。埋土の④層(採集箇所は図36参照)の理化学年代測定を行った結果、calAD1302～1400の年代値が得られた(第5章第3節参照)。

(3) 出土遺物(図39・40-108～160、表10)

全体で2,879点が出土した。遺物はⅠ層、Ⅱ層、Ⅲa層から多く得られている。出土した陶磁器類は、大宰府分類Ⅳ類の白磁碗(図39-116)を上限として、カムイヤキB群の壺(図40-144)、大宰府分類Ⅱ類の青磁碗(図39-127・132)、大宰府分類Ⅲ類の青磁碗(図39-131)、ピロースクタイプⅢ類の白磁碗(図39-135)、磁甕窯系の青磁皿(図39-130)、沖縄分類Ⅳ類の青磁碗(図39-110・111)、沖縄分類Ⅳ'類の青磁碗(図39-112・128)、沖縄分類Ⅴ類(図39-107、129・133・133、図40-156)、中国産褐釉陶器の壺(図39-117、142・143)、黒釉陶器の碗(図40-141)、白磁D群(図39-135)、明初の青花碗(図39-113)、沖縄産陶器の鉢(図39-114)と12世紀後半から近世にかけての遺物が出土しているが、14世紀後半～15世紀中頃にかけての陶磁器類が多い。また、青磁は皿(図40-157)、小碗(図39-112)、盤(図39-115・136・137)など多様な種類が出土している。

土製品は土壁の一部と考えられる破片が出土している(図39-119)。平坦な面と植物の圧痕(ササなどのイネ科植物か)が残る面があり、前者が外面、後者が内面側と考えられる。

石器は短冊形の下げ砥状の砥石(図39-121)、台形状の石器(図40-140)、方形の石器(図40-158)が出土している。図化していないが台石状の石器も出土している。短冊形の下げ砥状の砥石(図39-121)、台形状の石器(図40-139)の石材は島内で得られないことから、島外からの移入品と考えられる。石製品では、断面六角形の水晶製品(図39-108)や滑石製石鍋を二次的に三日月状に加工した石製品(図39-120)、凝灰岩質の石材の平滑面にベンガラが付着した石製品(図39-121)が出土している(ベンガラの分析結果は第5章第5節を参照)。

金属製品は鉄製の鐵杖製品(図39-123、146)や刀子の刃部(図40-147)、銭貨(洪武通宝)(図40-149)、青銅製の紙状の金具製品(図40-150)、破鏡の可能性のある素文鏡(図40-148)が出土している。



図 39 地区9 トレンチ 13 出土遺物1

Ⅲb-2層（1層含む）

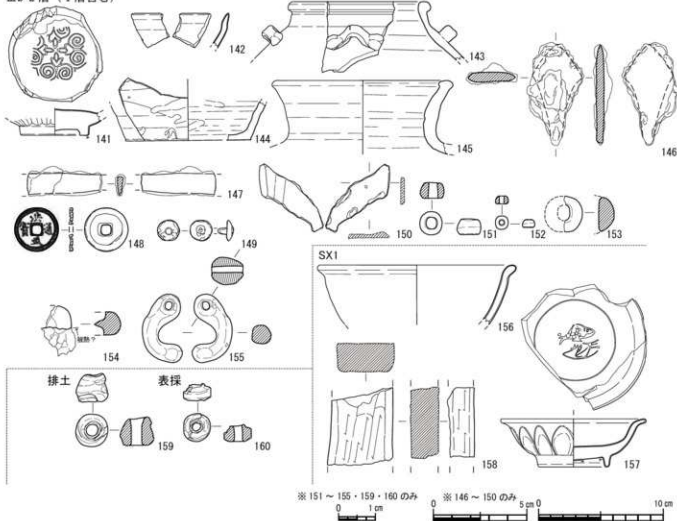


図 40 地区9 トレンチ 13 出土遺物2

また、図化は行っていないが鉄鍋の可能性のある扁平な鉄片も出土している。

鍛冶に関わる遺物としては輪の羽口片（図 40-138・139）が出土している。粘土の土質がきめ細かいことから島外の土を用いた移入品の可能性がある。

ガラス製品としてはガラスの勾玉（図 39-126、図 40-155）と小玉（図 39-123～125、図 40-151～154、159・160）が出土している。小玉は心棒にガラスを巻きつけて作成しており、径が 3mm 以下のもの（図 39-125、図 40-152）と 6mm 以上（図 39-123・124、図 40-151、153・154、159、160）のものに分かれる。一部が被熱した可能性のあるガラス小玉（図 40-154）も出土している。ガラス製品は全て水色でガラスで蛍光 X 線分析により全て鉛ガラス製であることが判明している（ガラス成分の分析結果は第 5 章第 4 節を参照）。

2 小結

地区 9 では、複数の柱穴跡と不明遺構（SX 1）が検出され、整地層と遺構の切り合い関係から 3 回の造成、建物の構築が行われたことが伺えた。理化学年代測定値や出土遺物から 15 世紀前半頃の遺構と考えられ、出土遺物の傾向とも一致する。また、出土遺物は食器や貯蔵のための陶磁器類のほかに、鐵や刀子といった鉄製品のほか、鏡や金具といった銅製品、鍛冶に関わる羽口、装飾品と考えられるガラス製品や水晶製品など、出土遺物の種類がほかの調査区に比べて多様である。当地区の評価については今後の課題であるが城内でも重要な地区であった可能性がある。

地区 10 の調査

地区 10 はトレンチ 14 で調査を実施した。

1 トレンチ 14 (図 41・42)

(1) 層序

I 層の表土は墓地として利用されていた際の層で、一部、1 m ほどの骨壺を埋める際の掘り込みも確認できる。II 層は墓地利用により一部攪乱を受けているが、10 ~ 15 cm ほどの堆積が確認でき、遺物量は少なかつたが近現代の遺物が入らないことから、生活層の一部と考えられた。また、II 層を埋め土として石垣の裏込めがと考えられる 15 ~ 20 cm の石灰岩礫が検出された。このため、II 層は石垣の造成土である III a 層を含むと考えられるが、明確な区分は出来なかつた。III b 層は赤土状の盛土が 80 cm ほど確認でき、色調や締まりから 3 つの層に区分できる。石垣の直下では IV 層との境目に礫が確認できたこ

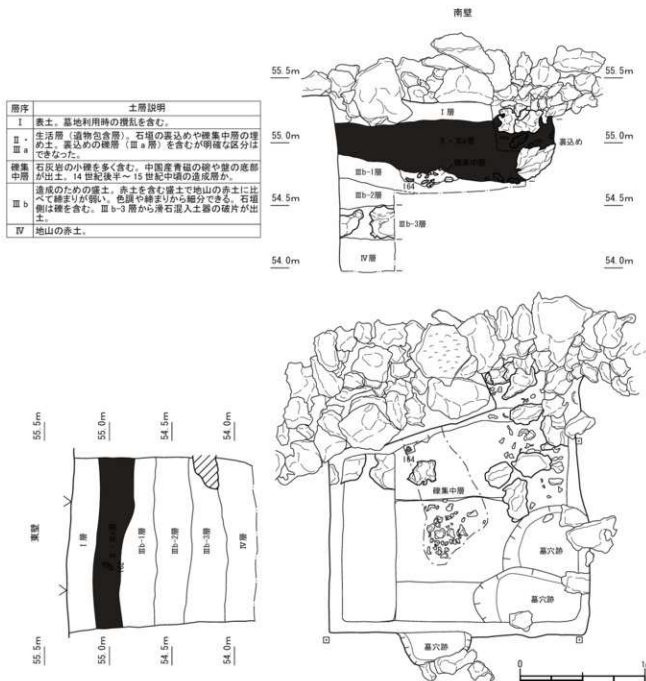


図 41 トレンチ 14 平面図・セクション

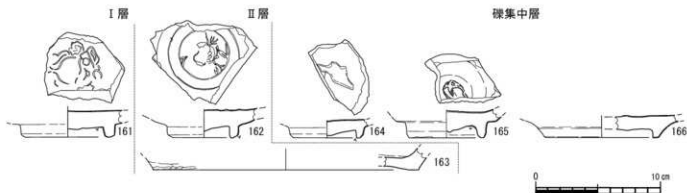


図 42 地区 10 トレンチ 14 出土遺物

とから、石垣や礫で土留めをして盛土を行ったと考えられる。また、Ⅲ b-3 層からは滑石混入土器の破片が出土している（図版 27）。Ⅳ層は赤土の地山層でⅢ b 層に比べて粘性があり、透水性も悪い。

(2) 遺構

墓地の石垣の下部から、Ⅱ層を埋土とする石垣の裏込めと考えられる礫が確認された。また、Ⅲ b 層の上面で礫が集中する箇所が確認された。当該降の性格は明らかにできなかったが、Ⅱ層が埋土となり、礫とともに青磁のⅣ類碗が出土していることから、城に伴う遺構もしくは整地層と考えられる。

(3) 出土遺物（図 42-161 ~ 166、表 10）

全体で 150 点が出土した。Ⅰ・Ⅱ層（1・2）およびⅢ b-1 層上面の礫集中層（造成層？）から青磁碗（図 42-164・165）や盤の底部（図 42-166）が出土している。年代観は 14 世紀後半～15 世紀中頃の遺物が中心である。

2 小結

トレンチ 14 では、近代の墓地整備により、擾乱を受けていたが、崖下の城域の南端と考えられる石垣の裏込めと造成層を確認することができた。また、Ⅱ層とⅢ b-1 層の間には、小礫がまとまる礫集中層が確認された。当該層の目的は不明だが、出土遺物から 14 世紀後半から 15 世紀中頃の利用年代が考えられる。

また、地区 7 のトレンチ 12 でもⅢ b-1 層で礫や貝類などが集中して含まれる状況が確認されている（図 33）。範囲や礫の大きさの差異はあるが、トレンチ 14 の礫集中層、トレンチ 12 のⅢ b-1 層の両方とも生活層（Ⅱ層）と造成層（Ⅲ b-1）の間に認められることから、城の利用に伴う可能性も考えられるが、今後の課題である。

地区 11 の成果

地区 11 はトレンチ 15 で調査を実施した。

1 トレンチ 15（図版 32）

(1) 層序・遺構

Ⅰ層の表土を剥いだ直下から地山が検出され、遺物包含層や整地層は確認されず、地山が地表面まで露出している状況であった。このため遺構は確認されなかった。

(3) 出土遺物

全体で 11 点が出土した。地区 VI からの流れ込みや木の根による混入と考えられる陶磁器類出土したが、小片のため図化は行っていない。

2 小結

トレンチ 15 では、木の根によって混入したと考えられる遺物以外は、遺物包含層や整地層は確認されなかった。このことから、主な城域の外と考えられる。

地区 13 の成果

地区 13 では、令和元年度に石垣 5 の測量調査を実施した。

1 石垣 5 (図 43・44)

石垣 5 は、推定入口から南側に折れる通路を挟む巨岩と巨岩の間を繋ぐように、人頭大の礎で野面積みで構築されている。石垣 5 の背後には地区 VI に通じる通路があり、この道に対する西側の防御を意識した石垣の配置が行われている。

石垣自体は崩落が激しいため、元々の幅と高さは不明だが、現状幅が約 2.5m、高さ約 1.5m ほどある。北側の巨岩に石垣の痕跡と考えられる石が残っていることから、高さは 2m ほどあった可能性がある。

2 小結

地区 V に現存する石垣 5 は、地区 13 と城外の南側を区画する石垣であったと考えられる。地区 11 のある岩盤から繋がるように配置されていることから、与論城跡の南西側の外郭としての機能が考えられる。地区 13 は平場が乏しく、古墓の造成による改変も加えられているため、当該地区の位置づけは今後の課題である。

地区 14 の成果

地区 14 は、トレンチ 16・17 (令和 4 年度のトレンチ 7・8) で調査を実施した。

1 トレンチ 16 (図 45)

(1) 層序

I 層の表土は、畑に伴う耕作土と盛土で、耕作土で石垣を伴う層 (I-1 層) と、畑地造成のための盛土 (I-2～4 層) に大別できる。また、I-2～4 層は造成の過程から複数の層に細別できる。

盛土下で検出された石積み状遺構は、地山の赤土と思われる層に構築されているが、確認調査を行っていないため、層序の判断は今後の課題である。

(2) 遺構

地表面で確認できる石垣は、I-1 層上に構築されていることから、城跡に伴うものではなく、後世に畑の区画として作られたと考えられる。

この石垣とは別に、1-2 層を埋め土として地表面下 1.7～1.4m から、年代不明の石積み状遺構が南北方向に 2 列並行して検出された。確認された石積みはいずれも野面積みで、西側の石積みは長軸 20～30cm ほどの石灰岩や片岩を 3 段積み重ねており (図 45)、東側の石垣は長軸 20～30cm ほどの石を 1 段並ぶように検出された。石積みの並ぶ方向は地表上の石垣とは異なっている。石積みの用途・目的は、調査面積や掘削深度の制限により検出面以上の調査が困難であったため、今後の課題である。

(3) 出土遺物 (図 45-167・168)

全体で 79 点が出土した。表土から流れ込みと考えられる陶磁器類が出土している (図 45)。盛土層からは貝類しか出土しなかった。また、表採品で地区 8 や 9 からの投棄もしくは流れ込んだと考えられる酒海壺の蓋が得られている (図 45-168)。

2 トレンチ 17 (図版 35)

(1) 層序

I 層の表土と地山に大別できる。また、石垣は I-2 層上に構築されていることから、城跡に伴う遺構ではないと考えられる。

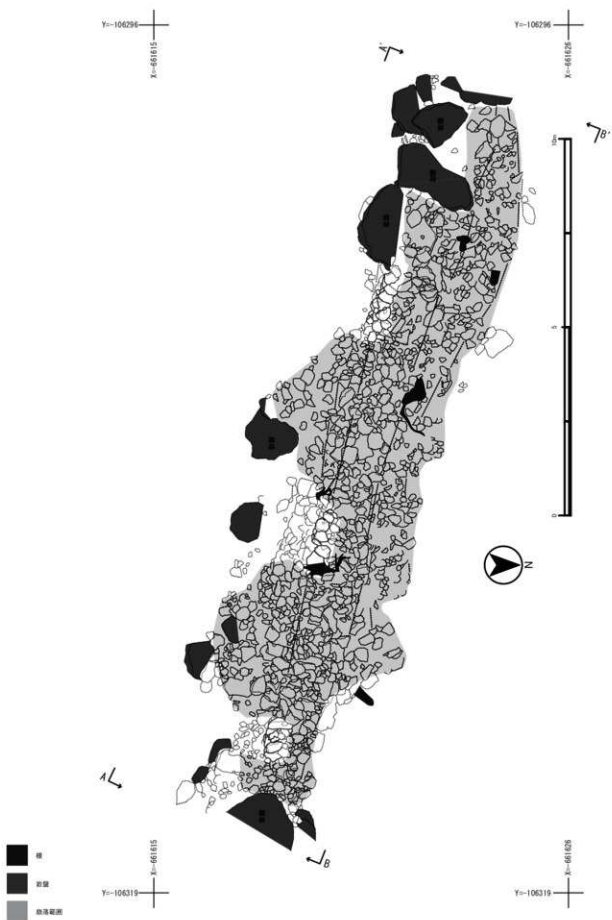


图 43 石塚5 平面图

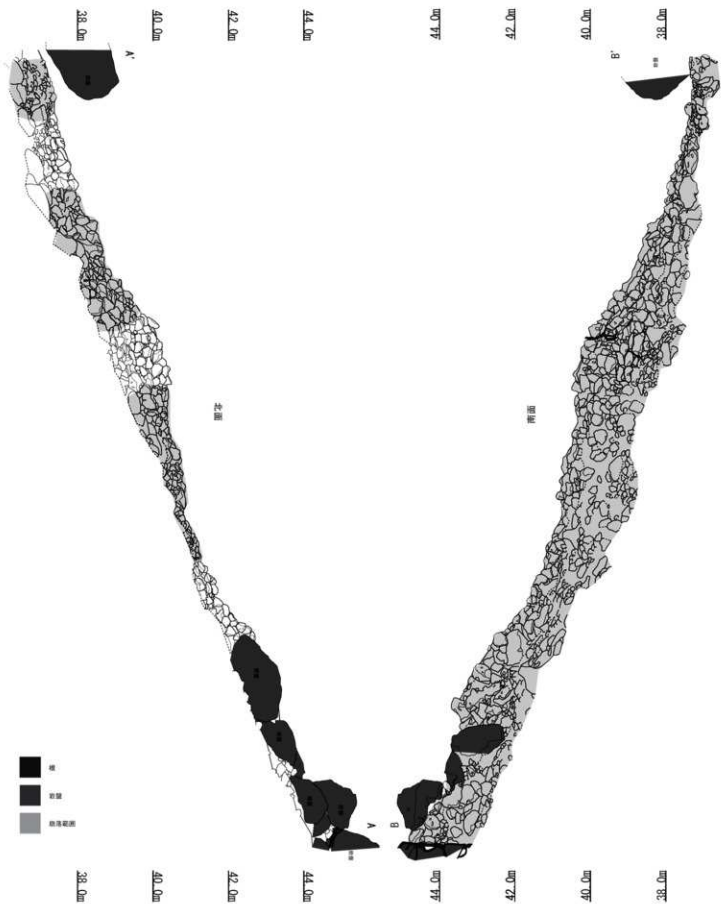
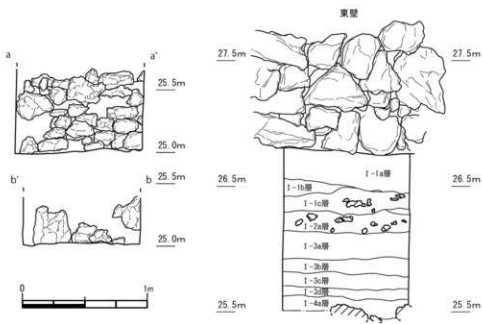
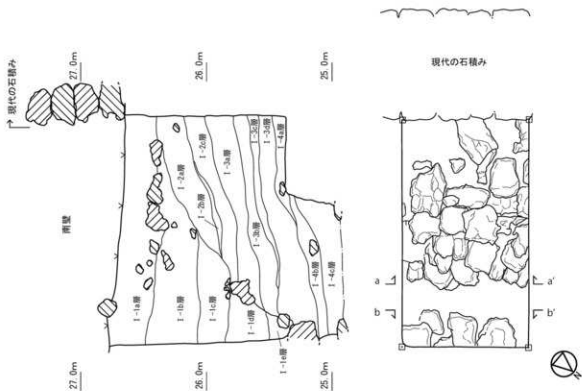


图 44 石垣5 对比图



階層	土説
1-1	耕作土、礫を含む。色黒や緑まりから層分できる。
1-2	盛土、礫を含む。色黒や緑まりから層分できる。
1-3	盛土、礫は少ない。色黒や緑まりから層分できる。
1-4	盛土、年代不明の石積み状遺構の埋め土。色黒や緑まりから層分できる。

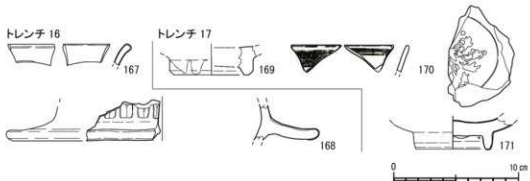


図 45 トレンチ 16 平面・セクション及びトレンチ 16-17 出土遺物

(2) 遺構

地表面で確認できる石垣は、I-2層上に構築されていることから、城跡に伴うものではなく、後世に畑の区画として作られたと考えられる。

(3) 出土遺物 (図45-169～171)

全体で25点が出土した。表土から流れ込みと考えられる陶磁器類が出土したが、小片のため図化していない。

3 小結

地区14の調査では、城跡に伴う石垣は確認されなかった。しかし、トレンチ16では年代不明だが新たに石垣が確認され、周辺では湧水が得られることから、当該トレンチ周辺まで城域に含まれる可能性が考えられた。地区Vの西側から北西にある畑は、耕作者によると嵩上を行っており、以前は現在よりも窪んだ土地であったという(2021年茶花集落在住、50代より聞き取り)。このことから、地区Vの西側は天然の谷状の地形と湧水を利用した地区と考えられる。

地区15の調査

地区15では、トレンチ18で調査を実施した。

1 トレンチ18 (図版36)

(1) 層序

I層の表土は、畑に伴う耕作土と盛土で、耕作土で石垣を伴う層(I-1層)と、畑地造成のための盛土(I-2層)に大別できる。地山のIV層は赤土で、わずかに流れ込んできた基盤岩の風化した破片などを含む。現地表面から約1.4m下で検出された。

(2) 遺構

当該トレンチでは遺構は確認されなかった。また、石垣はI-1層上に構築されていることから、城跡に伴う遺構ではないと考えられる。

(3) 出土遺物

全体で8点が出土した。I-1層で地区8や9からの投棄もしくは流れ込みと考えられる遺物が数点出土しているが、造成に伴う遺物は確認されなかった。

3 小結

地区15の調査では、城跡に伴う石垣等の遺構は確認されなかった。

第5節 周辺部の調査

周辺部の調査はトレンチ19～21(平成5年度のトレンチ1～3)、トレンチ22～23・25～27(令和2年度のトレンチ4～8、トレンチ24(令和4年度のトレンチ4)で調査を実施している。

1 トレンチ19 (図版37～39)

(1) 層序・遺構

地山直上まで耕作や造成工事による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。現在確認できる石垣はこの攪乱土(I層)の上に構築されている

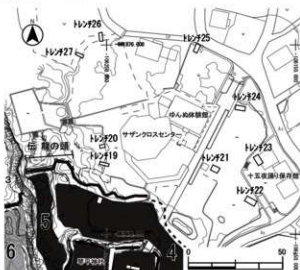


図46 周辺部 調査区配置図

ることから、近世・近代以降に土留めとして構築された石垣と考えられる。

(2) 出土遺物 (図 51-172)

全体で 51 点が出土した。I 層から遺物が僅かに出土したが、14 世紀後半～15 世紀中頃の陶磁器類の破片のほか、近世の陶磁器類も出土している (図 51-172)。

2 トレンチ 20 (図版 40)

(1) 層序・遺構・遺物

地山直上まで耕作による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。

3 トレンチ 21 (図 47・48)

城跡の範囲確認及び公園整備前の旧地形の把握を目的に調査を実施した。

(1) 層序

I 層は平成 3 年頃に行われた公園造成に係る盛土で、下層は旧表土 (耕作土) が混ざる。約 1m の盛土が行われていた。II 層は旧耕作土と遺物包含層が混ざった層で、14 世紀後半～15 世紀中頃までの陶

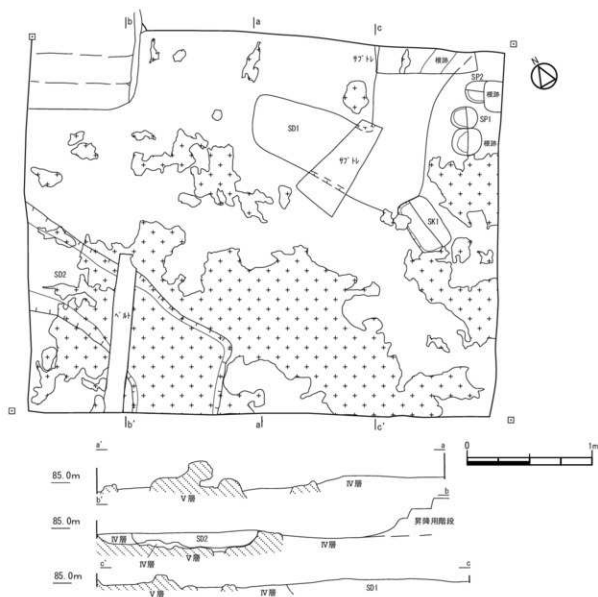
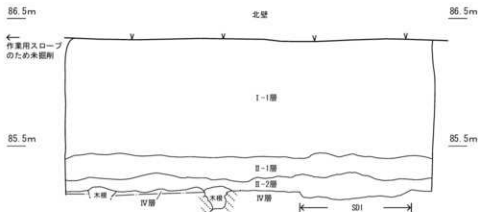


図 47 トレンチ 21 平面図・地形断面図



層序	土層説明
I-1	公園の造成土。I-2層近くに公園整備前の建物跡が残る。
I-2	造成土。公園整備前の畑地を掘出した層。
II-1	旧跡作土。遺物包含層に含まれていた遺物を含む。SD1、SK1の埋土。
II-2	旧跡作土。遺物包含層に含まれていた遺物を含む。SD2の埋土。
IV	地山の赤土。遺構検出面。
V	石灰岩の岩盤。

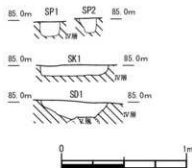
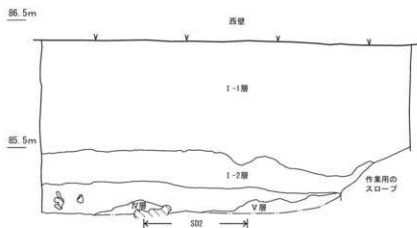
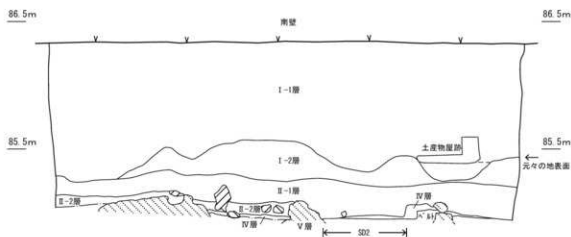
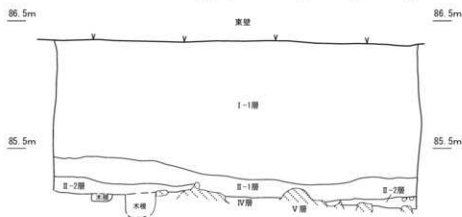


図 48 トレンチ 21 セクション

磁器類を中心に、近現代までの陶磁器類が出土した。IV層は赤土の地山層で、遺構はこの地山面で主に確認された。IV層の面では部分的にV層の石灰岩の岩盤が露出する。

(2) 遺構

遺構は主に、トレンチ北東側のIV層面で検出され、柱穴跡（SP 1・2）や土坑状遺構（SK 1）、L字状の溝状遺構（SD 1）が検出された。トレンチの南西側はV層を掘り込む形で逆L字状の溝状遺構（SD 2）が検出された。

SP 1・2、SD 1は埋土の放射性年代測定を行った結果、SP 1が13世紀前半～後半、SP 2が12世紀後半～13世紀前半、SD 1が17世紀前半～中頃の年代が得られている（第5章第3節）。

(3) 出土遺物（図51-173～183、表10）

全体で758点が出土した。主にII層から14世紀後半～15世紀中頃を中心に近現代までの遺物が出土した。また、SP 1からは鏝付きのグスク土器（図51-173）、SD 1からはガラス小玉（図51-182）が出土している。

4 トレンチ22（図49）

城跡の範囲確認を目的に、与論城跡北側を取り巻く道路沿いの畑地の調査を実施した。

(1) 層序

I層は耕作土で遺物包含層が混ざるため、14世紀後半～15世紀中頃までの陶磁器類を中心に、近現代までの陶磁器類が出土した。IV層は赤土の地山層で、遺構はこの地山面で確認された。

(2) 遺構

IV層の赤土面で柱穴跡と土坑状遺構が検出された。建物跡のプラン等は把握出来ていない。

(3) 出土遺物（図51-197～221、表10）

全体で265点が出土した。主にI層から14世紀後半～15世紀中頃の遺物が出土した。また、土坑状遺構（図49）や柱穴跡（図49）から14世紀後半頃の遺物が出土している。

5 トレンチ23（図版51）

与論城跡北側を取り巻く道路沿いの畑地の調査を実施した。

(1) 層序・遺構

地山直上まで耕作による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。

(2) 出土遺物（図51-184～193）

全体で149点が出土した。I層から14世紀後半～15世紀中頃までの陶磁器類や近世～現代までの陶磁器類が出土した。

6 トレンチ24（図50）

与論城跡北側を取り巻く道路沿いの畑地の調査を実施した。

(1) 層序

I層は耕作土で遺物包含層が混ざるため、14世紀後半～15世紀中頃までの陶磁器類を中心に、近現代までの陶磁器類が出土した。IV層は赤土の地山層で、遺構はこの地山面で確認された。

(2) 遺構（図50）

IV層の赤土面で土坑状遺構が3基検出された。SK 1・2は切り合い関係にあり、SK 1の方が深く掘り込む。遺構の用途は不明である。

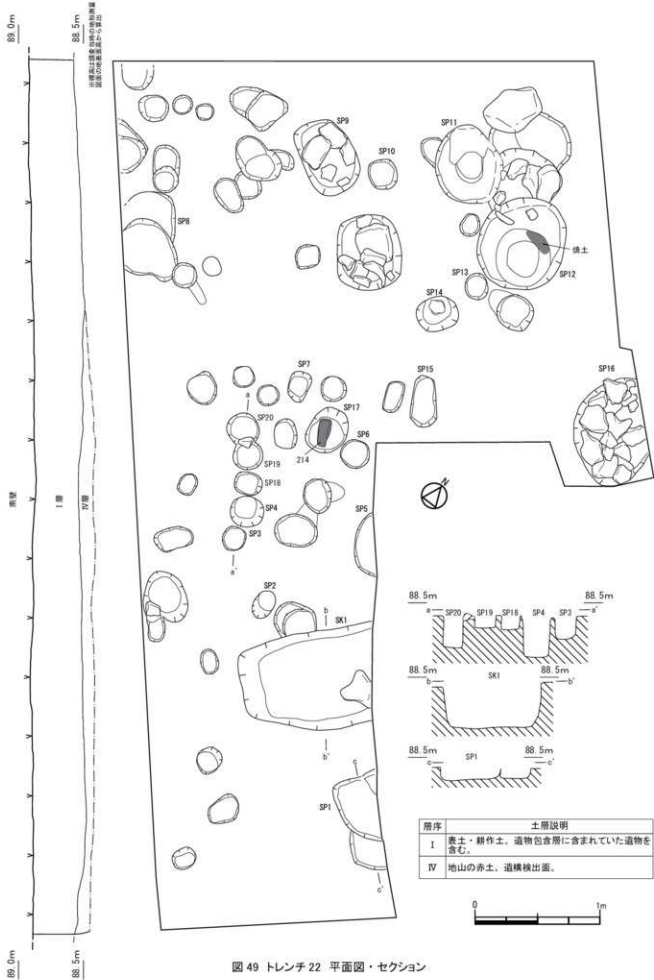


図 49 トレンチ 22 平面図・セクション

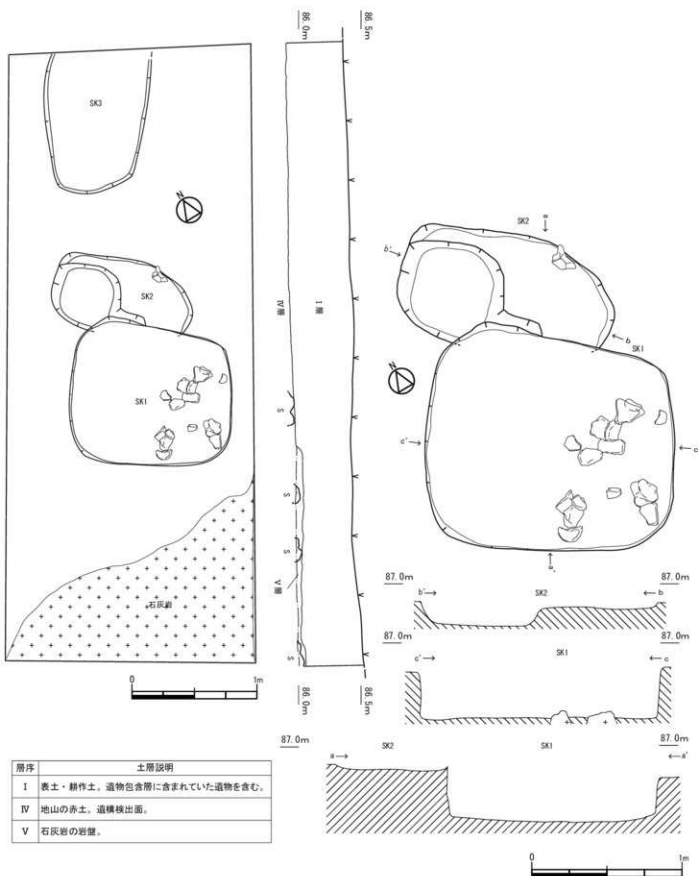


図 50 トレンチ 24 平面図・セクション・SK1・2 平面・断面

(3) 出土遺物 (図 51-194 ~ 196、表 10)

全体で細片を除き 260 点が出土した。I 層から 14 世紀後半 ~ 15 世紀中頃までの陶磁器類や近世の陶磁器が出土した (図 51-194 ~ 196)。また、小片のため図化していないが SK2 から羽口や鉄滓、焼土が出土している。

7 トレンチ 25 (図版 53・54)

城跡の範囲確認を目的に、参道西側に接する伝大水間切の番所跡で調査を実施した。

(1) 層序・遺構

地山直上まで耕作に伴う土の入れ替え (天地返し) による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。

(2) 出土遺物 (図 52-222)

全体で 74 点が出土した。攪乱土 (I 層) から 14 世紀後半 ~ 15 世紀中頃までの陶磁器類を中心に、近現代までの陶磁器類が出土した。

8 トレンチ 26 (図版 55)

城跡の範囲確認を目的に、サザンクロスセンター北側の牧草地の境界にある石垣の調査を実施した。

(1) 層序・遺構

地山の岩盤 (V 層) 直上まで耕作に伴う土の入れ替え (天地返し) による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。現在確認できる石垣はこの岩盤上に構築されていることや、城内の石垣に比べて面の揃え方や根石や裏込めの用い方の違いなど構築方法が異なることから、近世・近代以降に土留めとして構築された石垣と考えられる。なお、石垣を挟んで北側の畑は遺物を含む耕作土が残る。

(2) 出土遺物 (図 52-223 ~ 226)

全体で 38 点が出土した。石垣を挟んで北側の畑のトレンチから、遺物が得られているが、12 世紀後半の玉縁口縁の白磁 (図 52-223) から、近世の薩摩焼の陶磁器類まで時代幅がある。

9 トレンチ 27 (図版 56)

城跡の範囲確認を目的に、サザンクロスセンター北側の牧草地の境界にある石垣の調査を実施した。

(1) 層序・遺構

地山の岩盤 (V 層) 直上まで耕作に伴う土の入れ替え (天地返し) による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。現在確認できる石垣はこの岩盤上に構築されていることや、城内の石垣に比べて面の揃え方や根石や裏込めの用い方の違いなど構築方法が異なることから、近世・近代以降に土留めとして構築された石垣と考えられる。なお、石垣を挟んで北側の畑は遺物を含む耕作土が残る。

(2) 出土遺物 (図 52-227・228)

全体で 33 点が出土した。トレンチ 26 と同様石垣を挟んで北側の畑のトレンチから、遺物が得られているが、城内では殆ど出土しない 15 世紀後半 ~ 16 世紀頃の沖縄分類 VI 類の青磁碗 (図 52-227) が得られている。

10 小結

周辺部の調査では、現在道路や畑地の区画の石積沿いに設定したトレンチ 25 ~ 27 では、城城の北限と考えられる石積の基礎は確認されなかった。

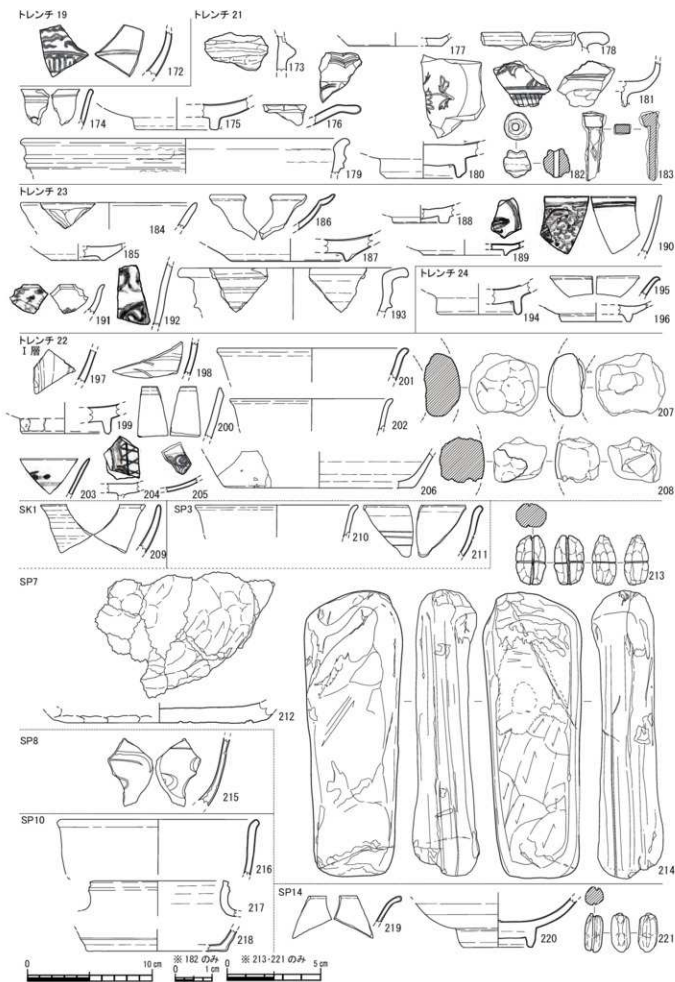


図 51 周辺部トレンチ 19(172)・21(174～183)・22(197～221)・23(184～186)・24(191～196) 出土遺物

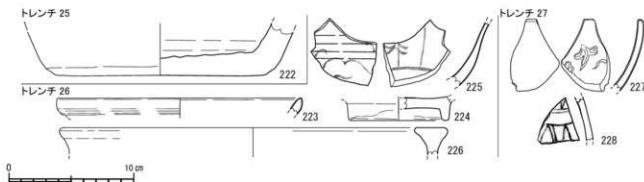


図 52 周辺部トレンチ 25 (222)・26 (223～226)・27 (227・228) 出土遺物

また、地区Ⅲと龍の頭と称される石積の北側の平坦面と石積は、トレンチ 23・24 の成果から近世・近代に造成・構築されたものであると考えられた。

一方でトレンチ 19～22 では、石積の基礎等は確認されなかったが、年代不明の柱穴跡や土坑がトレンチ 19・20 で確認された。また、トレンチ 22 では近世の溝跡と 13 世紀前半頃の柱穴跡が確認された。また、各トレンチからはほかの地区と同様に 14 世紀後半～15 世紀前半の陶磁器類が多く得られている。

これらの調査成果からトレンチ 19～27 は主な城域から外れるものの、出土遺物から城内の利用と同時期に周辺部分も何かしらの利用が行われていたと考えられる。特に、トレンチ 21・22・24 で柱穴跡や土坑状遺構が確認されており、現在「十五夜踊り保存館」が建てられている城跡から見て北東の集落側が利用されていたことが伺えた。また、地区Ⅲとの間のトレンチ 22 は調査成果や聞き取りから、現在より 1m ほど窪んだ地形であったと考えられる。

周辺部の評価は今後の課題であるが、城跡と同時期に利用されていたことから、当時の城跡周辺の利用状況を考える上で重要な地区である。

第 6 節 発掘調査成果の小结

与論城跡の発掘調査の結果、以下の成果が得られた。

1 台地部分

表土 (I 層) や生活層 (II 層)、造成層 (III b 層) から 12 世紀を上限として 14 世紀後半～15 世紀中頃に主な利用があったと考えられる。石垣の根石や裏込め (III a 層) や城跡の造成層 (III b 層) が、地区 2 のトレンチ 2・3、地区 4 のトレンチ 7・9・10 で確認された。裏込めが確認された範囲から地区 3・4 外縁の石垣が台地部分の城跡の外郭と考えられる。トレンチ 2 では、柱穴状の掘り込み遺構 (SP 2) が確認され、埋土から青磁の沖縄分類 IV 類の碗 (図 17-51) が出土、14 世紀前半頃の放射性炭素年代測定値 (第 5 章第 3 節参照) が得られている。同じ地区 2 のトレンチ 3 でも、造成層 (III b-1・III b-2 層) や青磁碗の薄片の他にフィッシャーの埋土 (III b-3 層) からグスク土器やカムイヤキが出土している (図 17-55～58)。このことから、14 世紀前半から中頃には地区 2 の造成と利用が行われていたと考えられる。

また、自然遺物の分析を行ったトレンチ 2・3 では、脊椎動物遺体は魚骨・ウミガメ・イノシシ (ブタ)、貝類遺体はイノーや崖側潮間帯の貝類が出土しており、この傾向は今帰仁城跡などの沖縄のグスクでも認められる (第 5 章第 1・2 節参照)。加えてトレンチ 3 のフィッシャーの埋土 (III b-3 層) から出土した現在与論島では絶滅しているシュリマイマイは、生活層 (II 層) から出土しないことから、15 世紀中頃には少なくとも与論城跡の台地部分周辺では絶滅していた可能性が考えられる (第 5 章第 2 節参照)。城跡の造成に伴う環境の変化が生物に与えた影響を考える上で重要な成果である。

2 崖下部分

表土 (I 層) や生活層 (II 層)、造成層 (III b 層) から 12 世紀を上限として 14 世紀後半～15 世紀中頃の遺物が出土した。近世以降の遺物は 15 世紀中頃の以前に比べて少ない。また、遺物は沖縄本島以

北では類例が少ない今帰仁タイプの白磁が出土した他、特に地区9ではガラス製品(小玉・勾玉)、銅製品(銅鏡片)、鉄製品(鏃)、ベンガラが付着した石製品、水晶製品、羽口など、最も多様な遺物が出土した。表採品では地区6でタイ産土器の蓋、地区8で備前焼の播鉢、地区13で明初の青花、地区4のトレンチ16では青磁酒海壺の蓋が得られている。また、自然遺物の分析を行ったトレンチ12・13では、脊椎動物遺体は魚骨が少ない代わりにウミガメ・イノシシ(ブタ)が多く、貝類遺体はイノーや崖側潮間帯の貝類が得られているが小型の貝類が少ない傾向がある(第5章第1・2節参照)。

石垣の根石や裏込め(Ⅲa層)や城跡の造成層(Ⅲb層)が、地区7のトレンチ12、地区9のトレンチ13、地区10のトレンチ14で確認された。トレンチ12は造成層(Ⅲb層)から14世紀後半～15世紀中頃の陶磁器類が出土していることから、15世紀頃には造成が行われたと考えられる。

トレンチ13は複数回の整地層と整地層を掘り込む柱穴跡や礫集中箇所、不明遺構(SX1)が確認された。トレンチ13のSX1からは青磁の神繩分類V類の碗(図40-156)と皿(図40-157)が出土しており、遺構埋土(④層)の放射性炭素年代測定値は14世紀後半～15世紀前半の年代が得られている。また、SP1、SK1の埋土も凡そ同じ時期の年代値(第5章第3節参照)であることから、SX1と整地層、柱穴跡の切り合い、重畳関係から城の利用に伴う整地層と遺構と考えられる。

トレンチ14の礫集中層からは、14世紀後半～15世紀中頃の青磁皿・盤(図42-164～166)が出土しており、城の構築若しくは利用に伴う層と考えられる。地区7～10で確認された1m以上の赤土の盛土造成層から、断層崖の谷を造成して平坦面を構築した上で、石垣を土留めしつつ、現在の平坦面と外郭線となる石垣を構築したと考えられる。トレンチ16では年代不明の石積み遺構が確認された。

崖下部分の現在の造成と利用は、14世紀後半から15世紀頃に行われていたと考えられる。

3 周辺部分

表土(Ⅰ層)や生活層(Ⅱ層)から12世紀を上限として主に14世紀後半～15世紀中頃を中心にして近世の遺物が出土した。城内とは異なり、城跡の整地などに係る造成層(Ⅲb層)は確認されなかった。

耕作に伴う攪乱によってサザンクロスセンターよりも西側のトレンチでは、城跡と同時期の遺構や石垣は確認されなかった。これに対してサザンクロスセンターよりも東側のトレンチ21では、地山面でSP2でコブ付きのグスク土器とSD1からガラス玉が出土した。遺構の放射性炭素年代測定値はSP1・2とも13世紀頃、SD1が17世紀の年代値(第5章第3節参照)が得られている。また、トレンチ22ではSK1、SP3・14で14世紀～15世紀前半頃の遺物が柱穴跡から出土している。このことから、城跡と同時期に何らかの建物が存在していたと考えられる。

調査成果の小結

発掘調査の結果、与論城跡の外郭となる範囲は、石垣の基礎や裏込め(Ⅲa層)が確認された台地部分の地区3・4・5の外郭となる石垣と、崖下部分の地区12・15を除く地区の石垣が連なる範囲と考えられる(図74)。出土遺物(図53)は、12世紀を上限に13世紀から遺物が出土するようになり、14世紀後半～15世紀中頃に主な利用が行われたと考えられる。15世紀以降は、出土量が激減することから(表10)、城内の利用が殆ど停止したと考えられる。このことから、城跡の利用時期は、利用が始まるⅠ期(12世紀～13世紀後半)、出土量が増加し台地部分を中心に造成が始まるⅡ期(14世紀前半～中頃)、崖下部分で現在の状況に造成が行われ建物が構築され利用の最盛期となるⅢ期(14世紀後半～15世紀中頃)、出土量が減少し利用が低調になるⅣ期(15世紀後半～16世紀)、近世以降に出土量が増加するⅤ期(17世紀～18世紀)、近世末から現代にかけてのⅥ期(19世紀～現在)に区分できる。

調査年度	大府地区	地区	トレンチ	調査時期	土質	種類	器種	部位	重量(g)	産地	分類	数量			備考	調査年度	
												長さ	幅	厚さ			
227	台地部分	2	3	Ⅱ	2	なし	瓦製品		17		瓦類	穿孔部長 幅 1.2 厚さ 0.5	4.5	10.4	オオシラナ瓦製。明確な経線は認められない。		
238	地下部分	2	2	Ⅱ	Ⅱ-1	4	なし	瓦製品	25		不明	穿孔部長 幅 1.2 厚さ 0.5	3.2	2.6	ヤシダツグカウ製。整理部と後部の間に凹行による割線あり。断面に加工による土着品の可能性。		
239	地下部分	7	12	Ⅱ	Ⅱ-2	石	瓦製品	なし	瓦製品	3	不明	穿孔部長 幅 1.2 厚さ 0.5	3.1	2.4	0.7	ナツメムシカウ製。整理部と後部の間に凹行による割線あり。断面に加工による土着品の可能性。	
240	地下部分	2	2	Ⅱ	Ⅱ-2	2	なし	瓦製品	6		不明	穿孔部長 幅 1.2 厚さ 0.5	2.8	0.6	イモガイ製。大径の瓦を板瓦型状に研削によって加工。経線を要しない。		
241	地下部分	9	13	Ⅱ	Ⅱ	2	なし	瓦製品	1	15	不明	穿孔部長 幅 1.2 厚さ 0.5	2.6	2.5	1.8	ヤシダツグカウ製。縦方向に加工。	
242	台地部分	2	2	Ⅱ	Ⅱ-1	2	なし	瓦製品	3		小玉	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	2.6	0.9		イモガイ製。中心に穿孔。中型の瓦の整理部を用いた瓦製品の可能性。	
243	地下部分	7	12	Ⅱ	Ⅱ-1	1	なし	瓦製品	1		小玉	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	1.8	0.5		イモガイ製。整理部に穿孔。中型の瓦の整理部を用いる。縁部は研削。	
244	台地部分	2	2	Ⅱ	Ⅱ-1	4	なし	瓦製品	4		小玉	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	2.0	0.9		マギキガイ製。中心に穿孔。瓦製品。	
245	台地部分	2	2	Ⅱ	Ⅱ-1	4	なし	瓦製品	4		小玉?	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	2.5	1.5		マギキガイ製。整理部に穿孔。下蓋を研削。	
246	地下部分	7	12	Ⅱ	Ⅱ-2	石	瓦製品	なし	瓦製品	1	小玉	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	1.2	0.4		マギキガイ製。整理部に穿孔。瓦製品。	
247	地下部分	7	12	Ⅱ	Ⅱ-2	3	なし	瓦製品	1		小玉	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	1.4	0.4		イモガイ製。整理部に穿孔。中型の瓦の整理部を用いる。	
248	地下部分	7	12	Ⅱ	Ⅱ-2	石	瓦製品	なし	瓦製品	2	小玉	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	1.8	0.9		マギキガイ製。整理部に穿孔。瓦製品。	
249	地下部分	7	12	Ⅱ	Ⅱ-2	石	瓦製品	なし	瓦製品	3	小玉	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	1.2	0.4		マギキガイ製。整理部のみに加工し。縁部を研削。穿孔無し。	
250	地下部分	7	12	Ⅱ	Ⅱ-2	3	なし	瓦製品	1	3	不明	穿孔部長 幅 0.5 厚さ 0.2	2.2	3.0	0.3	アンボウカワザメ製。整理部をイモウ型に加工。瓦製品。	

表 10 主なトレンチからの青磁碗・白磁碗等の出土数（Ⅱ層が確認されたトレンチもしくは遺構が確認されたトレンチが対象）

1 台地部分

層	種類	分類	口・底	胴部	全体数	トレンチ 2		トレンチ 3		トレンチ 7		トレンチ 10		備考																							
						長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅																								
Ⅰ	青磁碗	Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																							
															白磁碗	Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
																											Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0		
																																				Ⅱ	V
Ⅱ	青磁碗	Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																							
															白磁碗	Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0										
																												Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0
合計 16						1		1		1		1		注 1 計からトレンチ 7 以外。中庭で発掘された。本工区発掘 1 区。本工区発掘 1 区。本工区発掘 1 区。																							

2 崖下部分

層	種類	分類	口・底	胴部	全体数	トレンチ 12		トレンチ 13		トレンチ 14		トレンチ 22		備考																							
						長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅																								
Ⅰ	青磁碗	Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																							
															白磁碗	Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
																											Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0			
																																			Ⅱ	V	0
Ⅱ	青磁碗	Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																							
															白磁碗	Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0										
																												Ⅱ	V	0	0	0	0	0	0	0	0
合計 16						1		1		1		1		注 1 計からトレンチ 14 以外。中庭で発掘された。本工区発掘 1 区。本工区発掘 1 区。本工区発掘 1 区。																							

第5章 科学的分析

第1節 脊椎動物遺体

早稲田大学 樋泉 岳二

1 分析資料と分析方法

(1) 分析資料

今回報告するのは令和3年度調査(R3)のトレンチ12(R3-T12)・トレンチ13(R3-T13)および令和4年度調査(R4)のトレンチ2(R4-T2)・トレンチ3(R4-T3)からの出土資料である。R3は崖下部分の平坦面(地区6・7)、R4は中心部分と考えられる台地頂部(地区2)に設けられたトレンチからの出土資料である。

分析資料はすべて現地採集資料である。資料の年代は、Ⅰ層:表土、Ⅱ層:14世紀後半～15世紀中ごろを主体とする遺物包含層、Ⅲ層:築城にかかわる造成層であるが、今回は一括して扱った。

(2) 分析方法

同定対象部位については、魚骨では主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、椎骨の全資料およびそのほか同定可能な資料を同定用資料とした。魚類以外では部位の判定可能なものを同定用資料としたが、鳥獣類の四肢骨のうち骨幹の全周を残さない破片は同定対象外とした。同定は、原則として現生骨格標本との比較によって行った。比較標本には筆者の所蔵標本を用いた。

2 分析結果と考察

(1) 脊椎動物全体の組成(表11)

魚類では18分類群が確認された(詳細については後述する)。爬虫類ではウミガメが確認された。鳥類ではニワトリが確認されたほか、未同定の資料が若干ある。

哺乳類ではネズミ科、イノシシ・ブタ、ウシが確認された。ネズミ科のR4トレンチ3-Ⅰ層出土大腿骨は大型で、ケナガネズミまたはトゲネズミの可能性が高い。イノシシ・ブタは、確実にブタと考えられる資料を「ブタ」、形態的にはイノシシかブタかの判別が困難なものを「イノシシ/ブタ」とした。確実にウマと考えられるものが確認されなかった点の特徴で、このため「ウシ/ウマ」とした資料も大半はウシであると考えてよい。

脊椎動物全体の組成をみると、R4では魚骨が多く、ウミガメ・イノシシ/ブタもやや多いのに対し、R3ではほぼ魚類とウシのみで、なおかつ魚骨が少ない(図54)。今帰仁城跡でも主郭で魚骨とイノシシ/ブタが多い傾向が確認されており(樋泉2007)、本遺跡もこれと同傾向といえる可能性がある。

ただしR4をトレンチ別にみると(図55)、トレンチ2では魚類が圧倒的に多いのに対し、トレンチ3では魚骨が少なくウミガメ・イノシシ/ブタが多いことから、地区2の内部に活動の空間差があった可能性も考えられる。R3のトレンチ12・13はおおむね同傾向だが、トレンチ12は出土量が少ない。

(2) 魚類の組成(表11)

魚類の内容(図56)はR3・R4とも大差はなく、ブダイ科が最も多く、ハタ科がこれに次ぐ。そのほかに、フエフィキダイ科・ニザダイ科およびR3ではハリセンボン科もやや多い。サンゴ礁性の魚類が大半を占めており、沖縄のグスク時代と同傾向といえる。ただし、マグロ類似種およびサバ科(大型種)？とした資料は、詳細な同定に至っていないが大型の回遊魚類と思われ、沖縄ではあまりみかけない種類でもあり、本遺跡の特徴といえるかもしれない。

参照・引用文献

樋泉岳二2007「今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』今帰仁村教育委員会、pp. 253-282.

表 11 与論城から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISF)

種別	トレンチ 12			トレンチ 13			トレンチ 2			トレンチ 3																	
	I	II	合計	I	II	合計	I	II	合計	I	II	合計															
メジロガシ																											
サメ類																											
ボウ科																											
カマス科																											
マハガシ	1	1	1																								
バウハダ型																											
ハダ科	1	1	1																								
フェエダイ科																											
ハダ型	4	1	4																								
アジ科 (大型種)																											
コシロダイ科																											
メイチダイ科																											
フェウキダイ科																											
フェウキダイ科																											
ヨロシマクロダイ																											
タイ型	1	1	1																								
ベウ科																											
イロブダイ科																											
アオブダイ科	1	1	1																								
ブダイ科	2	5	5																								
マクロ 近原種																											
サハ科 (大型種) 2	1	1	1																								
ニギダイ科	1	1	1																								
モンガラカワハダ科																											
ウリセンボシ科																											
真骨類 未同定	2	1	1																								
真骨類																											
真骨類同定不可																											
ウミガメ	1																										
ニワトリ																											
鳥類 未同定																											
鳥類 同定不可																											
ネズミ科																											
イノシシ/ブタ																											
ブタ	1																										
ウシ	1	2	3																								
ウシ/ウマ	3	1	3																								
哺乳類同定不可	1	1	1																								
合計	2	8	3	6	3	22	32	101	9	13	5	4	186	23	80	9	1	14	5	132	52	33	10	1	5	4	105

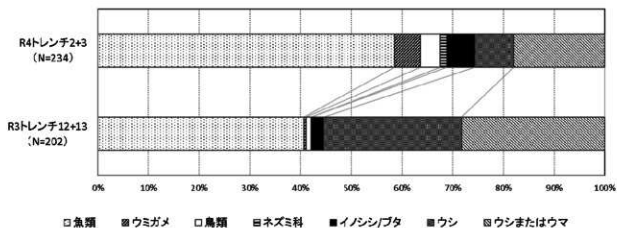


図 54 与論城から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISP 比)。R3(T2・3)・R4(T12・13)をそれぞれ一括

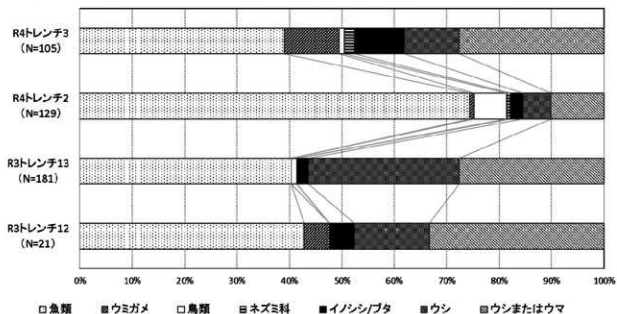


図 55 与論城から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISP 比)。R3(T2・3)・R4(T12・13)トレンチ別

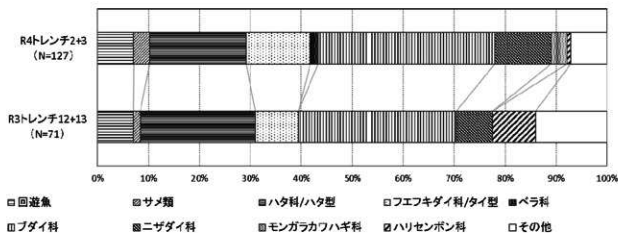


図 56 与論城から検出された魚類遺体の組成 (NISP 比)
回遊魚：カマス科・アジ科 (大型種)・マダコ近似種/サバ科 (大型種)？

第2節 貝類遺体

千葉県立博物館 黒住 耐二

与論城跡は、奄美群島最南端の与論島南部の崖上に立地する14世紀後半から15世紀中頃に利用された2万㎡を超える王城クラスの大規模グスクで、およそ北限のグスクとされ、琉球石灰岩の崖と石垣によって区画された巨大なグスクである。

これまでの発掘により、2か所から貝類遺体が集中して出土しており、今回は与論町教育委員会による発掘調査のピックアップ法（現場採集資料）で得られた貝類遺体を検討した結果を報告する。

貝類遺体は、1：崖上の主郭に隣接した地区2のトレンチ2とトレンチ3の2つのトレンチと、2：崖下の地区7のトレンチ12と地区9のトレンチ13の2つのトレンチから出土している。以下の表記では、トレンチ2などと示してある。また、現時点では、両地点で時期差は認められていないようである。今回は、トレンチごとに集計して、2か所の合計4トレンチの結果として示した。

組成

確認された貝類遺体は、海産腹足類（巻貝）44種、海産二枚貝類17種、陸産腹足類（カタツムリ）7種の合計67種が確認された（表12）。この中には、外来種のアフリカマイマイや小形のコンペイトウガイ（オカヤドカリ宿貝？）なども含まれているが、その割合は極めて小さかった。

優占種の組成を、図57上に示した。サンゴ礁のイノー内（生息場所類型I-2）で見られるマガキガイや干瀬（リーフ：I-3）のチョウセンサザエ・ハナマルユキ・ムラサキウズが多く、4つのトレンチで半数以上を占めていた。地区2の2つのトレンチでは、岸側潮間帯（I-1）のアマオブネとイソハマグリも目立っていた。また、ヤコウガイ（I-4）はいずれのトレンチでも確認されていた。

貝類の生息場所類型（採集環境）組成が図56下である。マガキガイなどのイノー内のものの割合が高く、特に崖下の地区7・9のトレンチ12・13では、優占種組成には違いが見られたが、生息場所ではかなり類似していた。そして、干瀬は、4つのトレンチで20-30%を占めていた。崖上の主郭に隣接した地区2で特徴的なことは、アマオブネ・イソハマグリなどの岸側潮間帯で見られる小形貝類が20%以上で、地区7・9では認められなかった内湾域のホソスジイナミなどが少ないながら2つのトレンチから得られていた。このように、1）崖下の地区7・9では小形種はほとんど含まれていなかった、2）また地区7・9では2つのトレンチはかなり離れた地点に位置していたものの、組成は極めてよく似ていることが示された。

沖縄島のグスク時代では、食用貝類は内湾域の巻貝・カンギクや河口干潟の二枚貝・アラスジケマン、あるいは塔型の小形巻貝・ウミナガ類が極めて多く、マガキガイやチョウセンサザエなどのサンゴ礁外海の種は少ないという傾向がグスク本体においても示されている（例えば今婦仁城跡：黒住1991）。これまで内湾や河口干潟の発達した周辺の悪い周辺島嶼でのグスク時代の貝類遺体の報告はほとんどなく、今回の与論城跡の事例は貴重なものと言える。主郭に隣接した地区2で岸側潮間帯の貝類が多かったことは、沖縄島のグスク時代の例に類似しているように捉えられる。また、主郭の外側に位置する今婦仁城の周辺遺跡では、主郭よりもサンゴ礁の貝が多く、食用貝類に階層差の存在が想定されている（黒住2005）。与論城跡の地区ごとの利用貝類の相違は、今婦仁城跡に類似しており、人工遺物の組成や出土量からの検討が望まれる。

貝製品関連

今回出土した明確な貝製品は本報告書で示されているが、不明瞭な貝製品関連例に関して、コメントしておきたい。まず、ヤコウガイは比較的多く出土していたものの、多くの遺跡と異なり、大形個体の破片やフタは比較的小さく、中小形個体が目立っていた（図57）。食用に中小形個体を選択的に採集し

たととは考えにくい。また僅かではあるが、今帰仁城跡でも完形品が知られているヤコウガイの小形の貝匙(金武ほか1991)と思われる破片が出土している。本遺跡でヤコウガイの中小形個体が多かったことは、小形の貝匙の原材料として、採集サイズを選択していた可能性も想定できる。また、マガキガイの貝玉も数点確認されており、貝玉の可能性もある資料も同数程度は出土している。加工は明瞭ではなかったが、大形イモガイのアンボンクローズメの製品素材と考えられるような破片も存在していた。本遺跡全体からの貝類遺体の出土数は比較的少ないにも関わらず、ヤコウガイの小形貝匙とマガキガイの貝玉という2つのタイプの“加工関連資料”の割合は高いように思われる。

ヤコウガイ・マガキガイともサンゴ礁の発達する奄美・沖縄では比較的普通な種であり、素材入手に島ごとに大きな相違はないであろう。一方で、島の面積が小さな与論島で(≒人口も多くはなかったと想定されよう)、上述の装飾的な貝製品の出土数が多いと捉えた時、これらの製品を島外へ搬出した可能性も想定できるのではないだろうか。与論城跡の築城に関しては、沖縄の三山王の親族などが関与していたという伝承があり、王の勢力範囲内での“特産品の分業体制”というような視点に対して、貝製品がその検証素材とできるのではないかと思っている。

ヨロンジママイマイのグスク時代の出土

ヨロンジママイマイは沖永良部島のエラブマイマイの亜種として、年代を明示せずに、化石個体で記載されたもので(東・東1990)、現在は絶滅してしまっている。島からの絶滅年代は、与論島の陸域の環境変化を示すものとして注目していた。沖永良部島の現生エラブマイマイは島中央部の大山周辺の自然林にのみ生息しているものの、貝塚時代前期には海岸部の住吉貝塚から多数の小形のエラブマイマイが出土している(黒住2006)。今回、ヨロンジママイマイは、地区2(崖上部分)のトレンチ3最下部からやはり現在は与論島から絶滅したシュリマイマイ(黒住1984)と共に少数個体が確認された(写真27)。つまり、ヨロンジママイマイやシュリマイマイは少なくとも14世紀後半から15世紀中頃までは生存していたことが示された訳である。この時代やそれ以降に、農地拡大に起因する森林伐採により、湿った森林環境を好むこれらのカタツムリは絶滅したことになるだろう。

逆に、本遺跡から得られたキカイキセルモドキは、現生個体の生息が確認されている沖永良部島では住吉貝塚から認められず、貝塚後期以降に持ち込まれた可能性を指摘した。この点から、与論島のグスク時代にキカイキセルモドキの生息が確認されたことは、人間活動によるこのカタツムリの動き(≒移入)を考える年代値を示せたことになるだろう。

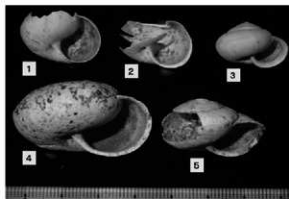


写真27 与論城跡出土陸産貝類(黒住撮影)
1: オキナフウスカフマイマイ、2: ヒメユリヤマトカマイマイ、
3: タトモマイマイ、4: シュリマイマイ、5: ヨロンジママイマイ

参照・引用文献

- 東良雄・東正雄 1990 「与論島の化石陸産貝類相」 *Venus*, 49(3), pp. 198-204.
 金武正記・宮里末廣・松田朝雄 編 1991 『今帰仁城跡Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書(14), pp. 1-108.
 黒住耐二 1984 「与論島の陸産貝類相。特にナガヤマヤマトボの記録」『ちりばたん』15(2/3), pp. 60-64.
 黒住耐二 1991 「貝類遺存体」『今帰仁城跡Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書(14), pp. 340-351.
 黒住耐二 2002 「貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活。」In 木下尚子 編『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』熊本大学文学部, pp. 67-86.
 黒住耐二 2005 「今帰仁城跡周辺遺跡の貝類遺体」『今帰仁城跡周辺遺跡』今帰仁村文化財調査報告書(20), pp. 219-226.
 黒住耐二 2006 「貝類遺体からみた沖永良部島住吉貝塚の特徴」『住吉貝塚』知名町埋蔵文化財調査報告書(10), pp. 132-141.

表 12 与論城跡の発掘調査で得られた出土貝類リスト

番号	和名	学名	生息場所	35	イトマキボラ	<i>Pleuroploca trapezium</i>	I-2-b
			類型 Habitat*	36	ナガイトマキボラ	<i>Pleuroploca filamentosa</i>	I-2-a
腹足綱 Gastropoda / 海産 Marine							
1	ツタノハ	<i>Scutellastra fteruosa</i>	I-3-a	37	リュウキュウソノマタ	<i>Laticrus polygonus</i>	I-3-a
2	リュウキュウウノアシ	<i>Patelloida saecharina</i>	I-1-a	38	マダライモ	<i>Conus ebraeus</i>	I-1-a
3	チョウセンサザエ	<i>Turbo angustostomus</i>	I-3-a	39	キヌカツギモ	<i>Conus flavidus</i>	I-2-a
4	リュウテン	<i>Turbo pthalatus</i>	I-4-b	40	イボシマイモ	<i>Conus lividus</i>	I-2-a
5	ヤコウガイ	<i>Turbo marmoratus</i>	I-4-a	41	ヤセシマイモ	<i>Conus emaciatu</i>	I-2-c
6	ニシキウス	<i>Trochus maculatus</i>	I-2-a	42	ヤナギシポリイモ	<i>Conus miles</i>	I-3-a
7	ムラサキウス	<i>Trochus stellatus</i>	I-3-a	43	タガヤサンミナシ	<i>Conus testile</i>	I-2-c
8	ギンタカハマ	<i>Trochus pyramis</i>	I-4-a	44	アンボンクロザメ	<i>Conus litteratus</i>	I-2-c
9	サラサバテガイ	<i>Trochus niloticus</i>	I-4-a	腹足綱 Gastropoda / 陸産 Terrestrial			
10	シダタミアマオブネ	<i>Nerita helicineoides</i>	I-0-a	45	キカイキセルモドキ	<i>Yakuna reticulata</i>	V-8
11	シダタカアマガイ	<i>Nerita striata</i>	I-1-b	46	アフリカマイマイ	<i>Achatina fulca</i>	V-9
12	キバアマガイ	<i>Nerita plicata</i>	I-0-a	47	シュリマイマイ	<i>Satsuma mercatoria</i>	V-8
13	アマオブネ	<i>Nerita albicilla</i>	I-1-b	48	ヒヨコ(シラジ)ヤマカマイマイ	<i>Satsuma largillierii</i>	V-7
14	ニシキアマオブネ	<i>Nerita polita</i>	I-1-c	49	オキナウスカマイマイ	<i>Acusta despecta</i>	V-9
15	オニツノガイ	<i>Cerithium modulosum</i>	I-2-c	50	タトモマイマイ	<i>Bradybaena phacogramma</i>	V-8-9
16	コンベイトウガイ	<i>Echinium cumingii spinulosus</i>	I-0-a	51	ヨロンジマイマイ	<i>Nesiohelix ronjimaensis</i>	[V-7]
17	マガキガイ	<i>Strombus luhuanus</i>	I-2-c	二枚貝綱 Bivalvia / 海産 Marine			
18	クモガイ	<i>Lambis lambis</i>	I-2-c	52	エガイ	<i>Barbatia trapezina</i>	I-1-a
19	スイジガイ	<i>Harpago chiragra</i>	I-2-c	53	リュウキュウヒバリ	<i>Modiolus auriculatus</i>	I-1-a
20	キロダカラ	<i>Cypraea moneta</i>	I-1-a	54	ミドリアオリ	<i>Pinctada parassaeae</i>	I-1-a
21	ハナバダカラ	<i>Cypraea annulus</i>	I-1-a	55	シロヒメガキ?	<i>Ostrea fluctigera?</i>	II-2-b
22	ハナマルユキ	<i>Cypraea caputserpentis</i>	I-3-a	56	メンガイ類	<i>Spondylus sp.</i>	I-2-a
23	ハチジョウダカラ	<i>Cypraea mauritiana</i>	I-1-a	57	シロザル?	<i>Chama brussa?</i>	I-4-a
24	ヤクシマダカラ	<i>Cypraea arabica</i>	I-2-a	58	カワラガイ	<i>Fragum unedo</i>	II-2-c
25	ホンダカラ	<i>Cypraea tigris</i>	I-2-c	59	オオシラナミ	<i>Tridacna marima</i>	I-2-a
26	ホンシキタ	<i>Cypraea vitellus</i>	I-2-a	60	ヒレジャコ	<i>Tridacna squamosa</i>	I-2-c
27	オキニシ	<i>Bursa bufonis dunkeri</i>	I-3-a	61	リュウキュウシラトリ	<i>Quidnityps palatum</i>	II-1-c
28	シラクモガイ	<i>Thais armigera</i>	I-3-a	62	サメザラ	<i>Scutarcopagia scobinata</i>	I-2-c
29	ツノレイン	<i>Mancinella tuberosa</i>	I-3-a	63	リュウキュウマスオ	<i>Asaphis violacens</i>	II-1-c
30	コイボテツレイン	<i>Mancinella intermedia</i>	I-3-a	64	イノハマスオ	<i>Atactodea striata</i>	I-1-c
31	クチベニレイシダマシ	<i>Drupella concatenata</i>	II-2-a	65	ナミ/コマスオ	<i>Davida plana</i>	I-1-c
32	ムラサキイレイシ	<i>Drupa morum</i>	I-3-a	66	アラヌ/メガイ	<i>Periglypta reticulata</i>	I-2-b
33	アカイイレイシ	<i>Drupa rubusidneus</i>	I-3-a	67	ホソスジイナミ	<i>Gafrarium pectinatum</i>	II-1-c
34	コオニコブシ	<i>Vasum turbinellum</i>	I-2-a	68	ヒメイナミ	<i>Gafrarium dispar</i>	I-1-c

* 生息場所類型 (Habitat)

- I : 外洋-サンゴ域 7 : 林内 a : 岩礁 / 岩壁
 II : 内海-転石域 8 : 潮間帯中・下部 林縁部 b : 転石
 V : 陸域 1 : 潮間帯 (Iではイノ) 9 : 開放地 c : 磯 / 砂 / 泥底
 2 : 干潮
 3 : 干潮
 4 : 磯斜面

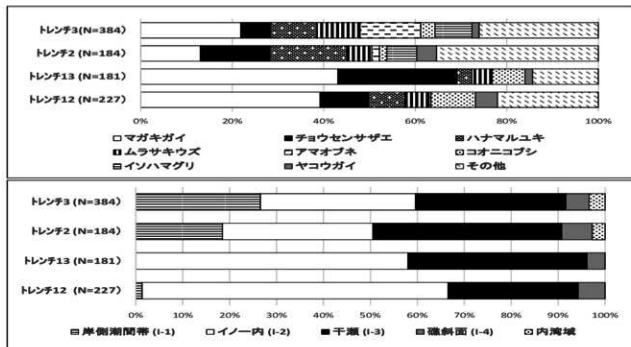


図 57 出土貝類組成

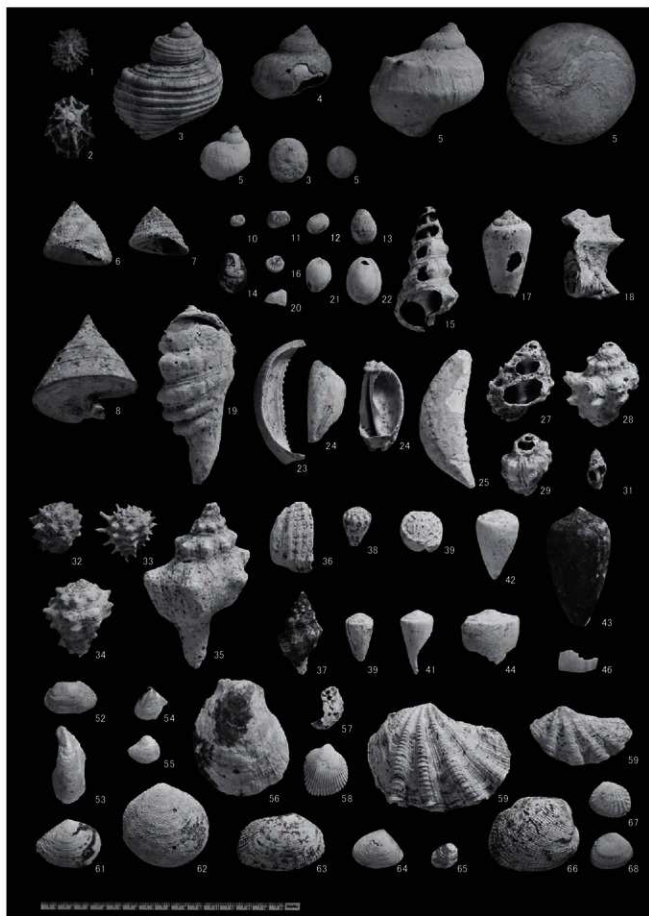


写真 28 主な与論城跡出土の貝類 (図版内の番号は表 11 の番号と一致)

第3節 放射性炭素年代

1 令和2年度の放射性炭素年代測定結果

委託会社 (株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

与論城跡は、鹿児島県大島郡与論町立長 3313 に所在する。測定対象試料は、トレンチ 22 の溝状遺構と柱穴状遺構から出土した炭化物の合計 3 点である (表 13・14)。試料③は土壤に含まれる微細な炭化物を集めて 1 試料とした。いずれも近世と考えられている。

(2) 測定の意義

遺構の埋没年代や調査区における過去の人間活動を把握する。

(3) 化学処理工程

イ メス・ビンセットを使い、付着物を取り除く。

ロ -アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

ハ 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。

ニ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

ホ 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

テ グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (Hox II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

イ $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 13)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

ロ ¹⁴C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

ハ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。pMC が小さい (¹⁴C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (¹⁴C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 13 に示した。

ニ 年較正年代とは、年代が既知の試料の ¹⁴C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ¹⁴C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線

上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(6) 測定結果

測定結果を表13・14に示す。試料の ^{14}C 年代は、①が $260 \pm 20\text{yrBP}$ 、②が $810 \pm 20\text{yrBP}$ 、③が $850 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、①が 1637 ~ 1791cal AD の間に2つの範囲、②が 1223 ~ 1261cal AD の範囲、③が 1176 ~ 1223cal AD の範囲で示される。なお、①の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(表14 下の警告参照)。①は推定と一致するが、②、③は推定よりかなり古い年代値となった。

試料の炭素含有率はいずれも 50%以上の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 13 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAA-201609	①	T5 遺構:SD1 層位:埋土	炭化物	AAA	-25.66 \pm 0.20	260 \pm 20	96.79 \pm 0.27
IAA-201610	②	T5 遺構:SP1 層位:埋土	炭化物	AAA	-28.09 \pm 0.16	810 \pm 20	90.38 \pm 0.26
IAA-201795	③	T5 遺構:SP2 層位:埋土	炭化物	AaA	-28.10 \pm 0.27	850 \pm 20	89.95 \pm 0.22

[IAA 登録番号: #A499, A528]

表 14 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代 13)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-201609	270 \pm 20	96.66 \pm 0.27	261 \pm 22	1637calAD - 1662calAD (65.3%)*	1524calAD - 1560calAD (17.5%)*
				1789calAD - 1791calAD (2.9%)*	1631calAD - 1669calAD (67.9%)* 1781calAD - 1798calAD (10.0%)*
IAAA-201610	860 \pm 20	89.80 \pm 0.25	812 \pm 22	1223calAD - 1261calAD (68.3%)	1184calAD - 1186calAD (0.5%)* 1212calAD - 1273calAD (94.9%)*
IAAA-201795	900 \pm 20	89.38 \pm 0.22	851 \pm 19	1176calAD - 1223calAD (68.3%)	1162calAD - 1230calAD (91.6%)* 1244calAD - 1257calAD (3.9%)*

[参考値]

* Warning! Date may extend out of range

(この警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

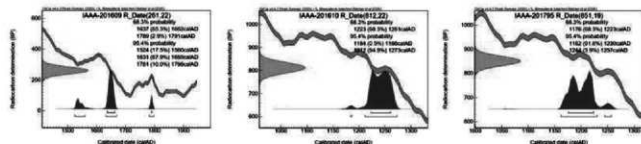


図 58 暦年較正年代グラフ (参考)

2 令和3年度の放射性炭素年代測定結果

委託会社 パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

与論城跡は島南部の鹿児島県与論町立長に所在し、1405～1416年頃に琉球の山北王の三男の王舅により築城されたが、山北王滅亡により未完成となっている。グスクは南西方向に突き出した標高90メートルほどの石灰岩台地上に曲輪有し、西側の断崖とこれを結ぶ石垣により構築されている。北側から南東側の200メートルにわたる石垣は、伏龍を模っている。本報告では、与論城跡より出土した炭化材をもとに放射性炭素年代測定を実施し、グスク機能時の資料を獲得することが目的である。

(2) 試料

与論城跡の令和3年度調査では、トレンチ13の柱穴等の遺構や当時の生活面ともに、14～15世紀の遺物が中心に出土している。本調査では、3点の炭化材を年代測定の供した。

試料番号①は、北壁に確認されたSX1の下層④層から採取され、14～15世紀の中国産青磁皿や動物骨が出土している。

試料番号②は、D区に確認された柱穴SP①埋土から採取され、大型の建物に伴う柱穴の可能性が指摘されている。遺構の切り合い状態や埋没状況から、調査区の中で最初期に構築された建物跡の一部と推定されている。

試料番号③は、A区に確認された遺構SK1の埋土から採取され、2層を覆土（炭が詰まる）とした遺構である。

(3) 分析方法

3点の炭化物はそれぞれで10mg以上が分離できた。これらについて、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹⁴C/¹³C)、¹²C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

δ¹³Cは試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。

また暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk, 2009)、較正曲線はIntCal20(Reimer et al., 2020)である。

(4) 結果と考察

結果を表15に示す。同位体補正を行った値は、試料番号①が605±20BP、試料番号②が485±20BP、試料番号③が550±20BPである。

暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期

5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20 (Reimer et al., 2020) を用いる。2σ の値は、試料番号①が calAD1302 ~ 1400、試料番号②が calAD1414 ~ 1445、試料番号③が calAD1324 ~ 1425 である。

年代測定の結果を暦年代で見ると、試料番号①が 14 世紀代、試料番号②が 15 世紀前半、試料番号③が 14 世紀前半 ~ 15 世紀前半を示し、いずれも 14 ~ 15 世紀代に当たる。与論城跡が 15 世紀前半の構築であることを考慮すると、3 点共に暦年代の範囲は異なるものの概ね当時を象徴する年代と言ってよい。今後も発掘調査時の詳細な層位的検討による炭素年代資料の蓄積により、グスク構築に関する情報が付加される。ものとする。

表 15 放射性炭素年代測定結果

試料	性状	分析方法	測定年代 YBP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年代 校正	暦年代			Code No.	
						年代値	標準	1σ		
① T13 土層 S3 1層	炭化材料	A a A (13)	605 ± 20	-31.38 ± 0.21	606 ± 20	1σ	cal AD 1311 - cal AD 1328	639-622 calBP	0.240	p a 1 - 1402
						2σ	cal AD 1339 - cal AD 1361	611-589 calBP	0.318	
						1σ	cal AD 1367 - cal AD 1395	563-555 calBP	0.125	
						2σ	cal AD 1302 - cal AD 1362	648-583 calBP	0.754	
② T13 土層 S3 1層	炭化材料	AaA (13)	485 ± 20	-30.18 ± 0.21	486 ± 18	1σ	cal AD 1380 - cal AD 1400	570-559 calBP	0.200	16574
						2σ	cal AD 1423 - cal AD 1439	527-511 calBP	0.483	
						1σ	cal AD 1414 - cal AD 1445	538-505 calBP	0.954	
						2σ	cal AD 1396 - cal AD 1421	551-529 calBP	0.683	
③ T13 土層 S3 1層	炭化材料	A a A (13)	550 ± 20	-31.45 ± 0.23	549 ± 20	1σ	cal AD 1324 - cal AD 1335	626-597 calBP	0.233	16575
						2σ	cal AD 1392 - cal AD 1425	558-525 calBP	0.702	
						1σ				
						2σ				

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した添字は、測定誤差σ (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AaA は、酸・アルカリ・酸処理、AaA はアルカリの濃度を下げたことを示す。
- 5) 暦年の計算には、OxCal v4.4 を使用。
- 6) 暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは、IntCal20 を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、σ が 68.2%、2σ が 95.4% である。

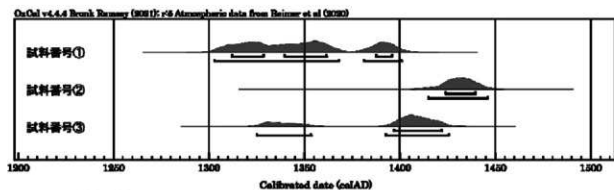


図 59 暦年代校正結果

3 令和 4 年度の放射性炭素年代測定結果

委託会社 パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

与論城出土資料の年代を知る目的で放射性炭素年代測定を行う。

(2) 試料

試料は 5 点あり、全て土壌試料である。そのうち、炭化物がみられる「① トレンチ 2 (R4-T1) SP2 ④層」と「③ トレンチ 2 (R4-T1) SP2 ③層」の 2 点を選択した。

(3) 分析方法

土壌を双眼実体顕微鏡で観察し、炭化材料片を抽出する。炭化材は微細なため、1 試料につき数点を抽出する。炭化材料片は乾燥させて周辺の土壌を削り取り、分析用試料とする。

塩酸 (HCl) により炭酸塩等可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ

可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L であるが、今回は試料が少なく、化学的に脆弱なため、炭素の損耗を防ぐため、アルカリの濃度を薄くする（AaA と記載）。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al., 2020) である。

(4) 結果・考察

結果を表 16、図 60 に示す。いずれの試料も測定必要なグラファイトが得られている。同位体補正を行った値は、① T2 SP2 ④層は $685 \pm 20\text{BP}$ 、③ T2 SP2 ③層は $690 \pm 25\text{BP}$ である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20 (Reimer et al., 2020) を用いる。2 σ の値は、① T2 SP2 ④層は calAD1276 ~ 1386、③ T2 SP2 ③層は calAD1275 ~ 1386 で、ほぼ同じ値を示す。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
 Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1-33.
 Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

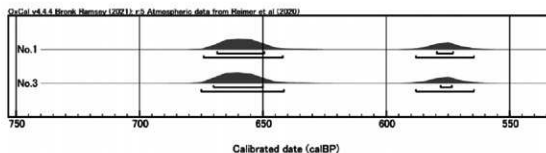


図 60 暦年較正結果

表 16 放射性炭素年代測定結果

試料 番号	性状	方法	補正年代 BP (暦年校正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正年代 年代値				確率%	Code No.	
					σ	cal AD	- cal AD	cal BP		- cal BP	PLD-
①トレンチ2 SP 2 (4層)	炭化材細片 マン属	AAa (0.1M)	685 ± 20 (685 ± 22)	-25.72 ± 0.21	2 σ	cal AD 1282	- cal AD 1301	669 - 650	calBP 55.1	PLD-	pal-
						cal AD 1371	- cal AD 1377	580 - 573	calBP 13.1		
						cal AD 1362	- cal AD 1388	588 - 565	calBP 28.4		
						cal AD 1280	- cal AD 1300	670 - 650	calBP 59.6		
③トレンチ2 SP 2 (3層)	炭化材細片 広葉樹	AAa (0.1M)	690 ± 25 (689 ± 23)	-32.18 ± 0.25	2 σ	cal AD 1372	- cal AD 1377	578 - 574	calBP 8.7	PLD-	pal-
						cal AD 1275	- cal AD 1309	675 - 642	calBP 70.1		
						cal AD 1362	- cal AD 1388	588 - 565	calBP 25.4		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。
 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
 4) AAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AAaはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。
 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用。
 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
 7) 校正データセットはIntCal20を使用。
 8) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、2 σ が95.4%である。

第4節 ガラス製品成分分析

分析協力 鹿児島県立埋蔵文化財センター分析室

与論城跡で出土した測定試料は、小玉12点、勾玉1点、計13点である。本分析では、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による成分分析を行った。

1 試料 与論城跡出土の小玉12点、勾玉1点、計13点

2 分析方法

成分分析 エネルギー分散型蛍光X線分析装置(場場製作所製XGT-1000、X線管球ターゲット:ロジウム、X線照射径100 μm)を使用し、次の条件により非破壊で分析を行った。

X線管電圧:15/50kV 電流:自動設定

測定時間:200秒 X線フィルタ:なし

試料セル:なし パルス処理時間:P3

定量補正法:スタンダードレス

3 結果 分析の結果は表17のとおりである。

4 考察

今回分析したガラス製品からは、複数の元素が検出されたが、どの資料からも共通して鉛を検出したことから、鉛ガラスの可能性が高い。ただし資料番号1・5・10はカルシウムの含有量が比較的多いことから、ソーダ石灰ガラスの可能性もある。

各遺物の鉛の質量濃度を比較すると、鉛の質量濃度が高いものと中程度のもの、低いものに大別できる。

鉛の質量濃度が50%を超えるものは、資料番号1・2、8、9である。特に資料番号9は鉛の質量濃度が80%を超え、ケイ素は7%程度しかない。これは鉛添加時の攪拌が不十分で、均一に混ざらず、鉛の質量濃度が高いガラスの部分測定したと考えられる。30~50%のものは、資料番号4・5・7・10~13である。現在の鉛ガラス(クリスタルガラス)は概ね25~35%の酸化鉛を添加していることから、当時の鉛ガラスも、この程度の鉛の質量濃度で制作されていたものと思われる。鉛の質量濃度が低いものは資料番号3で、ほかと比べても半分程度しかない。また、鉄の質量濃度が明らかに高い。考えられる原因としては、

- (1) 資料番号9と同様、鉛添加時の攪拌不足で鉛が均一に混ざらず、鉛の質量濃度が低い部分のガラスを測定した。
- (2) 添加した鉛の精錬が不十分で、鉄を多く含む鉛を添加した。または意図して鉄の多い鉛を使用したなどが考えられる。

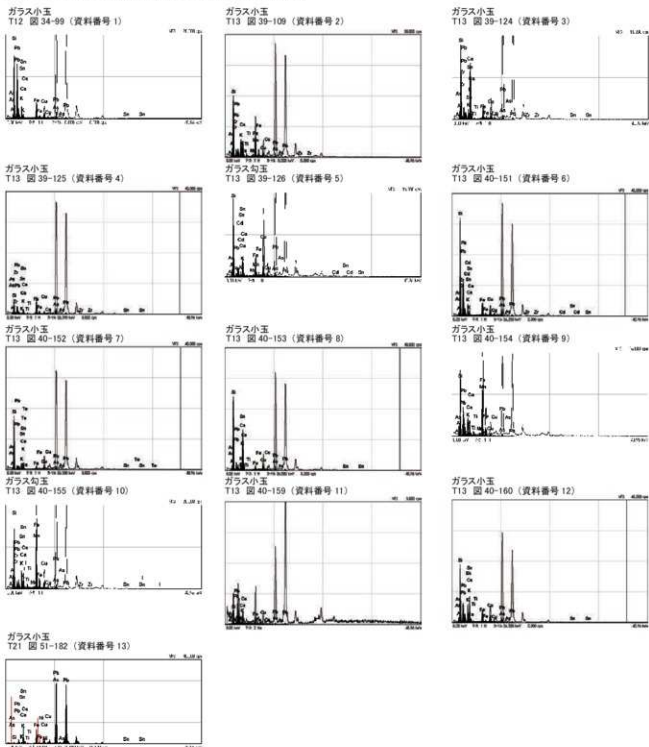
そのほかの元素の重量密度では、アルミニウムや鉄、銅が比較的多く含まれている。アルミニウムの含有量が10%超の試料があるが、これは意図的にドーブしたものは不明である。そのほかの元素については含有量が低く、不純物として混入したものと考えられる。

それぞれの試料蛍光X線分析スペクトルチャート(成分分析)(図61)を掲載する。

表 17 与論城跡出土のガラス製品の各元素の質量濃度結果

資料番号	図版	Al (アルミニウム)	Si (ケイ素)	K (カリウム)	Ca (カルシウム)	Ti (チタン)	Mn (マンガン)	Fe (鉄)	Ni (ニッケル)	Cu (銅)	As (砒素)	Zr (ジルコニウム)	Cd (カドミウム)	Sn (錫)	Te (テルル)	I (ヨウ素)	Pb (鉛)
1	34-99	2.91%	31.85%	4.99%	1.05%	—	—	2.32%	—	1.15%	—	—	—	0.56%	—	—	55.17%
2	39-109	8.71%	35.95%	7.06%	5.17%	0.72%	0.25%	4.32%	—	1.30%	0.03%	0.06%	—	—	—	—	36.44%
3	39-124	7.28%	33.37%	3.33%	17.49%	0.14%	—	1.31%	—	1.34%	—	0.08%	—	0.28%	—	—	35.39%
4	39-125	2.46%	7.73%	0.49%	1.91%	0.22%	—	3.55%	—	0.28%	0.06%	0.18%	—	0.83%	—	—	82.30%
5	39-126	7.43%	41.57%	1.13%	5.52%	—	0.17%	1.84%	—	5.08%	—	—	0.11%	0.98%	—	—	36.15%
6	40-151	0.75%	37.33%	4.04%	1.50%	—	—	1.87%	—	1.05%	0.04%	0.10%	0.18%	0.45%	—	—	52.68%
7	40-152	2.00%	39.88%	4.01%	3.02%	—	—	0.47%	—	1.38%	0.04%	—	—	0.51%	0.28%	—	48.43%
8	40-153	3.17%	36.07%	2.84%	14.99%	0.13%	—	0.53%	—	1.55%	0.03%	—	—	0.29%	—	—	40.41%
9	40-154	9.95%	44.44%	7.05%	4.41%	1.07%	0.68%	13.91%	—	0.84%	—	—	—	—	—	—	17.65%
10	40-155	11.66%	31.70%	5.79%	3.65%	0.84%	0.18%	9.00%	—	1.51%	—	0.08%	—	1.30%	—	0.01%	34.29%
11	40-159	—	31.34%	2.64%	7.97%	—	—	7.28%	—	1.50%	0.02%	—	—	—	—	—	49.25%
12	40-160	4.09%	29.94%	7.12%	9.18%	0.40%	—	1.76%	—	1.80%	0.03%	—	—	0.25%	—	—	45.43%
13	51-182	—	3.25%	2.83%	19.25%	0.71%	—	4.69%	0.01%	1.85%	—	—	—	0.44%	—	—	66.98%

図 61 与論城跡出土のガラス製品の分析スペクトルチャート



第5節 赤色顔料分析

分析協力 鹿児島県立埋蔵文化財センター分析室

与論城跡で出土した測定試料は、赤色顔料1点（図39-122）である。本分析では、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による成分分析を行った。

1 試料

与論城跡出土の赤色顔料1点（図39-121）

2 分析方法

成分分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000、X線管球ターゲット：ロジウム、X線照射径 100 μm）を使用し、次の条件により非破壊で分析を行った。

X線管電圧：15/50kV 電流：自動設定

測定時間：200秒 X線フィルタ：なし

試料セル：なし パルス処理時間：P3

定量補正法：スタンダードレス

3 結果

分析の結果は表18のとおりである。

試料番号	試料名	所見
1	図39-122 (R3⑧)	ベンガラであると思われる。

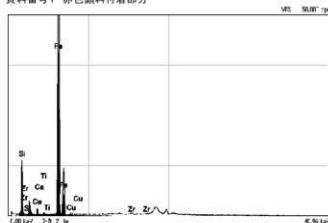
4 考察

今回の分析は、同一試料の赤色顔料が付着した部分と付着していない部分の2か所、で分析を行った。赤色顔料部分の鉄の質量濃度が43%程度、赤色顔料未付着部分の鉄の質量濃度が3%程度の結果になった。この結果より赤色顔料はベンガラであると考えられる。それぞれの試料蛍光X線分析スペクトルチャート（成分分析）（図62）を掲載する。

表18 与論城跡出土の赤色顔料の質量濃度結果

資料番号	資料名	Al (アルミニウム)	Si (ケイ素)	K (カリウム)	S (硫黄)	Ca (カルシウム)	Ti (チタン)	Cr (クロム)	Fe (鉄)	Cu (銅)	Sr (ストロンチウム)	Zr (ジルコニウム)
1	図39-122(R3⑧) 赤色顔料部分		53.58%		0.07%	2.26%	0.42%		43.06%	0.42%		0.19%
2	図39-122(R3⑧) 赤色顔料未付着部分	11.57%	55.13%	0.27%		1.25%	27.86%	0.35%	3.09%	0.03%	0.07%	0.40%

資料番号1 赤色顔料付着部分



資料番号2 赤色顔料未着部分

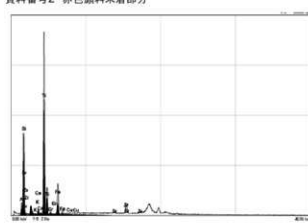


図62 与論城跡出土の赤色顔料の分析スペクトルチャート

第6章 各論

第1節 奄美・沖縄の城郭遺跡との比較

國學院大學研究開発推進機構 教授 池田 榮史

第1項 琉球・沖縄史における「グスク時代」と「グスク」について

琉球・沖縄史の時代区分では一般的に11世紀から14世紀後半までを「グスク時代」と呼んでいる（高良倉吉1980、沖縄県立博物館1985、沖縄県教育委員会2010ほか）。グスク時代の名称の因となった「グスク」は沖縄諸島に見られる城郭遺跡に対する地域的名称である。したがって、「グスク時代」も本来は沖縄諸島の歴史を対象とした時代区分概念であった。しかし、14世紀代の沖縄島に成立した琉球国がその後16世紀までの間に琉球列島全域を支配下に収めたことから、「グスク時代」という時代区分概念は次第に琉球列島全域の歴史区分として用いられ始めた。結果として、近年では「グスク」と「グスク時代」の用語が沖縄諸島だけでなく、奄美諸島や宮古諸島、八重山諸島を含めた琉球列島全域の同時代遺構の名称や時代区分として用いられることも多い。

この状況はこれまでの琉球・沖縄史研究が琉球国に関する史・資料を最も多く残す沖縄島の動向を中心として進められてきたことによって引き起こされた。また、史・資料だけでなく、大学をはじめとする研究機関とそこに勤務する研究者の多くも沖縄島に集中したため、琉球・沖縄に関するさまざまな研究は基本的に沖縄島で蓄積され、発信され続けてきたことの影響も大きい。いつの間にか、琉球・沖縄に関する研究の多くは常に沖縄島の研究動向、言い換えれば沖縄島を対象とした研究蓄積を中心とすることになり、前述した「グスク」や「グスク時代」の概念が琉球列島全域の類似遺構や時代区分名称として用いられるようになったのである。

しかしながら、日本の九州島と中華民国台湾島の間、約1,200kmの海洋中に点在する琉球列島200余の島々では自然環境やそこで育まれた歴史、文化に島ごとの個性が見られる。例をあげれば、琉球列島の北端に位置する大隅諸島は九州島と指呼の間に位置することから、基本的には九州の歴史文化圏に含まれる。これに対して、トカラ列島を挟んでその南に点在する奄美諸島から沖縄諸島、さらにその西に連なる宮古諸島や八重山諸島は自然環境の上では大隅諸島以北とは異なる亜熱帯気候に属しており、そこで育まれた歴史や文化もそれぞれの島ごとに異なる。

また、奄美諸島から八重山諸島までの島々の中で、奄美諸島から沖縄諸島までは隣り合う島を視認できる関係にあり、共通する事象も多い。しかし、沖縄諸島と宮古諸島の間には約300kmの海が横たわっており、船舶と航海技術が発達するまではこの間の安定的な往来は認められなかった。このため、奄美・沖縄諸島と宮古・八重山諸島の間では全く異なる先史文化が生じた。なお、宮古諸島と八重山諸島の間は多良間島を経由して相互の間を視認できるものの恒常的な往来は難しかったらしく、両諸島の先史文化の内容は微妙に異なる。しかし、11世紀に入ると、九州島から大隅諸島を経由してトカラ列島、奄美諸島から沖縄諸島、さらには宮古諸島、八重山諸島への海路を通じた安定的な往来が可能となった。その結果、琉球列島全域を対象とした人やモノ、さらには情報が行き来し、次第に共通する文化圏となる環境が形成され、16世紀に至って沖縄島に成立した琉球国が琉球列島の島々の多くを版図下に組み込むこととなったのである。

第2項 11～14世紀の琉球列島

とはいえ、11世紀代に始まる島々間の安定的な往来は琉球列島内部の自発的発展によって生じた訳ではない。近年の研究成果によれば、中国宋王朝と日本との間の東シナ海を介した交易・交流の展開

に伴って、その通交ルート上に位置する琉球列島の地理的条件とそこで産出する硫黄をはじめとする産物への関心が高まり、日本の九州地域、さらには中国大陸中南部地域から琉球列島への人やモノの移動が継起的に行われたことによって生じたと考えられる。すなわち11世紀代に始まる外部からの働きかけを受け入れる中で各島々の社会的文化的変容が引き起こされ、その動きの結果として14世紀に至って沖縄島に王都を置いた琉球国の形成が誘発された可能性が高い。(池田榮史2012・2019など)

このことからすれば、11世紀代に始まる琉球列島の各島々の社会的文化的変容とその後の14世紀における琉球国の形成過程を明らかにするためには、この時期における日本の九州地域や中国大陸中南部地域からの人やモノの移動とその影響の実態を確認することが重要となる。しかしながら、琉球国が登場する14世紀後半以降には文字記録が増加するものの、11～14世紀代の琉球列島について記された史・資料は極めて少ない。そこで、11～14世紀代史・資料の不足を補うものとして、各島々に残された考古学的調査研究情報は極めて有効である。そしてこの考古資料を対象とした検討によって明らかになりつつあることは、琉球列島における当該時期の社会的文化的変容は奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島ごとに異なる様相を見せることである。

これを最も良く示す資料が土器である。11世紀代に入ると奄美諸島ではそれまで用いられていた在土器型式の兼久式土器が次第に姿を消し、九州系土師器である小型丸底甕や長崎県西彼半島産の滑石製石鍋を模倣した土器が用いられるようになる。また、沖縄諸島では奄美諸島と同様に九州系土師器の小型丸底甕や滑石製石鍋の模倣土器が出現して「グスク系土器」と呼ぶ土器様式が成立する。また、この「グスク系土器様式」には11～13世紀の奄美諸島徳之島で生産された陶器であるカムイヤキ窯製品の壺や中国産磁器碗、陶器盤などを模倣した器種が加わることが知られている。その一方で、沖縄諸島の遺跡の中にはそれ以前に用いられていた在土器である「くびれ平底系土器様式」に連なる土器群を用いる遺跡も存在する。両土器様式は一時期併存し、その後「くびれ平底系土器様式」が消滅して、「グスク系土器様式」のみが用いられるようになる。(池田2004)

これに対して、宮古諸島や八重山諸島では先史時代以降11世紀に至るまで、土器を製作する技術が途絶えていた。しかし、11世紀に入ると奄美諸島や沖縄諸島と同様に滑石製石鍋模倣土器をはじめとする土器の製作が再開される。ただし、宮古諸島と八重山諸島では土器の器種や器形が少しずつ異なっており、それぞれに宮古式土器や八重山式土器と呼ばれる土器が登場する(新里貴之2004ほか)。

このような在土器の様相、すなわち土器の器種や器形のあり方には九州をはじめとする外部からの強い影響が窺えるものの、その影響を受け入れた各島々ではそれぞれ独自の受容と変化の過程があったことを示す。すなわち11世紀代の琉球列島では外部からの情報を得て社会的文化的変容が生じるものの、土器の動態を見る限り列島全体が歩調を揃えて進行するのではなく、情報を受容する側である島ごとに在り方が異なっていたのである。この11世紀以降の琉球列島に見られる土器様相は同時期の琉球列島社会の政治的変容のあり方を探る上でも参考となる。すなわち沖縄島に成立した琉球国が奄美諸島から宮古諸島、八重山諸島の島々を版図に収める前の琉球列島では、外部からの影響を受けつつもそれぞれの島ごとに異なる歴史的文化的展開を見せていたと考えられるのである。

第3項 沖縄諸島の「グスク」と「グスク時代」

琉球・沖縄史研究では11世紀代から14世紀後半に琉球国が歴史記録に登場するまでの間を「グスク時代」とすることは前述した。時代区分としての「グスク時代」を提唱したのは高宮廣衛であり、提唱当初は「城時代」と表記していた(高宮1966)。しかし、時を経るにしたがって、カタカナ表記の「グスク時代」が用いられるようになった。高宮による「城時代」は多くの研究者に受け入れられ、その後

の琉球・沖縄史時期区分用語として定着した。現在では「グスク時代」について、沖縄諸島において中国産陶磁器や滑石製石鍋、徳之島産カムイヤキ窯製品が持ち込まれるとともに穀物栽培が定着し、グスクが出現するに至る社会的変化が起こった段階と捉えている。なお、現在のところ「グスク時代」の開始時期については11世紀代に比定するが、時代名称の因となった「グスク」の初現は13世紀末～14世紀初頭頃とすることが研究者の共通認識である。

なお、グスクの性格については1960年代に「グスク論争」が起こり、グスクの本質は「集落」、「聖域（墳墓）」、「城郭」などとする諸説が発表された。これは琉球列島に分布するグスクと呼ばれる遺跡の規模や構造、さらにはグスクが村落祭祀の場としての利用される状況などに関する当時の情報を踏まえていた。しかし、諸説の提唱者が考古学、地理学（民俗学）、歴史学などそれぞれに異なる専門分野の研究者であったことから、議論が噛み合わないままに終始し、最終的にはこれらの諸説を取り込んで時間的推移過程の中で説明する「グスクモデル」が提起された。（富眞嗣一1987）

このこともあり、グスクの実態解明を目指した沖縄県教育委員会では1977（昭和52）年度から1993（平成5）年度にかけて沖縄県内のグスクに対する分布調査を開始し、グスクの所在とその立地や構造、出土遺物、伝承などについて確認する事業を実施した。その成果は『ぐすく-グスク分布調査報告』（全3冊）にまとめられており、沖縄諸島及び周辺離島223件、宮古諸島16件、八重山諸島143件が採録されている（沖縄県教育委員会1983・1990・1994）。

なお、この際、沖縄諸島および周辺離島の223件の中には「文献および地元の人びとの間でグスクと呼ばれているものは全て含める」とともに、「現在地元ではグスクと呼ばれていないが、高い所に位置してグスク時代遺物が出土するグスク様の遺跡」も含めた。「グスク様の遺跡」は「グスクが立地する小高い丘や丘陵の中腹から麓およびグスクの周辺に形成されており、（中略）グスクと対置される集落遺跡とも考えられる」（前出、沖縄県教育委員会1983のP.3）と定義している。

沖縄県教育委員会によるグスク分布調査事業、中でも最初に刊行した「沖縄諸島及び周辺諸島」の調査報告書ではグスクの立地条件を下に、1）石灰岩台地先端部、2）独立丘、3）崖に面する台地の一部に半円形常に石垣をめぐらしたもの、4）尾根続きの一峰を利用したもの、5）一側が断崖に面し他方は緩傾斜を示して尾行地になっているもの、6）海に突出する断崖の上に築かれたもの、7）満潮時になると陸と分断される孤島に築かれたもの、に区分する。その上で、「大は中城城跡のごとき10万㎡以上もあるグスクから小は僅か10数㎡のグスクまであり、千差万別」であるものの、「どんなに小さなグスクでも1～2軒の建物が立つほどの平場が人為的に築成されて」ことを指摘する。

そして、「日本本土の中世城館跡と異なり土塁、濠、堀などの構築技術が見られず、もっぱら天険の要害の地を利用して、必要とあらば石垣を積み周らす」ことが通常であるとする。また、その性格については鳥羽正雄の論考を引用して「用途上の種別によって国守の城、按司の城、国守もしくは按司の支城、海防の城、貯蔵所の城」の五種類に分け、これらの城は「本土の城に比すれば、武家時代における地方豪族の居城及びその支城に相当するものが大部分を占め、他にわずかに海防の砲台が存する」という鳥羽の評価に賛意を示している（前出、沖縄県教育委員会1983のP.6・7）。

これを見ると、グスク分布調査報告書には沖縄県教育委員会が沖縄県内においてグスクを把握する際の条件、すなわちグスクを基本的には城郭と捉え、①立地、②規模、③構造、④機能、⑤出土遺物の組成、などに注意を払っていたことが知れる。

一方、考古学分野の資料を用いながら、琉球・沖縄史研究の枠組みについて提案を続ける安里進は近藤義郎の提示した考古学研究における時代区分論に準拠して、グスク時代を「生産経済の時代」と「政治的時代」に2分し、後に前者を「原グスク時代」、後者を「グスク時代」とすることを提案した。前者

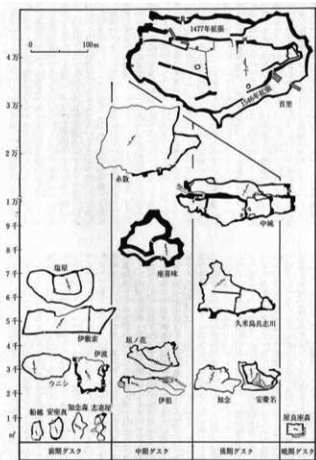


図 63 石積みグスクの規模の変遷 (安里 1987)

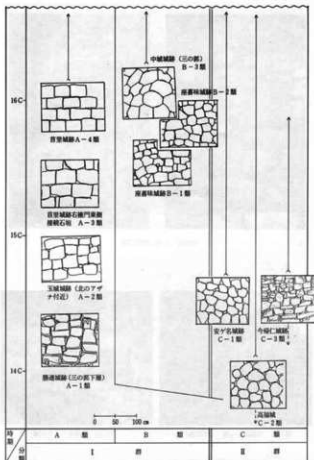


図 64 グスクの石積み編年 (當眞 1990)

はグスクが登場する以前の 11～13 世紀段階、後者は 13 世紀後半～14 世紀前半のグスク登場以降、島津氏による琉球侵攻が行われる 17 世紀初頭までとする。安里の論考はグスクの出現年代を 13・14 世紀とする先駆的なものであり、グスクの規模の大型化と多郭化および石積み技法の変化を下に前期グスク（野面積み）、中期グスク（野面積み・切石積み併用）、後期グスク（切石積み）、晩期グスク（後期グスクの後半期）として、それぞれの出現時期は前期グスク 13・14 世紀（三山鼎立期以前）、中期グスク 14 世紀後半（三山鼎立期）、後期グスク 15 世紀中葉（第一尚氏琉球王国期）、晩期グスク 16 世紀中葉（第二尚氏琉球王国期）に置いた（図 62、安里 1987・1994）。

一方、沖縄県教育委員会によるグスク分布調査に主導的な立場で参画していた當眞嗣一もグスクに関するいくつかの論考を発表している。その中の一つではグスクの城壁石積み手法に着目し、切石積みを I 群 (A 類布積み 4 類、B 類相方積み 3 類)、野面積みを II 群 (C 類 3 類) とし、基本的には II 群野面積み (C 類) が 13 世紀後半、I 群切石積み (布積み A 類) は 13 世紀後半から 14 世紀前半にかけて、(相方積み B 類) は 15 世紀前半の順に出現することを論証した (図 63、當眞 1988・1990)。また、沖縄諸島に見られるグスクの中には石積みを持たないものがあることにも注意を向け、これを「土より成るグスク」と呼んで、日本本土の中世城郭で行われている縄張り図研究手法を採用した検討を継続的に進めている (當眞 1993・1994・1997 など)。

さらに山本正昭はグスクの石積み囲いについて、第 1 類型 (一定空間を限定する石積み)、第 2 類型 A・B (一定空間を圍繞する単体の石積み)、第 3 類型 A・B・C (平場造成された石積み囲いを複数組み合わせたもの)、第 4 類型 A・B (主郭の石積み囲いを中心として複数の石積み囲いが配置されるもの) に分け、より単純な第 1 類型の 13 世紀後半から、第 2 類型 14 世紀前半、第 3 類型 14 世紀中頃、最も複雑な第 4 類型の 14 世紀後半へと発達しながら出現した可能性があることを指摘した (図 64、山本 1999・

	第1類型	第2類型	第3類型	第4類型
13c中				
14c				
14c中				
15c				
16c				

図5 グスクの石積み囲いの編年 (山本 2000a)

2000a)。

なお、筆者は沖縄諸島におけるグスクの特徴的な施設として、主郭における基壇建物の出現が13世紀末～14世紀前半であることを論証し、その歴史の評価の重要性を喚起した。すなわち基壇建物の出現は日本の中世居館における会所のような政治的儀礼を行う空間がグスク内に登場したことを示すと考え、これを琉球列島内での政治的組織形成過程の発現と評価したのである。言い換えれば、基壇建物の出現は後に琉球国の王城となる首里グスクの正殿と前庭に見られるようなグスクにおける儀礼空間登場の証左であると捉えたのである(図65、池田 2015)。なお、グスク内の基壇建物の重要性については山本正昭が詳細な検討を加えている(山本 2000b)。

沖縄県教育委員会及び安里進、當眞嗣一、山本正昭、筆者らの研究によって、沖縄諸島のグスクは凡そ13世紀後半から14世紀前半にかけて築造が開始されること、グスクは石積みを持つことが一般的であり、その石積み技法は時間の経過とともに発達するだけでなく、規模の大型化と多郭化が図られること、さらに大型グスクには主郭部分に儀礼空間としての基壇建物が出現することなどが明らかとなった。沖縄諸島に分布するグスクは時間的推移過程を経る中で、さまざまな構造的特徴を備えながら大型化し、ついには政治的儀礼の場を持つグスクを創出するに至ったのであり、研究者を含めた多くの人々はこれらを総称してグスクと認識しているのである。ただし、當眞が指摘するように石積みを持たない「土より成るグスク」が沖縄諸島に存在することも重要であり、このことは後述する奄美諸島と沖縄諸島の歴史的關係性の検討に繋がることは言うまでもない。

第4項 宮古・八重山諸島のグスク(類似施設)

宮古・八重山諸島のグスク(類似施設)については沖縄県教育委員会による分布調査が行われ、報告書が刊行されていることは先述した。また、同報告書には宮古諸島16件、八重山諸島143件の事例が採録されていることも先述したとおりである。

この中で、宮古諸島についてはグスクと呼称される例は1件しかなく、「○○頂(つづ)」や後世に付されたと思われる「○○城(じょう)」や「○○御嶽(うたき)」の名称をもつ遺跡、あるいは出土遺物の内容に基づいて「○○元島(ムトツマ)」と呼ぶ遺跡が取り上げられていた。これらの遺跡は「いわゆる石灰岩丘陵上の高所に位置し野面積みの石積みをもった施設を有し」、「中には城館的な性格をもったものや拝所機能が残った施設などが確認」され、「いずれも内部にフラットな面」を持っているとされていた(前出、沖縄県教育委員会 1990 P. 3)。

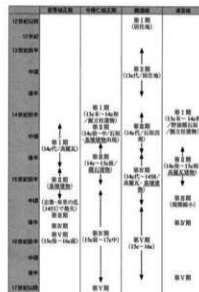


図66 グスクの構造化 (池田 2015)

近年、これらの遺跡を含めた宮古諸島のグスク時代遺跡の検討を行った久貝弥嗣は宮古のグスク時代について第1～3期に区分し、出土遺物の組み合わせを下に、第1期を11・12世紀から13世紀中頃、第2期前半を13世紀後半から14世紀前半、第2期後半を14世紀中頃～15世紀前半、第3期を15世紀中頃から16世紀とした。第1期には主な遺物として滑石製石鍋、カムイヤキ、白磁玉縁碗、第2期前半には白磁今帰仁タイプ碗、ピロースクⅡ類碗、第2期後半には白磁ピロースクⅢ類碗、青磁弦文帯碗・無文碗、中国産褐釉陶器、(在地産)外耳土器、第3期には青磁雷文帯碗・細連弁文碗・無文直口碗、景德鎮産青花磁器、中国産褐釉陶器が伴うとする。また、当該時期の遺跡について具体的な調査遺跡をモデルとして、「住屋タイプ」遺跡群、「高腰タイプ」遺跡群、「元島タイプ」遺跡群に分け、沖縄諸島のグスクに類似する野面積みの石積み遺構をもつ「高腰タイプ」遺跡群を第2期に位置付けた(久貝2014)。

久貝は「高腰タイプ」遺跡群の出現は第1期に遡る可能性を指摘しつつも、その主な時期は第2期であり、15世紀前半には「高腰タイプ」遺跡群に含まれる多くの遺跡が終末を迎えるとする。また、第2期前半に位置づけられる宮古諸島の遺跡から主に出土する白磁今帰仁タイプ碗、ピロースクⅡ類碗は、沖縄諸島における貿易陶磁器編年を行った瀬戸らの分類編年の第Ⅲ期並行とした。しかし、瀬戸らが同期の貿易陶磁器とする中国龍泉窯系青磁碗Ⅱ(鎗蓮弁文碗)・Ⅲ(三角高台上質蓮弁文碗)類、白磁A群(口禿碗)、C1群(ピロースクⅠ類碗)、C2群(ピロースクⅡ類碗)、F群(今帰仁タイプ碗)の中で、宮古諸島には中国龍泉窯系青磁碗Ⅱ(鎗蓮弁文碗)・Ⅲ(三角高台上質蓮弁文碗)類、白磁A群(口禿碗)、C1群(ピロースクⅠ類碗)がほとんどなく、C2群(ピロースクⅡ類碗)、F群(今帰仁タイプ碗)が主体であることを指摘する。この現象について、久貝は宮城弘樹・新里貴之の論考(宮城・新里2009)を踏まえ、当該時期の琉球列島への「新たな交易ルートが構築される」影響であり、「中国南部からの大きな交流の流れが関係していると想定」(前出、久貝2014のP.22)している。

この時期(13世紀後半から14世紀前半)の沖縄諸島と宮古諸島に見られる貿易陶磁器はいずれも琉球列島外から持ち込まれた製品であるにもかかわらず、沖縄諸島と宮古諸島の間で組成に違いが見られる現象は沖縄諸島と宮古諸島では貿易陶磁器をもたらす仕組みが違っていたことを示す。また、このことは同時期の宮古諸島でグスク(類似施設)として久貝が取り上げた「高腰タイプ」遺跡群の評価にも連動する。「高腰タイプ」遺跡群について、久貝は「石積み遺構を有する防御性を意識した集落」とするが、「高腰タイプ」遺跡群には沖縄諸島のグスクに見られた基壇建物がほとんど存在しない。このことは沖縄諸島と宮古諸島では持ち込まれる貿易陶磁器の組成だけでなく、社会的変容を生じるに至るさまざまな情報の質や量も異なっていた可能性が高い。

この点については八重山諸島のグスク(類似遺跡)でも同様である。沖縄県教育委員会の報告書に採録された143件の遺跡全てを対象にした研究ではないが、その中のいくつかについて調査を行った小野正敏は八重山諸島のグスク(類似遺跡)では石積みで囲んだ空間が細胞状に連結した遺構が多く見られることを指摘した。また、竹富町花城村跡遺跡の調査成果に基づき、核となる石積み囲いを中心として、これに新たな石積み囲いを連結し続けることでこのような細胞状に連結した集落が成立するとした(小野1999)。さらに小野は石垣市フルスト原遺跡の調査成果を踏まえて、同遺跡ではまず石積み囲いを持たず中央に大型の炉を持つ掘立柱建物が登場し、その後石積み囲いを連結した集落が登場することも明らかにしている(小野2001)。

また、小野の事業を引き継いだ村木二郎は国立歴史民俗博物館のプロジェクトチームを主導して、宮古・八重山諸島を中心とする集落遺跡出土貿易陶磁器組成の検討を進めており、これらの集落遺跡ではいずれも13世紀後半～14世紀前半に活動が始まり、宮古諸島では15世紀前半、八重山諸島ではやや

遅れて15世紀後半～16世紀初頭に廃絶する例が多いことを指摘する。そして、宮古・八重山諸島ともに13世紀後半～14世紀前半に石積み囲いを持つ集落の築造が始まり、その規模が増大する中で集落全体の防衛性を高めていくものの、沖縄諸島に見られるグスクのような大型城郭には発達せず、あくまでも防衛性を持った石積み囲い集落にとどまる。すなわち沖縄県教育委員会のグスク分布調査で取り上げた宮古・八重山諸島の遺跡の



図 67 竹富島花城村跡遺跡模式図 (村木 2021 より)

多くは、石積み囲いを持った集落が次第に発達する中で防衛性を高めて成立したことを明らかにしたのである (図 66、村木 2021)。

久貝や小野、村木らの研究成果を見れば、沖縄県教育委員会のグスク分布調査で取り扱った宮古諸島や八重山諸島のグスクは基本的に野面積みの石積み囲いを持った集落であり、13世紀後半から14世紀前半にかけて構築が始まり、それぞれ15世紀前半あるいは16世紀初頭に廃絶することが知れる。宮古諸島と八重山諸島では石積み囲いの構造に若干の違いが見られるが、内部に基壇建物などの政治的儀礼の場となる遺構が発達していない点など共通する点が多い。また、これらの集落遺跡の構築が始まる段階にもたらされる貿易陶磁器の組成も同時期の沖縄諸島とは異なっていた。ほぼ同時期に出現しながらも、沖縄諸島諸島のグスクと宮古・八重山諸島のグスク (類似遺跡) にはその構造や変遷過程に大きな違いが認められるのである。

第5項 奄美諸島のグスクとグスク類似遺跡

奄美諸島には「グスク」名称を冠したグスクとそうでない城郭遺跡が存在する。その例として、旧名瀬市 (現在は笠利町と合併して奄美市) が実施した市内グスク分布調査では、確認した城郭遺跡 45 箇所の中で「グスク」名称がついていたのは 5 箇所に過ぎなかった。「カミヤマ」や「タテヤマ」、「アジ屋敷」、あるいは「〜ジョウ」、「〜シロ」の呼び方をする場合があり、中には地元でも存在が知られず、個別名称のない城郭遺跡もあった。このことは旧名瀬市内では「グスク」の用語がほとんど用いられていないことを示す。旧名瀬市内で確認した「城郭遺跡」の構造は自然丘陵の尾根を掘削した堀切を設け、堀切で区切られた部分を複数段の平場とすることが一般的で、丘陵斜面はそのままか、人工的に急斜面を削り出している。この堀切と平場および斜面を利用した構造は基本的に日本の中世山城に類似しており、旧名瀬市内に限れば奄美諸島の城郭遺跡は日本本土の中世城郭に類似が求められると言って良い (名瀬市教育委員会 2001)。ただし、残念なことにこれらの遺跡では遺物を採集できることがほとんどなく、構築年代は良くわからない。その中で、奄美市古見方の伊津部勝グスク (図 67、名瀬市教育委員会 2001) では、1975 年に沖縄県立博物館で開催されたグスクを取り扱った展覧会に際して、現地調査を行った名嘉正太郎・知念勇・中山清美によって、12・13 世紀代に位置づけられる白磁や青磁、カマイヤキ製品が採取されている (前出、沖縄県立博物館 1985)。

また、丘陵を削り出した奄美諸島の城郭遺跡の中には喜界島七城遺跡のように丘陵頂部を利用して、一部に石積みを持つ略方形の土塁を作り出し、後背部分に堀切を設けた例もある。土塁の基底部長は約 60m を測り、内部は掘り回められて平面をなす。構造的には日本中世に見られる居館遺構に類似する (図 68、池田 2009)。遺物には土塁の外斜面から出土したラマ式連弁文青磁碗 (上田青磁分類 C-II-a

類、小野・村木分類青磁碗C2類 15世紀前～中葉)がある(上田1982、池谷・小野・村木ほか2021)。

これに対して、丘陵頂部に平場を作り、さらにその周囲に帯状の平場を巡らしているのは奄美市(旧、笠利町)赤木名グスク遺跡である。標高123.7mの山頂から眼下の赤木名集落に向

かって伸びる山陵の尾根と斜面部を利用して複数の平場を設け、尾根には複数の堀切、斜面には多数の堅堀を設けている。山陵頂部の平場に設けた調査区の下層からは11世紀後半～12世紀前半に位置付けられる中国産白磁玉縁碗IV類(太宰府市教育委員会2000)、カムイヤキ製品片、滑石製石鍋片が出土しており、頂部平場にはこの時期に作られた何らかの遺構があったと考えられる。ただし、山陵の尾根部分と斜面部を利用して平場を重ね、堀切や堅堀を設けた構造については15・16世紀の中世城郭であるとされ、使用時期には何期かの推移が想定される(笠利町教育委員会2003、奄美市教育委員会2009・2015)。

いずれにせよ、奄美諸島に見られるグスクおよびグスク類似遺跡は海岸近くに伸びた尾根筋に堀切や平場を設けた構造を持つ例が多い。これらの遺跡例は当真嗣一が沖縄諸島のグスクの中で取り上げた「土より成るグスク」に似通っており、その関連性が窺われる。さらにこれらの構造が日本の中世城郭に類似することからすれば、年代的な位置付けがはっきりしない例が多いものの、奄美諸島から沖縄諸島に見られる「土より成るグスク」は日本中世城郭の影響を受けて成立した可能性が想起される。

図69 喜界島七城遺跡測量図及び調査区設定状況図(池田2009より引用)

第6項 与論城の位置付け

奄美諸島の中で、石積みを持つ城郭遺跡例は極めて少なく、与論城跡と沖永良部島後蘭孫八城はその数少ない事例である。与論城跡は標高94mを最高所とする琉球石灰岩段丘の頂部丘陵に占地しており、南北に伸びる丘陵の西側は急峻な断崖であるのに対して、東側は緩斜面をなし、ここに現在の集落が位置する。丘陵頂部を中心に多重の石積みを巡らす構造は沖縄諸島に見られる石積みグスクとの強い類似性が感じられる。また、本報告書では台地部分2地区とした城内の平場には石積みによって段差を設けた上下2段の平場が見られ、今後の調査によってはここに基壇建物が確認できる可能性がある。

一方、沖永良部島後蘭孫八城は沖永良部島中央に位置する大山の中腹に伸びた石灰岩丘陵の残丘上に占地する。やや歪な「8」の字形の石積みを巡らし、「8」の字の内部の一方には自然の湧水を利用した溜井が設けられている。もう一方の石積み内部はいくつかの区画に区切られているが、近年まで人が

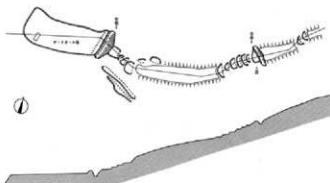
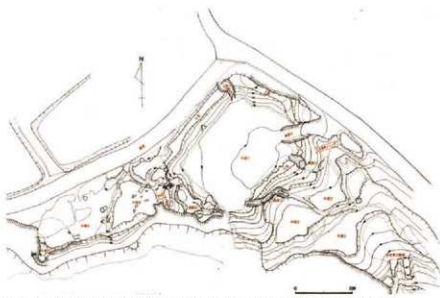


図68 奄美大島伊津部勝グスクバル(城原)遺跡(伊津部勝グスク)見取り図(名瀬市教育委員会2001より引用)



居住しており詳細は不詳である。

与論城や沖永良部島後蘭係八城に対して、奄美諸島北部の奄美大島や喜界島では前述したように日本の中世城郭の影響を受けたと思われる堀切や土塁、丘陵頂部の平場、斜面部の堅堀などを加えた城郭遺跡が存在する。年代的には北部の城郭遺跡から出土する遺物に古い要素が見られ、石積み構造を持つ与論城や後蘭係八城は比較的新しく位置付けられる。このことからすれば、奄美諸島では日本の影響を受けた「中世城郭」的遺構が先行して成立し、その後沖縄諸島の影響を受けた「グスク」的な城郭遺構が奄美諸島南部で導入されたと考えることができるかもしれない。この場合、奄美諸島北部地域の「中世城郭」的遺構は沖縄島からの軍事的圧力に対する対抗措置として、日本の「中世城郭」の築造技術を導入して構築された可能性もある。しかし、奄美諸島では城郭遺跡の考古学的調査事例が少なく、これはあくまでも予察の域を出ない。

これに対して、沖縄島内のグスクの中で、考古学的な調査成果によって変遷過程が明らかとなった今帰仁グスクの場合、13世紀中頃の段階で柵列を持つ砦的な施設が構築され、13世紀末～14世紀初頭に石積みを巡らした構造が登場する（金武正紀2004）。今帰仁城は琉球山北王の居城であり、15世紀初頭に琉球中山王によって攻略されたと伝えられる。一方、与論城では14世紀後半に位置付けられる貿易陶磁器から出土量が増加し、その後15世紀後半代までの間の資料が最も多く出土しており、この時期が与論城の最盛期であることが知れる。因みに与論城の築造に関する伝承では琉球山北王の三男である王舅や琉球中山王との関係がある花城真三郎という人物の関与が語られており、いずれも沖縄島との関わりが述べられている。このことからすると、与論城築造段階では琉球山北王との関係、山北王の滅亡後は中山王との関係が生じ、与論城の運用が図られたことを暗示しているのかも知れない。

なお、宮古・八重山諸島や沖縄諸島での貿易陶磁器出土状況からすれば、南宋の滅亡（1279年）を契機とする13世紀末～14世紀前半にかけて、元の支配下に入った中国江南地域沿岸部の商人をはじめとする人々が新たに八重山・宮古諸島から沖縄諸島への交流や交易関係を拡大に乗り出したと考えられる（宮城・新里2009）。沖縄諸島におけるグスクや宮古・八重山諸島における石積み囲いを持った集落の成立はちょうどこの時期に当たることからすれば、沖縄諸島や宮古・八重山諸島ではこの新たな働きかけに応じてそれまでの奄美諸島を通じた日本との交流・交易から、中国江南地域沿岸部との交流交易へと軸足を移した可能性が想起される。また、貿易陶磁器の組成や質量を見れば、この際には沖縄諸島の動きが奄美諸島や宮古・八重山諸島に比べてより積極的であったことが窺われる。

その結果として、14世紀後半の沖縄島に琉球山北、中山、山南の王権の成立を見るが、沖縄諸島のグスクはこのような新たな社会秩序を再構築する動きの中で成立し、政治的儀礼空間を備えるまでの展開を見せたと考えられる。そして、そうであるならば与論城や後蘭係八城は沖縄島での王権成立の影響が奄美諸島南部の与論島や沖永良部島にまで及んだことの現れであろう。この点において、与論城は沖永良部島後蘭係八城とともに、沖縄諸島に見られる石積みグスクの北限と評価できる。また、このような展開の中で、奄美諸島では日本の影響が強く認められる「中世城郭」的遺構を持つ遺跡が登場し、これが沖縄諸島に見られる「土より成るグスク」の登場にも繋がった可能性が高い。

王権の成立を見た沖縄諸島に対して、奄美諸島や宮古・八重山諸島では社会変化が進行したものの、それぞれに地域的王権が成立する前に沖縄諸島を統合した琉球中山王の圧力を受け、その支配下に組み込まれたと思われる。奄美諸島に見られる日本の「中世城郭」的遺構や沖縄諸島の「土より成るグスク」、あるいは宮古・八重山諸島の石積み囲いを持つ集落遺跡の存在はこのような13世紀後半から16世紀に至る琉球列島社会の錯綜した地域的変容状況を反映していると考えられる。

参考文献

- 安里進 1987 「琉球-沖縄の考古学的時代区分をめぐる諸問題（上）」『考古学研究』第34巻第3号、考古学研究会
1994 「東アジア交易圏と琉球の大型グスク-塞宮」『沖縄の歴史と文化-海上の道探究』吉川弘文館
奄美市教育委員会 2009 『赤木名城』
2015 『鹿兒島県奄美市史跡赤木名城跡保存管理計画書』
- 池谷初志・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎 2021 「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集〔共同研究〕中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究)
- 池田榮史 2004 「グスク時代開始期の土器編年をめぐる」『琉球大学考古学研究室集録』第5号
2009 「鹿兒島県大島郡喜界島所在志戸桶七城遺跡試掘調査報告 志戸桶七城遺跡Ⅰ」『琉球大学考古学研究室学術調査報告』第1集（平成20年度琉球大学中期計画実現推進経費による研究プロジェクト「考古学による奄美諸島中世史構築の試み」による学術調査）
2012 「琉球国以前-琉球-沖縄史研究におけるグスク社会の評価をめぐる」『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
2015 「沖縄におけるグスクの構造化」『叢書・文化の越境』23（琉球史を問直す）森話社
2019 「琉球列島史を掘りおこす-11～14世紀の移住・交易と社会的変容-」『中世学研究』2（琉球の中世）高志書院
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
沖縄県教育委員会 1983 「グスク-グスク分布調査報告（Ⅰ）-沖縄本島及び周辺離島-」『沖縄県文化財調査報告書』第53集
1990 「グスク-グスク分布調査報告（Ⅱ）-宮古諸島-」『沖縄県文化財調査報告書』第94集
1994 「グスク-グスク分布調査報告（Ⅲ）-八重山諸島-」『沖縄県文化財調査報告書』第113集
2010 『沖縄県史』各論編3（古琉球）
- 沖縄県立博物館 1985 『特別展グスク-グスクが語る古代琉球の歴史とロマン-』図録
小野正敏 1999 「密林に隠された中世八重山の村」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社
2001 「沖縄先島地域における発掘遺構と民家に見る掘立柱建物の問題」『埋もれた中近世の住まい』同成社
- 笠利町教育委員会 2003 「赤木名グスク遺跡」『笠利町文化財報告』第26集
金武正紀 2004 「考古学からみる今帰仁城跡の歴史」『グスク文化を考える』沖縄県今帰仁村教育委員会
久貝嗣綱 2014 「宮古のグスク時代の展開に関する一考察」『南島考古』第33号、沖縄考古学会
新里貴之 2004 「先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景」『グスク文化を考える』（世界遺産国際シンポジウム（東アジアの城郭遺跡を比較して）の記録 沖縄県今帰仁村教育委員会
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究-14～16世紀を中心に-」『中世窯業の諸相-生産技術の展開と編年-』補遺編（文部科学省特定領域研究計画研究『中世土器・陶器の生産技術及び全国編年研究と流通様相の年代的解明』資料集
高宮廣衛 1966 「沖縄」『日本の考古学』Ⅳ（古墳時代 上）、河出書房新社
高良倉吉 1980 「琉球の時代-大いなる歴史像を求めて-」『ちくまぶっくす』28、筑摩書房
太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡X V-陶磁器分類編-」『太宰府市の文化財』第49集
當眞嗣一 1987 「グスク論争」『論説学説 日本考古学』1（総論）、雄山閣出版
1988 「グスクの石積について（上）」『文化課紀要』第5号、沖縄県教育委員会文化課
1990 「グスクの石積について（下）」『文化課紀要』第6号、沖縄県教育委員会文化課
1993 「グスクの縄張りについて（上）」『沖縄県立博物館紀要』第19号
1994 「グスクの縄張りについて（下）」『沖縄県立博物館紀要』第20号
1997 「いわゆる「土より成るグスク」について-沖縄本島北部のグスクを中心に-」『沖縄県立博物館紀要』第19号
- 名瀬市教育委員会 2001 「奄美大島名瀬市グスク詳細分布調査報告書」『名瀬市文化財叢書』3
宮城弘樹・新里貴之 2009 「第3章第3節（今帰仁タイプとピロースタイプの消費地と消費状況）1、琉球列島における出土状況」『13～14世紀の琉球と福建』（平成17～20年度科学研究費補助金基盤研究（A）（2）研究成果報告書 研究代表者：木下尚子熊本大学文学部教授）
- 村木二郎 2021 「先島の集落遺跡からみた琉球の帝國的様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集〔共同研究〕中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究)
- 山本正昭 1999 「グスク時代の石積み囲いについての一考察（上）-沖縄本島及びその周辺離島を中心として-」『南島考古』第18号、沖縄考古学会
2000a 「グスク時代の石積み囲いについての一考察（下）」『南島考古』第19号 沖縄考古学会
2000b 「14,15世紀の礎石・基壇考」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』上巻、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

1 暮しのなかの与論城・くんびら

(1) 日々の暮らしの中で

「パーパー・パーパー（方言で「祖母」のこと）メーグチパンタで二十七度線に向って叫ぶと、下の方からほどなく「ホーイ」と返事が返ってくる。気持ちがつながるホッとする一瞬である。

薄暗くなった下りの小路を小走りにおりて行くと、ほどなく「ミーガー・ミーガー（方言で「ありがとうと褒めること）」の声に迎えられて祖母二人に出会う。出会った途端、手伝う気持ちで祖母のついている杖を取りあげ、語り合いながら上り階段を一步一步登りつめていく。

中程まで登った所でお墓が見えてくる。広場の中心に家型の破風墓（写真29）が構えている。小路をはさんで



写真29 与論城跡内の破風墓（龍撮影）

右側の前方の崖の下には石が積み上げられた古い墓があり、その前方には仏像が安置されている。

明和三年（1766）と記された、サンゴ石で造られた虚空菩薩像であると言う（写真30）。

ふと見上げるといまにも倒れてくるのではないかと思わせるほど傾いた大きな岩「ヤマラギシ」が目のかぶさってくる（写真31）。

足が急ぎ足になりその岩の下を通りすぎる。ヘアピンカーブを曲ってヤマラギシの背後に回ってくると、崖を背にした整ったもう一つの破風墓が目にはいる。ここの平場一面が墓地であり、この中央に切石積みで漆喰仕上げの破風墓が一带を凌ぐようにミーバカ（新しい墓）と名付けられている。

ミーバカを登ると左右を岩壁にはさまれた間道へいざなわれる（写真32）。まるで人工の技を思わせるような自然の造形にうならされる。ここを登りきると、パーパーと呼びかけたメーグチパンタに登りつく。下の畑や海をながめながら、登り着いた爽快感が心地よい。私の少年時代の一日のひとコマである。

この当時の階段には高い所と低い所があり、低い所は小振りな石が2～3段になっている。子供や女性は低い所を歩数を重ねて登るのである。小さい頃は早く先輩達と肩を並べたい思いから、高い所にチャレンジしたものです。この高低のある階段は先人の大きな知恵・遺産、ユニバーサルデザインであったと実感する。傾いた大きな岩、ヤマラギシの西側の一段下った崖の中段の平場には畑が連なっている。

サトウキビ作の初期の頃、ヤマラギシ西側の畑にキビを栽培し上のメーグチパンタまで担ぎあげたというから、畑によせる愛着の程がわかる。

一方西側の神社から下る道には城壁として築かれた石垣が残っている。下りていくと岩壁に沿うように風葬墓が続き、入口近くには大道那太（うぶどうなた）のクンジャンパーとサービマートイのアドンバーの墓が上下に肩を寄せ合うように隣り合っている。



写真30 与論城跡内の石仏（龍撮影）

崖を降りたつた溜池の東奥には湧水があり、崖下の伊波地区で農作業をする人々の憩い・癒しの場であった。この一帯をシンゴヌメーという。

与論城の崖下は墓地、畑とそれに伴う日々の生活道路があり、この道を通って畑や海に通つたものである。

さて、暮しのなかの「くんびら」といえば与論十五夜踊が戦前、戦後の高度経済成長期まで島の人々の楽しみであり、社交の場を着飾って出かけたと、栄誉町民の故菊千代さんがなつかしげに語っていた（令和4年1月に94歳で永眠）。

当時はまだ娯楽が少なく十五夜踊は人々の楽しみであり、社交の場を着飾って出かけたと、栄誉町民の故菊千代さんがなつかしげに語っていた（令和4年1月に94歳で永眠）。

また、私の少年時代は十五夜踊の前になると城地区の小組が持ち廻りで祭主、二番組、一番組のサークラを建てるのに各家庭から物干し竿やムシロを持ち寄って建てていた。そのサークラがシヌグ祭りのサークラと似て祭りにいざなう風情をかもしていた。

この奉納の風景は、昭和四十六年（1971）与論十五夜踊が県の無形文化財に指定されたのを機に教育委員会が行なうようになって様変わりした。今にして思えば、暮しのなかから祭りと地域のからみが、ひとつほかれた感じである。

台地部にも東側・南側に墓や畑が広がり、神社境内は子ども達にとっては日々の遊びの場であり、様々な工夫をして楽しんでいた。

また、神社に対する地域の信仰心も厚く、癒しの空間である。明治三十年生まれの私の祖母は地主神社に登る階段は不浄の身では登ってはいけない聖地であると崇めていた。



写真31 ヤマラギシ（麓撮影）

2 地域のなかの与論城・くんびら

ここでは神社の台地部を中心に時代の流れに沿って与論城に地域がどう関わってきたのか概要を集約する。

なかでも与論城の大きな変容は神社と墓地の建設である。神社については地主神社の由緒書に沿って紹介する。

（1）地主神社

明治維新の廃仏毀釈で高千穂神社を建立する際、各地区のシヌグ祭りやウンジャン祭りを禁止し、各拝所の神々を合祀し明治三年（1870）に辺後地（ビッグチ）の拝所に小祠を建て祭る。与論町誌には年表に明治四年（1871）に氏神を合祀して地主神社を建てる（増尾録）となっている。

昭和四十五年（1970）に地主・高千穂・琴平神社が改築される。いずれも島内外の有識者の御芳志による。地主神社を改築する際に、境内から出土した遺骨を南側の辺後地御願の拝所に改葬安置され、その前方に大きな岩が置かれている。

この岩は故麓垣茂氏（神社改築期成会会長）の依頼で林経透氏が



写真32 メグチハンタの間道（麓撮影）

運搬したという。ハキピナ湾東側の通称ハムスクビの前の窪地（チブ）にある岩を麓氏と林氏の二人で潜ってロープ掛けをした。「角をひとつも落とすな。俺は命懸けだ。君も命懸けで頑張ってくれ」と、麓氏の激を受け、斜路に砂を敷いてブルドーザーで慎重に引き揚げ、運搬する車両にも砂を敷き、地主神社の階段も砂利を敷き慎重に慎重に運び安置したという。麓氏が何故その岩を海の中から選んだのかは不明である。神の啓示か。

旧暦の三・八・十月の十五日に豊年祈願祭が催される。この時の奉納踊りが与論十五夜踊で平成五年(1993)に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

(2) 琴平神社

文政七年(1824)に龍頭付近に金毘羅大権現を勧請し、天保六年(1835)に敵島神社「市杵嶋姫之命」と菅原神社「菅原道真公」を合祀し、明治四十二年(1909)に地主神社の境内の現在地に移転された。

現在地は神社が移転されるまでは岩石が盛り上っており、整地をして神社が建設されたと言う(沖宮司の伝承)。現在の社殿は昭和四十五年(1970)に建設され、平成十四年(2002)に社務所が増築され現在に至る。

古老の伝承によると、現在の島居のある参道は神社建設に伴い設けられたもので、城としての城門は与論十五夜踊の祭主席の北側であったと言う。現在の門は昭和四十年代に再度整備されている。

琴平神社が建てられてから、人々は親しみをこめて「くんびら」と呼ぶようになったようである。少年時代に土俵のある境内で大人に交って雨乞いに参加した。太鼓、タライ、一斗カン、カンヅメカン等持ちよって、それを打ち鳴しながら「雨タボーリ」と声を張り上げ土俵の廻りをまわった。私はカンヅメカンをたたいていた。

(3) 与論城の墓地

与論城のなかには時代を経て様々な墓地がある。断崖部には東西の通路沿いに古くからの風葬墓・掘込墓と破風墓や、明治時期に広まった大和式のお墓を建てる墓が崖や平場に存在している。

明治期からは、台地部の忠魂碑から南側にかけて墓地が建てられるようになる。近年崖にある大和式のお墓は利便性のある台地部に改葬(移転)する例が増えている。

(4) 戦後以降の与論城の移り変わり

①昭和二〇～三〇年代に与論小・与論中や茶花港(江ヶ島)の建設のため崖下の入口周辺から石を運び出したという。

②昭和四十年代に龍頭に沖縄を望む展望台が設置された。その際に龍頭の左眼の石積みが撤去されたのではないと思われる。

③昭和四十年代、故麓垣茂氏が中心になって断崖部の祀り主が分からない風葬骨を収集、安置する。

④昭和四十二年(1967)メーグチバンタに母国復帰記念碑建立(写真33)。碑文に「全国同胞の浄財と誠を集結しこれに石塔を建て万世に之を伝う」とある(祖国復帰ではなく母国復帰となっている)。

⑤昭和四十五年頃、現在の忠魂碑の敷地の畑に高倉を移築する。当時は間を仕切っていた石垣が残っていた。

⑥昭和四十七年頃(1972)メーグチバンタの高台を砕石場として利用して、道路の敷砂利を生産していた。

⑦昭和五十三年(1978)忠魂碑移設・慰霊碑建立、土俵四本柱建設、



写真33 祖国復帰記念碑(龍撮影)

土俵と現在の忠魂碑敷地を仕切っていた石垣の整理。

この年に地主神社南側遊歩道に山口誓子句碑も建立される。

⑧昭和六十一年(1986)上野應介翁頌徳碑・口之津移住開拓民之碑を忠魂碑の横並びに建立(写真34)。

この頃、茶花公会堂(現、茶花自治公民館)に建てられていた「大野好文県議会議員」の碑も同地に移設。

この年、龍の口に「島中安穏」を祈願する仏像を設置。元全国与論会会長の故白井盛永氏が与論城で収納された遺骨をはじめ、島中の無縁仏を祀り島中安穏を祈願するために建立。

⑨平成五年(1993)サザンクロスセンター建設。

⑩平成五～八年(1993～1996)遊我風ランド事業で神社北側、与論十五夜踊保存館周辺の石垣の整備等を行う。

遊歩道の整備として復帰記念碑から山口誓子句碑までの整備と復帰記念碑(メーグチパンタ)より翔龍橋入口の道路までの整備を行う。この頃、西側の通路も溜池への取水路として整備がなされた。

⑪平成九年(1997)与論十五夜踊保存館の建設。

⑫平成十四年(2002)琴平神社に社務所が増改築される。

⑬平成二十三年(2011)NPOヨロン島・尊々我無が町の委託を受けて与論城を全面的に環境整美に取りくむ。これによって平成二十五年(2013)～平成二十七年(2015)にかけて赤司善彦氏らの九州国立博物館チームが測量調査を行ない(赤司2020)、平成二十七年(2015)沖縄の建築情報誌「しまたてい」に山本正昭氏が「与論城概観」を掲載(山本2015)。昭和五十八年(1983)県教育委員会の調査で与論高校の小園公雄氏が縄張り調査を行なっているが、草木が繁茂していたため調査に困難をきたした。

⑭令和二年(2020)沖縄県立博物館・美術館で与論城跡の模型を作成。沖縄県立博物館・美術館のグスクに関する企画展で沖縄のグスクと共に展示。

以上、与論城の戦後以降の変遷の概略を列挙した。与論城の変遷は文化財としての観点より、地域の拠り所、憩いの空間「くんびら」として受け入れてきたと言える。

(4) 古老の伝承

この他、明治三十一年(1898)生の故林清国の残した与論城に関する聞き取り調査の原稿に以下のような伝承が収録されている。

①夫婦井戸(ミートゴー)

樋口溜池の東側にある湧水が地域の人々のいやしの場であり、この一帯をシンゴヌメーという(地区14)。この湧水を境に石積みが残されており、今回の調査で城域に入っている。

故林清国の原稿には「湧水の上に井戸がある。さらに南下にももう一所井戸がある。夫婦井戸(ミートゴー)という。泉はない。」と記されている。

地区14にはそれと思わしき石組みをした方形の穴が



写真34 右から上野應介翁頌徳碑・口之津移住開拓民之碑、忠魂碑(大正年間作成)、満州開拓団の慰霊碑(麓撮影)



写真35 シンゴヌメー周辺の石積み、写真右下の方形の石組みと右端のバショウの間に石組みがあり、夫婦井戸の可能性(与論町教育委員会撮影)

ある（写真21・35）。

この西側にクンジャンパーから城内に通ずる道があり（地区13の通路）、昭和七年生まれの故人は、その道を「水汲み道」という伝承を話している。

②門の推移

地区2の門については次ぎのような記述が残る。「現在の門は以前は高い石垣で囲われていた。入口は現在、祭りの時の祭主が座る座敷の北の角であった。今の座敷は現在の門を造るときにその石垣を使って造った。」。

現在の門は神社の参道として整備されたと伝承。現在の形は昭和45年（1970）に神社をコンクリートに造営した時に整備されたという。

③城内に関する伝承

現在の土俵のある広場（地区2）の北西の角が門であったという伝承に沿って、その門に行くところ（地区4）に番兵の監視所と兵舎があり、その隣に軍馬飼育場があった（サザンクロスセンター南向い側）。

④城内に関する伝承2（写真36）

東側の公衆便所のあるところから南側の墓地向かっは（地区4）、兵舎・炊事場・倉庫があった。

⑤ハマシチャの畑（地区9）の中央部から焼土や金屑が出るが、鍛冶屋の跡と思われる。

⑥現在の忠魂碑のある広場（地区2）は御内原（内宮）であったという。ここは、地主神社から東側に向かって、中央にあるモクマオーに沿って石垣があつて分離されていた。昭和五十三年（1978）、土俵の建設と併せて忠魂碑の現在の場所への移設や石垣の整理が行われた。

これらの伝承は故人清国氏が、城集落の明治初期～幕末生まれの古老（故酒井喜美静氏・故田中納弘氏・故立福静氏・故人禮納喜美氏・故上間兼一氏・故麓義弘氏）から取材とある。



写真36 昭和30年代の与論城跡（東京与論城HPより引用）

3 現在と今後の与論城

(1) 与論城と境界

与論は沖縄返還運動の拠点となり、与論城は昭和三十八（1963）から昭和四十五年（1970）まで北緯二十七度線の海上集会、辺戸岬と与論島のかがり火大会を見守ってきた。お互いのかがり火が確認できる指呼の間にありながら、まつにならない27度線上で復帰の熱い想いが燃え燃え盛っていた。平成二十四年（2012）沖縄復帰40周年にあわせて沖縄県の国頭村と鹿児島県の与論町が合同で沖縄返還運動の海上集会とかがり火大会を再現する。その後、友好を深めつつ、10年後の令和四年（2022）沖縄復帰50周年にあわせて海上集会とかがり火大会を再現（写真37）。その年の11月21日、沖縄県国頭村と鹿児島県与論町は姉妹都市盟約を結ぶ。

そして、現在は沖縄県と鹿児島県の行政の境界が与論城下の海には横たわる。

(2) 今後の与論城

今回の調査成果を踏まえつつ、今後の城内や周辺集落まで含めた更なる発掘調査や民俗関係の調査により、与論城跡の築城目的、どのような戦いを想定していたのか、労働力・兵力の確保など、次々と解明されることが期待される。元宜野湾市職員の呉屋義勝と与論郷土研究会が共同で、与論城跡に連なる城・朝戸・西区集落にシニユグ祭などの祭場に中世並行期の遺跡を複数箇所確認（竹下他2017）。

与論城の東側・北側方面の防衛対策において城郭遺跡と、その周辺に展開する集落遺跡との関係につ

いても注目され、今後の調査の成果が待たれる。

さて、国指定を目指す与論城であるが、近年町民の関心が高まりを見せており、以下の取り組みが与論城でなされている。

①観光関係による文化財としての価値を踏まえ、ガイドコースの設営に取り組んでいる。

②和歌山大学を中心に進めているアストロツーリズムの拠点として、与論城を中心とした地域の光害対策として防犯灯の改善（輝度の調整など）を進めている。

③近年、民間イベントが与論城を会場として次々と行われる。

- ・マーゲン防火デイ ・星空マーケット
- ・フェスティバル後の交流会 ・満月祭
- ・魚のトト祭り ・こいのぼりの絵かきイベント

④景観美化を目的とした鳥居や土俵のペンキ塗り。

- ・民間が発信してボランティアで鳥居などを塗装
- ・塗装に出水市の塗装会社がペンキ提供等の協力

⑤城内で行われる与論十五夜祭を再びみんなの祭にするための工夫（写真38）。

- ・会場周辺に屋台を設置し販売。
- ・与論十五夜踊をわかりやすく解説する取り組み。
- ・踊りの空き時間も楽しめるように地元アーティストのイベントを組み合わせる。

このように島の人が与論城に集い、関心を持ち、親しんでいただけることはありがたいことである。

今、国の重要無形民俗文化財である与論十五夜踊も人々に分かりやすく解説し、親しく観賞していただけるような取り組みだけでなく、学術的な面でも踊りについて調査研究が進められており、与論城の調査と併せて与論島特有の文化の発信につながることを期待される。

私達与論の人々は、ビッグチ御願をもとに与論城に秘められている幾星霜の先人の思いと汗と足跡を紐解き、国指定を目指す文化財としての価値を共有し、島の宝を磨き続け未来へつなげたい。

伏龍よ はばだけ！ 与論城。

引用HP

東京与論会 <http://tokyo-yoronkai.jp/>（2024年1月19日アクセス）

引用文献

赤司善彦 2020 「平成25～27年度の与論グスクの調査と与論グスクの概要について」『明らかになる与論城跡発表資料集 令和2年度地域の特色ある埋蔵文化財活用事業に係る関連シンポジウム』与論町教育委員会事務局

竹下徹・竹盛直・内野優三郎・兵屋義勝・麓才良・南勇輔 2019 「与論（ゆんぬ）の先人の生活跡を訪ねて！—2016・2017年の遺跡分布調査の概要—」奄美考古学会編『中山清美と奄美学 - 中山清美氏追悼論集 -』奄美考古学会

山本正昭 2015 「与論グスク概観」『しまたてい』No.73, 建築情報誌しまたてい編集委員会



写真37 メーグチバンタから見た辺戸岬のかがり火、写真中の○枠内（与論町教育委員会撮影）



写真38 令和5年旧暦十月十五夜で踊りの解説する筆者（与論町教育委員会撮影）

第3節 古代・中世の奄美・与論

ラ・サール学園 永山 修一

本節では、古代・中世併行期の奄美諸島と与論島について、おもに文献の面から概観し、与論城が成立する背景について考察していきたい。

1 ヤクとリュウキュウとアマミ

『隋書』の流求伝によれば、隋の皇帝煬帝は、大業元年(607)と翌年に武官の朱寛を流求に派遣してその服属を試みたが、ともに失敗した。遣隋使小野妹子らは、朱寛が持ち帰った戦利品の布甲(一種の甲)を見て「これは夷邪久国人が用いるものである。」といった。夷邪久について、「ヤク」の音をこの3字で表記したという考え方と、「夷の邪久」と読んで、夷人であるヤクとする考え方が(田中聡2015)。ヤクの情報が、ヤマト(倭)政権中枢に届いていたことがわかる。

平安時代の辞書『和名類聚抄』によれば、夜久貝(ヤコウガイの古名)は、西海の益救島で産出するとされている。屋久島はヤコウガイ生息範囲の北限に近く、ヤクは個別島名ではなく、島々をさす集合名称であったと考えられる。

以下、しばらく『日本書紀』によって見ていく。推古二十四年(616)に、ヤク(掖玖・夜勾)人が、三月と五月と七月に合計30人帰化する、同二十八年(620)八月には、掖玖人2人が伊豆島に流れ来たったとの記事があり、さらに舒明天元(629)四月、田部連が掖玖に派遣され、翌年九月に帰還したとする。

多くのヤク人が来た背景には、『隋書』に見える流求と『日本書紀』に見えるヤク人居住地は同じで、隋・唐の王朝交代に伴う混乱の余波が流求/ヤク地域の人々にも及んでいたとする説がある(田中聡2015)。

白雉四年(653)に2隻からなる遣唐使が派遣されたが、その第2船は薩摩の曲と竹島の間で遭難しており、この第2船は南島路をとって唐に向かう予定だったらしい。この遭難の翌年には高向玄理を押せとする1隻の遣唐使船が派遣された。『唐会要』巻99倭国条に見える高向玄理が唐側に報告した内容の中に「倭国の東海の島々の野人に、耶古・波耶・多尼の三国がある。皆倭に従属している。」とあり、耶古=ヤク、多尼=タネとし、それぞれ屋久島・種子島との関連が想定されている。

白雉五年(654)四月に吐火羅国・舍衛の計4人が日向に、斉明三年(657)七月に靑貨邏国の男女6人が海見島を経て筑紫に漂着した。吐火羅国・靑貨邏国は、各ドヴァラヴァティ王国(タイのメナム河下流域)、シュラーヴァスティ(ガンジス河中流)とする説がある。これはアマミの初見となる。

2 南島人の朝貢

天武六年(677)二月、政府は多羅島の人らを飛鳥寺の西にあるつき櫓(ケヤキ)の樹つ広場で饗した。中国では、中華の周辺の「野蛮」な人々を、方位を冠して東夷・南蛮・西戎・北狄(総称して夷狄)とし、朝貢させることにより、皇帝の力を見せつけた。中国を手本に中央集権国家の建設をめざすヤマト政権も、こうした中華思想(華夷秩序)を取り入れていった。同八年(679)十一月、政府は倭馬飼部遣連らを多羅島に派遣した。同十年(681)八月に、使節は多羅島人を伴って帰還し、多羅国図と多羅島情報をもたらした。九月に多羅島人らは飛鳥寺の西の河辺で饗をうけた。同十一年七月に、多羅人・掖玖人・阿麻彌人が禄を与えられ、同じ頃、南九州の隼人も朝貢した。同十二年三月に多羅に派遣した使節が帰還した。持統九年(695)三月、文忌寸博勢、下訳語諸田らを多羅に派遣し、蛮の居る所を求めさせた。

以下はしばらく『続日本紀』の記事による。文武二年(698)四月、文忌寸博士ら8人に武器を持たせ

て南島に派遣し、「国を覓^{もと}めさせた。これは、未知の国を探し求めることであり、「南島」という語の初見記事となる。

同三年七月、多^た櫛^し・夜久^{やひさ}・菴^{あま}美^み・度感^{とくかん}などの人が朝貢を行い、度感島はこの時はじめて中国に通じた。度感島は徳之島のことで、徳之島の史料上の初見となる。「中国」は、世界の中心にある国のことで、ヤマト政権も自らの政権が周辺に住む夷狄を従える存在であるという認識（日本版華夷思想）を持つに至ったことがわかる。

覓国使は二手に分かれて行動し、一方は七月までに多櫛などの人々を引率して帰朝し、他方は文忌寸博士^{ぶんしすんはかせ}・刑部真木らで十一月までに南島から帰朝したが、後者は南九州の有力者たちから襲撃を受けていた。

大宝二年(702)八月、政府は薩摩^{さつま}・多^た櫛^しの「反乱」を討ち、戸籍を造り役人を置き始めた。種子島・屋久島は国に準じる多櫛嶋に編成され、南島の北端に国郡制が及ぶことになった。

慶雲四年(707)七月に南島人が朝貢し、大宰府で叙位と賜物が行われた。和銅七年(714)十二月、太^た遠^{えん}建^{けん}治^ちらが奄^あ美^み・信^{しん}覚^{かく}・球^く美^みなど南島人52人を都に引率し、大^お極^{ごく}殿^{でん}で行われた翌年正月元日の儀式では、陸^{りく}奥^{おく}・出^{しゅ}羽^うの蝦^え夷^いとともに奄美などの南島人が方物を買いた。信覚は石垣島、球美は久米島とされ、与^よ論^{ろん}島も政府の視野に入っていた可能性が高い。

養老四年(720)十一月に232人、神^{かみ}亀^{かめ}四年(727)十一月に132人の南島人が叙位された。これらは朝貢に対応する叙位であり、この叙位が都・大宰府のいずれで行われたのか不明である。大^お隅^{ぐも}・薩^{さつ}摩^ま両国では養老四年(720)二月～翌年八月に最大規模の対^{たい}隼^{じん}人^{にん}戦争が起こっており、南島人は戦地を経由して朝貢を行っていた。神^{かみ}亀^{かめ}四年(727)の朝貢以降、政府が編纂した正史には南島人の朝貢・交易に関する記事は確認できなくなる。

さて、大宰府不^ふ了^{りょう}地区から「掩^{あま}美^み嶋」「伊^い藍^{らん}嶋竹^{たけ}五」の貢進物付札木簡が出土している。この2点の木簡は、天^{あま}平^{へい}年間(729～49)に、大宰府が南島から集めた品々につけたもので、品々を都に送った後、不要になって溝に投棄された。「掩美嶋」は奄美大島、「伊藍嶋」は沖永良部島あるいは与論島とされる。

10世紀にまとめられた『延喜式』に南島産品に関する規定が見えるから、神^{かみ}亀^{かめ}四年(727)以降も南島との交易が続いていたことは確実である。神^{かみ}亀^{かめ}四年を最後として朝貢は終わったものの交易は続いたか、朝貢は続いていたが『続日本紀』の編者がそれを正史に載せる価値のないものと見なしたかのいずれかであろう。

3 遣唐使南島路

南島は、遣唐使の航路上にあつたため、遣唐使に関する史料の中に南島の姿を見ることができ。遣唐使は全部で18回の派遣が実施あるいは計画されたが(森公章2010)、このうち第2次(653年派遣)、第9次(733年派遣)、第11次(752年派遣)、第17次(838年派遣)は、ほぼ確実に南島路を利用している。

『唐^{たう}大^{たい}和^わ上^{じやう}東^{とう}征^{せい}伝^{でん}』(鑑^{かん}真^まの伝記)によれば、第11次遣唐使の4艘は、唐^{たう}曆^り天^{てん}寶^{ほう}十^{じゅう}二^に年(753)十一月十六日に唐^{たう}の黄^{わう}酒^{しゆ}浦^ぼを出帆した。第1・2・3船は二十一日までに阿^あ児^に奈^な波^は島(沖繩本島か)に着いた。十二月六日南風が起り、第2・3船は、座礁した第1船を残して、多^た瀾^{らん}に向けて出帆し、七^{しち}日^{にち}益^{えき}敷^{しき}島に至った。両船は十八日に出帆し、二日後鑑^{かん}真^まらの乗る第2船は薩^{さつ}摩^ま阿^あ多^た郡^{ぐん}秋^{あき}妻^{つま}屋^や浦(南さつま市坊津町秋日)に、副使古^こ備^び真^ま備^びが乗船した第3船は、紀伊国^{きのくに}の半^{はん}羅^ら崎^{さき}に着いた。第1船は帰国を果たせなかった。

この第2・3船からの情報により、政府は、帰還支援策を採った。『続日本紀』天^{あま}平^{へい}勝^{しょう}宝^{ほう}六^{ろく}年(754)二月丙戌条によれば、天^{あま}平^{へい}七^{しち}年(755)に高^{たか}橋^{はし}連^{れん}牛^{うし}養^{やう}を南島に派遣して樹てさせていた牌が朽ちていたため、

政府は大宰府に命じて、牌を元通りに修理し、牌ごとに到着した島の名や水が得られる場所など、帰還に有益な情報を記させた。大宰府は、南の島々に関してかなり詳細な情報を持っていたことがわかる。『延喜式』雑式にも、牌の規定があり、また、『延喜式』大藏省入諸蕃使条によれば、遣唐使には新羅語と奄美語の訳語（通訳）が同乗することになっており、航路を北に外れた場合は新羅に、南に外れた場合は奄美に漂着する可能性が考慮されていた。

4 多嶺嶋の廃止と喜界島城久遺跡群

多嶺嶋は、①律令国家の版図拡大、②南九州の単人支配の円滑化、③南島人の朝貢支援、④遣唐使の航路支援などため、8世紀初頭に設置されたが、その財政基盤は貧弱であったため、大宰府からの直接的支援をもとに維持されていた。

8世紀後半以降にはいずれの目的も達成されたり意味を失っていき、さらに9世紀前期に、管内で飢饉や疫病が流行したことにより大宰府は財政難に陥り、政府は天長元年(824)に多嶺嶋を廃止し、大隅国に併合した。

多嶺嶋の廃止によっておこった政府と南島との関係の変化を、喜界島(大島郡喜界町。以下、喜界町喜界島と呼ぶ)の城久遺跡群から見ておこう。

2003～2009年に調査された城久遺跡群は、喜界町喜界島中央部の標高90m～160mの海岸段丘上に立地する面積約130,000㎡におよぶ9世紀～15世紀の遺跡であり、大きくⅠ期(9世紀～11世紀前半)・Ⅱ期(11世紀後半～12世紀)・Ⅲ期(13世紀～15世紀)の3期に分けられる。

Ⅰ期の遺構は確認されていないが、越州窯系青磁や初期高麗青磁、東美濃産灰軸陶器など大宰府との関係を強く示唆する遺物が出土し、越州窯系青磁の中には9世紀中葉の年代が与えられるものがあり、量は少ないが高級品が多く、出土遺物の70%は島外からの搬入品が占めていることから、多嶺嶋廃止後、大宰府は南島経営の拠点を喜界町喜界島に移したのではないかという説が示されている(亀井明德2006)。

5 南島の交易品

南島の主要な産品は、赤木・檳榔・ヤコウガイであった(山里純一2012a)。

赤木は、親王位記、経巻の軸や和琴などに用いられ、『延喜式』内蔵寮諸国供進条には大宰府が進上するものとして赤木20村があり、同民部省下年料別貢雑物条によれば赤木は南島の進める物であった。

檳榔については、『続日本紀』宝龜八年五月癸酉条によれば、渤海王へ檳榔扇10枚を贈った。時代は下がるが、踐祚大嘗祭の百子帳(天皇の禊に用いる仮屋)の屋根は檳榔で葺くことになっており、牛車の車箱の表面を檳榔の葉で飾った檳榔毛車には、天皇・太上天皇及び四位以上の者しか乗ることができなかった。

奄美市小湊ワガナク遺跡(遺跡は国史跡指定、遺物は国重文指定)では、6～7世紀のヤコウガイ貝殻の加工過程が確認された。完成品のほとんどは交易品として島外に運び出された可能性が高い。また、ヤコウガイ大量出土遺跡では鉄器が確認されており、貝殻の対価であった可能性もある(高梨修2005)。

正倉院には、ヤコウガイを用いた鏡・琵琶・琴・箱など20点以上や貝殻そのものも伝来している(荒川浩和1998)。漆芸の研究によれば、10世紀と11世紀の交に新たに平塵地螺鈿・蒔絵螺鈿の技法が登場しており(中里壽克1995・1996)、これは必然的に螺鈿の材料としてのヤコウガイの需要を増大させた。

文献史学からは、南島社会は朝貢を可能にする首長制の社会と想定されていたが（鈴木靖民 2014）、小湊ワガネク遺跡の調査により、その想定が正しいことが明らかになった（高梨修 2005）。

6 キカイガシマと南島の転換

南島との交易の活発化は、交易上のトラブルも引き起こしていった。『日本紀略』、『小右記』（藤原実資の日記）、『権記』（藤原行成の日記）によれば、長徳三年（997）十月一日、旬政の儀式の最中、大宰府より南蛮人の管内諸国襲撃事件が報告された（山里純一 2012）。『小右記』同日条によれば、大宰府からの解文に、先年、奄美人が大隅国人 400 人を拉致する事件も起こっていたとあった。公卿たちは、要害の警備、追討命令、仏神への祈祷という善後策を決定した。翌年九月十四日大宰府が、南蛮の捕進を貴賀島に下知した由を言上した。これは、キカイガシマの初見記事である。長保元年（999）八月十九日には、大宰府が、南蛮の賊を追討したと言上してきた（以上『日本紀略』）。下知対象のキカイガシマと、征討対象の奄美は区別されており、キカイガシマには、下知を実行に移した大宰府の出先機関が存在したか、あるいは大宰府の官人が滞在していたと考えられる。城久遺跡群のⅠ期の出土品からして、キカイガシマが喜界町喜界島であった可能性は高い。寛仁四年（1020）と天喜二年（1054）前後にも、南蛮襲来事件が起こっていたと考えられる（永山修一 2007）。

この時期の南島交易の活発化について、11 世紀の『新猿蓑記』によれば、商人の首領である八部真人は、東は俘囚之地から西は貴賀之島までを活動範囲とした。また『小右記』によれば、薩摩・大隅の関係者から南島産品がたびたび右大臣藤原実資のもとに進上された。南海の島々は、王朝貴族が珍重する品々を産出することから、「貴」のイメージで認識されており、「キカイガシマ」は個別島名としてばかりでなく、多くの島々の集合名称としても用いられるようになった（永山修一 1993）。

11 世紀代には考古学的な面でも南島に大きな変化が生まれている。第 1 に、長崎の西彼半島などで産出される滑石製石鍋のうち、南島では 11 世紀までにつくられた縦耳型の滑石製石鍋が流入した。また石鍋の破片は、石鍋模倣土器や滑石混入土器の材料として持ち込まれた可能性が指摘されている。

第 2 に、玉緑口縁白磁碗（大宰府分類白磁Ⅳ類）・初期高麗青磁などの輸入陶磁器が大量に流入し始める。

第 3 に、徳之島でカムイヤキの生産が始まる。カムイヤキは、長崎県大村市の竹松遺跡から沖縄県の波照間島に分布する中世四大広域流通陶器の一つで、その製作技術は高麗無釉陶器と関係が深いとされている。

第 4 に、喜界町喜界島の城久遺跡群ではⅡ期の最盛期を迎える。遺跡群の最も高所に当たる地点では、倉庫を伴う大型の四面廂付掘立柱建物が発出されている。また、この時期の琉球、奄美地域で広く認められる玉緑口縁白磁碗や滑石製石鍋、カムイヤキなどが多量に出土し、この地域では唯一の製鉄炉が発出されるなど、琉球、奄美地域における一大交易圏の中心となった（松原信之ほか 2015）。

こうした南島の転換は、北部九州ひいては東アジア全体の動きと連関していた。大宰府における貿易陶磁は 11 世紀中頃に画期があるとされ、大宰府の第Ⅲ期政庁は 11 世紀初頭までには建物やその機能を失い、また鴻臚館（外交・海外交易の施設）が 11 世紀に半ばに廃絶し、貿易の中心地は宋人居留地が営まれた博多遺跡群に移って、いわゆる蕃貿易が開始された。

滑石製石鍋生産の契機の一つとして中国文化の流入、中国商人の生活・風習と関わりが想定され、石鍋の流通に「宋商人」が介在し（松尾秀昭 2017）、またカムイヤキの製作技術の流入にも、北部九州の勢力や「宋商人」などを想定できる。宋人たちの活動が活発になり、南島交易にも積極的に参入してきたようだ。

カムイヤキについて、南島交易の対価とされたという説に対して、はじめから九州島以北から南島に移住してきた人々に対する供給を目的として生産されたとする説もある（池田榮史 2019）。また、ヒトのミトコンドリア DNA の研究によれば、中世以降に南九州の農耕民が喜界島や徳之島など奄美諸島に移住し、さらにそこから琉球へ移住して、琉球に農耕が導入されたという可能性も指摘されている（篠田謙一 2018）。

7 キカイガシマとイオウガシマ

10 世紀以降唐王朝の崩壊から五代十国の分裂、宋王朝による中国の再統一の過程で、火薬の武器への転用が進められ、その原料である硫黄の需要が高まったが、宋王朝の支配領域では需要をまかなえず、10 世紀末頃、日本列島産硫黄が中国へ輸出され始めた。なかでも 1080 年代に西夏と戦う宋王朝では、硫黄の調達が急務となり、1084 年宋王朝は、5 つの綱（商人集団）を日本に派遣して、各 10 万斤、計 50 万斤（約 300t）のイオウを輸入した（山内晋次 2009）。このころから、イオウを産出し積み出し容易な薩摩硫黄島が目目されるようになって、イオウガシマは南島を代表する島名となり、多くの島々の集合名称としても用いられるようになった。

『長秋記』（源師時の日記）天永二年（1111）九月四日条によれば、紀伊国に到着した「喜界島の者」への対応を検討するため陳定が行われた。これは「宋人定」に準ずるもので、彼らは境外から来る者であり、キカイガシマは、日本の外側に位置付けられた。『吾妻鏡』文治三年九月二十二日条によれば、永暦元年（1160）ころ、薩摩国阿多郡に本拠を置き源為朝の舅として九州で大きな力をふるった平忠景が、勅勅を蒙り「貴海島」に逐電した。キカイガシマは、天皇の支配の及ばない場所と考えられていたことがわかる。

『平家物語』の諸本によれば、治承元年（1177）の鹿ヶ谷事件で平家打倒を企てた後白河上皇の近臣俊寛らは「鬼界島」に流された。俊寛の配流地は火山島として描かれており、これは薩摩硫黄島のことと考えられる。また、薩摩硫黄島は鎌倉時代にも流刑地として多くの史料に登場している。12 世紀の末ころにキカイガシマの「キ」音の表記が、「貴」「喜」から「鬼」へと変化しており、都人たちの南島観の変化を示している。

8 鎌倉幕府と奄美

元暦二年（1185）三月に平家が壇ノ浦で滅ぶと、源頼朝とその弟義経との対立が深まった。十一月に頼朝は後白河上皇から義経追討の院宣を得て、十二月には義経らの追討と平家の残党鎮圧のために朝廷に守護地頭の設置を認めさせた。義経の与党は次々に滅ぼされ、義経は文治三年（1187）二月平泉の藤原秀衡のもとに身を寄せた。文治三年九月頼朝は、宇都宮信房と鎮西奉行天野遠景に義経の与党が隠れているとされた「貴海島」の追討を命じ、翌年これを平定した。このキカイガシマは喜界町喜界島の可能性が高い。

このあと、頼朝は十二島地頭職を設置した。『平家物語』によれば、集合名称としてのキカイガシマは、口五島と奥七島からなり、口五島は鹿児島県の三島村に、奥七島は鹿児島県十島村に比定されている。また、十二島は、中世的な所領単位では、薩摩国河辺郡に編成されていた。尾張国愛智郡千電郷を本領とする御家人で得宗被官でもあった千電時家の嘉元四年（1306）四月十四日付狀状には、口五島・わさの島・喜界島・大島・永良部島・七島・徳之島・屋久島下郡が見える。千電氏が、島々を支配する根拠は、河辺郡司職を保持する得宗の代官職にあった。

14 世紀初頭に描かれた金沢文庫蔵『日本図』では、「雨見島私領郡」とされた。金沢文庫は、鎮西探

題を輩出した北条一門の金沢氏が設けたもので、得宗被官千竈氏の持つ權益情報などが、得宗周辺で共有されていた。その權益について、島の現地勢力との交易の利潤そのものを果実とする説(村井章介 2019)と、南西諸島と博多などを往復する船が寄港した坊津などで納めていた「交易上分」とする説(黒嶋敏 2014)がある。

9 室町幕府と琉球王国と奄美諸島

島津氏が保持していた十二島地頭職については、文永二年(1265)、文保二年(1318)、元徳三年(1331)の譲状や、延文元年(1356)の足利義詮安堵下文などで確認できる。貞治三年(1364)の島津氏所領注文には「同国河辺郡、同十八島」、同年四月十日付の島津道鑑(貞久)の譲状(師久宛)には、「薩摩国河邊郡【同拾貳島此外五島】」と記されており、14世紀後半に入ると従来の十二島に加えて五島あるいは六島が島津氏の權益の存在する地域として認識されるに至った。五島あるいは六島は奄美諸島のことであり、島津氏もまた奄美諸島における交易に関わり、南九州の在地領主たちも多く関わっていた可能性が高い。

14世紀中葉から肥後の高瀬津が対外交渉の港湾として頻りに登場するようになるが、これは、前期倭寇の猖獗と元末明初の混乱によって東アジア海域が不安定化し、博多—明州(寧波)の「大洋路」に変わって、薩南・琉球列島を經由する「南島路」が利用されたことによる(橋本雄 2005)。

琉球では国家形成の動きが本格化し、南の島々との交通が活発になっていった。『中山世鑑』などには、伝説的記事とはいえ、英祖王の咸淳二年(1266)に「北夷大島、重訳来朝」とあって、奄美諸島との関係の深まりをうかがわせる。

1368年、中国では朱元璋が明を建国し、新たな国際秩序の建設を図るべく周辺諸国に朝貢を求めた。琉球では、1372年に中山王察度、1380年に山南王承察度、1383年に山北王帕尼芝が明に朝貢を開始した。日本では、1392年に南北朝を合一させた室町幕府3代将軍足利義満が、1401年明に朝貢を開始し、明を中心とする国際秩序に加わった。こうした中で、琉球と日本との外交関係が成立してくる。応永十年(1403)、琉球船が武蔵国六浦(横浜市金沢区)に漂着し、翌年には瀬戸内海を航行する「をきなう船」が確認できる。応永二十一年(1414)に将軍足利義持から琉球国の世主(尚思紹)に宛てた文書が発給されており、応永二十七年(1420)に尚思紹から足利将軍宛の文書が出されている。また、応永二十七年(1420)に著された『老松堂日本行録』には、瀬戸内海を航行する琉球船の記載がある。明との国交断絶状態にあった将軍義持の時期に、日明双方が互いの物産を求め、琉球を中継するルートの重要性が高まって、琉球との関係が緊密になった。

これより早く、琉球には日本の信仰が入り、八幡菩薩、伊勢太神、天満天神も祀られるようになり、また琉球の仏教は、日本の禅宗のネットワークに包まれていた(永山修一 2010)。

通説では、1429年中山が山北と山南を滅ぼして琉球を統一したとされる。中山が山北を併せるまで、奄美諸島の一部は山北の影響下にあった可能性が高い。嘉永三年(1850)に沖永良部島でまとめられた『世之主かなし由緒書』によれば、沖永良部島の世の主は、山北王の二男であり、中山王の娘と婚姻関係を結んでいたが、三山統一後まもなく自害したとされ、沖永良部島は中山王の支配下に入ったという。

伝承ではあるが、与論島の城集落について、「北山の帕尼芝王の三男王舅が渡島して、樋口の高所に築城をなし、与論島の豪族の娘と結婚したとされている(野口才蔵 1976に見える林清国・麓桓茂両氏からの聞き取り)。

琉球王国は1441～46年に大島征討を完了し、大島北部の笠利に甘隣伊伯也貴(笠利大屋子)を派遣した。琉球王国の奄美諸島への勢力拡大は、すでにこの地域に權益を持っていた九州以北や在地の勢力

との対立をきびしいものにしていった。『朝鮮王朝実録』端宗元年(1453)五月丁卯条によれば、1450年トカラ列島の臥蛇島に漂着した4人の朝鮮人のうち2人は薩摩に、2人は喜界島征討中の琉球王の弟が滞在していた大島の笠利に連れて行かれて、琉球人が買い取り、琉球王に進上された。この4人は、奴隸として売買されており、倭寇によって掠奪された「被虜人」の売買もさかんに行われていた(真栄平房昭2001)

3年後、琉球国王は、琉球・朝鮮と関わりの深い博多商人道安に託してこの2人を朝鮮に帰国させた。道安は、近年琉球国と薩摩は和睦せず、擄掠が行われていることを述べ、朝鮮に博多～薩摩～琉球の地図を進上した。朝鮮ではこれらをもとに、1471年に『海東諸国記』を作成した(図69)。道安進上の地図と同系統のものに、沖縄県立博物館蔵琉球国図がある。これらの地図には、琉球から奄美海域の島々が詳細に描き込まれ、また航路も描かれている。与論島について、前者には「度九(徳之島のこと)を去る五十五里 国都を去る十五里」、後者には「博多を去る三百七十二里 琉球に至る十五里」と注記されている。

琉球王国は、奄美大島征討に引き続き喜界島征討を進めたが、頑強な抵抗にあった。『中山世鑑』などによれば、1466年に国王自らが遠征して喜界島征討を完了させた。喜界町手久津久地区の中増遺跡・川寺遺跡では、15世紀後葉以降の貿易陶磁器はほとんど出土しておらず(野崎拓司ほか2023)、この遺跡が廃絶する契機は琉球王国による喜界島征討完了であった可能性がある。

『琉球国由来記』によれば、その1466年に泊里主が任命され「大島・徳島・鬼界島・与論島・永良部の年貢等を掌」った。また奄美諸島・琉球国頭・九州方面の船の年貢等を掌る泊御殿という役所もつられ、また大島倉(大島御蔵)という奄美諸島の貢税・物資の取蔵庫もあった。

『朝鮮王朝実録』によれば、1493年ころ、日本の甲兵が奄美大島を奪還するために襲来し、琉球側はこれを撃退したとされる。『おもろさうし』第1に「おきやかもい(尚真王)が「かさり(大島の笠利)」を討ったというおもろがあるが、これが1493年の交戦であった可能性もある。また、『屋宮家自家正統系図』によると、嘉靖年間(1522～1567)に大島東間切諸鈍村の伊喜與保比屋と與牟知喜與兄弟が「一島の土貢を横領し」たため、金武按司と摩文仁親方に追討させ、その後も摩文仁親方は処々で蜂起した「大島残徒」を10年かけて掃討したという。『師玉系図』では嘉靖年間、金武按司と摩文仁親方に、貢物を掠奪した焼内間切の名柄八丸らを追討させたという。

『中山世鑑』によれば、琉球王国支配のもと大島には数名の「酋長」がいたが、その中に対立が生じ、ほかの「酋長」たちが與湾大親の謀反の企てを讒言したので、1537年に王府は軍を派遣して與湾大親を討った。『球陽』尚元王十六年(1572)条には、與湾大親亡き後、大島の同僚が謀叛し貢を絶つたため、王親ら船50余艘を率い征討し、別の「酋長」を立てたとあり、與湾大親を討った後も、琉球王国によ

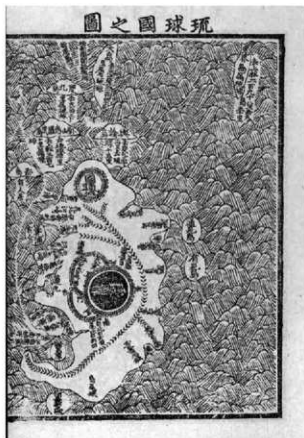


図70『海東諸国記』の「琉球国図」(部分)(国立国会図書館デジタルアーカイブ所蔵)

る大島支配が安定しなかったことを伝えている。

なお、奄美に関する最古の琉球辞令書は嘉靖八年(1529)十二月二十九日付の「ちゃくもい」を大島笠利間切宇宿大屋子に任ずるものである。

国頭より与論・永良部島を掌る「奥渡より上のさばくり(自奥渡上扱理・自奥渡上設理)」職が置かれ、『琉球国由来記』によれば、1539年に毛氏保榮茂親雲上盛実が、これに任命された。なお、『中山世鑑』や「すろつき御門のみなみのひのもの」「添継御門北之碑文」などによれば、尚清王が命じた首里城の添継門の石垣普請には、「奥渡より上」の人々も動員され、1546年に竣工した。

「基家系図」によれば、又吉大主の子花城真三郎が21歳の時首里より与論島に渡って花城與論主となり、その子殿内與論主が真三郎の遺跡を相続したと伝えている。これがいつのことか明らかではないが、又吉大主は尚真王(在位1477～1526)の時代の人とされているので、おおよそ16世紀に入ってからのことと考えられる。

おわりに

与論城は、14世紀後半～15世紀中頃を主体とする城郭遺跡である。こうした城郭を必要とする状況はどのようなものだったのだろうか。

14世紀半ばには、島津氏など九州の勢力が奄美諸島まで力を伸ばし、一方、与論城の王舅伝承にあるように山北の勢力は与論への勢力拡大をおこなった。その後、山北は中山に合わされることになり、沖永良部島の世の主伝承と同じく、与論も中山の勢力下に入ったと考えられる。

さて、徳之島天城町の戸森の線刻画には、多数の船と弓矢が描かれている。描かれている鑑の分析から、14～15世紀の可能性が高く、雁股鑑は南九州人、鷲根の鑑は沖繩人が持っていた可能性が考えられるともされる(木下尚子2019)。

また、ルイス・フロイス『日本史』に収める1552年のコスメ・デ・トルレスの報告には、薩摩国は非常に山が多く貧乏なため、その国の人びとはずっと前から八幡(倭寇のこと)といわれる職業に携わり、シナの沿岸や諸地域へ掠奪商獲に出かけているとあって、「日本図」を収める中国で著された諸資料には、嘉靖二年(1523)の「日本国考略」、嘉靖四十年(1561)の「日本図纂」、嘉靖四十一年(1562)の「籌海図編」、嘉靖四十五年(1566)頃の「日本一鑑」などがあり、いずれも活動を活発化させていた倭寇への対応のために編まれたものである。

さらに、『遣老説伝』第三巻には、王による与論・永良部出兵に従軍した喜屋武間切東辺名村の武勇抜群の者の話がある。『遣老説伝』は18世紀半ばに成立したものであり、この記事に見える与論・永良部出兵がいつ行われたものか不詳であるが、喜屋武間切(沖縄県糸満市)は三山時代では山南に位置しているから、与論・永良部出兵は三山が統一されて以降のことと考えられる。これに関連するか定かではないが、与論島に伝わる「アンジ・ニッチェーの話」では、与論島のニッチェーに住む兄妹のうち、武勇に優れた兄キャラクタードキは首里の王に仕え、按司に任じられたが、与論に帰島後、王府に置いてきた弓を王城に忍び込んで取り戻した。王は怒って、千人の兵を与論に差し向けて兄を殺し、さらに翌年には精兵千人を差し向けて、妹インジュルキを殺した、と伝えられている(榮喜久元1988)。大島や加計呂麻島で見られるように、与論・永良部でも琉球王府の支配に対する抵抗・反抗が起こっていた可能性は高く、これがこのような伝承記事につながると考えられる。

発掘調査から、与論城は14世紀後半から15世紀中頃が主体とされるが、その後も与論城の石垣は高い防御機能を持ち続けていたはずであり、倭寇などに対しても一定の役割を果たした可能性が高いと考えられる。その一方で、耕地・風葬墓や宗教施設としても利用されるようになった。

引用 HP

国立国会図書館デジタルアーカイブ <https://dl.ndl.go.jp/pid/1193135>

参考文献

- 荒川浩和 1998 「正倉院の螺鈿」『正倉院紀要』20
- 池田榮史 2019 「琉球列島史を掘りおこす」中世学研究会編『琉球の中世』高志書院
- 石上英一 2014 『奄美諸島編年資料 古琉球期編上』吉川弘文館
- 亀井明徳 2006 「南島における喜界島の歴史的位置」『東アジアの古代文化』129
- 木下尚子 2019 「戸森の線刻画に描かれた弓矢について」『戸森の線刻画シンポジウム発表資料集』天城町教育委員会
- 黒嶋敏 2014 「鎌倉幕府と南の境界」藤原良章編『中世人の軌跡を歩く』高志書院
- 小園公雄 1988 「中世」『与論町誌』与論町誌編集委員会
- 栄喜久元 1988 「民間説話」『与論町誌』与論町誌編集委員会
- 篠田謙一 2018 「DNA から西南諸島集団の成立」高宮広人編『奄美・沖縄諸島先史学の最前線』南方新社
- 鈴木靖民 2014 「南島人と日本古代国家」『日本古代の周縁史』岩波書店、初出は 1987
- 高梨修 2005 『ヤコウガイの考古学』同成社
- 田中聡 2015 『日本古代の自他認識』塙書房
- 田中史生 2012 『国際交易の古代列島』角川選書 KADOKAWA
- 中里壽克 1995 「古代螺鈿の研究 上」『国華』1199 号
- 中里壽克 1996 「古代螺鈿の研究 下」『国華』1203 号
- 永山修一 1993 「キカイガシマ・イオウガシマ考」笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集 下』吉川弘文館
- 永山修一 2007 「文献から見るキカイガシマと城久遺跡群」『東アジアの古代文化』130
- 永山修一 2010 「中世日本の琉球観」『沖縄県史 古琉球』沖縄県
- 野口才藏 1976 『南島と論島の文化』（私家版）
- 野崎拓司 2023 「総括」『川寺遺跡 1』喜界町教育委員会
- 橋本雄 2005 「肥後地域の国際交流と偽便問題」『中世日本の国際関係』吉川弘文館
- 真栗平房昭 2001 「東アジア海域と倭寇」尾本恵市他『海のアジア 5 越境するネットワーク』岩波書店
- 松尾秀昭 2017 『石鍋が語る中世・ホグット石鍋製作遺跡』新泉社
- 松原信之・野崎拓司・澄田直敏・早田晴樹 2015 『城久遺跡 総括報告書』喜界町教育委員会
- 村井章介 2019 『古琉球 海洋アジアの輝ける王国』KADOKAWA
- 森公章 2010 『遣唐使の光芒』角川学芸出版
- 山内晋次 2009 『日宋貿易と「硫黄の道」』日本史リブレット、山川出版社
- 山里純一 1999 『古代日本と南島の交流』吉川弘文館
- 山里純一 2012a 『古代の琉球弧と東アジア』吉川弘文館
- 山里純一 2012b 「平安時代中期の南蛮人襲撃事件をめぐって」鈴木靖民編『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館

はじめに

日本の歴史では、応仁の乱(1467年)から徳川幕府が誕生する16世紀までを戦国時代と呼ぶ。戦国時代を扱ったNHKの大河ドラマでは、信長の安土城など数多くの城が物語の主要な舞台となっているように、乱世を生き抜くため戦国大名は競って城を築いた。この時代に全国で作られた城は3万以上とみられる。村に一つというほどの数で世界史的にも例を見ない築城数である。この攻防の戦の中で生み出されたさまざまな城は、徳川政権の世になると、幕藩体制のもとで都市や集落などの城下町を抱えた城に統一された。多くの日本人は青空を背景にしてそびえ立つ天守閣や櫓、曲線が美しい石垣と、これを映した水を満々と湛えたお堀が大好きである。江戸時代のお城はその美において日本のお城の到達点である。

全国各地で中世に築城されて、なかには明治時代まで受け継がれた城郭のルーツは実はよく分かっていない。また、日本には古代に山城が築かれているが、そこまで遡って繋がっているかという点、そこには全くつながりがない。古代山城は飛鳥時代から奈良時代にかけて、西日本一帯に築造され、こちらは「き」と読まれた。主に高地につくられたことから古代山城と呼んでいる。軍事的な緊張の中で誕生した城は、その必要性が薄れると忘れ去られる宿命をもっている。つまり、中国や朝鮮半島で発達した城が一度は古代に日本へと伝わったものの、すぐに廃れてしまい、中世になって国内の覇権争いの激化で一からのやり直しのようにして築城されたと考えられる。

このように城は、権力と直接結びついた軍事の象徴でもあり、都市や集落あるいは政治経済や宗教と深く関わっていることから、日本や地域の歴史を探ろうとするときに、城郭の研究は欠かせないのである。ただし、城郭研究では、城主の謎解きなど軍事の拠点というリアルな城郭の本質とは異なる議論がなされることが多い。

与論城についても築城の目的、誰が動員されてどのような戦が想定されるのか、まだまだ分からないことが多い。今後考古学的な調査研究によって城郭の遺構配置を綿密に検討されることが期待される。ここでは日本の城郭研究を概観し、与論城の理解の一助としたい。

1 日本の城郭研究

(1) 軍事研究の始まり

近代以降の日本での軍事研究は、明治新政府に陸軍が創設された時点で本格的に開始された。欧米でも将校教育の一環として過去の戦争経験を学ぶ戦史は重要視されており、日本もこれに倣って軍事変革がなされた明治時代に兵記や戦史の編纂、教育、そして調査研究がなされたのである。

城郭研究も、「本邦城郭史編纂委員会」を陸軍省に設置して、古絵図等の資料収集や研究を進めていた。

しかし、敗戦により中断を余儀なくされることになる。ただし、戦災を免れたその膨大な成果の一部が国立国会図書館の所蔵となり、現在『日本城郭史資料』として公開されている。いずれにせよ戦前は旧日本軍、戦後は防衛省・自衛隊の軍事組織によって独占・継続されており、これに一部戦史マニアを含めた人たちが主流となっている。

(2) 大学と軍事研究

一方、大学等の教育研究機関の場合には、とりわけ歴史学では戦前に軍部が研究を進めていた経緯もあり、立ち入らなかつたのである。ただし、戦前も現存している天守閣や城門建築を対象に、それまで神社仏閣が主流だった建築史の分野で城郭建築の調査研究は行われていたのである。戦後になると、皇

国史観を主流に戦争に加担した反省から、軍事や戦争にかかわる研究とは一線を画すようになり、軍事史科目等の軍事関係の教育がなされることはなく、アンタッチャブルな扱いとなっていた。そのため、歴史学の中でも城郭研究は正面から避けられる傾向にあった。こうして城郭研究は地域の郷土史家や在野の研究者に委ねられ、城や城主の歴史を明らかにすることがなされていた。

(3) 行政調査による蓄積

状況が大きく変わったのは、1950年代後半に高度成長期へと突入した時代を迎えてからである。高速道路の建設が象徴するように各地で団地造成や工業団地等の大規模開発が行われ、その中に山中に位置する山城等の城郭も開発範囲に含まれるようになっていった。そのため、土塁や堀などの遺構が明確な城郭も開発によって失われるために、行政による記録保存発掘が各地で実施されるようになった。

当初は考古学の対象といえば登呂遺跡のような弥生時代の遺跡や縄文時代・古墳時代の遺跡であったが、1970年代以降になると中世の山城も開発されて破壊される前に緊急調査として緊急調査の対象となり行政の課題となったのである。この中世山城の発掘調査では、多量の土器や陶磁器、金属器や木製品も出土し、城の各所の機能や性格を明らかにしただけでなく、遠隔地で生産された製品が出土した場合には、生産地との交流も分析されるようになってきた。現在では、同時期の周辺遺跡と合わせて検討し、城主の経済基盤を明らかにしている。こうして中世社会における地域史の構築が可能となったために、中世城郭は、グスクも含めて歴史的に重要な学問対象と認識されるようになってきたのである。

(4) 縄張り図研究

ところで、城郭研究のうえで日本独自の発展を遂げているのが、縄張り図研究である。縄張りとは、城館の活動の場となった曲輪と呼ぶ平坦面や、曲輪周囲の堀などの区画・防衛施設、曲輪への出入り口や通路などで構成される遺構配置のことで、これを地形図に掲載したものを縄張り図と呼んでいる。縄張り図は、地表観察で確認した城館の遺構や関連する地形を簡易な測量によって、既存の地形図上に遺構を記録したものである。精度は劣るが一人でも作成でき城郭全体の概要を縄張り図で示すことが可能である。

城郭の縄張り図作成は、戦後に民間学として発達してきた。大学等の研究機関や行政にも属していないいわゆる日曜日の研究者の手によって、全国の城郭が踏査され、城郭の概要が縄張り図となり、比較が検討されてきたのである。先述したように長い間考古学の対象外であり行政の専門家も、今そこに危機のない城郭を踏査する必要性もなかったのである。そして、この城郭愛好家によって、その情報は蓄積されていき、現地踏査の方法や城郭の見方がさらに鍛えられていったのであった。現在では、行政による城郭測量の一つの研究スタイルと認知され、各県単位で作成される城館の悉皆調査（全部の城館の概要調査）の報告書に掲載されている。

以上、簡単に記したが、城館を軍事研究の対象とするのは、抵抗が多かったが近年では城館の本質である軍事的属性を正面から捉える研究も縄張り図研究の成果として行われるようになってきた。

2 古代の山城

日本の城郭の嚆矢ともいえるのは、7世紀から8世紀にかけて、西日本に築かれた山城を古代山城とよぶ。史料では「城(き)」とよび、その造営を「築城」と記す。築が土を突き固める意であり、城の文字も土から成ると記している。土塁などの城壁を主体とした施設を「城」と称したとみられる。築城の目的は、東アジアの緊迫する情勢を背景に、ヤマト政権によって外敵の侵入を防ぐことにあったが、地域支配の拠点づくりにも大きな役割を果たしたと考えられている。

(1) 分布

古代山城の分布は、日本海側には見られず、九州北部と瀬戸内地域に集中している(図71)。九州北部では、対馬の金田城を除いて内陸部に位置し、大宰府地域を中心とした放射状の配置となる(図70)。また、瀬戸内地域では中国地方と四国に帯状に配置されている。こうした分布から、朝鮮半島から畿内にいたる主要ルートの防御を目的にしていたことがうかがえる。

(2) 立地

古代山城は、戦略上の要所が選ばれている。そのため、近接する交通路との深い関係があり、古代の駅路が通過する位置に設けられた山城もある。また、こうした主要官道だけでなく、人里を離れた山道や間道との関係も考慮しておく必要がある。古代山城の立地は、城壁線と地形の関係によって分類されることが多い。古くは、朝鮮半島の山城の分類に準じ、城壁が谷を大きく取り込む包谷式と、山頂部を巡る鉢巻式とに分けられていた。近年では、城壁全周の規模と標高から、規模が大きく比較的高い位置を占地した一群と、規模が小さく平地に接する一群に分けられている。前者は自然地形の険しさを生かし、実戦的である。後者は防御性を保っているとはいえ、城塞には向きな立地にある。これに以外に、城壁の構造や施工などの細部を加味した分類もなされている。また、守備範囲を視野におさめる眺望と同時に、交通路や周辺地域からの視覚効果も立地を考える上で重要な視点となっている。

(3) 朝鮮式山城

山城については、665年の長門城・大野城・基肆城の築城記事を嚆矢として、9世紀末までに、14城についての築城や修築、廃城に関する記事が散見される。所在がわかっているのは、このうちの7城ある。これらの古代山城の築城技術については、山岳地形に富んだ朝鮮半島で発達した山城の築城に系譜が求められ、大野城や基肆城の築城には、百済の亡命武官のかかわりが記されている。こうした朝鮮半島の山城との共通性から、これらの古代山城を朝鮮式山城とよんでいる。

(4) 神籠石系山城

一方で、史料に記載のない16の山城も発見されている。城壁線に列石をめぐらす特徴がある。明治時代にこれを靈域とする論者によって「神籠石」の名称がつけられた。しかし、発掘調査によって古代山城と位置づけられるようになってからは、神籠石系山城の名称が定着している。各遺跡の調査では、7世紀中頃～8世紀前半の土器が出土する傾向にある。築城時期については、大きくは、朝鮮式山城の築城より古いとする説と、新しく考える説に分かれる。

(5) 外郭線

古代山城は単郭を基本とし、外郭線が数kmに及ぶという特徴がある。ただし、平地から見て背後に当たる一部分などに、城壁が見えたらず、外郭線が全周しない山城もある。自然地形を最大限に利用するとともに、視覚的效果を考慮した結果と思われる。

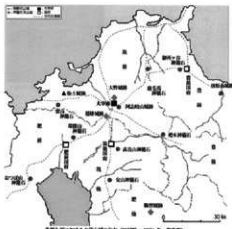


図71 古代山城と官道の位置関係図(第4回古代山城サミット高松大会実行委員会編2013より引用)



- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------------|-------------|
| 朝鮮式山城 | | 神籠石系山城 | | |
| 1 長安城 | 14 基肆城 | 2 鞍山 | 9 石城山神籠石 | (15) 雲山神籠石 |
| 5 栗原城 | 21 鞆城 | 3 大瀬川 | 9 廣原山神籠石 | (16) 赤木神籠石 |
| 12 大野城 | 22 倉田城 | 山籠石 | (10) 御用ヶ谷神籠石 | (17) 鳥島山神籠石 |
| | | 4 赤松山 | (11) 鹿毛山神籠石 | (18) 心山神籠石 |
| | | 6 栗原山 | (12) 阿波山神籠石 | (19) 栗原山神籠石 |
| | | 7 赤松山 | | (20) おつ山神籠石 |
- ※()内の山城は所在地不明の朝鮮式山城
※鳥籠石の番号は古代山城の図録に同一番号の一覧中の番号と対応する。

図72 古代山城分布図(第4回古代山城サミット高松大会実行委員会編2013より引用)

城壁は、土塁が一般的である(写真39)。金田城のように、城壁がすべて石塁^{せきらい}で築かれることもある(写真40)。土塁は、尾根の高所や支峰^{せりやうち}を内側に取り囲み、尾根の斜面を整えて盛り土して構築される例が多い。内外に両壁を築く構造(夾築構造)と、斜面に低い盛り土をして外壁を築く構造(内托構造)があり、後者の例が多い。

また、土塁外底部に列石を据える山城がある(写真40)。石材は自然石から切石まで、加工の度合いは多様である。列石が並ぶ視覚的效果を重視した山城もあれば、列石が土塁に覆われて外部に露出していない事例もある。外郭線では直線を基調に多角形状にのびるもの(折れ構造)と曲線的にのびる構造の、二つの施工方法が見られる。前者は瀬戸内地方の山城に多く見られ、後者は九州北部の山城に多い。進入路にあたる谷部では、土塁ではなく、強固な石塁の水門を設けることが多い。鹿毛馬神龍石のように、列石土塁に石組み暗渠を通す例もある。

(6) 城門・角楼

外郭線でもっとも重要な施設が城門である。門の形式には掘立柱構造と礎石建ちがあり、大野城では掘立柱式から荘厳性を高めた門に建て替えられている(写真42)。

古代山城の城門には、門扉の軸や方立などを受ける仕口を造り出した唐居敷^{からいしき}が付属することが多い。礎石建ちの場合、礎石と唐居敷を一石でつくる事例が多い。掘立柱構造の場合は、唐居敷に柱の断面形状を示す欠込が施される。これらによって、柱が円柱か角柱かが判明する。

門の床面は、段差のない形式(平門式)が一般的だが、大野城をはじめ、鬼ノ城・屋嶋城では、防御性を重視して急峻な段を設けた例(懸門式)も見つかっている(写真43)。そのほか、蹴放^{きめじょう}を造り出すものや、床面の石敷に階段を設けた大野城・金田城・鬼ノ城の例もある。このほか、外郭線には、一部に角楼などの張り出し部を設け、横矢掛けあるいは物見のための施設としていることもある。



写真39 大野城の土塁 (松川他 2015 より引用)



写真40 金田城の石塁 (赤司撮影)



写真41 高良山神龍石の列石 (赤司撮影)



写真42 大野城太宰府口城門 (九州歴史資料館編1988)

(7) 東北の城柵

古代の東日本には城柵が蝦夷や樺戸などの移民の支配統括を目的に、日本海側の越後と出羽、太平洋側の陸奥国北半に設置された軍事・行政の拠点である(写真44)。その築造は段階的に北上し、設置後は郡がたてられ、行政区分による地域支配が行われることになる。

その構造は、基本的に政庁とその外側の外郭官衙を区画施設で囲む二重構造を基本としている。史料上の初見は647年の越後国淳足柵(新潟県)の設置である。考古学的には9世紀代までの間で、立地や基本構造の変化、周辺施設を含めた変遷が明らかになっている。律令国家による地域支配のあり方や地域の様相を反映しているものと考えられる。

1段階は朝貢した蝦夷への饗応の場、2段階は荘厳化だけでなく実務要素が付加される。3段階では軍事機能が強化され、4段階では再び饗応機能が強化されている。このように城柵も軍事機能に加えて様々な機能や性格が時代的に変遷しているのである。



写真43 復元整備された屋島城の懸門(高松市教育委員会2008より引用)



写真44 弘田柵(赤司撮影)

3 中世の城館等

(1) 城

中世の各地域で政治拠点である領主の居館は、戦闘に備えて濠を設けるなど防御機能を強めていった。別の見方をすれば防御しやすい立地を選んで居館を構えるなど、防御拠点としての城館になっていった。東北北部では10世紀後半には防御機能を強化した居館がみられるが、全国的には14世紀以降に顕著となる。居館の防御施設の規模や内容は地域や領主によって大きく異なる。このうち、山地に立地する居館を山城と呼ぶ(図72)。

そして16世紀以降の信長・秀吉の全国統一の過程で城館構造は飛躍的に発展した。安土城では山全体を大規模に造成し石垣を伴う曲輪を設け、瓦葺きの天主を築き、ここを本丸にして城内に有力家臣の居館、城下にはそのほかの家臣団や庶民の居住地域も設けられた。階層による空間構成が出現するなど、近世にいたる城郭の基本形が誕生した。その後江戸幕府の成立とともに、全国へと定着し城郭を中心とした近世の城下町が各地に形成されることになるのである。

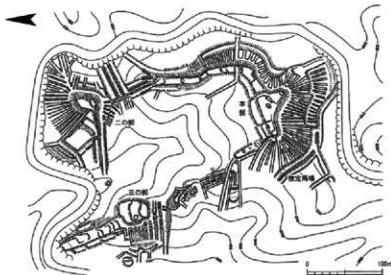


図73 長野城縄張り図(福岡県教育委員会2016より引用)

弥生時代併行期の北海道と奄美・沖縄では水田稲作が定着せず本州とは異なる文化が形成されている。中世併行期には北海道ではチャシ、奄美・沖縄ではグスクが展開される。

(2) 北海道のチャシ

グスク以外では、チャシは河川や海を臨んだ眺望のよい丘陵に立地して、濠や溝を伴っている(写真45)。構造は比較的単純で小規模なものが多い。内部に建物が立つものもある。大変興味深いのは17世紀のエクエピラチャシである。3つの曲輪を有し、長さ150mのチャシでは最大級の規模を誇る。各曲輪には濠が廻りその外側に掘り上げた土を盛って土塁とする。一般的な山城は土塁の外に濠があるが、まるで弥生時代の環濠集落の土塁と同じである。

チャシは祈りの場やサケの見張りから始まり、コタンの抗争の過程で軍事施設として機能するようになる。



写真45 ランネモトチャシ(赤司撮影)

4 グスクの成立と与論城

(1) 南島木簡

大宰府跡の発掘出土品に、730年頃の「奄美嶋・伊藍嶋」と墨書された付札木簡がある。遠く離れた南島から大宰府政庁に何らかの産物が運ばれてきた証跡である。考古学的にも大変興味深い。それは、1,300年前の古代の南島は未だ狩猟採集生活の社会と考えられていた。ところが、大宰府を窓口にして朝廷と朝貢関係を結ぶ政治的な社会の存在が南島に成立していたとみられるからであった。

近年、奄美群島の調査では、大島のヤコウガイ製作遺跡や、喜界島の城久遺跡が注目されている。日本の境界領域にある奄美諸島が、本土と琉球を含む南島との古代から中世にかけての接触の場だったことが少しずつ明らかになってきている。城久遺跡からは300種を超える掘立柱建物や再葬墓、鍛冶炉遺構などが8世紀後半から15世紀までの長期間(3時期に区分できる)の遺構が確認されている。8世紀後半の出土土器は、在地土器を全く含まず、福岡の大宰府跡から出土する官衙特有の土器様式である。しかも、10世紀前半には中国の越州窯系青磁も出土している。8世紀から10世紀には、大宰府による南島支配の先機関がここに置かれた可能性が高い。

(2) 南島物産と博多交易

さて、九州本土の交易拠点は、11世紀中頃に降って大宰府が管理した鴻臚館から、東の博多津へと中心が移る。主役は宋の商人達に替わっていき、いわゆるチャイナタウンが形成されるようになる。喜界島の城久遺跡では、11世紀後半から12世紀初頭にかけての中国製白磁碗や滑石鍋や滑石混入土器、鉄器、カムイヤキと呼ぶ南島須恵器などとともに、高麗青磁・高麗陶器が出土している。これらの製品は中世の博多や中世の大宰府などの都市で顕著なものである。特に高麗青磁は初期高麗青磁で、琉球列島では初めての出土である。ことから、これらの出土遺物は博多商人(宋商人を含む)が南島物産を入手した対価の意味が強い。

この時期には高麗陶器を模倣したカムイヤキと呼ぶ初めての陶器が徳之島で生産され、琉球列島全域で流通するようになる。また煮炊きの鍋としてすぐれた滑石混入土器も生産されている。このように高麗・九州・南島を結ぶ交易ルートで人や物の接触が、南島の生活様式を変え、間接的には在地領主が成立するグスク社会へと変貌した。喜界島はそのファーストインパクトの地点だったと考えられる。

与論城の立地は急崖に面した台地であって、崖面も石垣を多重に設けるなどその縄張りには工夫がみ

られる。グスク社会が進展していく中で、権力争いが激化し、政治の攻防の拠点となるグスクを按司たちは競って強固にしようとした意図が読み取れる。

おわりに —与論城を解明するために—

古代山城は、古代国家が対外戦争に備えるという大義名分で各地に築城している。城郭は基本的に権力者が軍事的緊張の中で自分たちを守るために、戦略的な拠点としてあるいは戦術的な理由で築いている。言い替えるならば攻めてくる敵が居る限り城は存続するのである。緊張状態が長引けば、攻防の経験によって城の防禦はより強固なものに作り替えられるので、現在見えている姿が最初の姿と考えてはいけない。あくまでも城の機能が失われた段階での姿である。



写真 46 与論城石垣 (赤司撮影)

また、城はグスクを含めて支配の拠点という観点でとらえられるが、やはり地域の権力者が軍事的な必要性から築城したのが城の本質と考えた方がよい。そのような視点で与論城は追究するべきだと考える。実は残念なことに、9割以上の城は、いつ頃・誰が・どのような目的で・どのように築いたのかは分からない。ましてや廃城の理由はさらに分からないのである。ほとんどの城の来歴はあてにはならないことが多い。それは史料が少なく、多くの場合は地元の言い伝えて、何時の時代の伝承なのか確認はないからである。

与論城の築城で考えなければならない課題は、戦略（選地・縄張り等）、築城技術（土木技術・石積み）、そして兵力（労働力）の確保がある。土木技術の系譜を明らかにする必要がある。また、攻防を想定したグスクの兵力はどのようなものだったのだろうか、武器武具はどのようなものか、動員される人たちは何人ぐらいで、どこに住んでいたのか。

与論城にはサンゴ石を積んだ石垣が築かれている（写真 46）。その理由も考える必要がある。攻めてくる敵を迎え撃つための防禦線としては、実は自然石を乱積みした石垣は脆弱で手をかけやすく、夜襲をかけるときなど登って超えることが可能である。その点では土塁の方が登りにくいのである。ではなぜ、石垣にしたのか。当時の技術的動向や見るものに威圧感を与えるためというのは考えにくい。城は軍事施設であるという前提にたてば、必要だから石垣を用いたという結論が出る。必要性は何か。土木の見地から考える必要がある。もちろん、時期的変遷のなかでは格を高めるという性格がないとは言えないが、まずは軍事的な理由から考えるべきである。

参考文献

- 赤司善彦 2018 「古代山城とGIS」『大宰府の研究』古志書院
- 赤司善彦 2019 「大宰府と古代山城の誕生」『大宰府学研究』九州国立博物館
- 九州歴史資料館編 1988 『大宰府 発掘が語る遠の朝廷』九州歴史資料館
- 高松市教育委員会 2008 『屋嶋城跡Ⅱ - 史跡天然記念物屋嶋基礎調査事業調査報告書Ⅱ -』高松市教育委員会
- 福岡県教育委員会 2016 『福岡県の中近世城館跡 - 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書 3 -』福岡県文化財調査報告書254, 福岡県教育委員会
- 西股總生 2013 『「城取り」の軍事学』学研パブリッシング
- 松川博一・井形進・岡田諭・岡寺良・小澤佳憲・小田和利・酒井芳司・下原幸裕・杉原敏之・赤司善彦・入佐友一郎 2015 『大宰府史跡ガイドブック 2 特別史跡大野城跡』九州歴史資料館
- 文化庁文化財部記念物課 2013 『発掘調査のてびきー各種遺構編ー』

第7章 統括

本章では、第1章～第6章の成果を踏まえ、与論城跡の歴史的な特徴や今後の展望を述べる。

第1節 与論城跡の構造

与論城跡は、伝承では琉球国山北王の三男王舅や尚真王代の人物とされる花城真三郎が築城したと伝わる城跡（グスク）である。城跡は与論島の南側、標高93mの台地の縁辺部に立地しており、辻宮断層の断層崖を取り込む縄張り構造を持つ。その特徴から、「台地部分」と断層崖とその間の平坦面の「崖下部分」、公園地の周辺部に区分できる。台地部分は神社のある地区（地区1）を中心に他の地区が取り巻く空間構造を持つ点は沖繩のグスクの影響が考えられる。このような城内の空間構造は、同じ北限のグスクである沖永良部の後蘭孫八グスクでは認められない（第6章第1節、図75）。

第2節 与論城跡の発掘調査成果

- ① 主な城域面積は約23,000㎡。崖下部分の掘え方では30,000㎡に広がる可能もある（図73）。
- ② 構築技法としては沖繩のグスクで用いられる技法（裏込めを伴う石垣や盛り土造成）が用いられる。
- ③ 城の外郭となる石垣は、地形を利用しながら平坦面や谷筋を防ぐように高さ2・3m以上の野面積みの石垣を配置している。また、石垣の外側側面は面が揃うように構築される。
- ④ 台地部分や崖下部分で城の造成に伴う整地層や14世紀から15世紀前半の柱穴跡などが確認された。
- ⑤ 遺物は12世紀頃から出土するが、13世紀頃（大宰府分類青磁碗Ⅱ類、カムイヤキ）から少量ずつ出土。14世紀以降に遺物量が増加（沖繩分類青磁碗Ⅳ類・ピロースクタイプⅢ類白磁）、14世紀中頃から15世紀後半にかけての時期（沖繩分類青磁碗Ⅳ'類～Ⅴ類）が最も出土量が多くなる（表10）。しかし、15世紀後半から17世紀（沖繩分類青磁碗Ⅵ類、白磁D群、明代の青花）は出土量が激減する。
- ⑥ 奄美群島では出土量が限られる今帰仁タイプやピロースクタイプの白磁（新里2018）が出土。脊椎動物骨遺体や貝類遺体の組成が今帰仁グスクの地区（曲輪）毎の差異と同様の傾向が認められる。
- ⑦ 輪の羽口や貝製品、金属製品（鉄製品・銅製品）、ガラス製品など、多様な遺物が出土していることから、城内に工房や祭祀に関わるような建物が存在した可能性がある。
- ⑧ 出土遺物や整地時期、遺構年代から、与論城跡の活用時期はⅠ期から近現代および現在のⅥ期に区分できる。この内、Ⅲ期（14世紀後半～15世紀中頃）が最盛期と考えられる。
- ⑨ 周辺部では、現在の十五夜通り保存館周辺（トレンチ21～24）で13～15世紀頃の柱穴跡や土坑状遺構が確認されたことから、城跡と同時期に利用が行われていた。15世紀後半以降の遺物も多い。
- ⑩ 奄美群島では与論城跡の他に奄美市で赤木名城跡、辺留グスク、万屋グスクなどの調査が行われているが、与論城跡に匹敵する規模の城跡は確認されていない。また、沖繩本島北部では国頭村の根謝銘グスクや名護市の名護グスク、今帰仁村の今帰仁グスクで調査が行われているものの、今帰仁グスクで数段階にわたる造成行為が確認されたのみで、他のグスクについての詳細は明らかではない。この点において、与論城跡は沖繩本島北部に分布する石積みをも有するグスクの影響を受けた北限の大型グスクであり、数次にわたる造成の過程が明確となった奄美群島唯一の城跡である。

第3節 与論城跡の各期の特徴

発掘調査で確認された城の構築方法や遺物組成から、与論城跡は沖繩の影響を受けて構築・利用されたと考えられる。各論を踏まえながら与論城跡のⅠ～Ⅴ期の特徴についてまとめる。

与論城跡Ⅰ期（12世紀～13世紀後半）

与論城跡の中で人の利用が確認できる最初期で、奄美・沖繩地域に大きな社会変動が生じ、沖繩史で「グスク時代」に移る時期である。この時期には城郭遺跡としての「グスク」は沖繩・奄美地域では確認できないことや、出土遺物量もⅡ期以降に比べて少なく、柱穴跡（トレンチ21のSP2）が確認された周

辺部の平坦面を中心に集落の一部として利用されていたと考えられる。

与論城跡Ⅱ期（14世紀前半～中頃）

遺物の出土量が増加し、台地部分を中心に造成が始まる時期で、主に地区2で岩盤を埋める造成層や柱状の掘り込み遺構（トレンチ2のSP2）が確認されている。この時期は沖縄でも石積みで囲まれたグスクの構築が始まることから、沖縄側の社会変動に連動した動向と考えられる。

城の造成が行われる一方で、黒住が指摘するように造成後の生活層（Ⅱ層）では、岩盤のフィシャーを埋める造成層（Ⅲb-3層）から出土したヨロンジママイマイ・シュリマイマイが確認できないことから（第5章第2節）、築城行為により城跡周辺の自然環境（森林）が大きく変動したと考えられる。

与論城跡Ⅲ期（14世紀後半～15世紀中頃）

崖下部分の整地・建物構築が行われ、現在の城域が整備された時期と考えられる。青磁の器種の多様化や備前焼鉢鉢、ガラス製品、石製品（ベンガラ付着の製品）、鏝・刀子や素文鏡などの金属製品が認められ、複数回の整地行為が行われていることから、利用が最も盛んであったと考えられる。

この時期、沖縄本島では山北・中山・山南の各勢力が明に相次いで朝貢を行っていた三山時代にあたる。日本本土は、南北朝の動乱によって前期倭寇が激しさを増し、日明貿易の航路は大洋路に加えて南洋路の利用が活発になる。このことを示すように、15世紀中頃の朝鮮から日本（九州島）を経て沖縄に至る海路図が記載されている『海東諸国紀』や『琉球国図』には奄美群島の島々と与論島が航路上の島として記載されている。加えて、三山の各勢力が明への重要な輸出品としていた硫黄の産地である硫黄島島は、沖永良部島と徳之島間の西側に位置しており、奄美群島は貿易品の確保の上でも重要な地域であったと考えられる。

また、同時期の沖縄本島北部や奄美群島で、与論城跡と同規模以上の造成行為が確認されているのは今帰仁グスクであり、脊椎動物骨遺体や貝類遺体の検出状況も今帰仁グスクと似た傾向が確認された（第5章第1節・同章第2節）。伝承においても、与論城跡を山北王の三男の王舅が築城したと伝わること、山北王の次男が沖永良部島を治めた永良部世の主（真松千代）と伝わることを踏まえると、山北の勢力が奄美群島方面へ進出する足掛かりとして人員を派遣して城跡を整備した可能性がある。

一方で、池田や赤司が指摘するように与論城跡の防御性・正面性は、断層崖がそそり立つ城跡の西側から南側の海城方面が想定される（第6章第1節、同章第2節）。この方向は、今帰仁グスクが位置する本部半島方面であり、沖縄側を意識して構築したことも考えられる。また、島の南西側は主な港湾・入り江が集中することから、港や沖合いを通る船への監視や、永山が指摘する倭寇対策の意味合いも考えられる（第6章第3節）。このように、与論城跡の南側に対する防御意識は、今帰仁を含めた沖縄本島北部地域や周辺海域に対する警戒の意味合いが想定される。

与論城跡Ⅳ期（15世紀後半～16世紀）

出土量が減少し利用が低調になるが、15世紀後半までは城内で遺物が散発的に出土する。このことは、琉球国が尚巴志によって統一された15世紀中頃以降は遺物が極端に少なくなることを示している。

町内に残る系図上の伝承では、尚真王代の頃に沖縄から渡来した花城真三郎が与論城跡を築城したと伝わる（第3章第1節）。この時期は、第一尚氏王統の尚徳王による喜界島親征や、第二尚氏王統の奄美大島や喜界島への征討が行われたとされる時期に当たることから、池田が指摘するように中山王権との関りの中で何かしら城跡が利用されていた可能（第6章第1節）が想定されるとともに、琉球国側からすれば、北へ進出する足掛かりとしての役割を終え、城跡の役割が変化した可能性がある。

与論城跡Ⅴ期（17世紀～18世紀）

1609年の島津氏による琉球侵攻以降、与論島以北の奄美群島は薩摩藩の直接統治下に置かれる。与論島にも代官が派遣され、地元の役人層を花城真三郎の子孫が務め、これらの一族は各家に屋号を有して与論城跡の東側に集住したことにより（図5）、城跡の周辺は与論島の中心地となる。一方で城内は、崖下部分が周辺集落住民の墓地となり（崖下の石垣はこの時期に一部改変か）、城内外の平坦面は耕作

地や、岩場を茅場、湿地近くは糸芭蕉栽培のためのバシヤヤマとして利用される。また、城内の通路は集落の住民が崖下の畑地や海岸（現在の立長集落方面）に通うための里道として用いられ、城内が生活空間の一部に取り込まれる。しかし、城跡に関する伝承が伝わるように（第2章第2節、第6章第2節）、城跡であった意識は残されていた。

また、この時期の陶磁器類の産地は沖縄産を中心に、本土産（主に薩摩や肥前）、中国産など多様であり、近世日本と琉球の境界に位置する与論島の状況を示している。

与論城跡VI期（19世紀～現在）

幕末から明治期以降、城内は地区1・2の石垣の積み換えや整地など神社地としての整備が進むとともに、城内外は引き続き地域住民の信仰や生活の空間の一部として利用された。「与論の十五夜踊」も明治以降に地区2の広場で行われるようになる。太平洋戦争後、昭和26年に奄美群島が日本国に復帰すると、与論城跡の南側沖合を通る北緯27度線が沖縄復帰の昭和47年まで国境となり、与論城跡の周辺は沖縄復帰運動でかがり火を焚く最前線となる。沖縄復帰後の与論城跡は公園整備等が進められ、現在は神社・伝統芸能の奉納地・イベント会場・墓地・観光地として利用されている（第6章第2節）。

第4節 与論城跡の歴史的位置づけ

与論島を含む奄美群島は、沖縄や日本本土との歴史・文化の境界に位置しており、双方の影響を受けつつ独自の地域文化と歴史の歩みを持つ。与論島は奄美群島最南端で、与論城跡は島内でも南側の沖縄本島を望む台地上に立地している。与論城跡の調査結果から、城郭としての機能は14世紀代から整備され、14世紀末から15世紀中頃を最盛期とし、石垣を防御施設の中心とした琉球の影響のもと築造されたグスクであることが確認された。

この時期の当該地域を取り巻く情勢は、明による東シナ海域の秩序の再編が起り、日本本土では島津氏など九州島の勢力が交易などを通じて南へ勢力を伸ばすとともに、沖縄本島では明との朝貢貿易で勢力を伸ばした三山の各勢力が競い合う三山時代から、尚巴志による三山統一など、与論島を含む奄美地域は中国、日本、沖縄の動向に対応しなくてはならない政治的緊張の高い地域であったといえる。

与論城跡の考古学的特徴や形態、伝承は、沖縄本島とくに山北との関係を伺わせる。一方で、琉球王国が奄美群島北部へ侵攻した15世紀中頃以降は城跡の利用が低調となることから、城跡の役割に変化が生じたと考えられる。境界城の城郭としての与論城跡の役割は時期によって変化が生じており、歴史的なアジア社会状況の変化に連動した城郭であった可能性が想定される。

第5節 与論城跡の保存・活用の現状と展望

現在与論城跡は、城跡の一部は町指定文化財に指定されているが、指定が行われたのは昭和51（1976）年であり、この頃は崖下部分は把握されていない。

また、VI期以降の公園・墓地整備事業によって、台地部分の一部や周辺部のサザンクロスセンター以東の大半は公有地化が占めるものの、崖下部分は全て民有地である（図74）。公有地が多い台地部分においても神社地や墓地、土俵が所在し、「与論の十五夜踊」の奉納場所でもあることから、様々な組織・団体・個人が関わりをもつ状況にある。それだけ与論城跡は与論町民にとって身近な親しまれている場所なのである。加えて、高台にある立地と眺望の良さから日中は町内有数の景勝地として、また、夜は星空ガイドのスポットといった、観光客も訪れる観光地としても活用されている。

今後は、城跡の持つ豊かな文化財として価値を踏まえた城域全体の保護と整備、管理、普及啓発活動を行う必要がある。城跡の発掘調査時には、地権者を始めとする地域の多くの方から「シマノタメエクトウ キバツテタバーリ（島のために 頑張って下さい）」とお声がけ頂いた。今後、地域に調査成果の還元を行うとともに、後の世代まで町民に親しんで貰える場として、また、本町の重要な産業である観光の文化資源資源の磨き上げを図る場として、与論城跡の保護・整備・活用に努めたい。

引用 HP

国土地理地図 <https://maps.gsi.go.jp/>

引用文献

奄美市教育委員会 2009『赤木名城跡』奄美市文化財叢書6, 奄美市教育委員会

大宜見市教育委員会 2022『村内遺跡詳細分布調査報告書-根謝銘城跡保存目的調査および開発に伴う試掘調査報告-』大宜味村文化財調査報告書第9集, 大宜味村教育委員会

新里亮人 2018『琉球国成立前夜の考古学』同成社

今帰仁村教育委員会 2011『今帰仁城跡発掘調査報告V』今帰仁村文化財調査報告書第29集, 今帰仁村教育委員会

名護市教育委員会 2021『ナングシク遺跡群-市内遺跡詳細分布調査報告書-』

名護市文化財調査報告書第28集, 名護市教育委員会

南勇輔 2022『神永良部島・与論島における城郭遺跡の検討』『南島考古- 嵩元政秀先生追悼号-』第41号, 沖縄考古学会

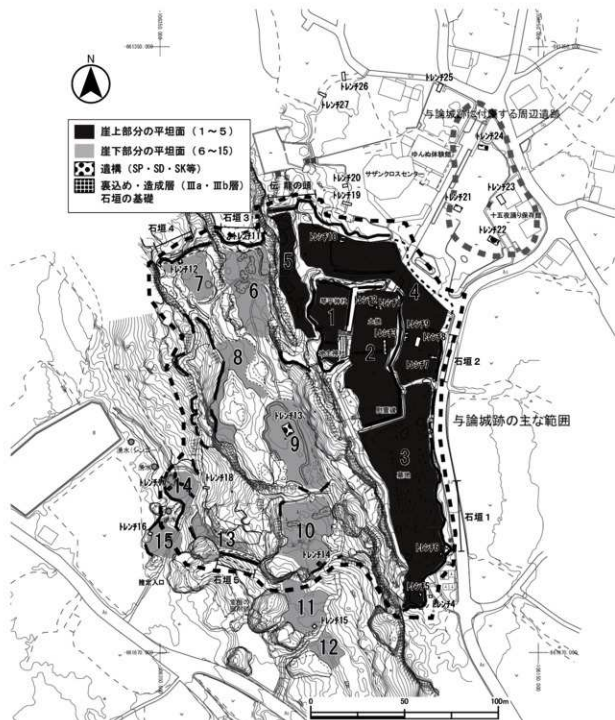
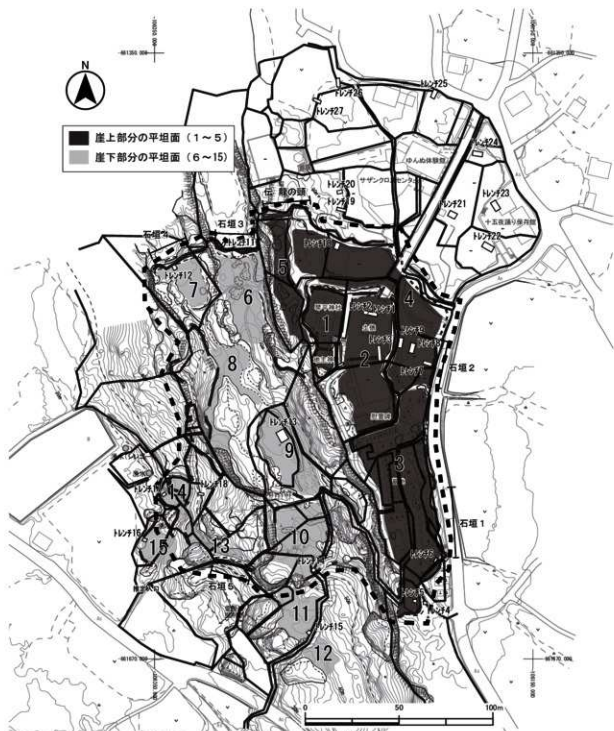


図 74 与論城跡の主な範囲



地区	現状	構造物等	地区	現状	構造物等	
1	神社地（一部公有地含む）	地主神社・琴平神社	6	原野（私有地）	畑地跡・石壇 3・崖下へ降りる通路	
台地部分	2 公園（公有地・境内地）	慰霊碑・土俵・十五夜講りの奉納場所	7	原野（私有地）	畑地跡・石壇 4・崖下へ降りる通路	
3	墓地・公園（公有地・私有地）	墓地・日本霊癩の記念碑等・石壇 1	8	原野（私有地）	畑地跡	
4	公園・牧草地（公有地・私有地）	公衆トイレ・石壇 2	9	原野（私有地）	畑地跡・崖下へ降りる通路	
5	原野（私有地）	崖下へ降りる通路・石壇（籠の頭）	崖下部分	10	原野（私有地）	畑地及び墓地跡
			11	原野（私有地）	畑地及び墓地跡・崖下へ降りる通路	
			12	原野（私有地）	畑地及び墓地跡・崖下へ降りる通路	
			13	原野（私有地）	墓地跡・石壇 13・崖下へ降りる通路	
			14	原野（私有地）	畑地及び墓地跡・湧水地・崖下へ降りる通路	
			15	原野（私有地）	畑地跡・崖下へ降りる通路	

図 75 与論城跡の主な範囲と土地境界（崖下部分の筆が大きい箇所は旧畑地、小さい筆は風葬墓として利用）

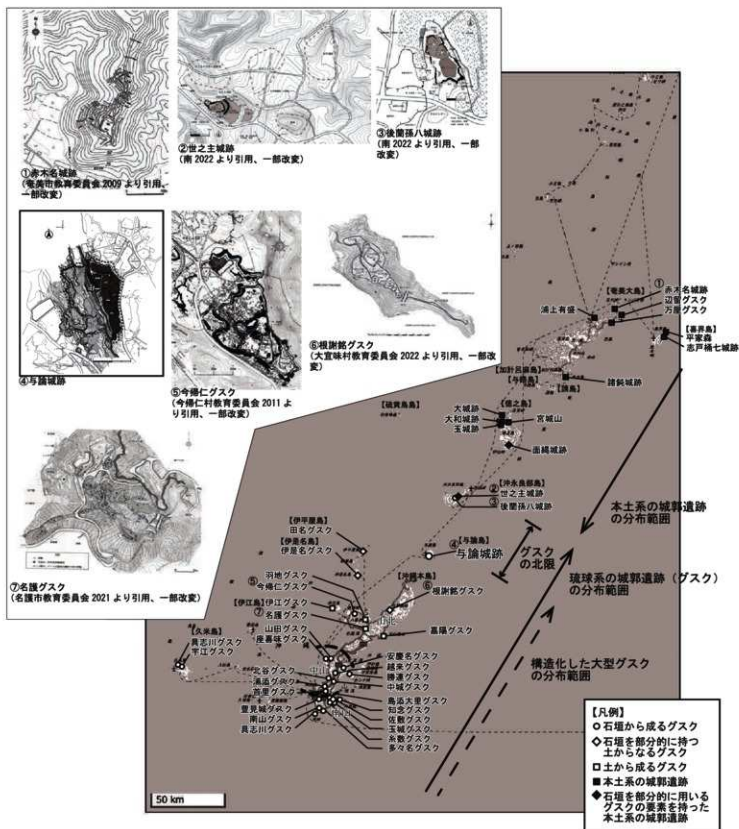


図 76 奄美群島～沖縄諸島の城郭遺跡(グスク)の中の与論城跡の位置(背景には国土地理地図)

写 真 图 版



図版1 地区2トレンチ1調査状況（北から）



図版2 地区2トレンチ2調査状況（南から）



図版3 地区2トレンチ2SP 1石灰整地層核出状況（西から）



図版4 地区2トレンチ3調査状況（西から）



図版5 地区2トレンチ3石積根石・フィッシャー造成状況（北から）



図版6 地区3トレンチ4調査状況（北から）



図版7 地区3トレンチ5調査状況（西から）



図版8 地区3トレンチ6調査状況（北から）



図版9 地区3トレンチ7調査状況（北西から）



図版10 地区3トレンチ7根石及び造成層（西から）



図版11 地区3トレンチ8根石及び造成層（西から）



図版12 地区3トレンチ9根石及び造成層（西から）



図版13 地区3トレンチ10調査状況（南西から）



図版14 地区6トレンチ11調査状況（北から）



図版 15 地区7トレンチ 12 整地層核出状況（南から）



図版 16 地区9トレンチ 13 II層遺物出土状況（北西から）



図版 17 地区7トレンチ 12 調査状況（南西から）



図版 18 地区7トレンチ 12 石壇2の表込め及び造成層（南から）



図版 19 地区9トレンチ 13 調査状況（西から）



図版 20 地区9トレンチ 13 調査状況（北西から）



図版 21 地区9トレンチ 13SK1 調査状況（東から）



図版 22 地区9トレンチ 13SP1 調査状況調査状況（西から）



図版 23 地区9トレンチ 13SK1 調査状況調査状況（北西から）



図版 24 地区9トレンチ 13SX1 遺物出土状況（東から）



図版 25 地区9トレンチ 13 銭貨出土状況（東から）



図版 26 地区 10トレンチ 14 調査状況（西から）



図版 27 地区 10トレンチ 14 滑石混入土器出土状況（北から）



図版 28 地区 10トレンチ 14 調査状況（北から）



図版 29 地区 10トレンチ 14 調査状況（北から）



図版 30 地区 10トレンチ 14 東壁セクション（東から）



図版 31 地区 10トレンチ 14 表込め検出状況（北から）



図版 32 地区 11 トレンチ 15 調査状況 (南から)



図版 34 地区 14 トレンチ 16 調査状況 (東から)



図版 33 地区 14 トレンチ 16 調査状況 (南から)



図版 35 地区 14 トレンチ 17 調査状況 (東から)



図版 36 地区 15 トレンチ 18 調査状況 (東から)



図版 37 周辺部分トレンチ 19 調査状況 (北東から)



図版 38 周辺部分トレンチ 19 東区調査状況 (北東から)



図版 39 周辺部分トレンチ 19 西区調査状況（北から）



図版 40 周辺部分トレンチ 20 調査状況（北西から）



図版 41 周辺部分トレンチ 21 調査状況（南から）



図版 42 周辺部分トレンチ 21SD1 ガラス小玉出土状況（東から）



図版 43 周辺部分トレンチ 21SD1 調査状況（東から）



図版 44 周辺部分トレンチ 21SD2 調査状況（東から）



図版 45 周辺部分トレンチ 21SP1 調査状況（西から）



図版 46 周辺部分トレンチ 21SP1 遺物出土状況（西から）



図版 47 周辺部分トレンチ 22 調査風景



図版 48 周辺部分トレンチ 22 調査状況（西から）



図版 49 周辺部分トレンチ 22 遺物出土状況（南から）



図版 50 周辺部分トレンチ 22 遺物出土状況（南から）



図版 51 周辺部分トレンチ 23 調査状況 (西から)



図版 52 周辺部分トレンチ 24 調査状況 (南から)



図版 53 周辺部分トレンチ 25 調査状況 (南から)



図版 54 周辺部分トレンチ 25 調査状況 (北から)



図版 56 周辺部分トレンチ 27 調査状況 (南西から)



図版 55 周辺部分トレンチ 26 調査状況 (東から)

遺物 図 版



図版 57 台地部分出土の青磁・白磁・染付



図版 58 台地部分出土の土器・陶器



図版 59 台地部分・崖下部分出土の羽口・土製品・石器・石製品



図版 60 崖下部分出土の土器・陶磁器



図版 61 台地部分・崖下部分出土の小型土製品・小型石製品



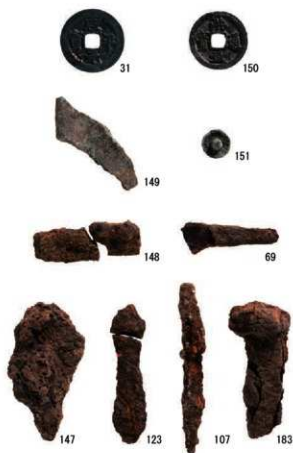
図版 62 与論城跡出土のガラス製品



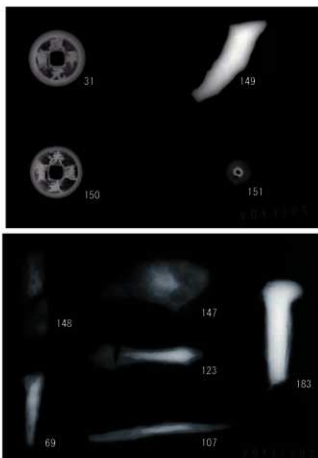
図版 63 台地部分・崖下部分出土の貝製品・未製品



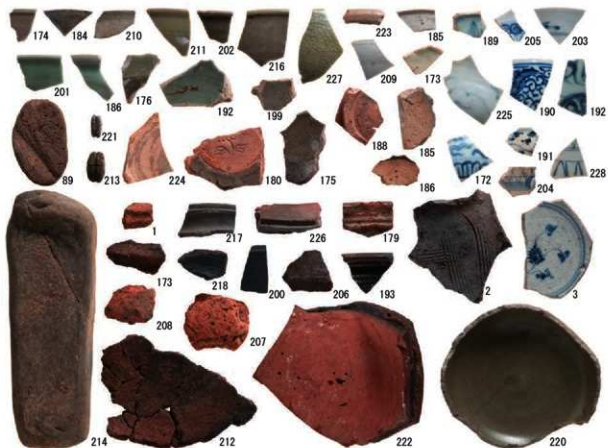
図版 64 与論城跡出土の貝製品



図版 65 与論城跡出土の金属製品



図版 66 与論城跡出土の金属製品のX線写真



図版 67 周辺部分出土資料及び表採資料

報告書抄録

ふりがな	よろんじょうあと・よろんくすくあと								
書名	与論城跡								
副書名	町内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	与論町埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号	第2集								
編集者名	南勇輔								
編集機関	与論町教育委員会								
発行年月	西暦 2024年3月								
ふりがな	ふりがな所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因	
		市町村	遺跡番号						
よろんじょうあと 与論城跡	かごしまけん 鹿児島県 おほしまぐし 大島郡 よろんちやう 与論町 おほあびりちやう 大字立長	465356	535-7	27° 1'	128° 25' 44"	試掘期間 1993.10.25 ～11.2	62.3	史跡内容確認の ための発掘調査	
						2020.10.19 ～2021.3.12	39.5		
						2021.10.18 ～2022.3.11	48.8		町内遺跡発掘調査 事業による確認 調査
						2022.6.30～ 2022.9.28	18.6		
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構	主な遺物		特記事項		
与論城跡	城館	中世		柱穴 城の造成層 石垣の裏込め	土器、青磁、白磁、カムイ ヤキ、褐釉陶器、滑石製 鐘、石製錘、砥石、羽口 ガラス、ガラス製勾玉、 銭貨		城の造成層や石垣 の裏込めを確認 城の主な利用時期 と同時期の建物の 柱穴を確認		
		近世							溝跡
要約	<p>与論城跡は与論島の南、標高約90mの琉球石灰岩段丘頂部に所在する三山時代（グスク時代・中世並行期）のグスク跡。グスクの北限の一例となる城跡で、発掘調査及び測量調査の結果、比高60mの断層崖から段丘頂部にかけて、東西約150m、南北約210mの範囲を石垣が囲んでいたと推定される。</p> <p>城は沖繩本島以外の離島では最大規模で、2万㎡を超えると考えられ、断層崖の地形を取り込んだ縄張り、はかのグスクでは類例が少ない特徴を示す一方、段丘頂部の城域内平坦面は2～3mの石積で囲むなど沖繩からの影響や技術導入によって築城されたと考えられる。</p> <p>城域内部には、平坦面から大きく15の地区に分けることができ、段丘頂部は石垣、断層崖斜面地の平場は石垣や通路によって分割されている。断層崖の石積は、開発等に伴う変化が少なかったため比較的保存状況が良く、高さ2～3m以上の野面積みによる石垣が残存し、城外側を意識して面が揃うように構築されている。段丘頂部の石垣は、墓地造成等によって改変されているが、発掘調査の結果、人頭大の石灰岩礫を用いた石垣の裏込めや造成層が確認され、内部の平場を取り囲む石垣は面の揃い方が不明瞭なのに対して、外郭となる石垣の外面は崖下と同様に面が揃うように構築されている。</p> <p>城跡の存続時期は、出土遺物や城内で確認された柱穴跡の理化学年代測定値から、13世紀頃から城内の利用が始まり、14世紀後半から15世紀中頃が主体となることが明らかになった。</p> <p>伝承では、琉球国山北王の三男王舅や琉球国中山王尚真王代的人物とされる花城真三郎が築城したとされる。発掘調査の結果、築城年代については明確でないものの、出土遺物から考える主な利用時期が、琉球史のいわゆる三山時代から第一尚氏統期に含まれる14世紀後半から15世紀中頃であり、第一尚氏統が奄美大島などの奄美群島の北部で遠征を行う15世紀後半以降は出土遺物が乏しくなることが確認された。伝承で伝わる琉球国山北王の三男王舅が築城したとする年代観と符号するものの王舅の実在性は定かではない。伝承と発掘調査結果から、与論城跡は琉球国の影響下のものと築城され利用され、琉球列島を取り巻く社会的な情勢に連動した城郭であったと考えられる。</p>								

与論町埋蔵文化財発掘調査成果報告書（2）

町内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

与論城跡

発行年月日 令和6（2024）年 3月

編集・発行 与論町教育委員会

〒891-9301 鹿児島県大島郡与論町茶花1418-1

TEL：0997-97-2441

印刷 株式会社 新生社印刷

〒894-0008 鹿児島県奄美市名瀬大字浦上小字ヤン川683番地

